

萱振遺跡

財團法人八尾市文化財調査研究会報告109

I 萱振遺跡(第12次調査)

II 萱振遺跡(第14次調査)

2008年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

萱振遺跡

財団
法人 八尾市文化財調査研究会報告109

I 萱振遺跡(第12次調査)

II 萱振遺跡(第14次調査)

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

この度、八尾市生涯学習センター建設に伴う萱振遺跡第12次調査と府営住宅建設に伴う萱振遺跡第14次調査の整理業務が完了し、発掘調査報告書を上梓する運びになりました。

今回報告する萱振遺跡は大阪府八尾市の中北部に位置しています。遺跡の位置する萱振地区は、河内平野の中の長瀬川と玉串川に挟まれた低地部にあたり、地区内を縦断して河内街道、ならびに地区の北部では、大阪玉造から大和竜田へ通じる十三街道が合流する交通の要衝でもありました。

このため、南北朝期から戦国時代にかけては、河内での戦場となつたことが多くの文献に記されています。これらの度重なる戦いの中で、環濠集落化が図られ、室町時代中期には浄土真宗本願寺派の恵光寺を中心とした寺内町が形成されています。現代に残る地区を囲繞する堀(溝)は、時の権力に対抗して、日々、自衛を怠らなかつた萱振の人々の努力と苦悩の証しと言えます。

また、室町時代中期に権大外記日向守隼人正であった中原康富の日記『康富記』には、隼人の畿内における移配地として、河内国若江郡萱振保が記述されており、古代より付近一帯に隼人と呼ばれた人々が住んでいたことが推定されています。

一方、これまでの考古学的成果においては、豊富な埴輪類の出土で知られている古墳時代前期の萱振1号墳をはじめとして、特に古墳時代初頭から前期の良好な資料が検出されています。

今回報告する第12次、第14次調査においても、古墳時代前期を中心とする遺構・遺物が数多く検出されており、遺跡範囲南部における当該期の実態を知るうえで貴重な資料を提供する結果となりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料として、又、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して多大な御支援、御協力をいただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

序

1. 本書は、大阪府八尾市の萱振遺跡で平成4～5年度に実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成20年1月を以って終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
 1. 本書に収録した各調査報告の文責・編集は原田昌則が行った。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図（昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂）、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成19年度版）を使用した。
 1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
 1. 本書で用いた方位は、国土座標第VI系〔日本測地系〕の座標北を示す。
 1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
 1. 遺構は下記の略号で示した。
堅穴住居 - S I 堀立柱建物 - S B 井戸 - S E 土坑 - S K 溝 - S D 土器集積 - S W
小穴・柱穴 - S P 自然河川 - N R 古墳 - 古墳
 1. 遺構図面の縮尺は適宜決定した。
 1. 遺物図面の縮尺は1/4を基本とする。実測図断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品は斜線を用いた。
 1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 萱振遺跡第12次調査(K F 91-12)	1
II 萱振遺跡第14次調査(K F 93-14)	47

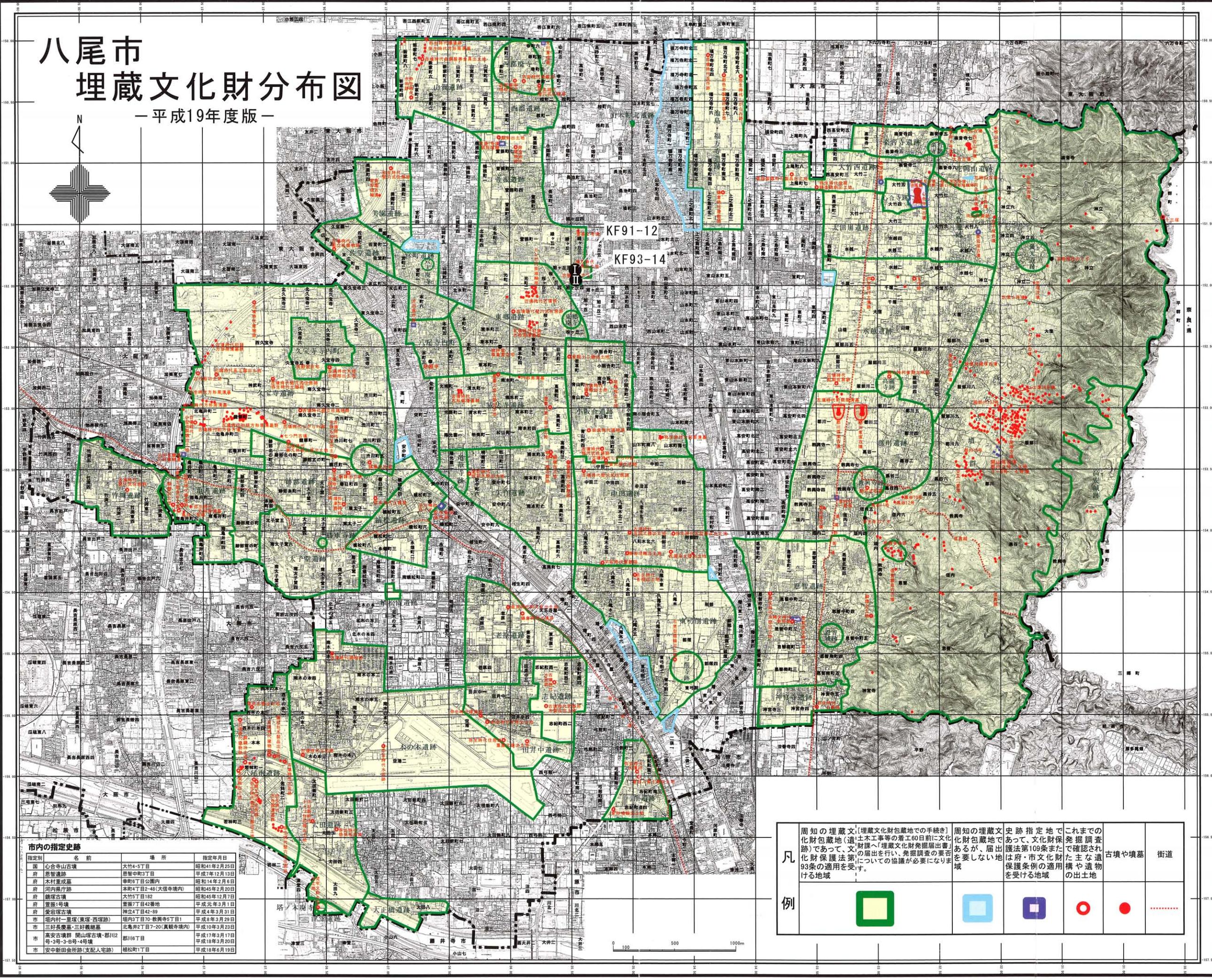
八尾市埋蔵文化財分布図

一平成19年度版一



KF91-12
KF93-14

例	周知の埋蔵文化財(埋蔵文化財包蔵地での手続)についての協議が必要になります。	周知の埋蔵文化財包蔵地であつて、文化財保護法第109条または府・市文化財保護条例の適用を受ける地域	これまでの発掘調査で確認された主な遺構や遺物の出土地	古墳や墳墓	街道



八尾市内の埋蔵文化財包蔵地一覧表

時代	時代				
	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥
集落遺跡					
跡部遺跡	あべくわいき	●	●	●	●
池島・福寺遺跡	いけじ・ふくじ	●	●	●	●
植松遺跡	うもつしきせき	●	●	●	●
植松南遺跡	うもつみなみ	●	●	●	●
原老遺跡	はるしらいせき	●	●	●	●
太田遺跡	おおたいせき	●	●	●	●
太田川遺跡	おおたがわいせき	●	●	●	●
大竹遺跡	おおたけいせき	●	●	●	●
大竹西遺跡	おおたけにしせき	●	●	●	●
恩智遺跡	おんちいせき	●	●	●	●
乗音寺遺跡	がくおんじいせき	●	●	●	●
龜井遺跡	かめいわいせき	●	●	●	●
萱振遺跡	かやぶりいせき	●	●	●	●
久宝寺遺跡	きゅうぼうじいせき	●	●	●	●
木の本遺跡	きのもとせき	●	●	●	●
郡川遺跡	こおりがわいせき	●	●	●	●
小阪合遺跡	こざかあいせき	●	●	●	●
佐室遺跡	さどいせき	●	●	●	●
志紀遺跡	しきいせき	●	●	●	●
成法寺遺跡	じょうほうじいせき	●	●	●	●
神宮寺遺跡	じんぐうじいせき	●	●	●	●
太子堂遺跡	たいしどういせき	●	●	●	●
大正橋遺跡	たいじょうばいせき	●	●	●	●
田井中遺跡	たいなかいせき	●	●	●	●
竹測遺跡	たけのういせき	●	●	●	●
津連遺跡	つづれいせき	●	●	●	●
東郷遺跡	とうごういせき	●	●	●	●
中田遺跡	なかたいせき	●	●	●	●
西都遺跡	にしどいせき	●	●	●	●
花岡山遺跡	はなおかやまいせき	●	●	●	●
東弓削遺跡	ひがゆみいせき	●	●	●	●
水越遺跡	みずこしいせき	●	●	●	●
美園遺跡	みそのいせき	●	●	●	●
宮町遺跡	みやまちいせき	●	●	●	●
八尾南遺跡	やおみなみいせき	●	●	●	●
矢作遺跡	やはぎいせき	●	●	●	●
山賀遺跡	やまかいせき	●	●	●	●
山本北遺跡	やまもととうようき	●	●	●	●
弓削遺跡	ゆげいせき	●	●	●	●
古墳群					
高安古墳群	たかやすこふんぐん	●	●	●	●
寺院					
波川庵寺	しぶかわいんじ	●	●	●	●
東郷庵寺	とうごういんじ	●	●	●	●
西都庵寺	にしどいんじ	●	●	●	●
教興寺跡	きょうこうじあと	●	●	●	●
高麗寺跡	こまちらあと	●	●	●	●
勝軍寺跡	しょうぐんじあと	●	●	●	●
心合寺跡	しんごうじあと	●	●	●	●
弓削寺跡	ゆげいじあと	●	●	●	●
童華寺跡	りゅうわいじあと	●	●	●	●
穴太庵寺	あのうはいんじ	●	●	●	●
樂音寺跡	がくおんじあと	●	●	●	●
圓光寺跡	おんこうじあと	●	●	●	●
塔ノ本庵寺	とうのもとはいんじ	●	●	●	●
城跡					
高安城跡	たかやすじょうあと	●	●	●	●
恩智城跡	おんぢじょうあと	●	●	●	●
寺内町					
久宝寺寺内町	きゅうぼうじいじまち	●	●	●	●
八尾寺寺内町	やおじいじまち	●	●	●	●
生産遺跡(窯跡)					
向山瓦窯跡	むかいやまがよう	●	●	●	●
八尾市埋蔵文化財分布図 一平成19年度版一					
発行・問い合わせ:八尾市教育委員会 文化財課 〒581-0003 大阪府八尾市本町1-1-1 TEL:072-924-8555/FAX:072-924-5593 Eメール:bunkazai@city.yao.osaka.jp 発行年月日:平成19年3月31日 編集協力:財八尾市文化財調査研究会 八尾市刊行物番号:H18-117					

I 萱振遺跡第12次調査(K F 91-12)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市旭ヶ丘五丁目85番2他で実施した八尾市生涯学習センター建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第12次調査(KF91-12)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年2月10日から平成4年6月9日(実働80日間)にかけて原田昌則・岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約2000m²を測る。
1. 現地調査においては、井上千枝子・垣内洋平・阪下　学・柴田達弥・嶋村綾子・中川義朗・能勢尚樹・福島晋美・福島友香・松田恵一が参加した。
1. 内業整理事業は平成19年8月から12月に整理係の原田昌則・尾崎良史が実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・山内千恵子、図面トレース－山内、遺物写真撮影－尾崎・北原、写真図版作成－尾崎が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からのご協力とご指導を受けた。
村川行弘(大阪経済法科大学)、河上邦彦(橿原考古学研究所)、尾上　実、小林義孝、西川寿勝、橋本高明、大槻康宏、中村清美(大阪府教育委員会)、八尾市建築総務課、(株)八州、(株)島田組(敬称略、所属は調査時点)
1. 航空写真測量・撮影は(株)八州に委託した。
1. 本書で記述した古墳時代初頭から前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式－古相・新相)、古墳時代前期前半から後半(布留式－古相・中相・新相)に区別した。当該期の土器形式分類および土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(1993)に従った。本書で使用した布留式期の土器編年と既往編年との対応については本書II萱振遺跡(第14次調査)のP87の第4表に示した。
1. 土器の形式・編年で参考とした文献については、P44に提示した。

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 地理・歴史的環境.....	1
第3章 調査概要.....	7
第1節 調査方法と経過.....	7
第2節 基本層序.....	8
第3節 検出遺構と出土遺物.....	8
1) 第1調査面.....	8
2) 第2調査面.....	12
3) 第3-1調査面.....	17
4) 第3-2調査面.....	22
第4章 まとめ.....	44

挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	2
第2図 調査区設定図および地区割図.....	7
第3図 北壁、西壁断面図.....	9
第4図 第1調査面平面図.....	10
第5図 第2調査面平面図.....	13
第6図 SK203断面図.....	14
第7図 SK203、204出土遺物実測図.....	15
第8図 SK204断面図.....	14
第9図 SD210出土遺物実測図.....	15
第10図 古墳301出土遺物実測図.....	17
第11図 第3調査面平面図.....	18
第12図 古墳301断面図.....	19
第13図 古墳302断面図.....	20
第14図 古墳302出土遺物実測図.....	21
第15図 古墳302周溝南西部(1層内)遺物出土状況.....	21
第16図 SI301出土遺物実測図.....	22
第17図 SI301断面図.....	23
第18図 SB301断面図.....	24
第19図 SE301断面図.....	25
第20図 SE301遺物出土位置図.....	26

第21図	S E 301出土遺物実測図－1	27
第22図	S E 301出土遺物実測図－2	28
第23図	S E 302出土遺物実測図	28
第24図	S E 302平断面図	29
第25図	S K 303平断面図	30
第26図	S K 303出土遺物実測図	30
第27図	S K 308平面図	32
第28図	S K 308遺物出土位置図	33
第29図	S K 308断面図	34
第30図	S K 308出土遺物実測図－1	35
第31図	S K 308出土遺物実測図－2	36
第32図	S K 308出土遺物実測図－3	37
第33図	S K 308出土遺物実測図－4	38
第34図	S K 308出土遺物実測図－5	39
第35図	S K 309出土遺物実測図	40
第36図	S K 309平断面図	40
第37図	S D 302出土遺物実測図	41
第38図	S D 304出土遺物実測図	41
第39図	S D 305出土遺物実測図	42
第40図	S W301出土遺物実測図	43
第41図	古墳分布図	45

写 真 目 次

写真1	S E 101検出状況	11
写真2	S E 102検出状況	11
写真3	S E 103検出状況	11
写真4	S E 104検出状況	11
写真5	土坑群検出状況	12
写真6	S W301検出状況	43

表 目 次

第1表	周辺の発掘調査一覧表	3
第2表	第2調査面 S D201～209、211～249法量表	15
第3表	第3－2調査面 小穴(S P)法量表	42

図版目次

- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 図版 一 第1調査面全景 | 図版一一 S K203、S K204、S D210、古墳 |
| 第2調査面全景 | 301、古墳302出土遺物 |
| 図版 二 S K203検出状況 | 図版一二 古墳302、S I301、S E301出土遺物 |
| S D210土馬出土状況 | |
| 図版 三 第3調査面全景 | 図版一三 S E301出土遺物 |
| 第3調査面 西部遺構検出状況 | 図版一四 S E301出土遺物 |
| 図版 四 古墳301北東部検出状況 | 図版一五 S E301出土遺物 |
| 古墳301南東部検出状況 | 図版一六 S E302、S K303出土遺物 |
| 図版 五 古墳302検出状況 | 図版一七 S K308出土遺物 |
| 古墳302周溝南西部遺物出土状況 | 図版一八 S K308出土遺物 |
| 図版 六 S I301検出状況 | 図版一九 S K308出土遺物 |
| S B301検出状況・柱根検出状況 | 図版二〇 S K308出土遺物 |
| 図版 七 S E301検出状況 | 図版二一 S K308出土遺物 |
| S E301下層部分遺物出土状況 | 図版二二 S K308出土遺物 |
| 図版 八 S E302検出状況 断割り | 図版二三 S K308出土遺物 |
| S E302井戸側内部 | 図版二四 S K308、S D302、S D304出土遺物 |
| 図版 九 S K303検出状況 | |
| S K308検出状況 | 図版二五 S D304、S D305、S W301出土遺物 |
| 図版一〇 S K308北西部、北東部、中央西部、 | |
| 中央東部 | |

第1章 調査に至る経過

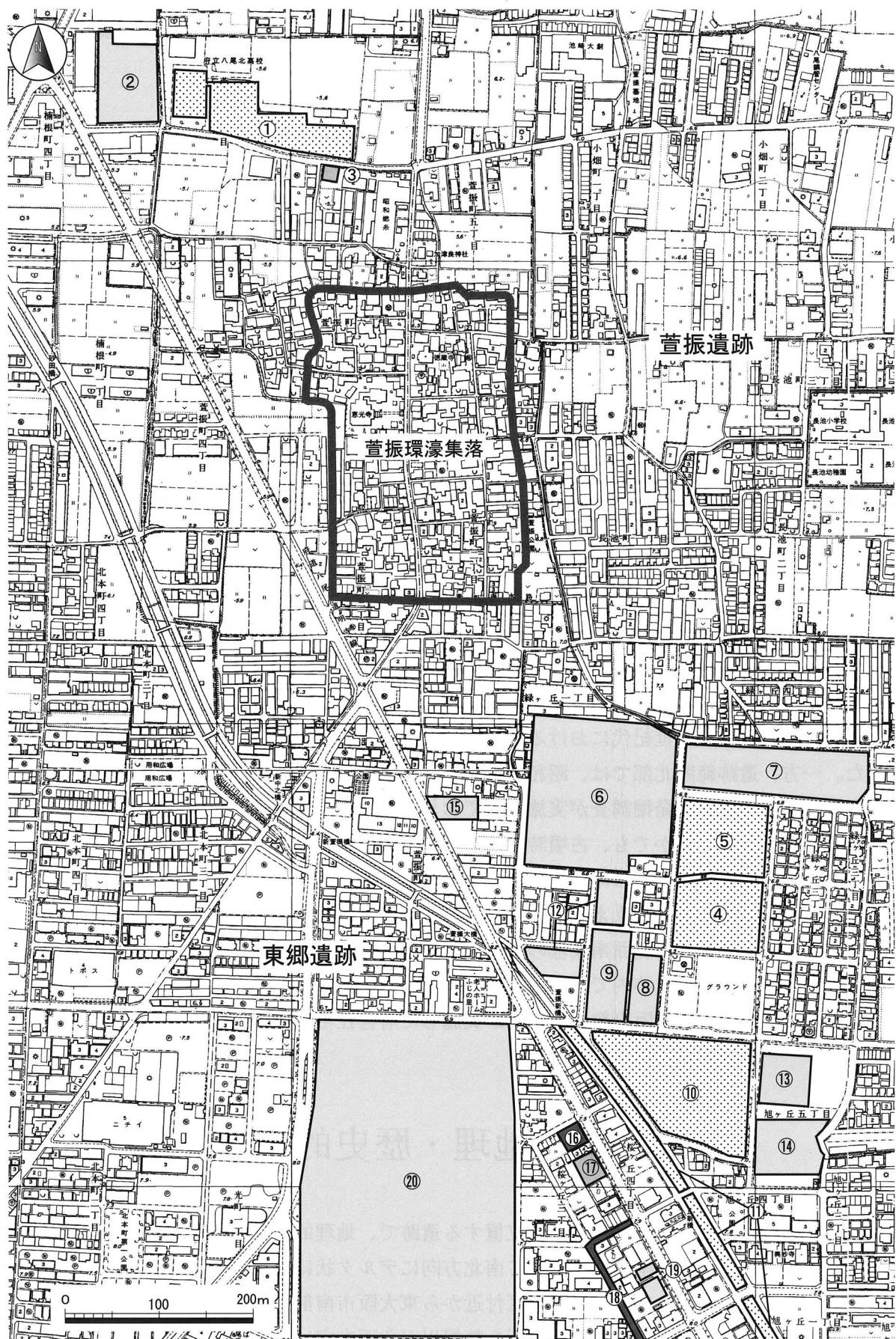
萱振遺跡は、大阪府八尾市の北西部に位置する緑ヶ丘一～五丁目、萱振町一～七丁目、北本町三・四丁目、楠根町一丁目に所在する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡で、東西0.5～0.9km、南北1.1kmがその範囲とされている。

萱振遺跡が遺跡として認識されたのは、遺跡範囲の南東部にあたる緑ヶ丘一・二・五丁目に存在した八尾競馬場（昭和5～15(1930～1940)年）跡地内で昭和18(1943)年に防空壕を構築する際に、古墳時代中期の土師器片や子持勾玉が出土したことを嚆矢とするが、出土地点や出土層位等の詳細は不明であった。昭和57(1982)年以降には、八尾競馬場跡地一帯に建てられていた府営・市営住宅の建替えや八尾市の公共施設建設に伴う発掘調査が大阪府教育委員会、（財）八尾市文化財調査研究会により実施してきた。これら一連の調査の結果、遺跡範囲の南部では弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡が存在していたことが明らかとなった。遺跡範囲南部における主な調査成果としては、昭和57(1982)年度の大坂府教育委員会による府営住宅に伴う発掘調査で、古墳時代前期前半（布留式古相）を中心とする居住域が検出された他、後に中河内地域での布留式土器の古段階の基準資料に位置付けられた土器群が出土している。その他、当調査研究会が昭和60～61(1985～1986)年度に行った府営住宅に伴う萱振遺跡第3次調査では、方墳で主体部に木棺が直葬された古墳時代後期後半の「萱振2号墳」が検出されている。当該期においては、生駒山地西麓部を中心に横穴式石室を持つ円墳の造墓が通有な趨勢において、平野部で検出された「萱振2号墳」の存在は、6世紀代における古墳造営基準の在り方を考える上で一石を投じる結果となった。一方、遺跡範囲北部では、昭和58～59(1983～1984)年に大阪府教育委員会による府立八尾北高校建設工事に伴う発掘調査が実施されており、弥生時代後期から室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。なかでも、古墳時代前期後半の「萱振1号墳」からは、鰐付円筒埴輪・朝顔形埴輪の他、鞍形埴輪をはじめとする豊富な形象埴輪が多量に出土しており、古墳時代前期後半の地域首長の動向を考えるうえで重要な成果と言える。

今回の発掘調査は、遺跡範囲南東部の旭ヶ丘五丁目85番地で実施した八尾市生涯学習センター建設に伴うもので、萱振遺跡内で実施した第12次調査(K F 91-12)にあたる。調査地点は、昭和62～63(1987～1988)年に大阪府教育委員会が実施した府営住宅に伴う発掘調査地の東に隣接している。

第2章 地理・歴史的環境

萱振遺跡は、大阪府八尾市の北西部に位置する遺跡で、地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流である玉串川に挟まれて南北方向にデルタ状に展開する低位沖積地に位置している。この低位沖積地は、八尾市二俣地区付近から東大阪市南部にかけての約10kmにわたって広がるもので、そのほぼ中央部の最も低い所を楠根川が北西方向に流下し、東大阪市若江南五丁目付近で第二寝屋川と合流している。発掘調査を実施した萱振遺跡範囲の南部一帯は、楠根川を挟



第1図 調査地周辺図 (S = 1/6000)

第1表 周辺の発掘調査一覧表（小規模な調査を除く）

番号	調査名（略号）	調査主体	所在地	調査期間	文 献
①	萱振	府教委	萱振町七丁目	S58/6/17～S62/7/16	広瀬雅信他1992「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書第39輯』大阪府教育委員会
②	萱振(KF91-11)	八文研	楠根町四丁目	H3/8/26～9/25	高萩千秋1992「IX 萱振遺跡(第11次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34 (財)八尾市文化財調査研究会
③	萱振(90-006)	市教委	萱振七丁目83-1他	H4/4/6～4/9	酒 斎1993「4 萱振遺跡(92-006)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財報告27 八尾市教育委員会
④	萱振	府教委	緑ヶ丘二丁目	S57/6/28～8/10	大野 薫1983「萱振遺跡発掘調査概要・I - 八尾市緑ヶ丘2丁目所在」大阪府教育委員会
⑤	萱振	〃	緑ヶ丘二丁目	S58/12/～S59/3/31	阪田育功1984「萱振遺跡発掘調査概要・II - 八尾市緑ヶ丘2丁目所在」大阪府教育委員会
⑥	萱振(KF85-2)	八文研	緑ヶ丘一丁目17	S60/5/24～7/27	西村公助1990「市立八尾中学体育館建設工事に伴う調査(第2次調査)」『萱振遺跡発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告20 (財)八尾市文化財調査研究会
⑦	萱振(KF85-3)	〃	緑ヶ丘二丁目1	S60/11/7～S61/4/30	西村公助1990「府営八尾萱振第3期中層住宅新営工事に伴う調査(第3次調査)」『萱振遺跡発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告20 (財)八尾市文化財調査研究会
⑧	萱振(KF86-4)	〃	緑ヶ丘一丁目117-8	S61/7/25～10/31	西村公助1993「IV 萱振遺跡(第4次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
⑨	萱振(KF87-5)	〃	緑ヶ丘一丁目118	S62/12/3～S63/3/19	西村公助1993「V 萱振遺跡(第5次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
⑩	萱振	府教委			未報告
⑪	東郷	〃	桜ヶ丘・旭ヶ丘	S62/5/26～S63/11/31	奥 和之他1989「東郷遺跡発掘調査概要・I - 八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在」大阪府教育委員会
⑫	萱振(KF89-8)	八文研	緑ヶ丘一丁目74他	H1/7/17～9/30	西村公助1993「VI 萱振遺跡(第8次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
⑬	萱振(KF91-12)	〃	緑ヶ丘五丁目85他	H4/2/10～6/10	本書 I掲載
⑭	萱振(KF93-14)	〃	緑ヶ丘五丁目85-4-1他	H5/8/9～H6/3/14	本書 II掲載
⑮	萱振(KF94-15)	〃	幸町三・四丁目	H6/4/18～4/27	岡田清一1996「VI 萱振遺跡(第15次調査)」『萱振遺跡 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告52』(財)八尾市文化財調査研究会
⑯	東郷(86-419)	市教委	桜ヶ丘三丁目23・29	S62/8/7～8/19	米田敏幸1988.3「7.東郷遺跡(86-419)の調査」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告17 八尾市教育委員会
⑰	東郷(TG93-45)	八文研	桜ヶ丘三丁目45・49	H6/3/16～4/1	岡田清一1995「III 東郷遺跡(第45次調査)」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化財調査研究会
⑱	東郷(94-369)	〃	桜ヶ丘一～三丁目	H6/9/22・28、10/3・4	米田敏幸1995「3.東郷遺跡(94-369)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業 八尾市教育委員会
⑲	東郷(TG2003-60)	八文研	桜ヶ丘三丁目	H15/5/6～6/11	樋口 薫2004「23.東郷遺跡第60次調査(TG2003-60)」『平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
⑳	東郷(TG2005-64)	〃	光町二丁目3他	H17/4/4～10/4	坪田真一他2006「22.東郷遺跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

凡例 大阪府教育委員会-府教委、八尾市教育委員会-市教委、(財)八尾市文化財調査研究会-八文研

む海拔7m前後に位置している。萱振遺跡を含む長瀬川と玉串川の旧大和川の主流であった二大河川に挟まれた地域一帯は、農耕社会を構築する基盤的要素である肥沃な土壤と豊富な水量を背景として水稻耕作の開始段階である弥生時代前期から数多くの集落が営まれており、考古学的資料の蓄積も多い。同一沖積地上には、当遺跡の南に東郷遺跡(弥生中期～鎌倉)、成法寺遺跡(弥生中期～室町)、小阪合遺跡(弥生中期～室町)、中田遺跡(弥生前期～室町)、矢作遺跡(弥生後期

～室町)、東弓削遺跡(弥生中期～鎌倉)、南西に宮町遺跡(古墳前期～室町)、西に美園遺跡(弥生前期～鎌倉)、佐堂遺跡(弥生中期～室町)、北に西郡遺跡(弥生後期～江戸)、北西に山賀遺跡(弥生前期～鎌倉)が位置している。

遺跡範囲内では、特に北部および南部一帯での調査が集中しており、弥生時代中期以降の遺構・遺物が検出されている。また近年の調査成果から、集落内を南北に流下した小阪合分流路の存在が注目されており、古墳時代以前の集落においては、流路に規制された集落推移が想定される。以下、萱振遺跡内の集落推移を時期毎に概観してみる。

遺跡内において生活痕跡が認められているのは弥生時代中期以降である。⑤調査地のCトレーニングで弥生時代中期中葉(河内Ⅲ-2様式)に比定される大形甕と大形鉢で構成される土器棺墓が1基検出されており、周辺に居住域の存在が想定される。

弥生時代後期の集落は萱振遺跡北部の①調査地において、17棟の掘立柱建物が検出されているほか、多量の弥生土器とともに、体部外面に格子タタキを持つ朝鮮半島系土器が出土しており、三韓土器の模倣ならびに渡来韓人の存在が想定される。

古墳時代初頭(庄内式期)の集落は、萱振遺跡北部の①調査地の西部から②調査地付近を中心に古墳時代初頭前半から後半(庄内式古相から新相)にかけて居住域の位置を変えながらも連続した集落が形成されている。

続く、古墳時代前期(布留式期)の集落は、遺跡範囲の南部一帯で展開している。⑤調査地のB～Dトレーニングでは南北方向に流下し、川幅が100m以上、深さが2.5m以上を測る自然河川(NR401)が検出されている。出土遺物から古墳時代前期後半まで機能していた河川と推定されるもので、この河川が小阪合分流路に対応するものと推定される。この河川の北側の続きが⑥調査地の2調査区で検出されている他、南部では楠根川改修工事に伴って東郷遺跡内で実施された⑪調査地において小阪合分流路の東岸の一部が検出されている。したがって、萱振遺跡南部の古墳時代前期(布留式期)の集落分布は遺跡内を縦断する小阪合分流路に規制されて展開したことが窺われる。

布留式古相段階の居住域としては、小阪合分流路の右岸にあたる④調査地で検出されている。後に、中河内地域における布留式古相段階の基準土器資料が出土した井戸(S E03)をはじめとする遺構を検出した居住域で布留式古相段階の布留Ⅰ・Ⅱ期に存続している。さらに、④調査地から南約150m地点の⑬調査地および⑭調査地のA・C区からは布留Ⅱ期の居住域が確認されている。布留式中相段階(布留Ⅲ期)の居住域は、小阪合分流路の右岸においては布留Ⅱ期から継続する⑬⑭調査地、左岸においては⑮調査地がある。布留式新相段階(布留Ⅳ期)の居住域は、小阪合分流路の右岸においては、⑦調査地の第1調査区、⑤調査地のAトレーニングを中心とする居住域と左岸では、北から⑥調査地の4調査区、⑨調査地の第2・3調査区がある。この様に、布留式古相から新相段階においては、小阪合分流路を挟む両岸を中心として、概ね2箇所に居住域が存在していたことが推定される。生産域としては、東郷遺跡⑯調査地の1区で多条の小溝を伴う耕作痕が検出されている。墓域としては、萱振遺跡北部の①調査地で古墳時代初頭前半から前期前半(庄内式新相から布留式古相)の方形周溝墓4基が検出されているほか、南部の⑰調査地で墳墓21基が検出されている。前期後半(布留式新相)では、①調査地の方形周溝群の東に隣接する位置で萱振1号墳が築造されている。萱振1号墳は、一辺約27m、周濠幅約5mを測る方墳で、テラス部

分に鰐付円筒埴輪・朝顔形埴輪が樹立されているほか、墳頂部からは輦形・盾形・甲冑形・蓋形・家形等の形象埴輪類が出土している。なかでも、輦形埴輪については高さ1.62m、上部最大幅1.15mを測る最大級のもので、表面には装飾突起と精緻な直弧文・鍵手文のほか、赤色顔料による彩色が施されている。一方、萱振遺跡南部においては、布留式新相の方墳が⑩・⑬調査地で検出されている他、東郷遺跡の⑯調査地2・3区では布留式中相の古墳が2基検出されている。そのうち、3区で検出された方墳は一辺22m前後を測るもので、鰐付円筒埴輪・形象埴輪を持つ在地首長クラスの古墳である。萱振遺跡の北部および南部から東郷遺跡の北東部で検出された古墳時代前期中葉から後半に築造されたこれらの古墳は、豊富な埴輪の保有や墳形が方墳である点で共通しており、前期中葉から後半段階での平野部における地域首長の動向を知る上で貴重である。

古墳時代中期の集落域は前代に比して、減少傾向が顕著である。遺跡北部では中期後半の居住域が①・②調査地で検出されている。遺跡南部では、⑤調査地のAトレンチ包含層から格子タタキを持つ韓式系土器片や円筒・朝顔・盾・蓋・動物・人物等の埴輪類が出土しており、中期前半から後半の居住域や墓域の存在が示唆される。また東郷遺跡の⑯調査地の第3調査区では、TK208型式段階の遺物と共に馬の顎骨が出土している。

古墳時代後期の集落は前代と同様少なく、遺跡北部の①調査地で後期中葉の遺構、遺跡南部の⑧調査地、東郷遺跡の⑯調査地の第5調査地で居住域が検出されている。古墳としては、⑦調査地で、木棺直葬の主体部を持つ後期後半の方墳(萱振2号墳)が検出されており、当該期における平野部での古墳築造の在り方を考える上で貴重な資料を提供している。

飛鳥時代のものとしては、遺跡南部の⑤調査地のBトレンチを中心に同時期の遺物包含層が確認されている他、⑯調査地の2区で掘立柱建物が検出されている。寺院としては、遺跡範囲の北部に近接して西郡廃寺、南部に近接する位置に東郷廃寺が存在しており、共に原山廃寺系の軒丸瓦を創建瓦として飛鳥時代中期に成立している。

奈良時代のものとしては、遺跡北部の①調査地のD区を中心に、奈良時代中期(平城宮Ⅲ)を中心とする掘立柱建物10棟が検出されている。掘立柱建物は主軸をほぼ北に向くもので、桁行3間×梁間3間建物が7棟、桁行2間×梁間1間建物が1棟と倉庫と推定される推定桁行5間×梁間2間の建物1棟が検出されている。出土した遺物の中には、墨書き土器、墨書き人面土器、転用硯、銅製帶金具(丸鞘)が含まれており、官衙的性格を持つ集落であったことが想定されている。遺跡南部では、⑯調査地で居住域、⑬調査地からは飾り馬を表現した土馬が出土している。

平安時代、萱振遺跡が位置する若江郡は『和名類聚抄』によれば、北から川俣郷・余戸郷・新治郷・錦織郷・巨麻郷・刑部郷・弓削郷の7郷があり、そのうち萱振遺跡の範囲は錦織郷の南部にあたる。

平安時代の集落は、萱振遺跡北部の③調査地で検出された前期の井戸・火葬墓、南部の⑧調査地の1・2調査区および東郷遺跡の⑯調査地の2・3地区で検出された掘立柱建物を主体とする居住域を除けば、後期のものが多い。後期の居住域は北部の①調査地と東郷遺跡の⑯調査地で検出されている。なお、③調査地の南東約150m地点の萱振五丁目には、式内社加津良神社が鎮座しており、当該期の集落の中心を成したものと推定される。

続く鎌倉時代の集落は北部の①調査地では前代の集落が踏襲されており、南部では新たに⑥調査地の第2調査区で成立している。室町時代の集落は北部の①調査地のみで検出されているが、

前代に比して集落規模が縮小する傾向が強い。これらの現象は萱振遺跡のみならず、中河内地域においては14世紀以降にその傾向が顕著である。このことは、14世紀前半以降の南北朝の内乱、さらには15世紀中葉の両畠山氏の争い、16世紀後半の織田信長による大坂の石山合戦に続く長期間に亘って戦乱の渦中のなかで、防御を目的とした環濠集落化を周辺集落もせざるを得ない状況であったと推定される。この時期、萱振環濠集落の中東部には萱振城が存在していた。萱振城については、南北朝の延元三(1338)年に南朝方の高木遠盛が北朝方の萱振城を攻め焼き払ったことが和田文章、田代文章に記されており、既にこの時期には城構えがあったことが知られている。室町時代中期の文明二(1470)年に本願寺第八世法主蓮如上人の布教の後、蓮如の第六子蓮淳を初代住持として、萱振城内に浄土真宗本願寺派の萱振御坊恵光寺が創建されている。戦国期の天文三(1534)年には、大坂の石山本願寺と対立していた木沢長政との戦いの戦場となりこの戦いで萱振が焼かれたと伝えられている。天正二・三(1574・1575)年には、織田信長の河内平定に反抗して、恵光寺を中心とした門徒衆を中心とした戦いが行われており、大坂石山本願寺の河内での拠点として萱振が大きな役割を果たしたものと推定される。

室町時代前期以降に成立していたと推定される萱振環濠集落は、長瀬川と玉串川に挟まれた低地部を南北に縦断する主要街道(後に河内街道)が集落内を通り、さらに萱振集落の北には大坂玉造から大和竜田へ通じる十三街道と合流する交通の要衝であった。このため、南北朝期から戦国期にかけて河内での戦いの戦場となった北の若江や南の八尾、久宝寺と比較的近い地点に位置していたことにより、絶えず戦乱に備えた防御的な集落形態を執らざるを得ない状況の中で環濠集落化が計られたものと推測される。

一方、室町中期に権大外記日向守隼人正であった中原康富の日記『康富記』(1401~1445年)には隼人の移配地として、河内国若江郡萱振保が記述されており、古代より畿内在住の隼人との関係が推定される。

参考文献(周辺の既往調査文献は第1表参照)

- ・岩本次郎 1967「隼人の近畿地方移配置について」『日本歴史 第230号』吉川弘文館
- ・棚橋利光 1977『式内社調査報告 第四巻 河内国』式内社研究会編纂
- ・沢井浩三 1988「第三章 中世 第四節 戦国時代における八尾」『増補版 八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
- ・寺沢 薫・森井貞雄1989「2各地の様式編年 1河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』木耳社
- ・佐々木裕子 1988~1989「河内の隼人 河内に隼人がいた! [1~5]」『河内どんこう 26~30』やお文化協会
- ・棚橋利光 1991「二、河内中北部の街道(東西道)」『奈良街道 歴史の道調査報告書 第四集』大阪府教育委員会
- ・棚橋利光 1984『城と陣屋シリーズ 152号 河内 萱振城 =萱振環濠集落=』日本古城友の会
- ・上田 瞳 1997「古代寺院と集落(中・南河内)」『第1回 摂河泉古代寺院フォーラム 摂河泉の古代寺院とその周辺』泉南市教育委員会・摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫
- ・松田順一郎 2001「河内平野沖積平野南部における完新世後期の旧大和川分流発達と人間活動」『環境と人間社会』埋蔵文化財研究会

第3章 調査概要

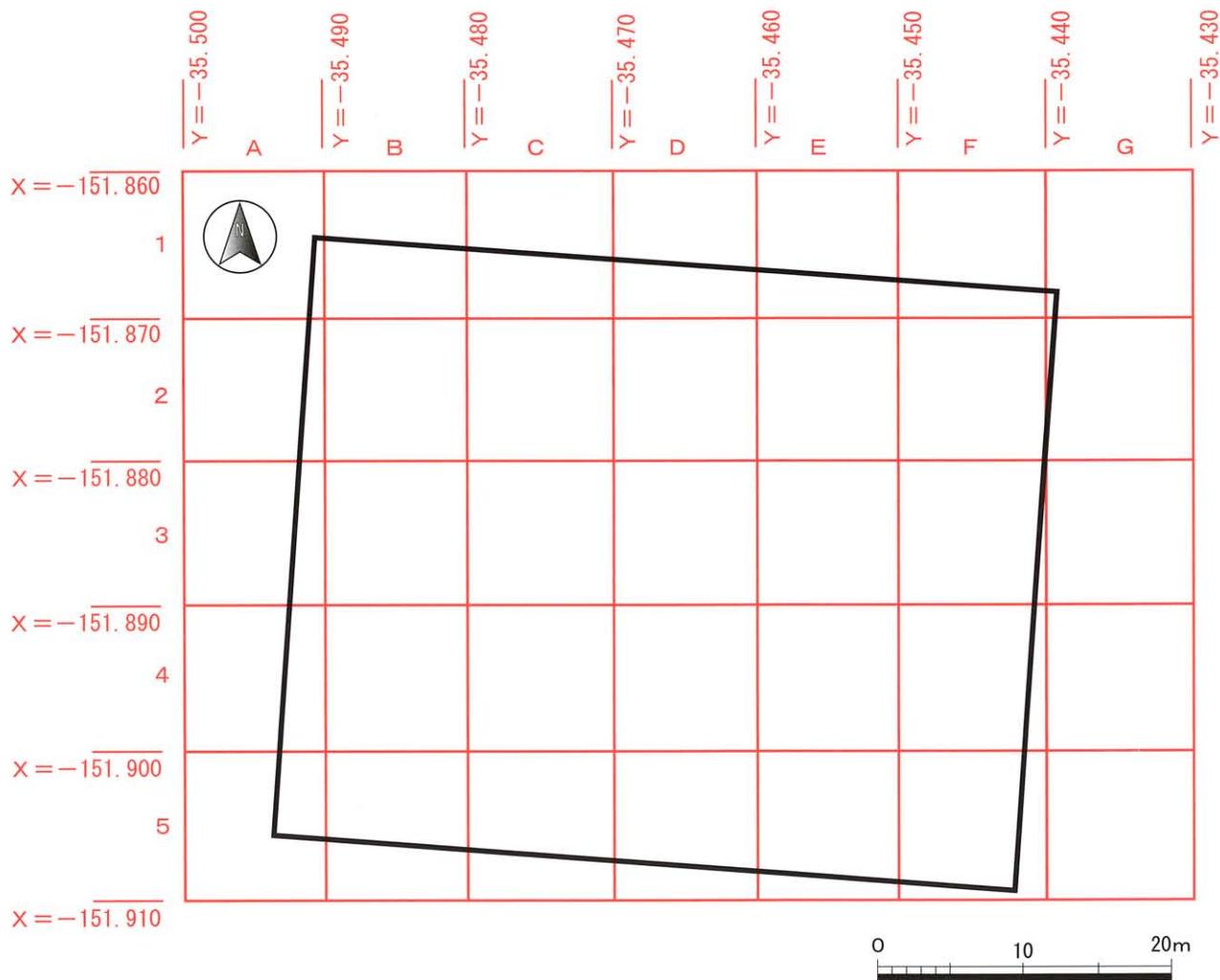
第1節 調査方法と経過

今回の発掘調査は八尾市生涯学習センター建設に伴うもので、建物の建築予定地に東西50m、南北40mの調査区を設定した。

調査地の地区割りは、国土座標第VI座標系（日本測地系）を基準として北西隅の基点（X = -151.860.000、Y = -35.500.000）から東西70m、南北50mにわたって設定した。地区の一区画単位は10m四方で、東西方方向はアルファベット（西からA～G）、南北方向は算用数字（北から1～5）で示し、地区の表示は1 A～5 G区と呼称した。地点の表示については、X線とY線の交点の座標値で示した。調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1調査面」とした。遺構番号は、遺構略号の後に面番号を付与し、全体で3桁の数字で表記した。

掘削に際しては、地表下0.7m前後までを機械により掘削した後、以下0.5m前後については層理に従って人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、地表下0.65m前後(T.P.+6.6m前後)に存在する第IV層浅黄色極細粒砂上面で江戸時代中期以降に比定される井戸4基(S E101～104)、溝2条(S D101・102)、土坑29基(S K101



第2図 調査区設定図および地区割図(S=1/500)

～129)を検出した〔第1調査面〕。第1調査面より下部0.4m前後の第VI a層上面(T.P.+6.4m前後)で飛鳥時代から奈良時代・平安時代前期・鎌倉時代に比定される土坑5基(S K201～205)と溝50条(S D201～250)を検出した〔第2調査面〕。さらに下部0.2mの第VI b層上面(T.P.+6.30m)で古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古墳2基(古墳301・302)〔第3-1調査面〕、第VII層上面(T.P.+5.9～6.1m)で、古墳時代前期前半から後期(布留式古相から新相)に比定される竪穴住居1棟(S I301)、掘立柱建物1棟(S B301)、土坑13基(S K301～313)、溝6条(S D301～306)、小穴・柱穴21個(S P301～321)を検出した〔第3-2調査面〕。なお、古墳301の規模を確認するため北側へ一部を拡張し、墳丘の南北幅・東周溝の規模ならびに北周溝の一部を確認した。

出土遺物は第IV層～第VI b層および第2・3調査面で検出した遺構を中心に、古墳時代前期前半(布留式古相)から江戸時代に比定される古式土師器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石製品がコンテナ25箱程度出土している。なお、平成4年5月30日に第3調査面を対象とした現地説明会を実施した結果、84名の参加者があった。

第2節 基本層序(第3図)

調査区内での層位は、調査区の東部付近で河川の氾濫に起因する水成土層の堆積層の広がりが南北方向に認められたが、他は比較的安定した層相であった。ここでは、普遍的に存在した9層(第I～VIII層)を摘出して基本層序とした。

第I層：盛土。5Y6/1灰色極細粒砂～中粒砂。層厚0.1m前後。上面の標高はT.P.+7.30m。

第II層：床土。2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂。層厚0.15m。

第III層：10YR7/6明黄褐色極細粒砂。層厚0.3m。

第IV層：2.5Y7/3浅黄色極細粒砂。層厚0.2m。上面が第1調査面。中世の遺物を少量含む。

第V層：7.5Y7/1灰白色極細粒砂。層厚0.15m。鎌倉時代の遺物を少量含む。

第VI a層：10YR6/1褐灰色極細粒砂。層厚0.05～0.2m。古墳時代後期から奈良時代の遺物を含む。上面が第2調査面。

第VI b層：10YR5/1褐灰色極細粒砂。層厚0.1～0.2m。古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)の遺物を含む。上面が古墳301・302の構築面。第3-1調査面。

第VII層：2.5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂。層厚0.3m。第3-2調査面。

第VIII層：10BG7/1明青灰色粘質土。層厚0.3m以上。無遺物層。

第3節 検出遺構と出土遺物

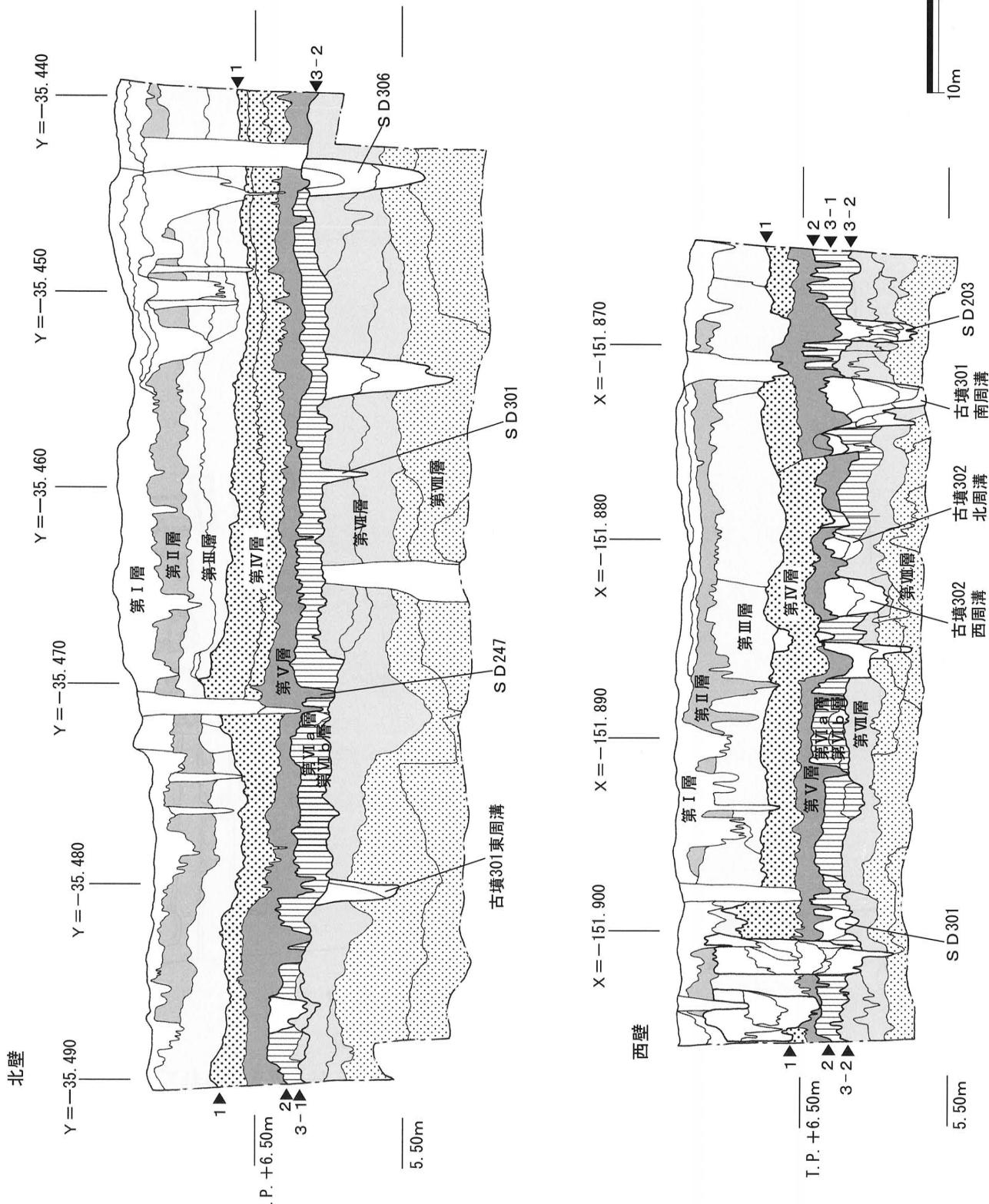
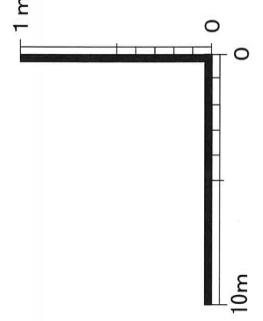
1) 第1調査面(第4図、図版一)

第1調査面は、地表下0.65m前後(T.P.+6.6m前後)に存在する第IV層2.5Y7/3浅黄色極細粒砂上面を調査対象とした。その結果、江戸時代中期以降に比定される農耕に関連した井戸4基(S E101～104)、溝2条(S D101・102)、土坑29基(S K101～129)を検出した。

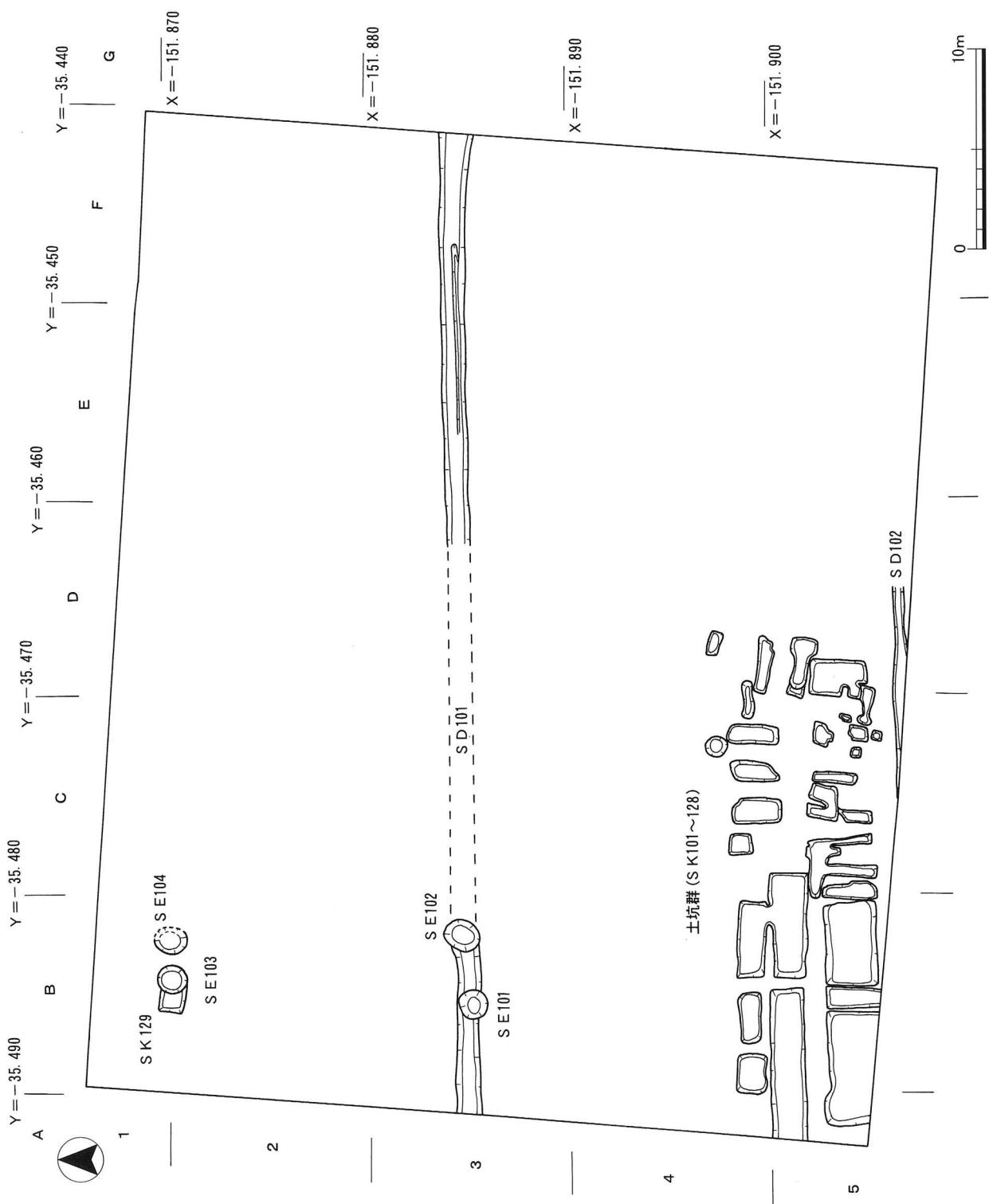
井戸(S E)

S E101(写真1)

3B地区で検出した。S D101を切っている。掘方の上面形状が円形を呈するもので、東西幅1.5m、南北幅1.4m、深さ0.9m以上を測る。掘方は二段に掘削されており東部に三日月状のテラス



第3図 北壁、西壁断面図(水平S=1/300、垂直S=1/40)



第4図 第1調査面平面図($S=1/300$)

を有する。井戸側は、掘方の西部に設置されていたと推定されるが、抜き取られており存在しない。ただ、竹製籠の一部が遺存していたことから桶を積み上げる井戸側が使用されていたことが想定される。掘方内の埋土は粘土～粘土質シルトを主体とする8層で、上部については水平堆積であるため、井戸側を抜き取った後に入人为的に埋め戻しが行われたことを示している。遺物は江戸時代に比定される陶磁器の細片が少量出土している。

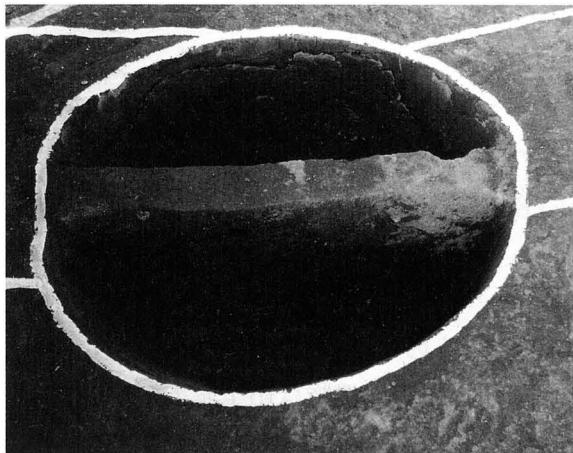


写真1 S E 101検出状況(南から)

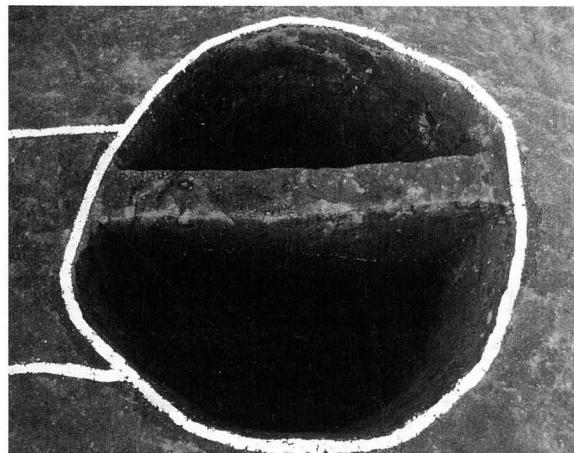


写真2 S E 102検出状況(南から)

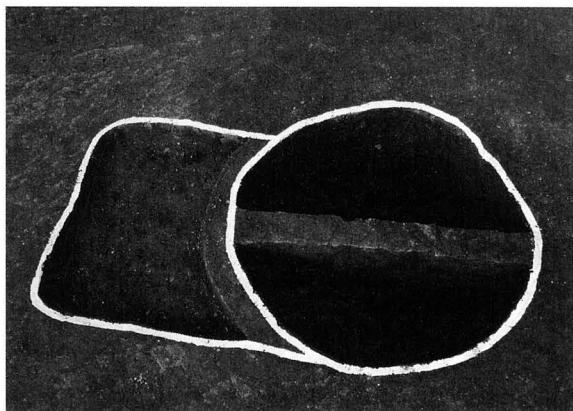


写真3 S E 103検出状況(南から)

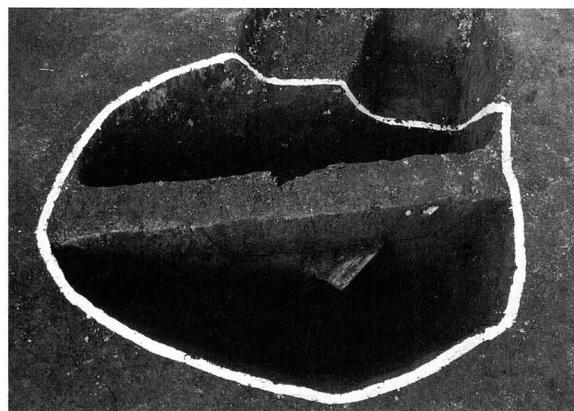


写真4 S E 104検出状況(南から)

S E 102(写真2)

S E 101から東約2mの地点で検出した。掘方の上面形状が円形を呈する素掘り井戸で、東西幅1.7m、南北幅1.8m、深さ0.9m以上を測る。掘方の断面形状は逆台形を呈する。掘方内の埋土は、2層で上層が5YR5/6明赤褐色砂礫混砂質土、下層が10BG5/1青灰色微砂混粘質土である。遺物は近世時期に比定される磁器碗の細片が極少量出土している。

S E 103(写真3)

1・2B地区で検出した。西部はS K 129を切っている。掘方の上面形状が円形を呈する素掘り井戸で、東西幅1.5m、南北幅1.5m、深さ0.95m以上を測る。掘方の断面は垂直に近い角度に掘られている。掘方内の埋土はブロックを含む不均質で複雑な層相で、検出部分では、12層に分層できる。遺物は出土していない。

S E 104(写真4)

S E 103の東側に隣接している。北東部は搅乱により不明である。掘方の上面形状が円形を呈するもので、東西幅1.3m、南北1.5m、深さ0.65m以上を測る。掘方内の埋土は、粘土～粘土質シルトを主体とする5層に分層されるが、中央付近がレンズ状に堆積していることや、井戸側の部材と推定される木片が出土していることから井戸側が存在していた可能性が高い。遺物は出土

していない。

溝(S D)

S D101

3 A 地区から 3 F 地区にかけて東西方向に伸びるもので、3 C 区から 3 D 区は削平を受けており明確でない。幅 1.2m、深さ 0.1m を測る。埋土は 7.5Y8/1 灰白色砂質土である。遺物は土師器土釜片のほか土師器の細片が少量出土している。

S D102

調査区南端の 5 C・D 地区で検出した。東西方向に伸びるものであるが、南部が調査区外に至るために全容は不明である。埋土は 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑(S K)

総数で 29 基 (S K 101~129) 検出した。S K 129 が調査区の北西に位置する以外は調査区の南西部に集中している。

南西部で検出した 28 基の土坑を上面の形状で区別すれば、長方形 19 基、方形 4 基、円形 1 基、不定形 4 基である。規模は東西幅 0.5~7.5m、南北幅 0.4~3.0m、深さ 0.05~0.5m で最下部が第Ⅶ層に達しているものが大半を占める。なかでも、西部に集中する土坑群の形状は長方形が大半で、幅・深さ等の数値がほぼ一定しており、掘方が垂直である等の特徴を持つもので、何等かの規則性に基づいて掘削されたことが推定される。これらの遺構は、第Ⅳ層上面で検出したが本来の構築面は第Ⅲ層上面である。



写真 5 土坑群検出状況(東から)

2) 第2調査面(第5図、図版一)

第2調査面は第VI a 層上面(T.P.+6.2m前後)を調査対象面とした。その結果、飛鳥時代から奈良時代、平安時代前期、鎌倉時代に比定される土坑 5 基 (S K 201~205)、溝 50 条 (S D 201~250) を検出した。

土坑(S K)

S K201

2 C 地区で検出した。上面の形状が橢円形を呈するもので、長径 0.9m、短径 0.7m、深さ 0.3m を測る。埋土は 10YR4/2 灰黄褐色粘土である。遺物は須恵器甕の破片が 1 点出土しているが時期は不明である。

S K202

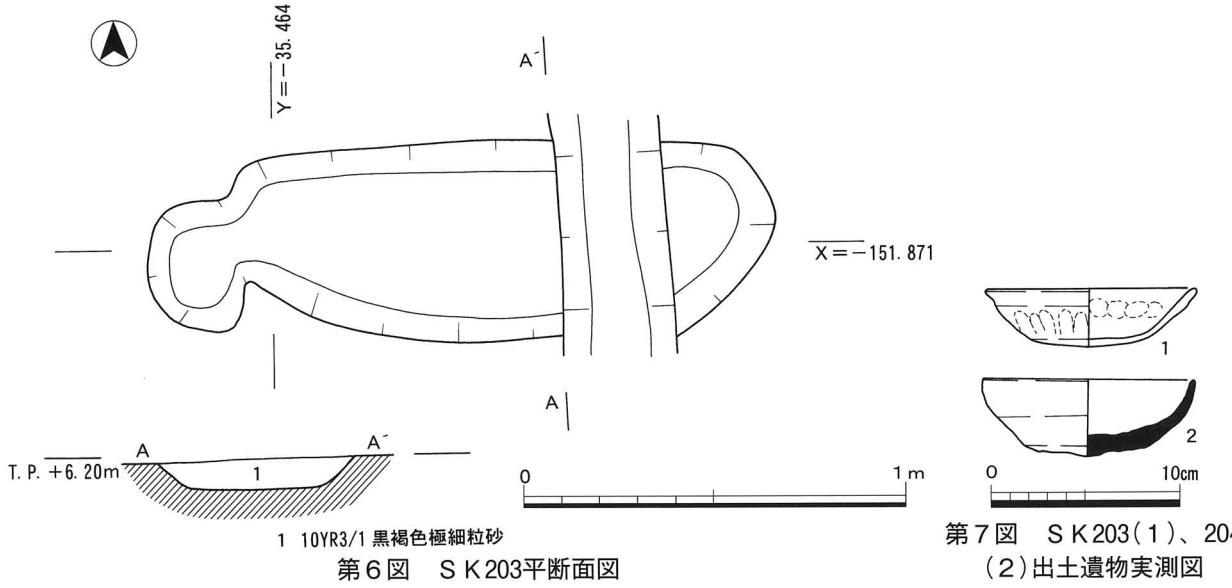
S K 201 の東 1.2m で検出した。上面の形状が円形を呈するもので、東西径 0.4m、南北径 0.5m、深さ 0.1m を測る。埋土は 7.5YR7/1 明褐灰色極細粒砂である。遺物は出土していない。

S K203(第6・7図、図版二・一一)

2 D 地区で検出した。東部端が S D 248 に切られている。上面の形状が東西方向に長い溝状を



第5図 第2調査面平面図(S=1/300)



第6図 SK 203平面図

第7図 SK 203(1)、204
(2)出土遺物実測図

呈する土坑で、東西幅2.1m、南北幅0.7m、深さ0.08mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色極細粒砂である。遺物は平安時代前期の土師器杯が1点(1)出土している。1は土師器杯である。完形品で口径11.3cm、器高3.2cmを測る。やや粗雑な作りで、体部外面に指頭圧痕が明瞭に残る。色調は赤褐色。形態の特徴や口径の数値から、佐藤氏編年の平安時代Ⅱ期新(10世紀中頃)に比定される。

SK 204(第7図、図版一一)

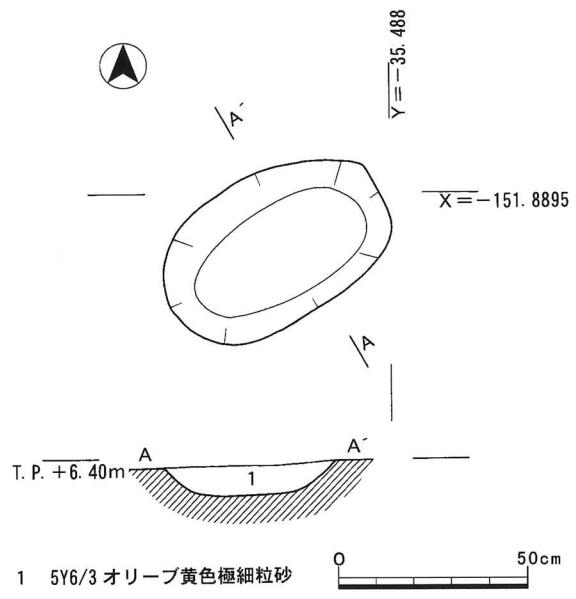
3B地区で検出した。上面の形状が橢円形を呈するもので、長径0.8m、短径0.5m、深さ0.08mを測る。埋土は5Y6/3オリーブ黄色極細粒砂である。遺物は飛鳥時代前半の須恵器杯身が1点(2)が出土している。2は須恵器杯身である。完形品で口径11.3cm、器高4.1cmを測る。全体に雑な作りで、底部裏面は未調整で凹凸が目立つ。色調は灰白色。胎土は粗く1mm大の長石粒が散見される。田辺氏編年のTK217型式(7世紀中葉)に比定される。

SK 205

4AB地区で検出した。上面の形状が橢円形を呈するもので、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.11mを測る。埋土は5Y6/3オリーブ黄色極細粒砂である。遺物は土師器の破片が極少量出土したが、時期は不明である。

溝(SD)

総数で50条(SD201~250)を検出した。飛鳥時代~奈良時代の溝1条(SD210)、平安時代前期の溝1条(SD232)以外は、鎌倉時代に比定される溝である。鎌倉時代の溝は48条検出した。



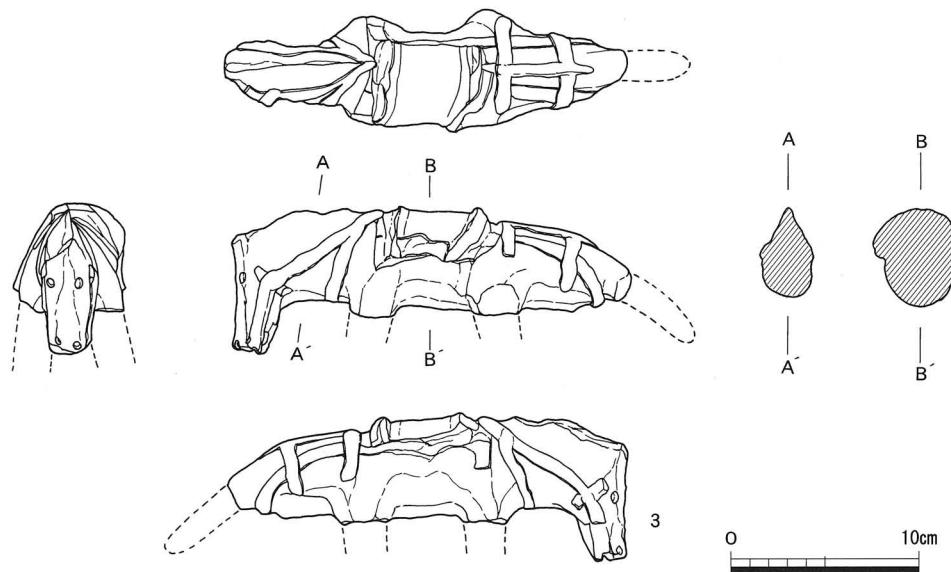
第8図 SK 204平面図

I 萱振遺跡第12次調査(KF91-12)

農耕に関連した溝群で、大半が牛馬耕による犁溝である。検出長3.3~42.5m、幅0.3~2.8m、深さ0.08~0.3mを測る。埋土は7.5Y7/1灰白色極細粒砂である。東西方向に伸びるもの39条と南北方向に伸びるもの8条がある。南北方向に伸びる溝が東西方向の溝を切っている。SD210以外の溝の詳細については、第2表の一覧表で示した。

SD210(第9図、図版二・一一)

東西方向に伸びるもので、検出長43m、幅1.5~2.5m、深さ0.21mを測る、埋土は2層から成る。遺物は下層から7世紀中葉から8世紀後葉に比定される土師器甕・高杯・土馬、須恵器杯身・杯蓋等が出土している。土馬(3)を図化した。3は馬装具が写実的に表現された飾馬で、4脚および尻尾の先端部分を欠く。残存部分で全長21.0cm、幅6.0cmを測る。胴部は丸味を持ち頭部に向かって頸部は緩やかなカーブを描くもので、頸部の上端部を尖らすことにより鬢が表現されている。頭部は胴部に対してほぼ垂直に付けられている。頭部は両耳が欠損しており、目や鼻孔は細い棒状工具による刺突、口は沈線により表現されている。馬装具のうち障泥と鞍はやや厚く丁寧に作られているが、障泥は腹部分の大半が欠損しており不明である。轡、手綱、面繫、胸繫、尻繫については、細い粘土紐を貼り付けた形で表現されている。色調は赤褐色。胎土は精良である。類例としては、大阪市平野区の城山遺跡(その1)の自然河川2出土の(461)があり、時期的には7世紀後半とされている。



第9図 SD210出土遺物実測図

第2表 第2調査面 SD201~209、SD211~250法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
SD201	1 B	8.80	0.40	0.09	7.5Y7/1灰白色極細粒砂	
SD202	1 B~1 C	18.0	0.55	0.10	〃	
SD203	1 B	8.90	0.20	0.20	〃	
SD204	2 B	48.5	0.25	0.09	〃	
SD205	〃	5.00	0.50	0.13	〃	
SD206	2 B	48.5	0.60	0.09	7.5Y7/1灰白色極細粒砂	

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D207	2 A B ~ 1 B C	13.6	1.60	0.18	10YR7/6明黄褐色中粒砂	
S D208	1 C	1.50	0.35	0.09	"	
S D209	2 B	2.20	0.60	0.07	"	
S D211	"	0.60	0.25	0.09	"	
S D212	2 B ~ E	27.9	0.45	0.09	7.5Y7/1灰白色極細粒砂	
S D213	2 B C	6.80	1.20	0.06	"	
S D214	2 C ~ E	17.7	0.45	0.20	"	
S D215	2 A ~ E、3 C	39.0	1.65	0.18	7.5Y7/1灰白色極細粒砂他	
S D216	2 E	8.30	0.40	0.14	"	
S D217	2 B	5.80	0.60	0.05	7.5Y7/1灰白色極細粒砂	
S D218	"	5.40	0.45	0.07	"	
S D219	3 A ~ D、2 E	37.3	0.90	0.11	"	
S D220	3 B ~ D	19.8	1.00	0.10	"	
S D221	3 A ~ D	28.3	0.30	0.06	"	
S D222	3 A ~ F	41.8	0.32	0.07	"	
S D223	3 C ~ F	23.5	0.30	0.06	"	
S D224	3 D ~ F	15.0	0.40	0.08	"	
S D225	3 A ~ D	26.2	2.90	0.14	10YR7/6黄褐色中粒砂	
S D226	"	26.6	0.60	0.09	7.5Y7/1灰白色極細粒砂	
S D227	3 A ~ B	6.20	0.40	0.03	"	
S D228	3 D ~ F	16.7	0.30	0.07	"	
S D229	"	16.9	0.55	0.13	"	
S D230	3 D	6.00	0.22	0.08	"	
S D231	4 A B	3.20	0.40	0.08	"	
S D232	3 B ~ 4 A	15.0	1.00	0.23	10YR7/6黄褐色中粒砂	土師器杯(平安時代前)
S D233	3 B C D ~ 4 C	20.5	0.45	0.12	7.5YR7/1灰白色極細粒砂	
S D234	4 B ~ E	25.7	0.40	0.10	"	
S D235	4 C ~ E	22.6	0.35	0.07	"	
S D236	4 C ~ D	9.80	0.45	0.09	"	
S D237	4 A ~ B	10.5	1.10	0.10	10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂	
S D238	"	7.30	0.25	0.07	7.5Y7/1灰白色極細粒砂	
S D239	"	8.60	0.26	0.12	"	
S D240	4 B ~ D	15.3	0.65	0.08	"	
S D241	4 D	3.20	0.20	0.06	"	
S D242	5 B ~ D	22.0	0.35	0.09	"	
S D243	"	21.0	0.30	0.09	"	
S D244	1 B	3.50	0.80	0.13	"	
S D245	1 B ~ B	39.5	1.20	0.12	"	
S D246	1 C ~ C	18.6	0.65	0.14	"	
S D247	1 C ~ 2 C	4.90	0.50	0.09	"	
S D248	1 D ~ D	15.3	0.40	0.10	"	
S D249	3 D ~ 5 D	17.3	0.32	0.08	"	
S D250	4 D	6.50	0.50	0.09	"	

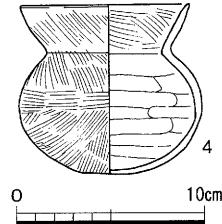
3) 第3-1調査面(第11図、図版三)

調査においては、同一面で捉えているが、調査区北西部で検出した古墳2基(古墳301・302)については、構築面が第VII b層上面(T.P.+6.30m)であるため第3-1調査面とした。第3-2調査面は第3-1面より下方20cmに存在する第VII層上面を対象としたもので、古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)の居住域に関連した遺構が検出されており、これらの居住域が廃絶した後に墓域としての土地利用が行われていたようである。

古墳(古墳)

古墳301(第10・12図、図版四・一一)

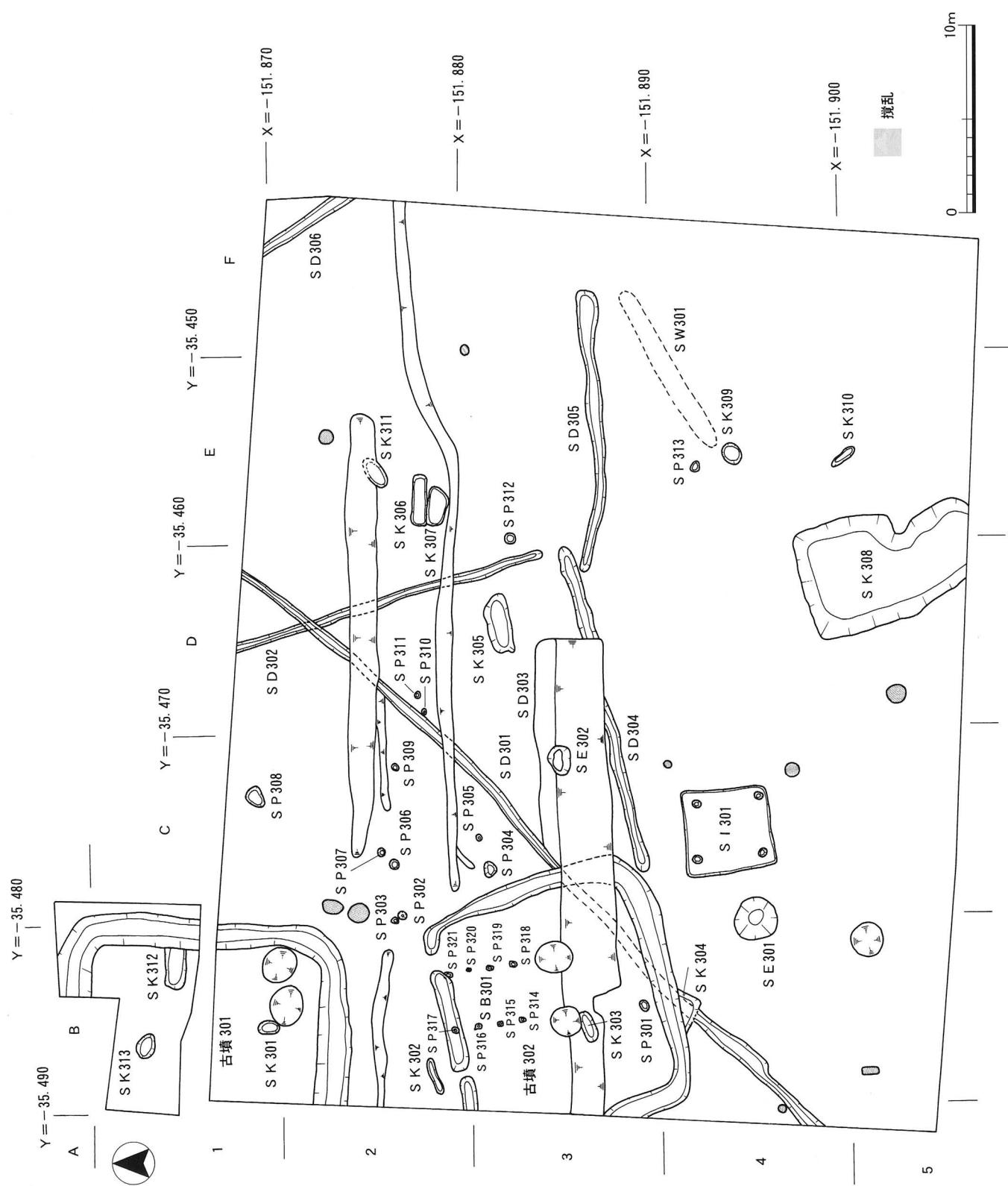
調査区北西部の1B・2B地区で検出した。北部および西部が調査区外のため、全容は不明である。墳丘の規模は、両端を検出した東辺からみて、12m前後を測る方墳と考えられる。墳丘内にはSK301・SK312・SK313が存在するが、いずれも、構築以前の第VII層を構築面とする第3-2調査面の遺構である。主軸方向はほぼ座標北を示す。墳丘部分は削平を受けており主体部の痕跡が残存していないことから、主体部が盛土内に収まるものであった可能性が考えられる。周溝の断面形状は、半円形ないしは台形状を呈しており幅1.1~1.7m、深さ0.4m前後で周溝外側付近が最も深くなっている。周溝内の埋土は、周溝形状に沿ってレンズ状に5層(1~5層)が堆積している。そのうち、最下部に堆積する3層が植物遺体を含む粘土質シルトであることから、構築後の一時期は周溝内が滞水状態であったことを示している。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器類がコンテナ箱に半分程度出土したが、細片化したものが大半を占めている。小形丸底壺1点(4)を図化した。4は南周溝東部の3層から出土した。ほぼ完形品で口径8.9cm、器高8.9cm、体部最大径9.7cmを測る。小形壺B₅にあたるもので、外面および口縁部内面の器面調整にハケが多用されている。粗製品で1mm以下の長石・石英・チャートを多く含む。色調は淡灰褐色。出土遺物から、構築時期は古墳時代前期後半の布留IV期に比定される。



第10図 古墳301出土遺物実測図

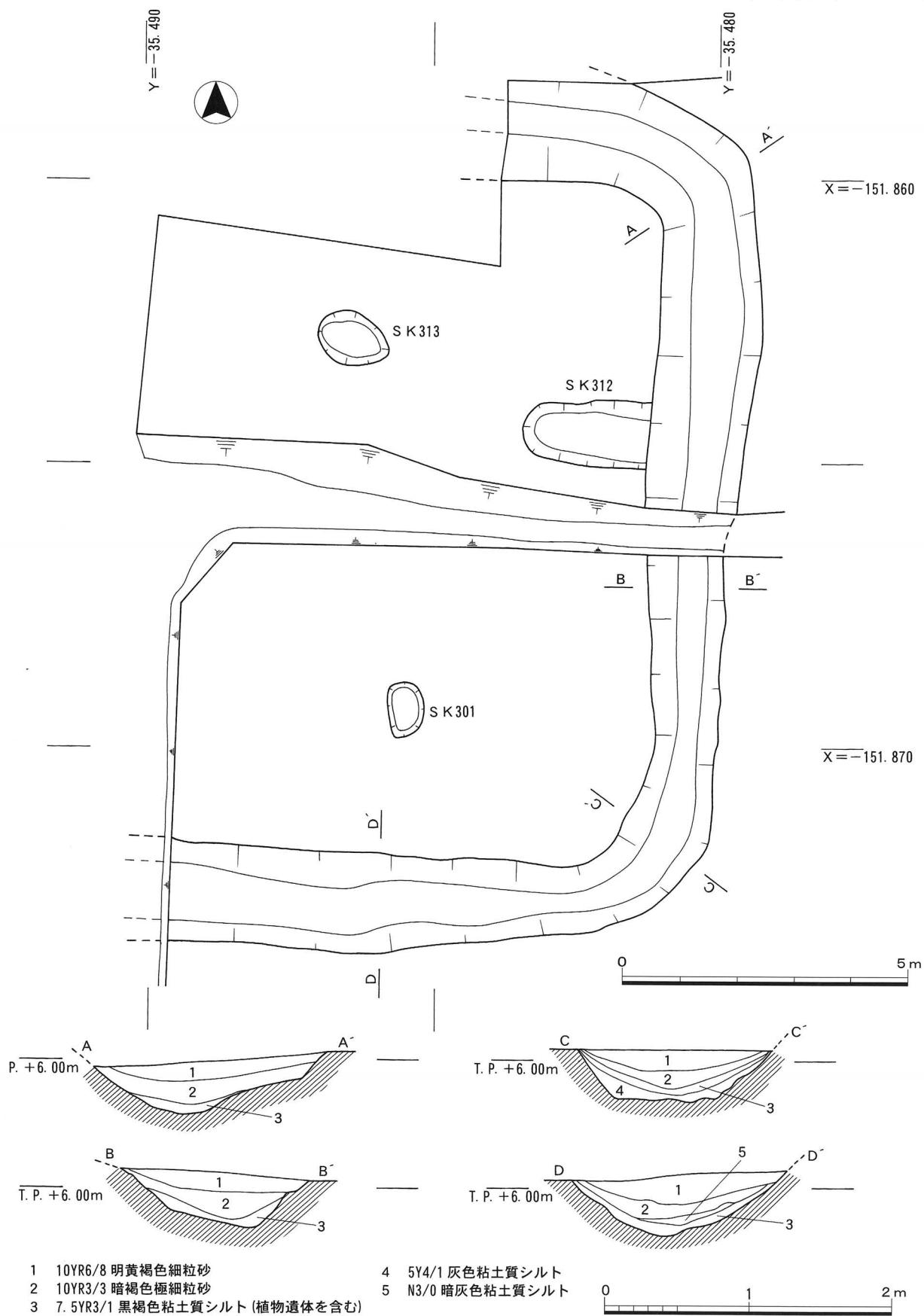
古墳302(第13~15図、図版五・一一・一二)

古墳301の南周溝から南に約5m地点で検出した。北西部を除いて、ほぼ全容を知ることができる。墳丘の平面形は東西方向にやや長い隅丸の長方形を呈するもので、北周溝の2箇所に陸橋部を有する。墳丘の規模は、東西幅12m、南北幅10.4m、周溝を含めた規模は東西幅約14.6m、南北幅12.5mを測る。方向は南北軸に対してN 17° Wを示す。墳丘内には、第VII層を構築面とする第3-2調査面のSB301・SK303・SP301が存在している。墳丘盛土は大半が削平を受けしており埋葬主体部は残存していない。周溝の断面形状は浅い皿状で幅0.4~1.5m、深さ0.1~0.23mを測る。周溝内の埋土は、周溝南西部を除き2層が堆積している。そのうち、上層の1層7.5Y3/1黒褐色粘土質シルト層には滞水状態であったことを示す植物遺体が含まれている。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器類の細片がコンテナ1箱程度出土している。なかでも周溝南西隅部分からは、小形丸底壺、甕等が集中して出土している。5点(5~9)を図化した。5は小形丸底壺(小形壺B₄)である。ほぼ完形品で口径8.4cm、器高8.0cm、体部最大径7.9cmを測る。胎土は粗く0.5mmの大長石・石英を多量に含む。色調は淡灰色。6・7は布留式甕(甕

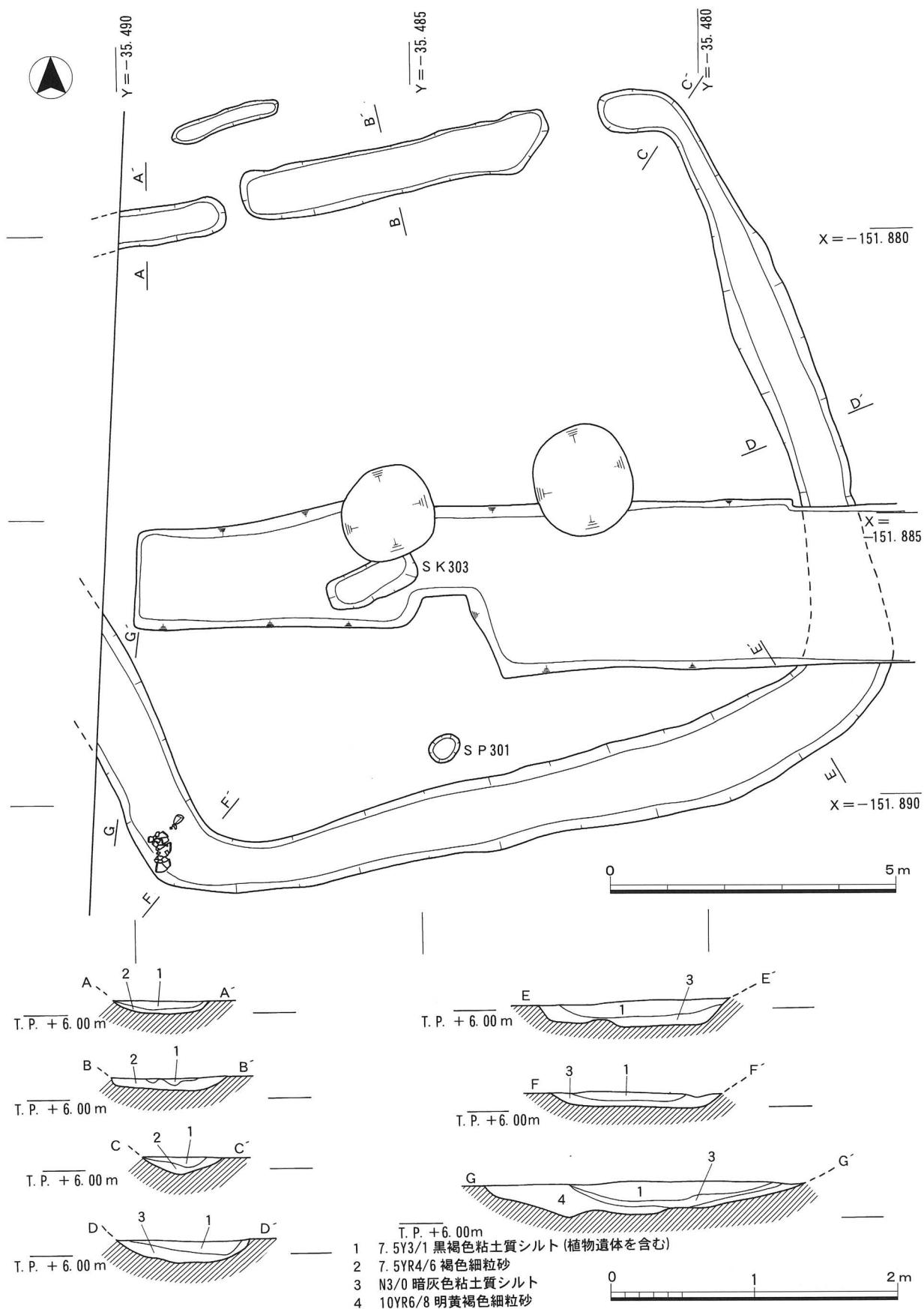


第11図 第3調査面平面図 ($S = 1/300$)

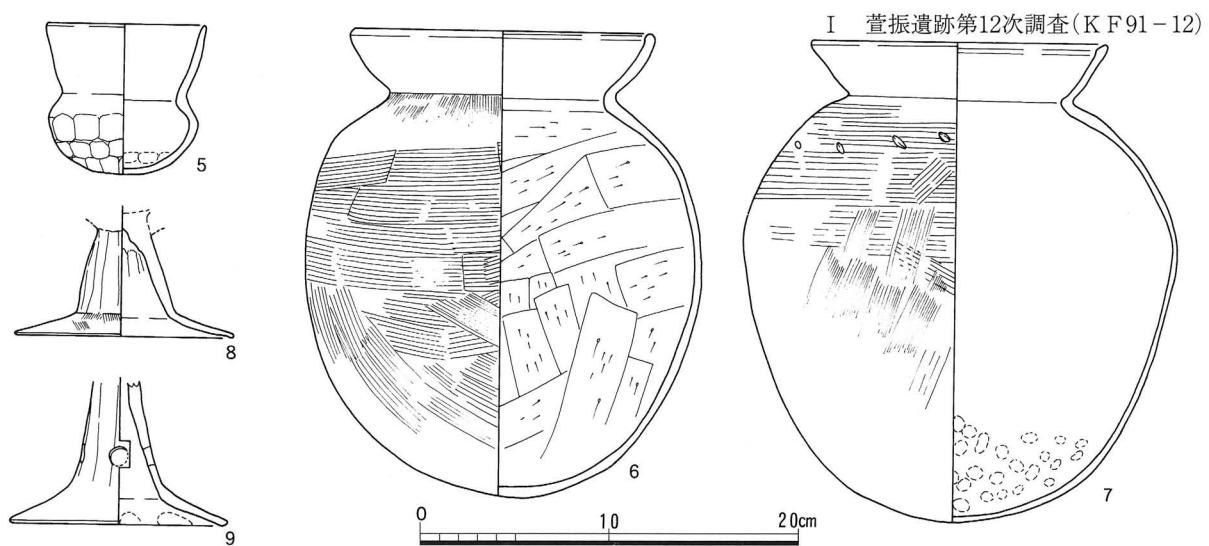
I 萱振遺跡第12次調査(K F 91-12)



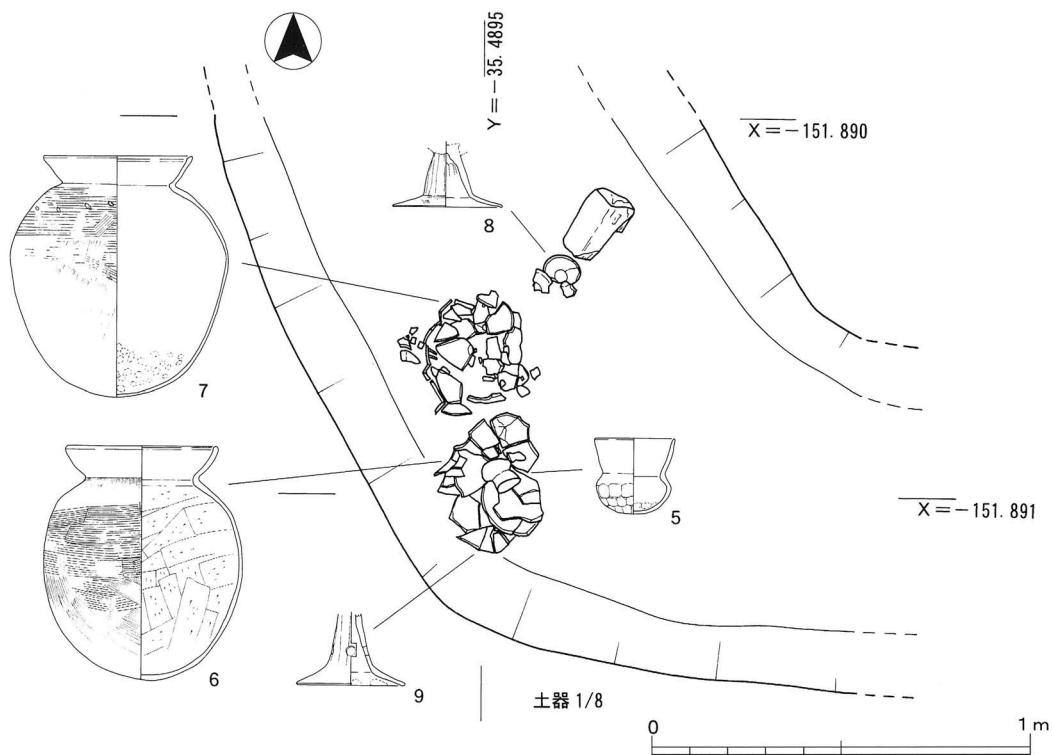
第12図 古墳301平面断面図(平面S=1/100、断面S=1/40)



第13図 古墳302平面面図(平面S=1/100、断面S=1/40)



第14図 古墳302出土遺物実測図



第15図 古墳302周溝南西部(1層内)遺物出土状況(S=1/100)

F₂)である。6は図上で完形に復元できるもので、口径16.1cm、器高24.7cm、体部最大径21.0cmを測る。口縁部が内灣気味に伸びるもので、端面は僅かに内側に肥厚している。体部の器面調製は内面がヘラケズリ、外面は最上位が縦方向、上位から中位にかけて横方向、中位から下位に左上がりのハケが施されている。7は図上で完形に復元できるもので、口径15.7cm、器高25.7cm、体部最大径23.0cmを測る。口縁端部が内傾して幅広の端面が形成されている。体部の内底部に指頭圧痕を残すが、全体に風化しており不明瞭である。外面は上位に横方向、中位に右上がりハケ調整がある他、上位にはヘラないしは棒状工具による米粒状の圧痕が水平方向に5箇所に認められる。色調は淡灰褐色。胎土は粗く、4mm大の長石が散見される。8・9は高杯の脚部である。5の小形丸底壺から、構築時期は古墳時代前期後半の布留IV期が推定される。

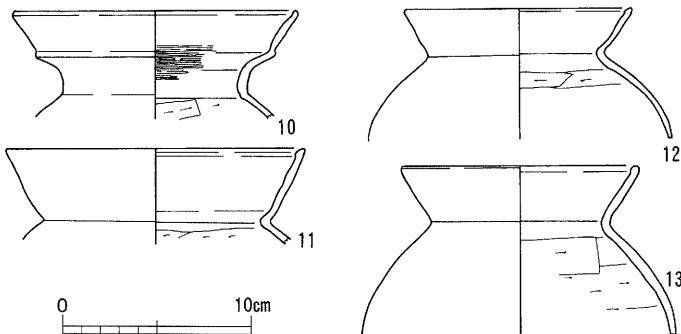
4) 第3-2調査面

第3-2調査面は第VII層上面 (T.P. + 5.9~6.1m) を調査対象面とした。調査の結果、古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)に比定される竪穴住居1棟(S I 301)、掘立柱建物1棟(S B 301)、井戸2基(S E 301・302)、土坑13基(S K 301~313)、溝6条(S D 301~306)、小穴・柱穴21個(S P 301~321)、土器集積1箇所(S W 301)を検出した。

竪穴住居(S I)

S I 301(第16・17図、図版六・一二)

4C地区で検出した。上面の形状が方形を呈するもので、東西幅4.33m、南北幅4.56m、壁高0.1~0.18mを測る。主軸方向はN 5° Wである。主柱穴は4個で、四隅の壁面に近い位置に設置されている。柱間は東西方向が3.0~3.15m、南北方向が3.4~3.5mを測る。主柱穴を構成する柱穴は、径0.4~0.5mを測るが、深さは浅く0.1m前後を測る。柱穴内の埋土は10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂である。床面は壁面部から中央部にかけて僅かに傾斜しており、中央部が窪む構造である。炉跡は検出していない。竪穴住居内の埋土は、下層(2層)の10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂が堆積した後、中央部付近を中心に上層(1層)の10YR1.7/1黒色極細粒砂がレンズ状に堆積している。遺物は主に1層から古式土師器類の細片が少量出土している。4点(10~13)を図化した。10は二重口縁壺(複合口縁壺B₁)の細片で、口縁部から体部上位が残存している。復元口径15.1cmを測る。11~13は布留式甕(甕F₂)の細片である。古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定され、西接するS E 301と同時期に存在したことが推定される。

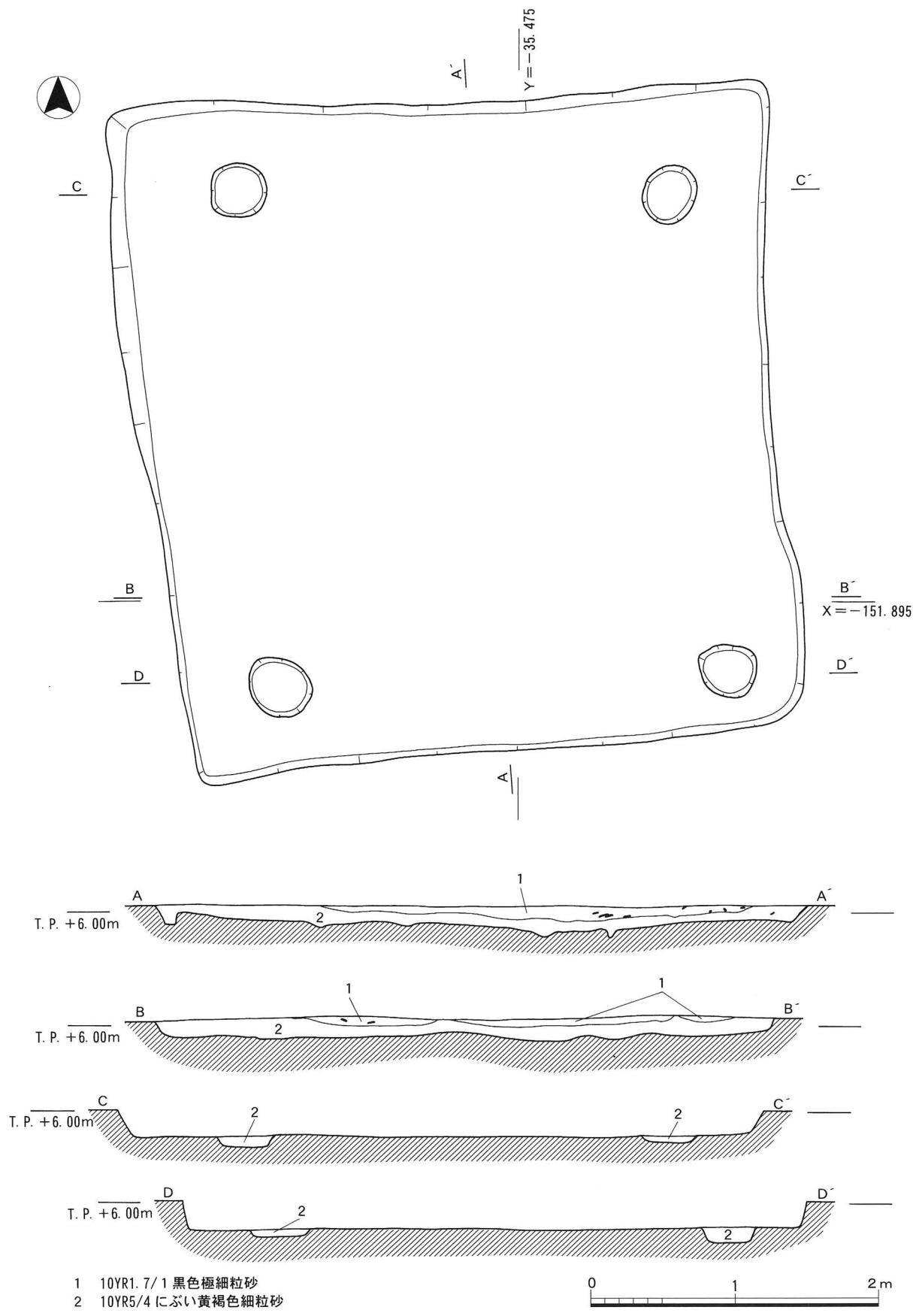


第16図 S I 301出土遺物実測図

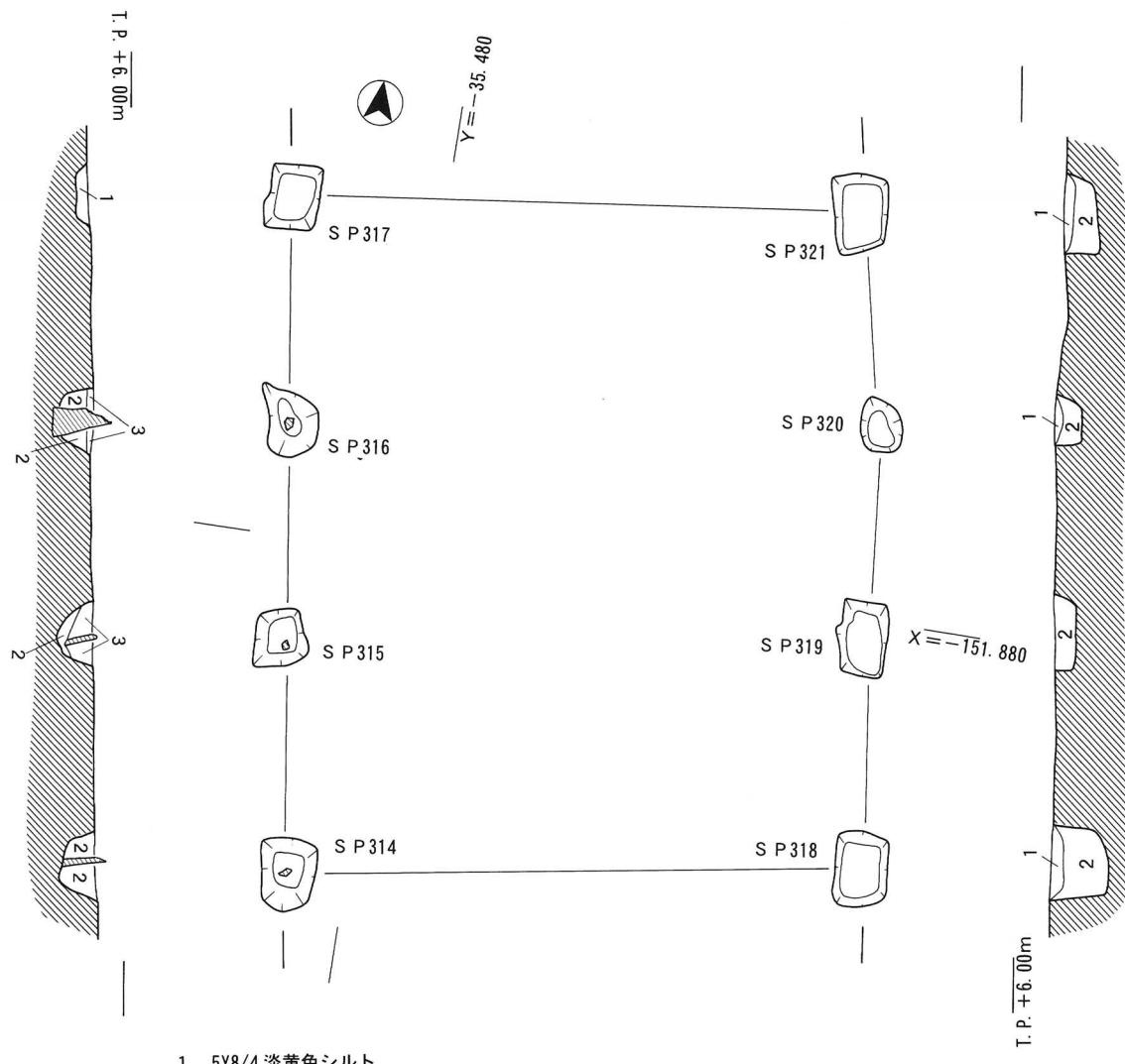
掘立柱建物(S B)

S B 301(第18図、図版六)

2B地区の南部から3B地区の北部で検出した。東西1間(3.05m)×南北3間(3.6m)の規模を測る。平面図では、古墳302の北周溝に一部重複しているが、層位的には住居廃絶後に古墳302が構築されている。主軸方向はN 5° Wで、床面積は約11.0m²を測る。掘立柱建物を構成する柱穴は、上面の形状が方形ないしは不定形で、幅0.22~0.3m、深さ0.07~0.3mを測る。埋土は1層ないしは2層が堆積しており、2層堆積するものは最下層がN7/0灰白色粘質シルトと2.5GY8/1灰白色シルトの互層で、上部に5Y8/4淡黄色シルトと5Y6/1灰色シルトの互層ないしはN6/0灰色粘質シルトが堆積している。遺物はS P 318・S P 319から古式土師器類の細片が極少量出土しているが図化し得たものはない。なお、S P 314~316には柱根が遺存していた。帰属時期については、出土遺物が細片のため限定できないが、東接するS E 302と同時期に存在したと推定すれば、古墳時代前期前半(布留Ⅱ期)が想定される。



第17図 S I 301平面断面図(S=1/40)

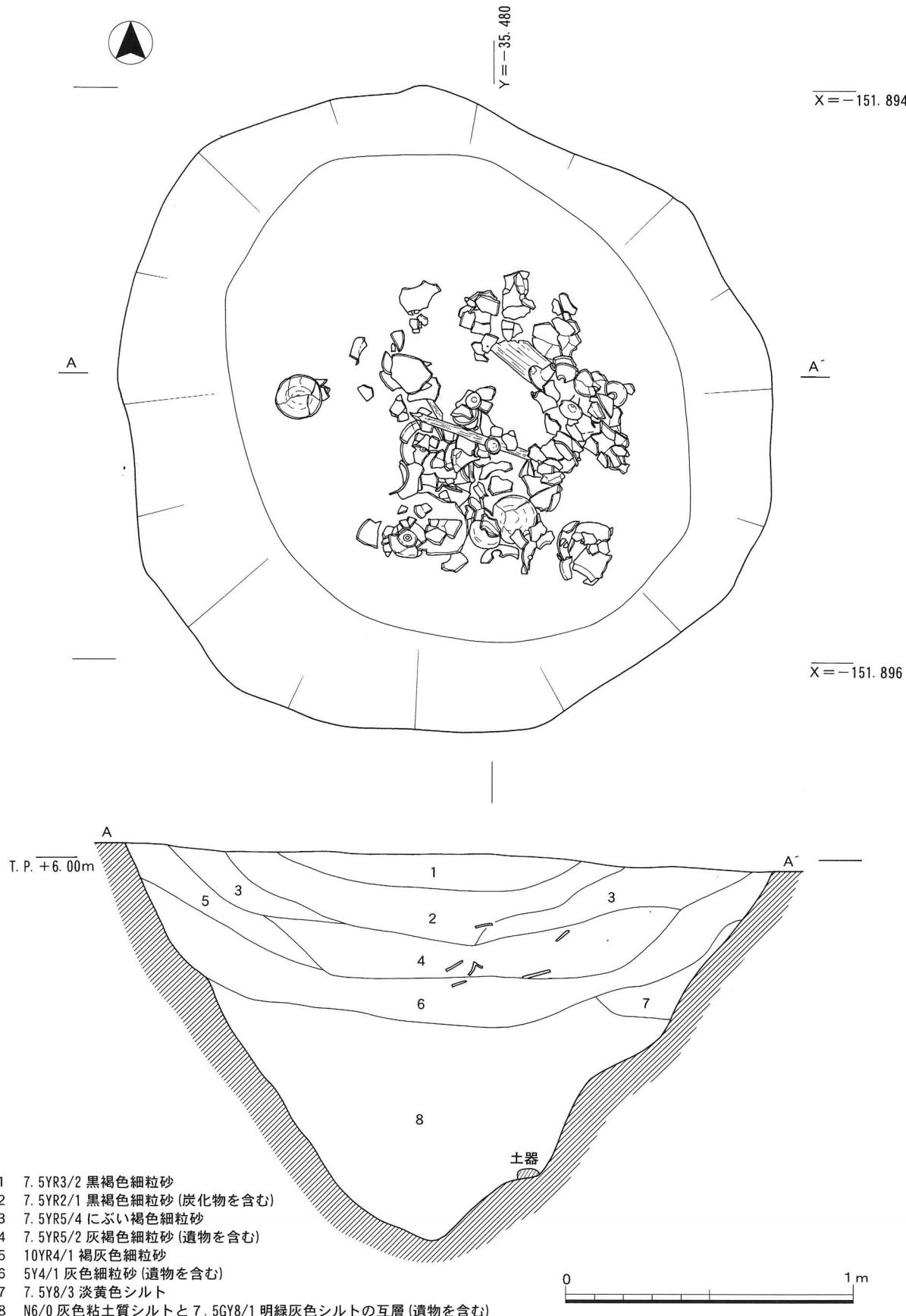


第18図 SB 301平面面図(S=1/40)

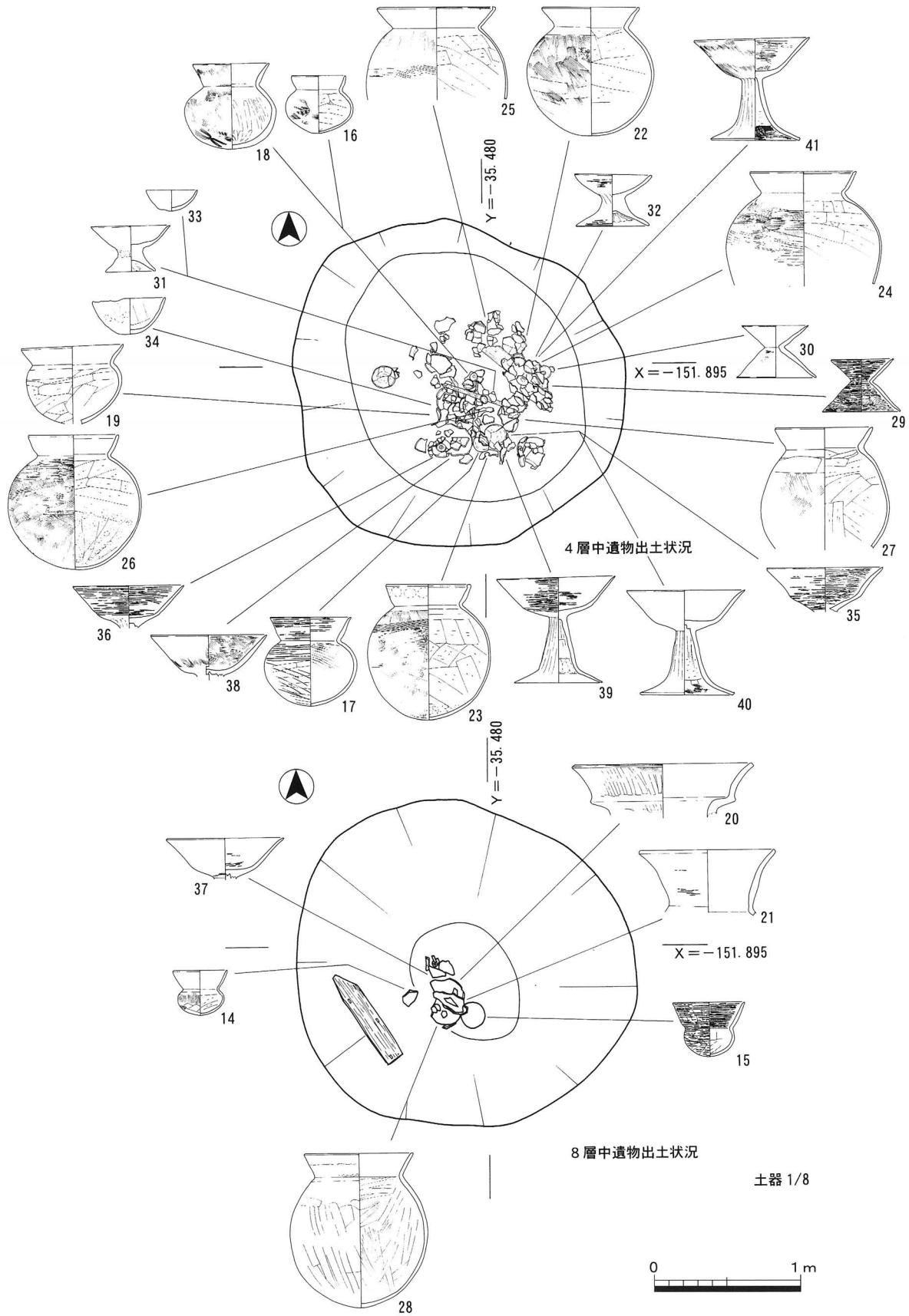
井戸(S E)

S E 301(第19~22図、図版七・一二~一五)

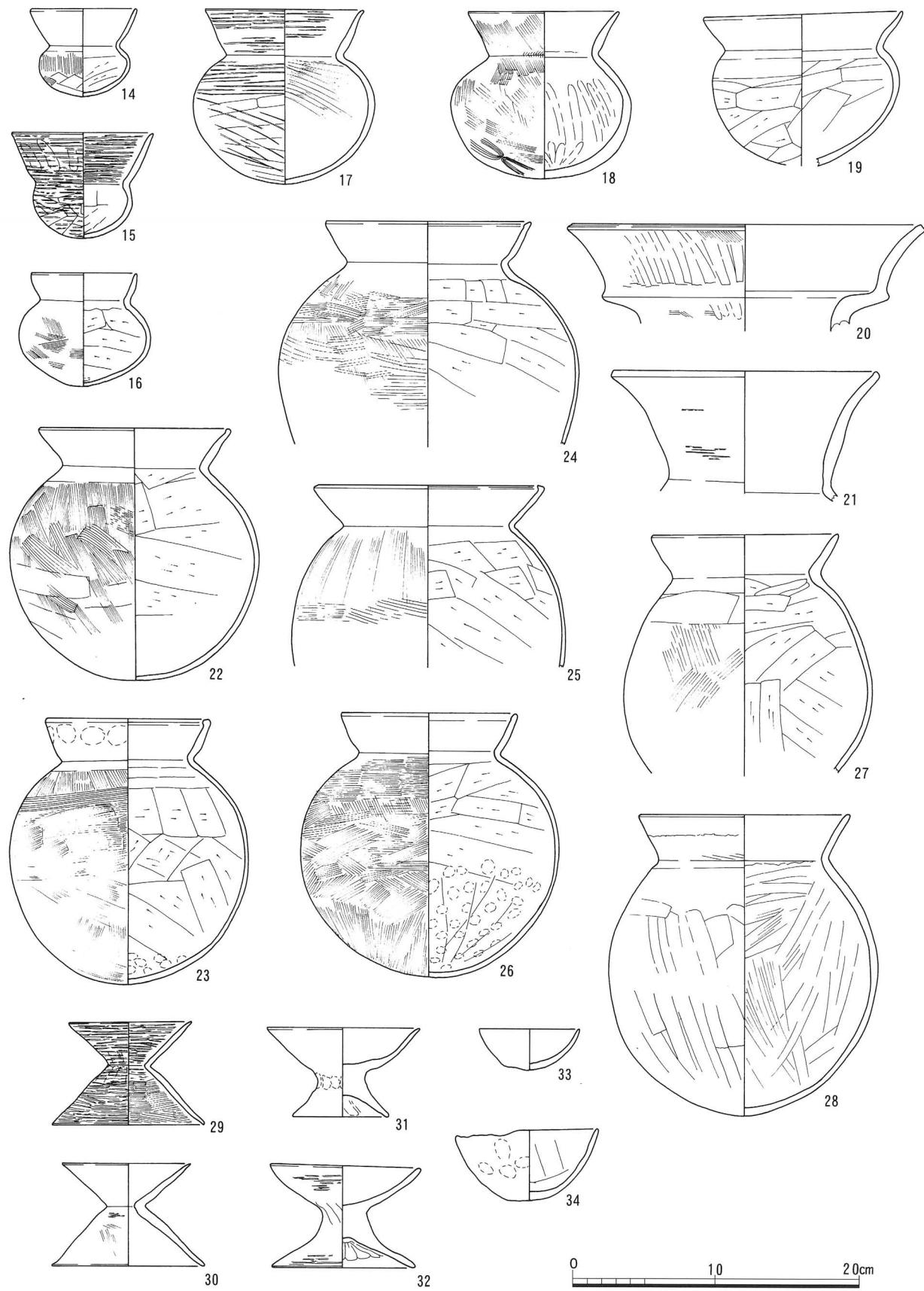
4B地区東部から4C地区西部で検出した素堀り井戸である。上面の形状が不整円形を呈するもので、東西径2.25m、南北径2.25mを測る。掘方の断面形状は摺鉢状で、深さ1.35mを測る。埋土は8層(1~8層)で、断面形状に沿ってレンズ状に堆積している。遺物は4・6・8層から古墳時代前期中葉(布留式中相)の古式土師器類が多量に出土しており、8層からは完形の布留甕を含む良好な資料が出土地していている。28点(14~41)を図化した。14~19は小形丸底甕である。14・15が半球形の体部に長めの口縁部が付く小形甕B₄、16が小形甕B₅である。17~19は14~16に比して器高が高い中形品である。17・18が小形甕B₅、19は小形甕B₁の形態に近い。17~19は小形甕に通有な精良粘土が使用されているが、3点共に体部外面に煤の付着が認められるため、煮炊き具として使用されている。20は大形の二重口縁甕(複合口縁甕B₁)の口縁部である。復元口径24.8cmを測る。21は大形直口甕の口縁部。口径18.7cmを測る。色調は赤褐色。22は体部内面のヘラケズリが屈曲部に及ぶもので、布留式影響の庄内式甕(甕D)に分類される。23~26は布留式



第19図 S E 301平面面図(S=1/20)

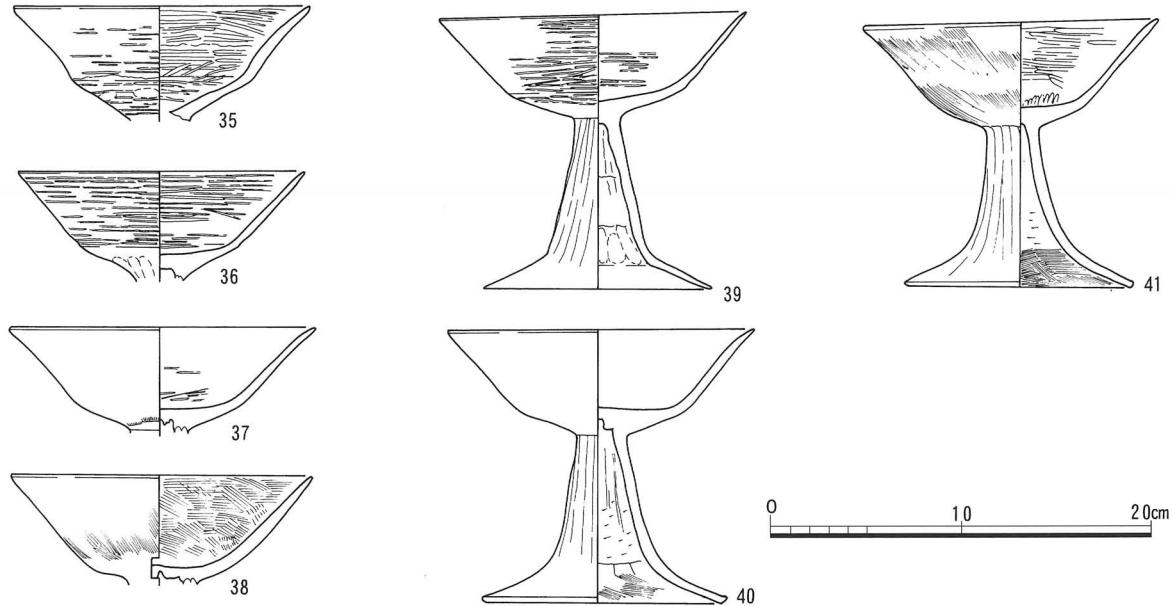


第20図 S E 301遺物出土位置図 (S = 1/40)



第21図 S E 301出土遺物実測図-1

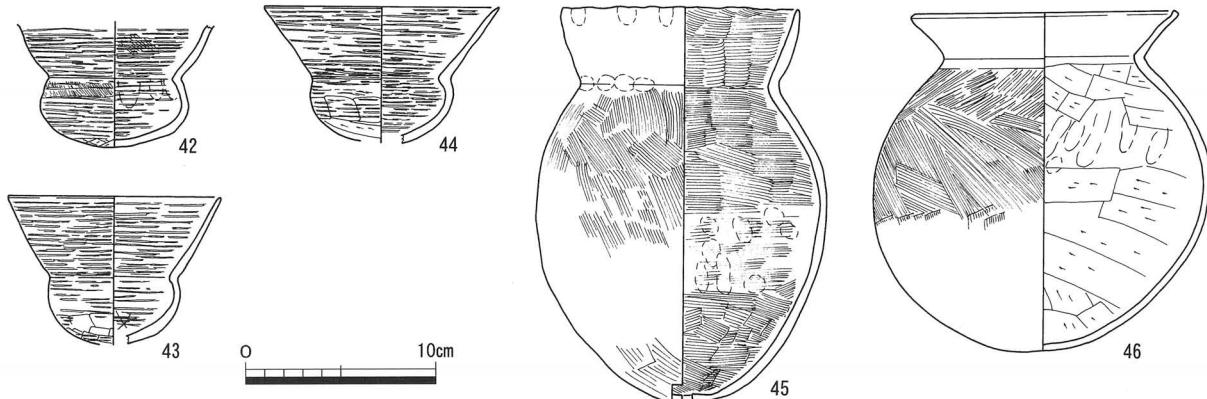
甕（甕F₂）である。そのうち、23・26は完形品である。4点共に外面全体に煤が付着している。27・28は直口の口縁部を持つ甕（甕G）である。共に、明褐色で、胎土が精良である。29・30は小形精製品の鼓形器台（器台C）である。29が精製品、30も精製品であるが器面風化のため調整は不明瞭。31・32は小形器台ないしは高杯の可能性があるが、中河内地域においては類例が少ない。33・34は小形鉢（鉢E₁）である。高杯は7点（35～41）である。杯部の形態および調整等から、横方向のヘラミガキを多用する35・36・39が高杯A₅、杯部の稜に丸みを持つ37・38・40・41が高杯A₆にあたる。出土遺物から遺構の帰属時期は、古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定される。



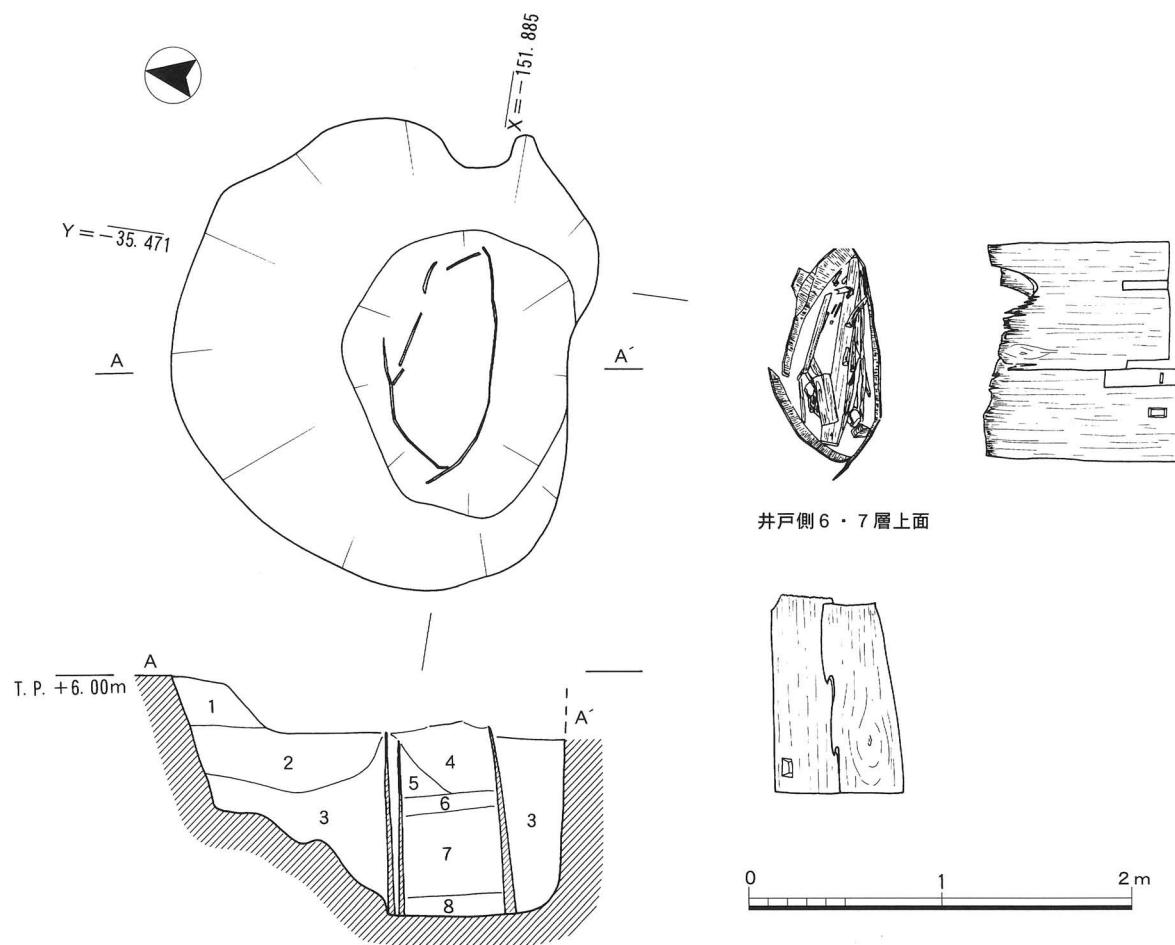
第22図 S E 301出土遺物実測図－2

S E 302(第23・24図、図版八・一六)

3 C 地区で検出した。掘方上部の北部が S D 303 に南部が S D 225 に削平されている。掘方の上面形状は東西方向に長い不整の楕円形を呈するもので、東西径 2.2m、南北径 2.1m、深さ 1.3m を測る。井戸側は大形の部材 3 枚を組み合わせたもので、掘方の南部に設置されている。井戸側の上面の形状は、東西方向に長い楕円形状で、東西幅 1.15m、南北幅 0.57m、高さ 1.0m を測る。井戸側に使用された部材は、船材を転用したものと推定されるもので、北部が 2 枚（西側 - 幅 0.65m・



第23図 S E 302出土遺物実測図



第24図 S E 302平断面図(S=1/40)

高さ1.03m・厚さ0.01~0.04m、東側幅0.75m・高さ0.94m・厚さ0.01~0.04m)、南部が1枚(幅1.25m・高さ1.0m・厚さ0.01~0.06m)で構成されている。掘方内の埋土が3層(1~3層)、井戸側内の埋土が5層(4~8層)である。遺物は6層および7層上層から古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器類、石材等の細片が少量出土している。5点(42~46)を図化した。42~44は小形丸底壺(小形壺B₃)である。3点とも精製品で内外面に密な横方向のヘラミガキが施されている。45は長胴形の体部に短く伸びる口縁部が付く壺(短頸壺B)である。底部中央に焼成後に円孔が穿たれている。46は甕でほぼ完形品である。体部外面の器面調整は上位が右上がりのヘラミガキで以下は左上がりの単位の細かいハケが施されている。器面調整や形態の特徴から、布留式影響の庄内式甕(甕D)にあたる。出土遺物から遺構の帰属時期は、古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定される。

土坑(S K)

S K 301

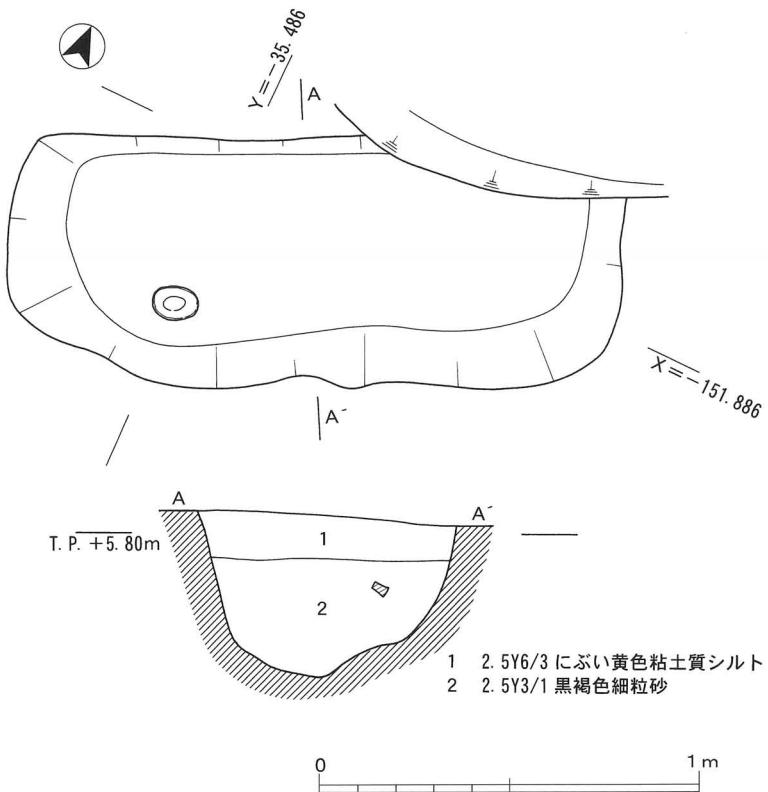
1B地区の南部で検出した。上面の形状が橢円形を呈するもので、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5Y3/1黒褐色粘質土である。遺物は古式土師器の細片が少量出土しているが図化し得たものは無い。

S K 302

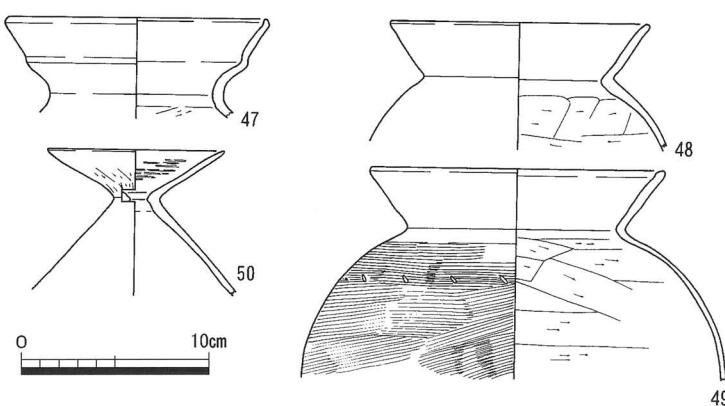
2B地区の南部で検出した。上面の形状が東西方向に長い溝状を呈する土坑で、東西幅2.0m、南北幅0.4mを測る。埋土は7.5Y3/1黒褐色粘質土である。遺物は古式土師器の小形丸底壺、高杯等の細片が少量出土している。

S K 303(第25・26図、図版九・一六)

3B地区で検出した。上部がSD 225とSE 101により削平を受けている。上面の形状が東西方向に長い橢円形もので、長径1.7m、短径0.7mを測る。埋土は2層(1・2層)から成る。遺物は2層から古式土師器類が少量出土しているが大半が細片である。4点(47~49)を図化した。47は二重口縁壺(複合口縁壺D)の口縁部細片である。形態から山陰地方を中心に分布するものと推定される。48は口縁屈曲部近くまでヘラケズリを行う布留式甕の属性の一部を持つ布留式傾向甕(甕E)である。外面に煤が付着している。49は布留式甕(甕F₂)である。体部外面上位に棒状工具による米粒状の刺突痕が5箇所に認められる。50は鼓形器台(C₂)で脚部に比して受部が小さい形態で、この器種としては最終段階にあたる。出土遺物から遺構帰属時期は、古墳時代前期前半の布留II期に比定される。



第25図 S K 303平面面図(S=1/20)



第26図 S K 303出土遺物実測図

S K304

4 B 地区で検出した。北部が古墳302に切られており全容は不明である。検出長2.3m、深さ0.15mを測る。埋土は7.5YR3/1黒褐色粘質土である。遺物は古式土師器の小形丸底壺、布留式甕、小形鉢等の細片が少量出土している。布留IV期以降の古墳302に切られていることから、構築時期はそれ以前である。

S K305

3 D 地区で検出した。上面の形状が東西方向に長い楕円形を呈するもので、長径3.2m、短径1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の壺、布留式甕、高杯の細片が極少量出土しているが図化および時期を明確にし得たものはない。

S K306

2 E 地区で検出した。上面の形状が長方形を呈するもので、東西幅2.7m、南北幅0.7m、深さ0.25mを測る。埋土は上層から10YR7/6明黄褐色極細粒砂、10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の小形丸底壺、布留式甕等の細片が極少量出土しているが図化および時期を明確にし得たものはない。

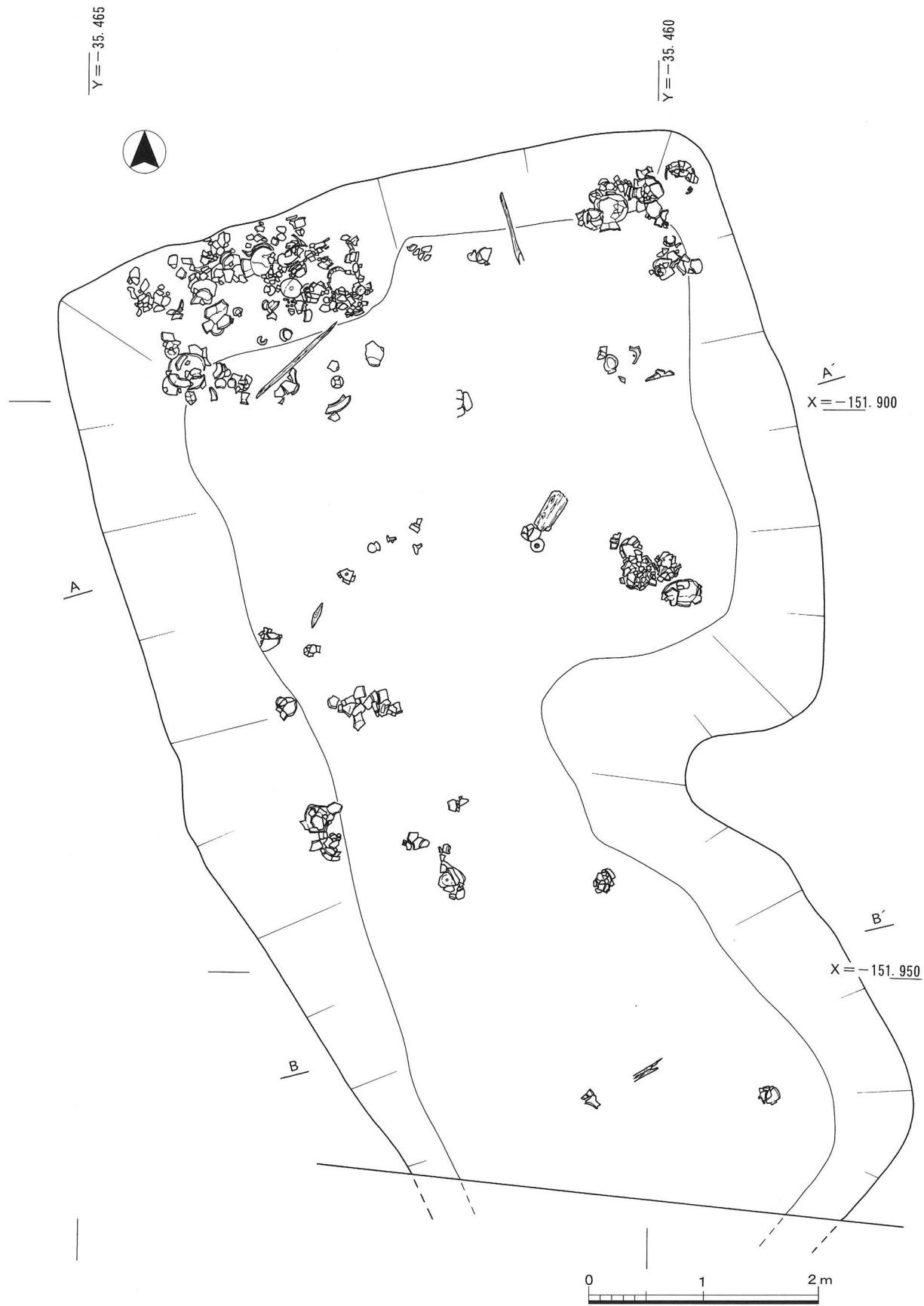
S K307

S K306の南側に接して検出した。上面の形状が東西方向に長い楕円形を呈するもので、長径2.1m、短径1.1m、深さ1.8mを測る。埋土は上層から10YR7/6明黄褐色極細粒砂、10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の甕の細片が極少量出土しているが図化および時期を明確にし得たものはない。

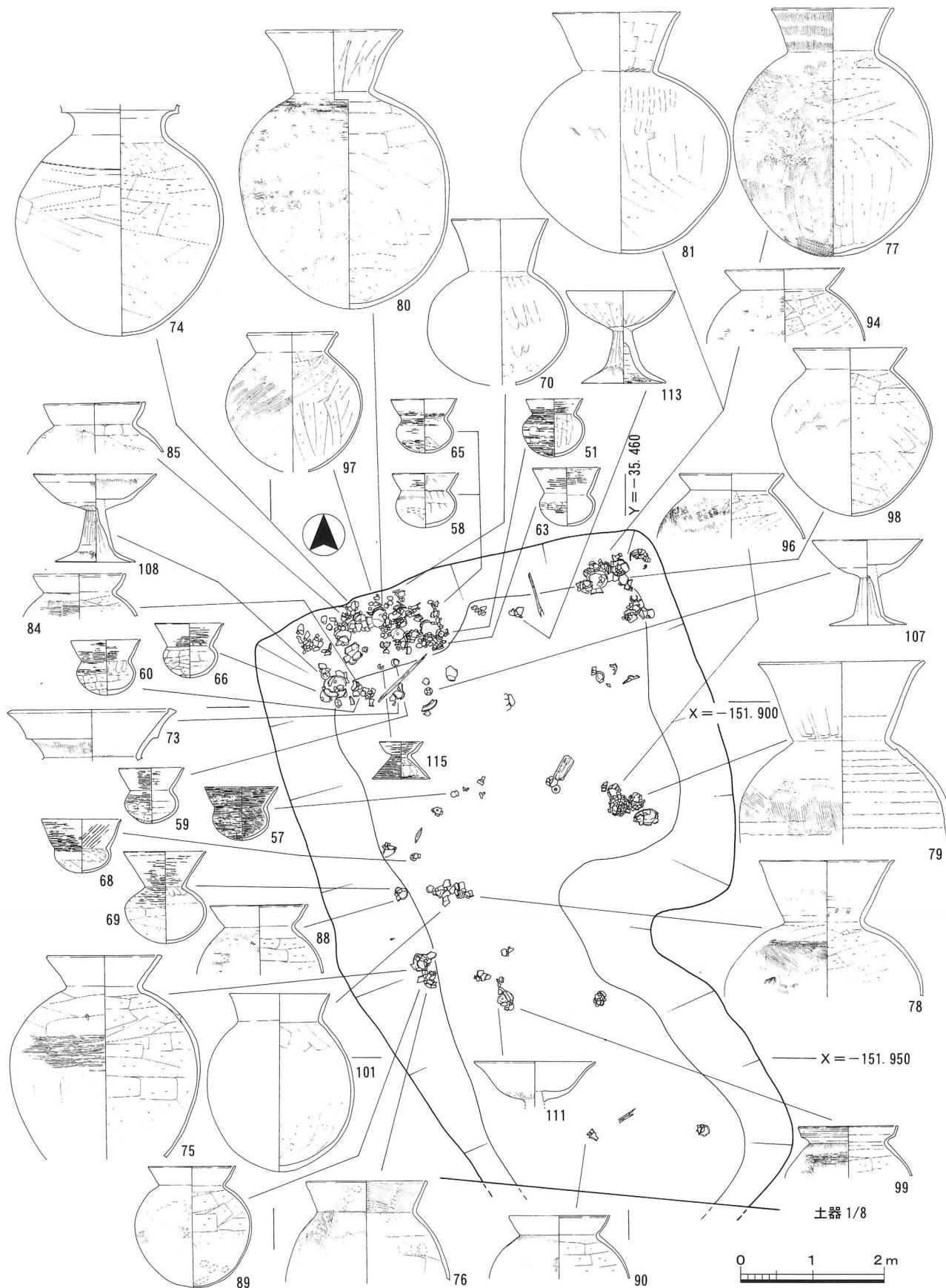
S K308(第27~34図、図版九・一〇・一七~二四)

4・5 D E 地区で検出した。上面の形状が不整方形を呈する大型の土坑である。規模は東西幅4.35~6.15m、南北幅9.3mを測る。深さは北部で0.5m、南部が0.6mで南部がやや深くなっている。断面の形状は北部が逆台形、南部が船底状を呈する。埋土は概ね遺構形状に沿ってレンズ状に9層に分層される。そのうち、2~4層については粘土ないしは粘土質シルトの層相であるため、水を溜めておくことを目的とした水溜め状遺構であった可能性が高い。遺物は遺構北部の1・2層から、古墳時代前期中葉から後半(布留式中相から新相)に比定される古式土師器類、石器類がコンテナ箱に8箱程度出土したが、その大半が2層からの出土である。

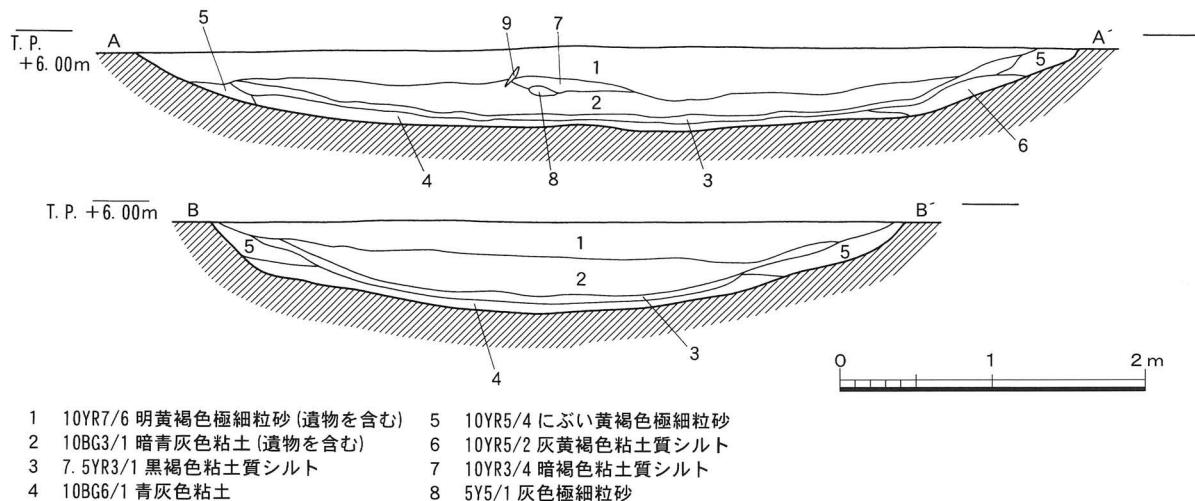
総数で68点(51~118)を図化した。そのうち古式土師器が66点(51~116)、石製品が2点(117・118)である。壺類は31点(51~81)である。51~68は小形丸底壺である。口径8.2~11.2cm、器高7.2~9.0cm、体部最大径7.4~10.0cmを測る。体部最大径が口径を凌駕する51が小形壺B₁、口径と体部最大径がほぼ同じか、口径が体部最大径を凌駕する52~56が小形壺B₂、半球形の体部に大きく開く口縁部が付く57・58が小形壺B₃、半球形の体部から大きく開き口縁部高が増大した59~68が小形壺B₄にあたる。外面の器面調整においては、横方向の密なヘラミガキ、ケズリ、ハケが行われている54・55以外については精製品に分類される。69は精製品の小形直口壺(直口壺A₁)である。図上で完形に復元でき口径11.7cm、器高13.0cm、体部最大径11.6cmを測る。70は中形の直口壺(直口壺A₂)である。器壁面が風化しており、調整等は不明である。色調は赤褐色。71は扁球形の体部に二重に屈曲する口縁部が付く小形壺(複合口縁壺B₃)である。口径10.3cm、器高11.5cm、体部最大径11.1cmを測る。72は複合口縁を有する複合口縁壺の口頸部片である。色調は



第27図 SK 308平面図($S=1/50$)



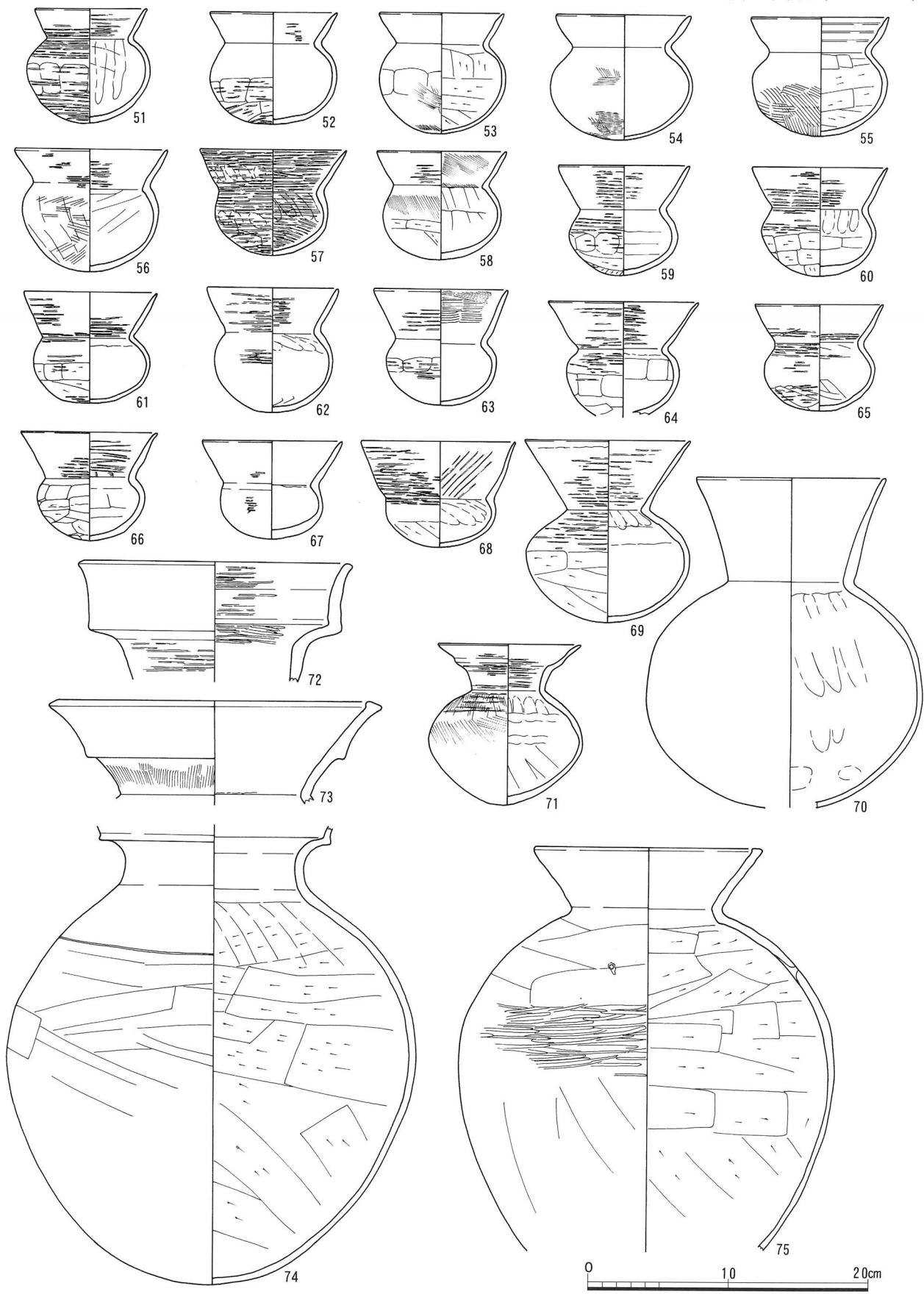
第28図 SK 308遺物出土位置図(S=1/80)



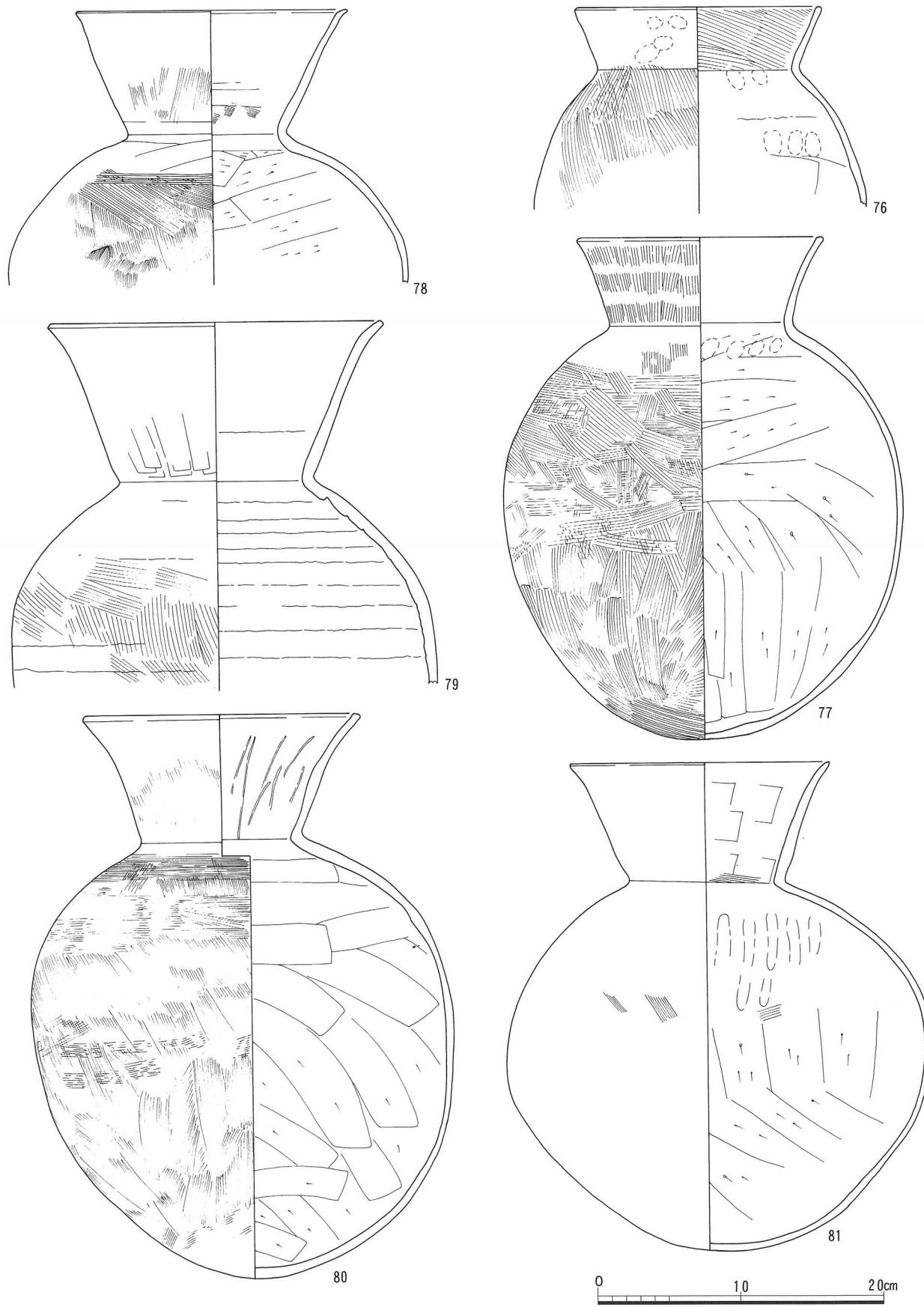
第29図 S K 308断面図 (S = 1/50)

淡灰褐色を呈する。四国東部産の可能性がある。73は口縁部の中位に外方に張り出す明瞭な稜部分を形成する大形の二重口縁壺の口縁部である。口縁端部は外傾して内側に肥厚している。山陰地方からの搬入品である。74は複合口縁壺で口縁部を欠く。体部は楕円形で外面の上位にヘラ描きによる1条の沈線が巡る。山陰地方からの搬入品である。75は広口壺である。口縁端部は水平で内に僅かに肥厚している点や、体部内面のヘラケズリが屈曲部のやや下方以下に行われている等の特徴は同時期の布留式甕の製作技法に共通している。体部上位に焼成後に穿たれた穿孔がある。76・77は直口の口縁部を有する大形の壺(短頸直口壺A)である。77は図上で完形に復元できるもので、口径17.3cm、器高35.5cm、体部最大径28.0cmを測る。2点ともに外面にはハケ調整が多用されている。78~81は大形直口壺(大形直口壺A)である。4点ともに口縁端部付近で小さく外反しており、端部は尖り気味で終る78・81と外傾する小端面を形成する79・80がある。色調は78が白灰色、79が橙色、80が淡灰色~淡灰褐色、81が褐灰色である。81は角閃石を含む生駒西麓産である。82~98は布留式甕(甕F₂)である。82~89は口径11.6~16.2cmを測るやや小振りのものである。口縁端部は布留式甕に特有な内面肥厚が主体であるが、82のように肥厚せず小さく外反するものがある。体部外面の器面調整はハケが主体で上位では横方向、それ以下を縦方向に施されている。体部内面は底部付近に指頭圧成形の圧痕跡、それ以外はヘラケズリが行われている。88の体部外面の上位には布留式甕に特有なヘラないしは棒状工具による米粒状の圧痕が認められる。82の色調は、淡褐灰色で胎土に角閃石を含む生駒西麓産である。90~94は口径16.0cmを測る布留式甕(甕F₂)である。93の体部外面の上位に米粒状の圧痕が3箇所に認められる。95~98は布留式影響の庄内式甕(甕D)である。そのうち97が生駒西麓産である。99は吉備系の甕の細片である。口縁部外面に6条を一単位とする擬凹線が廻る。100・101は球形の体部に短く立ち上がる口縁部を有する甕(甕G)である。101については、粗製で器面全体にクラックが認められるもので、製塩土器の可能性がある。102~114は高杯である。102~104が精製品の高杯(高杯A₅)杯部である。内外面に横方向の密なヘラミガキが施されている。105~111は稜部に丸みを持つもので、高杯A₆にあたる。112は脚部である。113は椀形の杯部を持つもので高杯A₇である。外面調整は杯部、脚部共に縦方向のハケの後、二次調整としてヘラミガキを行う。114は有稜の大形高杯(高杯A₉)の杯部である。口縁部は端部付近で強く外反している。体部外面に縦方向の密なヘラミ

I 萱振遺跡第12次調査(K F 91-12)

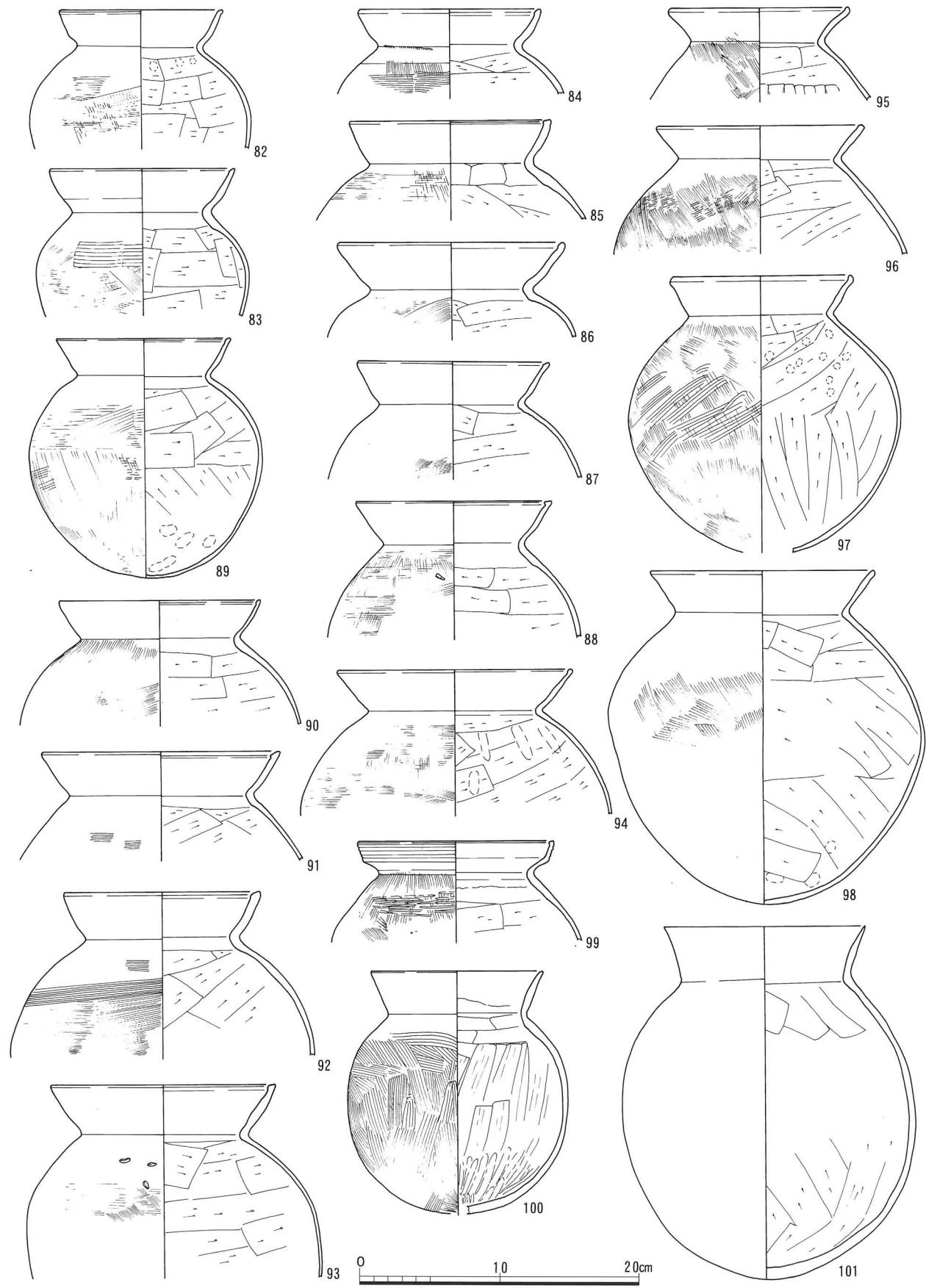


第30図 SK 308出土遺物実測図-1

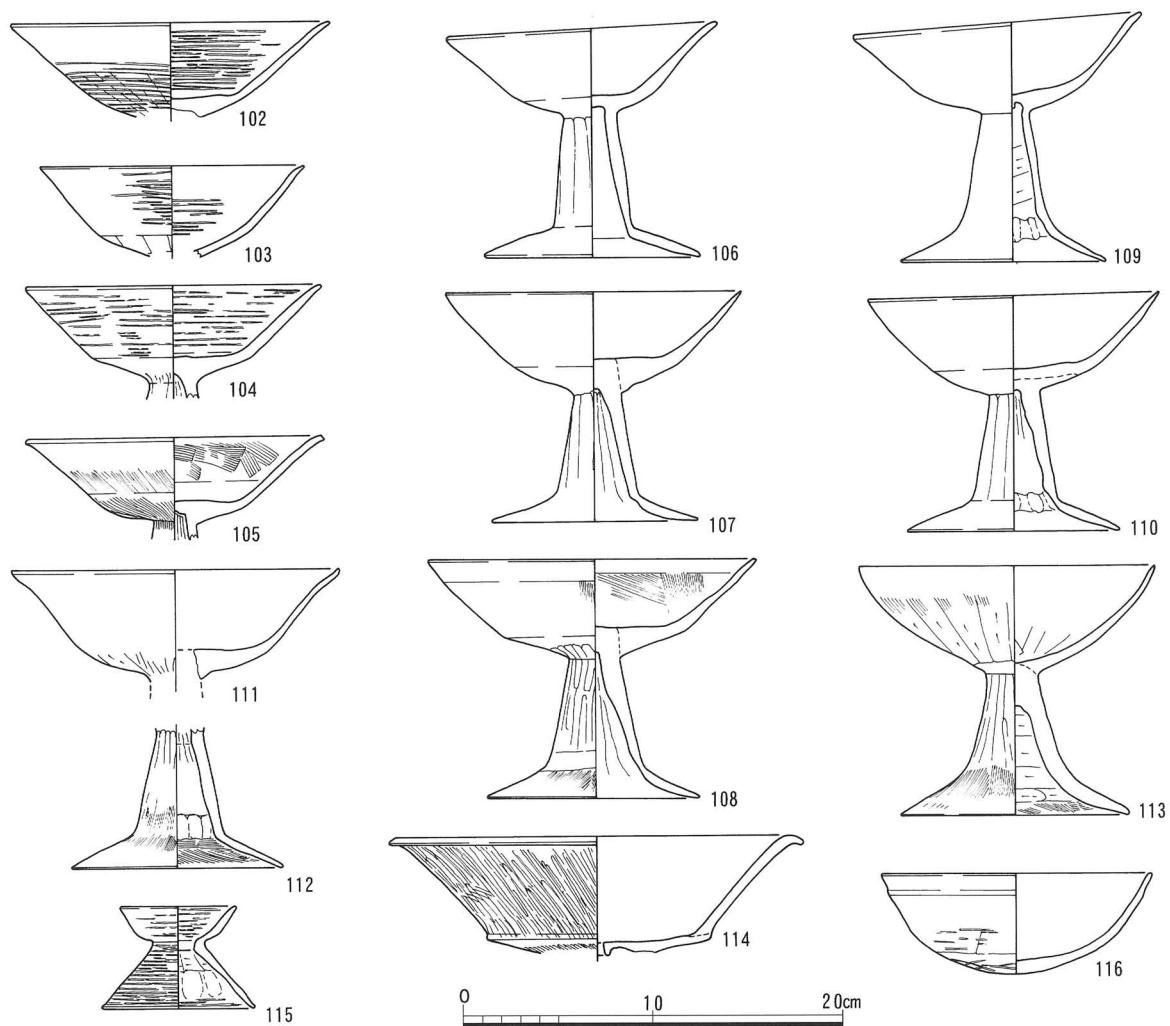


第31図 SK 308出土遺物実測図－2

I 葦振遺跡第12次調査(K F 91-12)

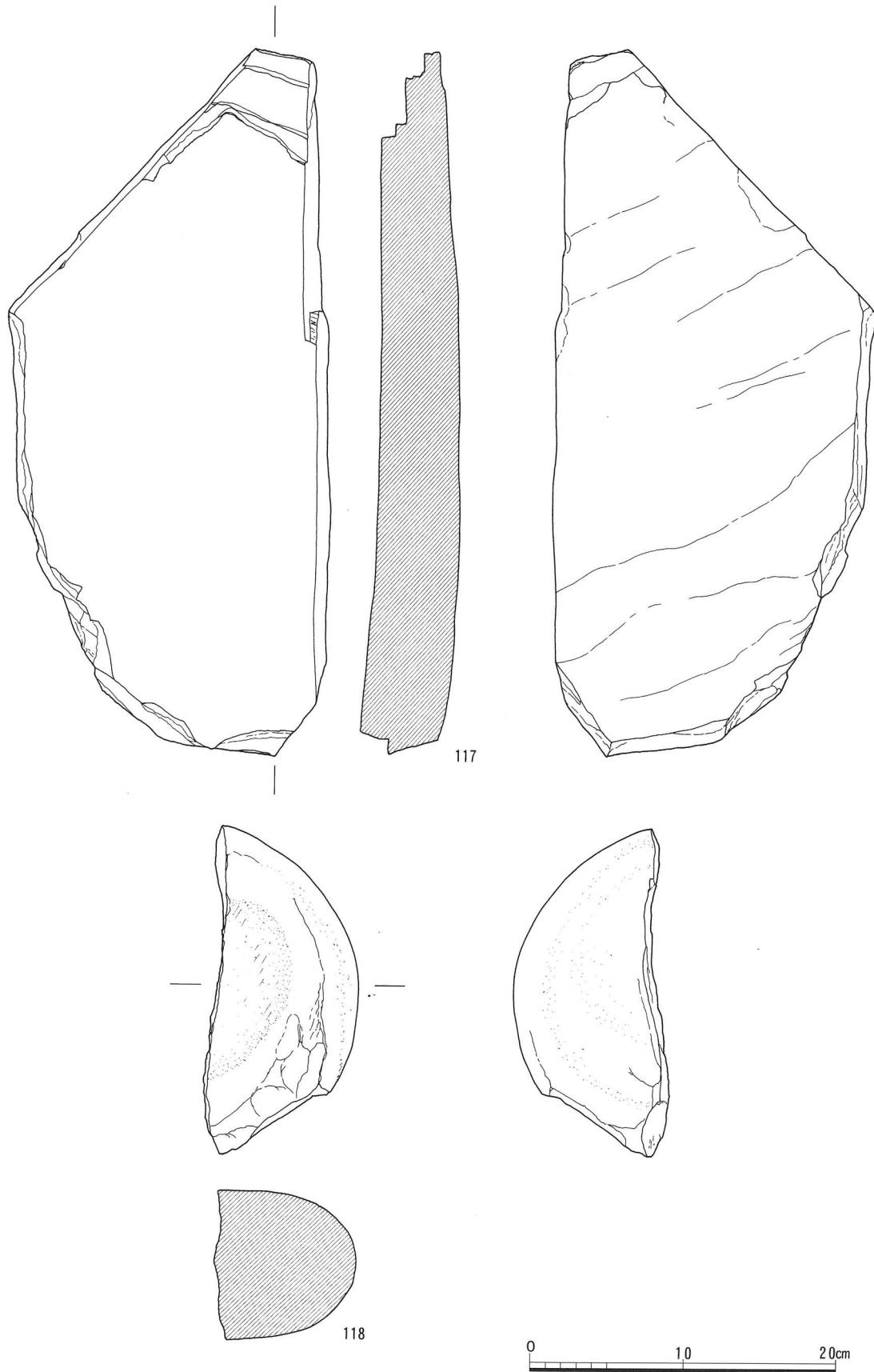


第32図 SK 308出土遺物実測図-3



第33図 S K 308出土遺物実測図－4

ガキが施されている。杯底部の中央に脚部に続く穿孔が認められる。115は皿状の受部を持つ小形の器台(器台C₂)である。受部と脚部が貫通している。116は半球形を呈する小形の鉢(鉢E₁)である。完形品で口径14.2cm、器高5.3cmを測る。石製品は2点(117・118)図化した。117は板状の石材を利用した台石と推定される。1面のみに使用痕が認められる。緑色を呈する石材は緑色片岩である。118は擦り石と推定されるもので、約1/2が残存している。残存部からみて円形で扁平な石材を利用した擦り石である。使用面は1面のみで中央部付近が僅かに窪む。石材は花崗岩である。出土遺物については、古墳時代前期中葉から後半に比定される布留Ⅲ～Ⅳ期の遺物が混在している。そのうち大半のものが布留Ⅲ期を中心とするが、布留Ⅳ期に盛行する甕G(100・101)、高杯A₇(113)、高杯A₉(114)が含まれているため、この時期まで遺構が機能していたことが推定される。



第34図 SK 308出土遺物実測図－5

S K 309(第35・36図、図版二四)

調査区南東部の4 E 地区で検出した。上面の形状が円形を呈するもので、東西幅1.2m、南北幅1.0m、深さ0.14mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の大形直口壺、布留式甕、高杯等の細片が少量出土している。大形直口壺(大形直口壺)1点(119)を図化した。口縁部のみが残存している。口径18.5cm、口頸部高7.5cmを測る。色調は褐灰色。角閃石を含む生駒西麓産である。古墳時代前期前半の布留式古相のものと推定される。

S K 310

調査区南東部の4 E 地区南部から5 E 地区北部にかけて検出した。S K 308の東約2.5m地点に位置する。上面の形状が橢円形を呈するもので、長径1.5m、短径0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は出土していない。

S K 311

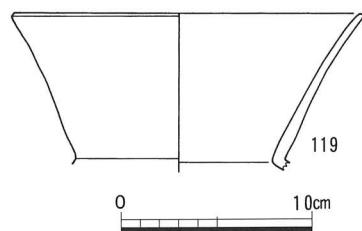
調査区北東部の2 E 地区で検出した。北部がS D210に切られている。上面の形状が橢円形を呈するもので、長径1.8m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の布留式甕の細片が少量出土しているが時期を明確にし得たものはない。

S K 312

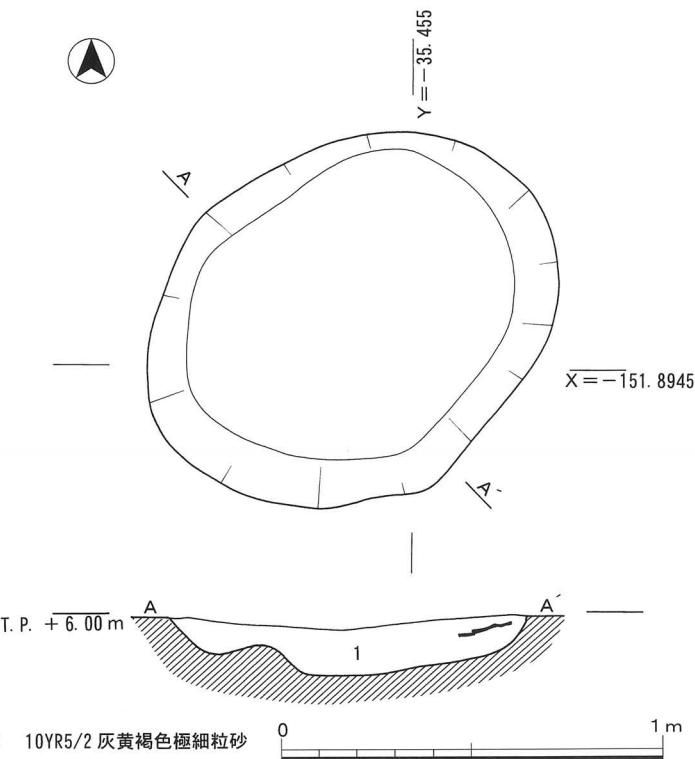
1 B 地区で検出した。上面の形状が、長方形を呈するもので、東部が古墳301の東周溝に切られている。検出部分で東西幅2.2m、南北幅1.0m、深さ0.33mを測る。埋土はシルト～極細粒砂を主体とする4層から成る。遺物は古式土師器の布留式甕、高杯の細片が少量出土している。細片のため時期を明確にし得たものはないが、布留IV期以降の構築である古墳301に切られているため構築時期はそれ以前が推定される。

S K 313

1 B 地区で検出した。古墳301の墳丘部分に位置している。上面の形状が、橢円形を呈するもので、長径1.3m、短径1.0m、深さ0.07mを測る。埋土は10YR3/3暗褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の布留式甕、高杯の細片が極少量出土しているが図化および時期を明確にし得たものはない。古墳301構築以前のものと推定される。



第35図 S K 309出土遺物実測図



第36図 S K 309平面面図(S=1/20)

溝(S D)

S D 301

北東-南西方向に伸びるもので、S D 302・S D 303・S K 304・古墳302の一部を切っている。検出長42m、幅0.5~1.0m、深さ0.1mを測る。埋土は2.5Y6/3にぶい黄色粘質土である。遺物は古墳時代後期と推定される須恵器甕の細片が2点出土している。

S D 302(第37図、図版二四)

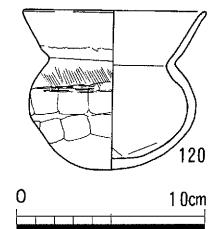
北北西-南南東方向に伸びるもので、北部でS D 301に切られている。検出長17m、幅0.5m前後、深さ0.1m前後を測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の壺、布留式甕、高杯等の細片が少量出土している。小形丸底壺1点(120)を図化した。120は口径が体部最大径を凌駕するもので小形壺B₄にあたる。ほぼ完形品で口径9.8cm、器高8.5cm、体部最大径8.9cmを測る。やや粗製品で、体部外面はハケ調整が行われている。古墳時代前期中葉の布留Ⅲに比定される。

S D 303

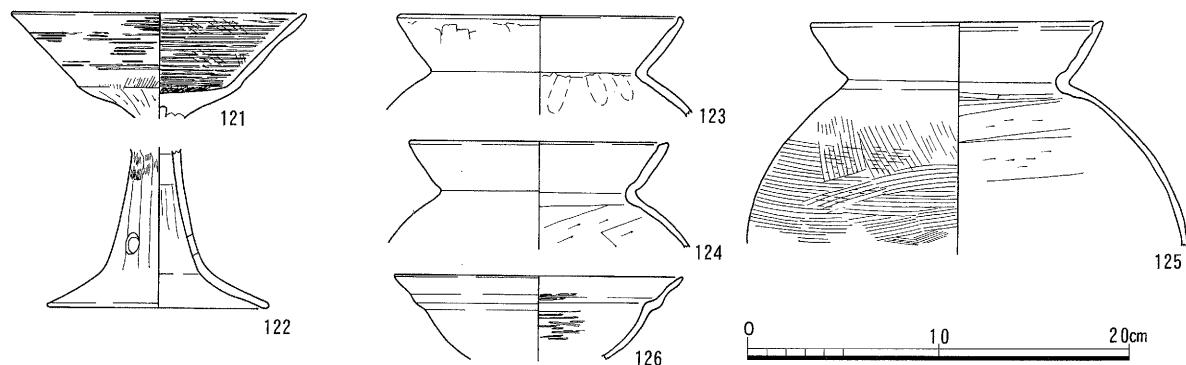
3 C 地区から3 D 地区にかけて東西方向に直線的に伸びるもので、西肩はS D 225に切られており不明である。検出長12m、幅1m前後、深さ0.3mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は出土していない。

S D 304(第38図、図版二四・二五)

3 C 地区から3 D 地区にかけて北東-南西方向に伸びる。検出長17.6m、幅0.5~0.7m、深さ0.25mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂と2.5Y3/1黒褐色細粒砂である。遺物は古式土師器類の甕、鉢、高杯の細片が少量出土している。6点(121~126)を図化した。121・122は高杯である。121は杯部が完存している。口径15.5cm、杯部高5.6cmを測る。精製品で平坦な杯部内面から口縁部が斜上方に直線的に伸びる。杯部内外面に横方向の密なヘラミガキ施されている他、杯体部にヘラケズリが行われている。杯体部内面には放射状にヘラミガキが施されている。122は脚部で完存している。裾部径11.7cmを測る。123は口縁部から体部上半の細片で、その形状・調整から布留式影響の庄内式甕である甕Dにあたる。124・125は布留式甕(甕F₂)の細片である。126は二段に屈曲する口縁部を有する精製の鉢(鉢H₂)にあたる。復元口径15.2cmを測る。古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定される。



第37図 S D 302
出土遺物実測図



第38図 S D 304出土遺物実測図

S D 305(第39図、図版二五)

3 D 地区から 3 F 地区にかけて東西方向に伸びる。検出長 14.8 m、幅 0.5~1.1 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は灰黄褐色極細粒砂である。遺物は古式土師器の壺、布留式甕、高杯等の細片が少量出土している。高杯 1 点(127)を図化した。127は杯部のみで、口径 16.4 cm、杯部高 4.8 cm を測る。高杯 A₆ に分類される。古墳時代前期中葉の布留Ⅲ期に比定される。

S D 306

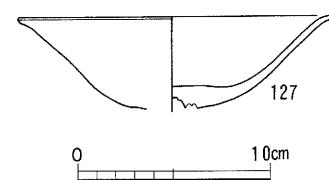
2 F 地区で検出した。北西 - 南東方向に伸びる。検出長 6 m、幅 1.3 m、深さ 0.63 m を測る。埋土は 3 層から成る。遺物は古式土師器の壺、布留式甕の細片が少量出土しているが図化および時期を明確にし得たものは無い。

小穴・柱穴(S P)

S B 301を構成する柱穴(S P 314~321)を含めて、総数で 21 個(S P 301~321)を検出した。調査区の北西部を中心に分布している。上面の形状では、円形・橢円形・隅丸方形・長方形・不定形がある。規模は径 0.2~1.12 m、深さ 0.07~0.29 m を測る。埋土は 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂ないしは 2.5Y3/1 黒褐色細粒砂である。遺物は S P 304・307・308・311・313・317・318 から古式土師器の二重口縁壺、甕、台付き鉢等が出土しているが、いずれも細片で図化し得たものは無い。法量等の詳細は第 3 表に示した。

第3表 第3-2調査面 小穴(S P)法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物・備考
S P 301	4 B	橢円形	0.55	0.45	0.08	10YR5/2 灰黄褐色細粒砂	
S P 302	2 C	隅丸方形	0.45	0.40	0.22	〃	
S P 303	2 B C	不定形	0.39	0.28	0.13	〃	
S P 304	3 C	円形	0.72	0.59	0.10	〃	古式土師器
S P 305	〃	〃	0.29	0.27	0.07	〃	
S P 306	2 C	〃	0.50	0.45	0.15	〃	
S P 307	〃	隅丸方形	0.52	0.46	0.07	〃	古式土師器
S P 308	1 C	橢円形	1.12	0.83	0.16	〃	古式土師器
S P 309	2 C	円形	0.53	0.50	0.17	〃	
S P 310	2 D	〃	0.25	0.20	0.14	〃	
S P 311	〃	〃	0.30	0.22	0.14	〃	古式土師器
S P 312	3 D E	〃	0.59	0.54	0.09	〃	
S P 313	4 E	橢円形	0.53	0.32	0.08	〃	古式土師器
S P 314	3 B	〃	0.40	0.29	0.17	第18図に提示	S B 301
S P 315	〃	隅丸方形	0.30	0.26	0.16	〃	S B 301
S P 316	〃	不定形	0.43	0.27	0.15	〃	S B 301
S P 317	2 B	隅丸長方形	0.35	0.27	0.08	〃	S B 301古式土師器
S P 318	3 B	〃	0.41	0.29	0.29	〃	S B 301古式土師器
S P 319	〃	〃	0.40	0.26	0.14	〃	S B 301
S P 320	2・3 B	円形	0.30	0.21	0.17	〃	S B 301
S P 321	2 B	長方形	0.41	0.30	0.14	〃	S B 301



第39図 S D 305出土遺物実測図

土器集積(SW)

SW301(写真6、第40図、図版二五)

調査区東部の3・4 EF 地区の第VI b層内で検出した。北東から南西方向に11.0m、幅0.7mにわたって古式土師器類が列状に分布しており、溝状遺構の底部に廃棄された土器であった可能性がある。5点(128~132)を図化した。128は大形の二重口縁壺(複合口縁壺B₃)である。口頸部が残存しており、口径24.0cmを測る。色調は褐灰色。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。129は大形の直口壺(大形直口壺A)である。口径15.5cm、器高29.4cm、体部最大径23.6cmを測る。器壁面が風化しており調整等が不明瞭である。胎土は粗く1~3mm程度の長石・石英を多量に含んでいる。130は布留式甕の要素の一つである口縁端部が肥厚するもので、布留傾向甕(甕E)に分類される。131は典型的な布留式甕(甕F₂)である。体部外面の器面調整は、上位に横方向のハケ、その他には縦方向のハケが施されている。内面は体部上位から下位にヘラケズリ、底部に指頭圧痕が認められる。132は二段に屈曲する口縁部を持つもので、山陰系の甕(甕K)である。器面の風化が著しい。色調は白灰色である。古墳時代前期前半の布留式古相に比定される。

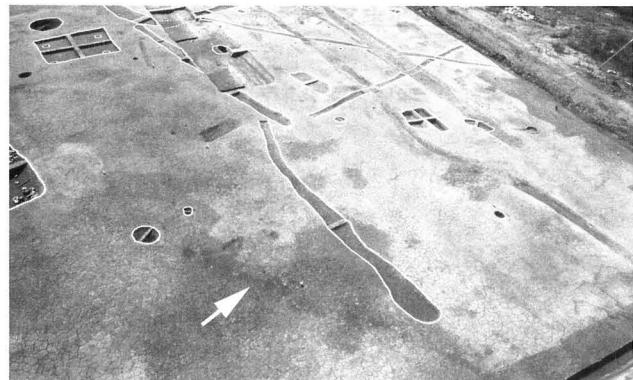
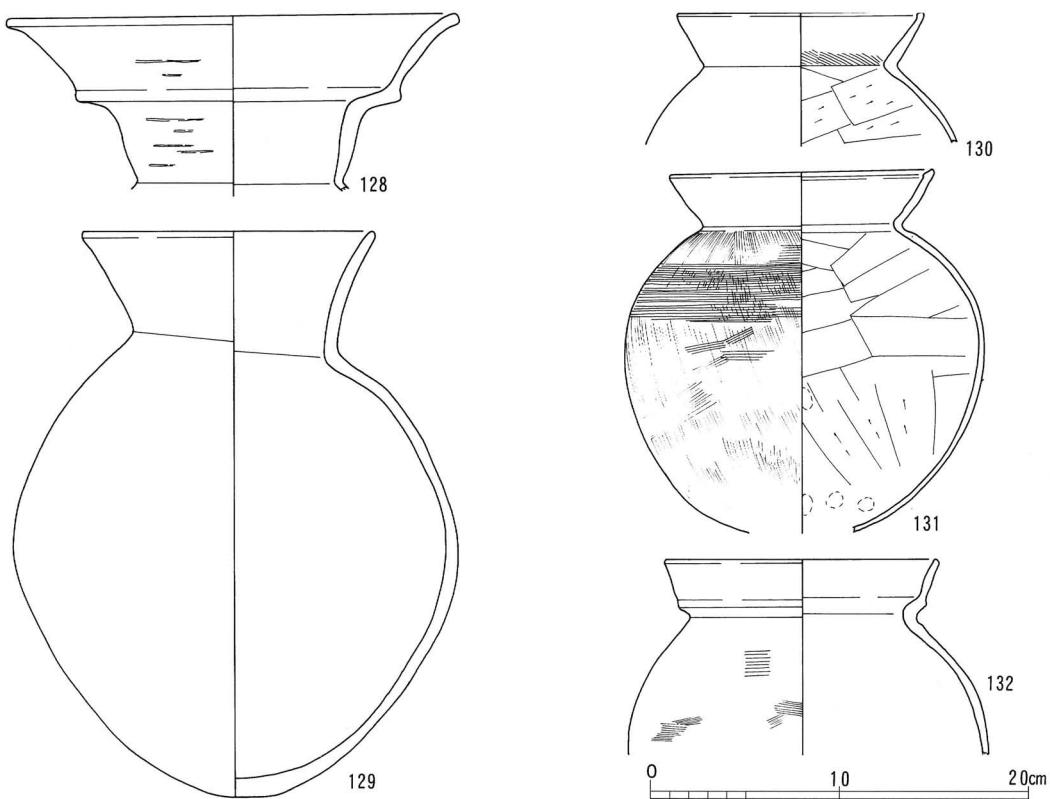


写真6 SW301検出状況—矢印の部分がSW301の痕跡
(東から)



第40図 SW301出土遺物実測図

参考文献

- ・田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』 平安学園考古学クラブ
- ・田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- ・佐藤 隆 1992 「第2節 平安時代における長原遺跡の動向 ii) 長原遺跡における平安時代の土器編年」 『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』 (財)大阪市文化財協会
- ・小笠原好彦 1975 「土馬考」『物質文化 考古学民俗学研究』物質文化研究会
- ・杉本二郎・岩瀬 透 1986 『城山(その1)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

第4章　まとめ

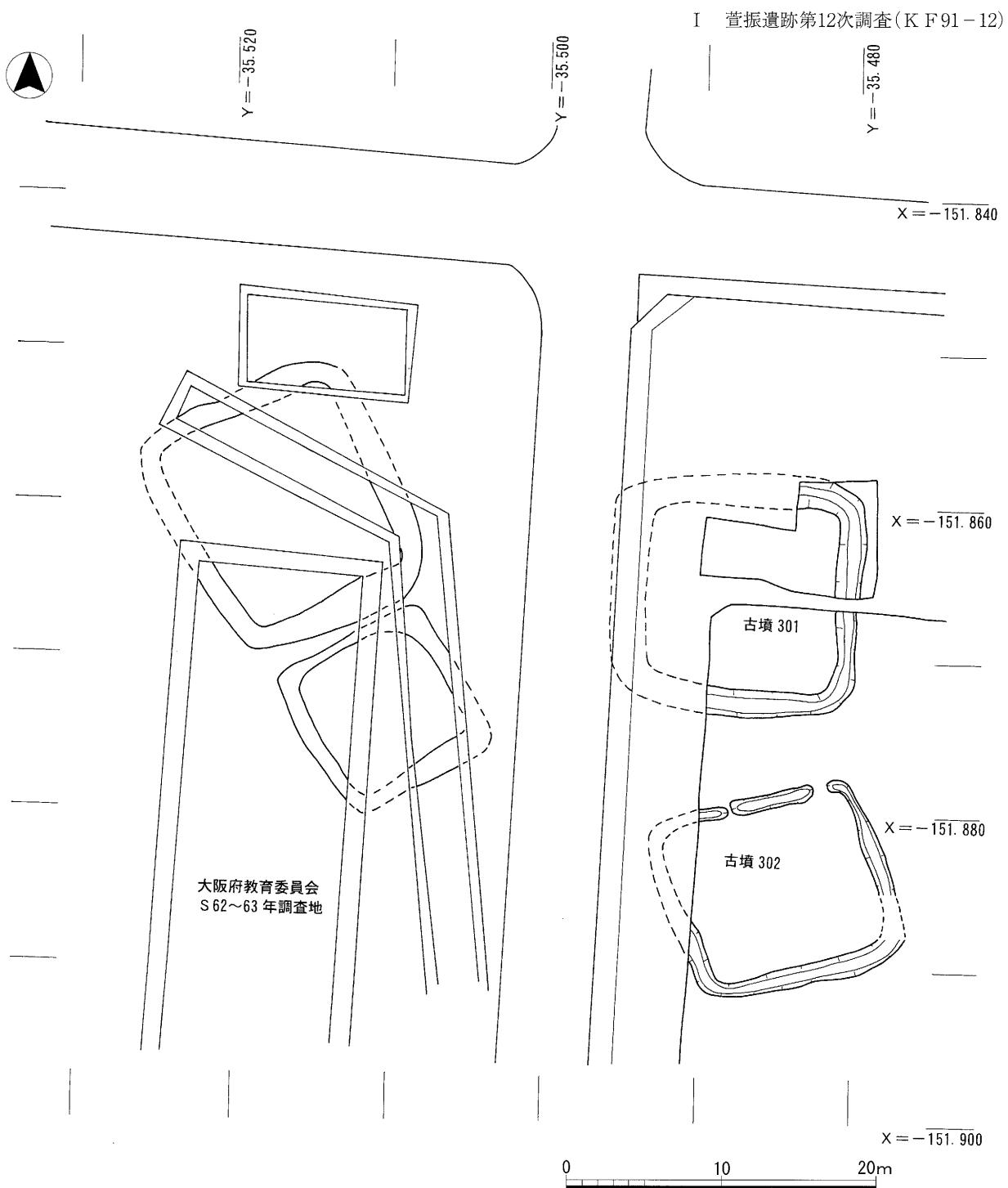
今回の調査では、3面(第1～3調査面)にわたる調査を実施した。その結果、古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)、飛鳥時代から奈良時代、平安時代前期、鎌倉時代、近世に比定される遺構・遺物を検出した。以下、時期ごとに概観する。

・古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)

古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)の遺構・遺物は、第3-1・2調査面で検出されている。集落内の居住域を構成した遺構群で、布留式古相後半の布留Ⅱ期に成立し、布留式新相の布留Ⅳ期に廃絶するまで、比較的安定した集落推移が看取される。布留式古相後半に比定される布留Ⅱ期の遺構は、竪穴住居1棟(S I 301)、掘立柱建物1棟(S B 301)、井戸2基(S E 301・302)、溝1条(S D 304)等で、概ね調査区の中央部から西部を中心に遺構分布が認められる。同時期の遺構は、南接する第14次調査(K F 93-14)のA・C区で検出されており、現時点では南北方向に120m以上にわたる遺構分布が認められる。布留式中相の布留Ⅲ期においては、調査区中南部で検出した土坑1基(S K 308)、溝1条(S D 305)等がある。同時期の遺構は、南接する第14次調査(K F 93-14)のA・C・D区で検出されているが、前代に比して遺構の減少傾向が認められる。布留式新相の布留Ⅳ期の遺構としては、調査区の北西部で検出した古墳2基(古墳301・302)がある。未報告のため詳細は不明であるが、西接する大阪府教育委員会の昭和62～63年度調査^{註1}で検出された2基の古墳を含めて、墓域としての土地利用が図られている。同時期の墓域は、調査地の南西約300m地点の東郷遺跡第64次調査(T G 2005-64)で検出されており、小阪合分流路を挟んで2箇所に存在していたことが窺われる。この時期の集落は、当調査地の北東約150m地点で昭和62年度に当調査研究会が実施した萱振遺跡第5次調査(K F 87-5)で確認されており、今回検出した墓域と有機的な関係が示唆されよう。

・飛鳥時代から奈良時代

当該期の遺構は第2面で検出している。飛鳥時代の遺構には、土坑1基(S K 204)がある。内部から完形の須恵器杯身1点が出土しており、祭祀的な様相を帯びた土器埋納土坑と考えられる。同時期の居住域は、北北西約250m地点で昭和58年度に大阪府教育委員会が実施したBトレント付近が想定される。



第41図 古墳分布図(S=1/400)

奈良時代の遺構としては、溝1条(S D 210)を検出した。溝内からは、7世紀中葉から8世紀後半に比定される土器類と共に、土馬が1点(3)出土している。馬装具が写実的に表現された飾馬で、土馬のなかでも最古級に位置づけられる。当時の水靈信仰の一端を知るうえで貴重な資料を提供している。同時期の居住域は、南西約200m地点の東郷遺跡第45次調査(T G 93-45)付近が想定される。

・平安時代前期

第2調査面で土坑1基(S K 203)、溝1条(S D 232)を検出した。周辺で実施された発掘調査に

おいても、この時期の遺構は明確でなく不明な点が多い。

・鎌倉時代

第2調査面で溝48条(S D 201~209・S D 211~231・S D 233~250)を検出した。大半が牛馬耕による犁溝で、東西方向に伸びるものと、南北方向に伸びるものがある。南北方向に伸びる溝が東西方向の溝を切っており、ある時期を境に耕地内の耕作方向が変化したようである。また、南北方向に伸びるS D 245・246・248の各溝間の間隔が10m前後であることから、条里制の1町(109m)を10等分する1反間隔を区画する溝であったと推定されよう。なお、同様の溝遺構が調査地の西側で大阪府教育委員会が昭和62~63年度に実施された調査でも確認されている。

・江戸時代

第1調査面で井戸4基(S E 101~104)、溝2条(S D 101・102)、土坑29基(S K 101~129)を検出した。井戸遺構や溝遺構については、構築位置等からみて農耕用に使用されたものと推定される。調査地の南西部で検出した土坑群については、第Ⅲ層上面が構築面であり、明らかに他の第1調査面で検出した遺構よりは新しく位置づけられる。これらの土坑群は配置関係や深度からみて、掘削に際しては企画性を持って実施されたものと推定される。また、土坑の最下層が第Ⅶ層明青灰色粘質土に達していることなどを考慮すれば、粘土を採掘するための採掘坑であった可能性が高い。

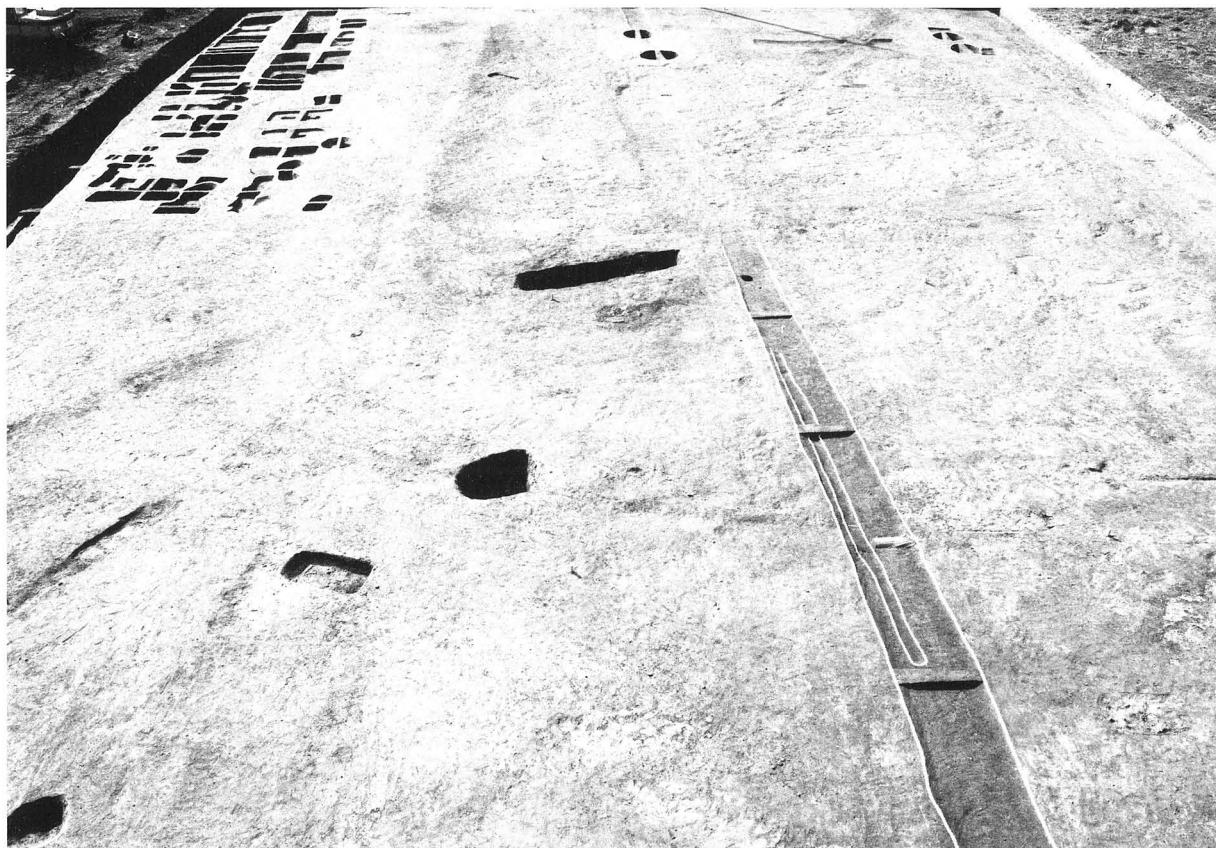
註記

註1 昭和62~63年に大阪府教育委員会が調査。未報告。第41図に掲載した古墳分布図については調査担当者の大樂康宏氏から資料提供を受けた。

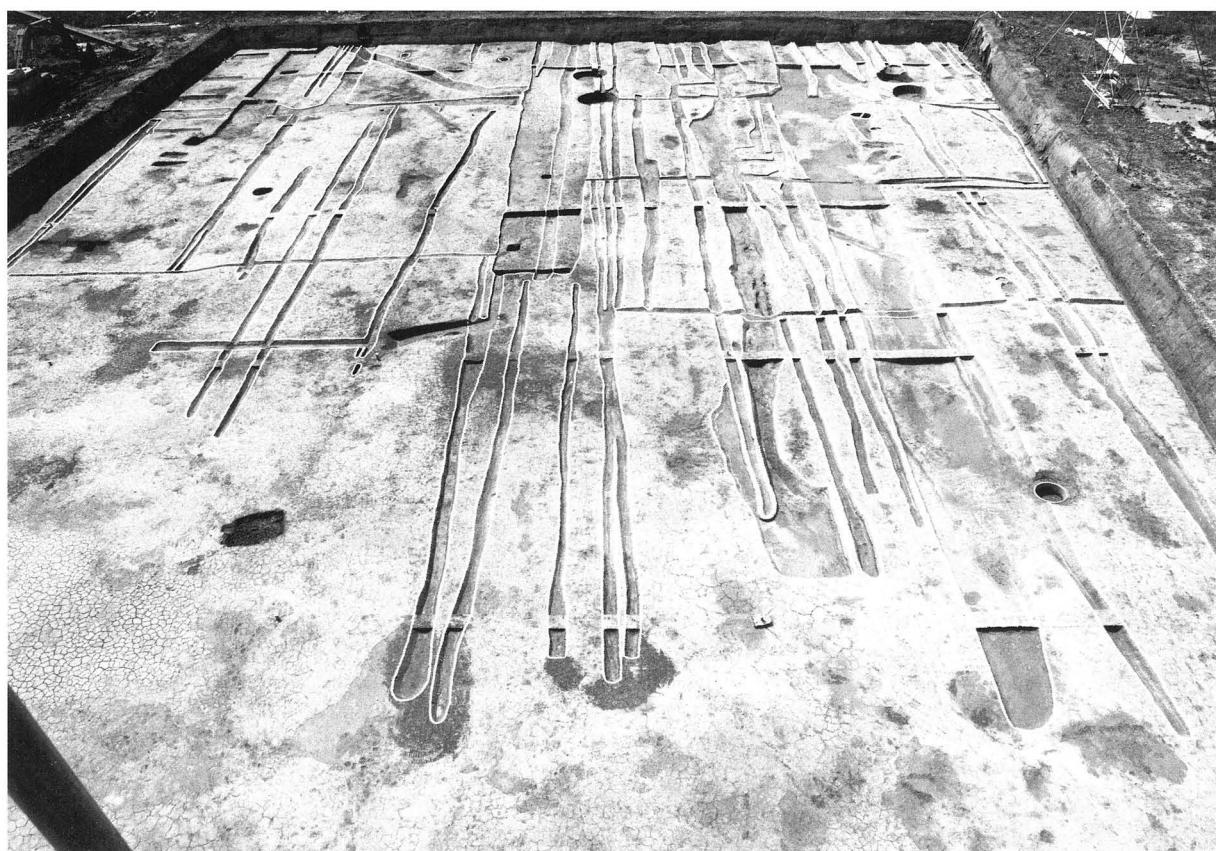
参考文献

- ・西村公助 1993「V萱振遺跡(第5次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1995「Ⅲ東郷遺跡(第45次調査)」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・松田順一郎 2001「河内平野沖積平野南部における完新世後半の旧大和川分流路発達と人間活動」『環境と人間社会』埋蔵文化財研究会
- ・坪田真一他 2006「22. 東郷遺跡第64次調査(T G 2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

図 版



第1調査面全景(東から)



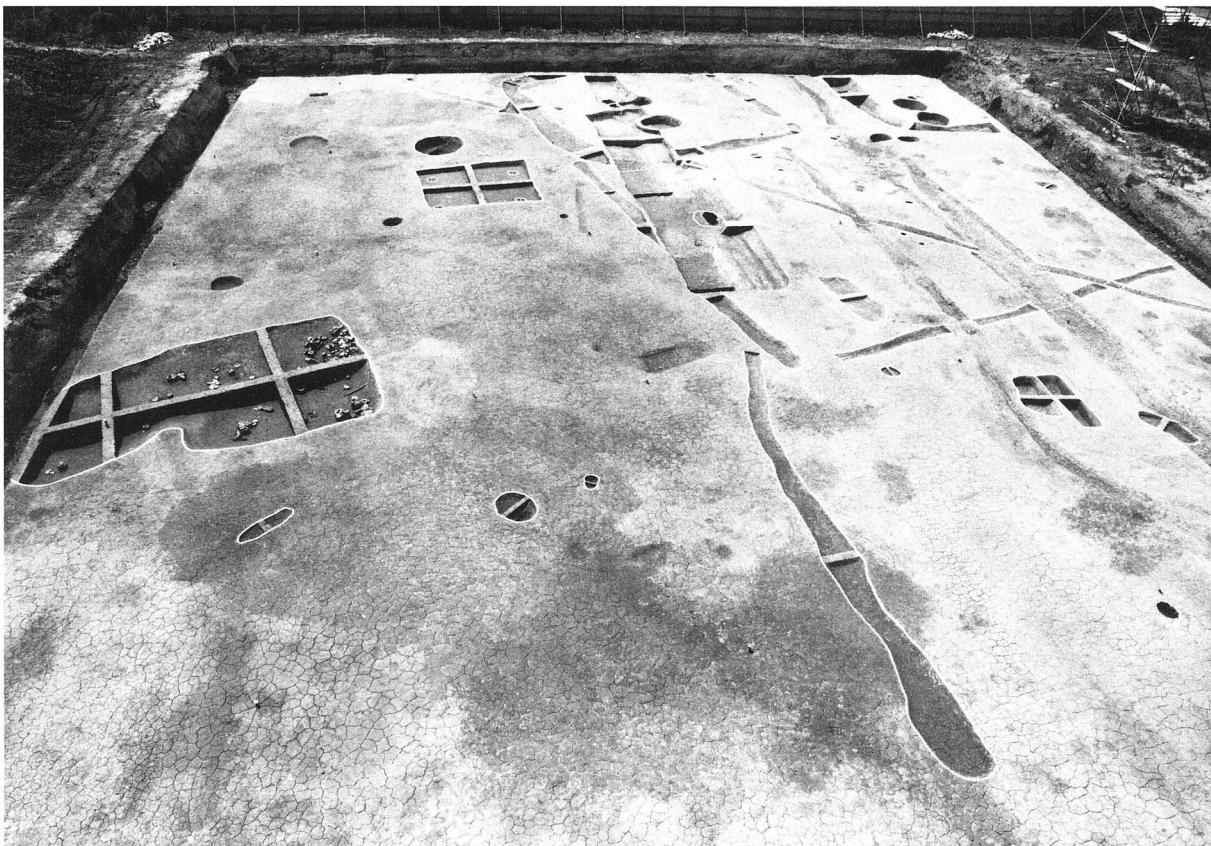
第2調査面全景(東から)



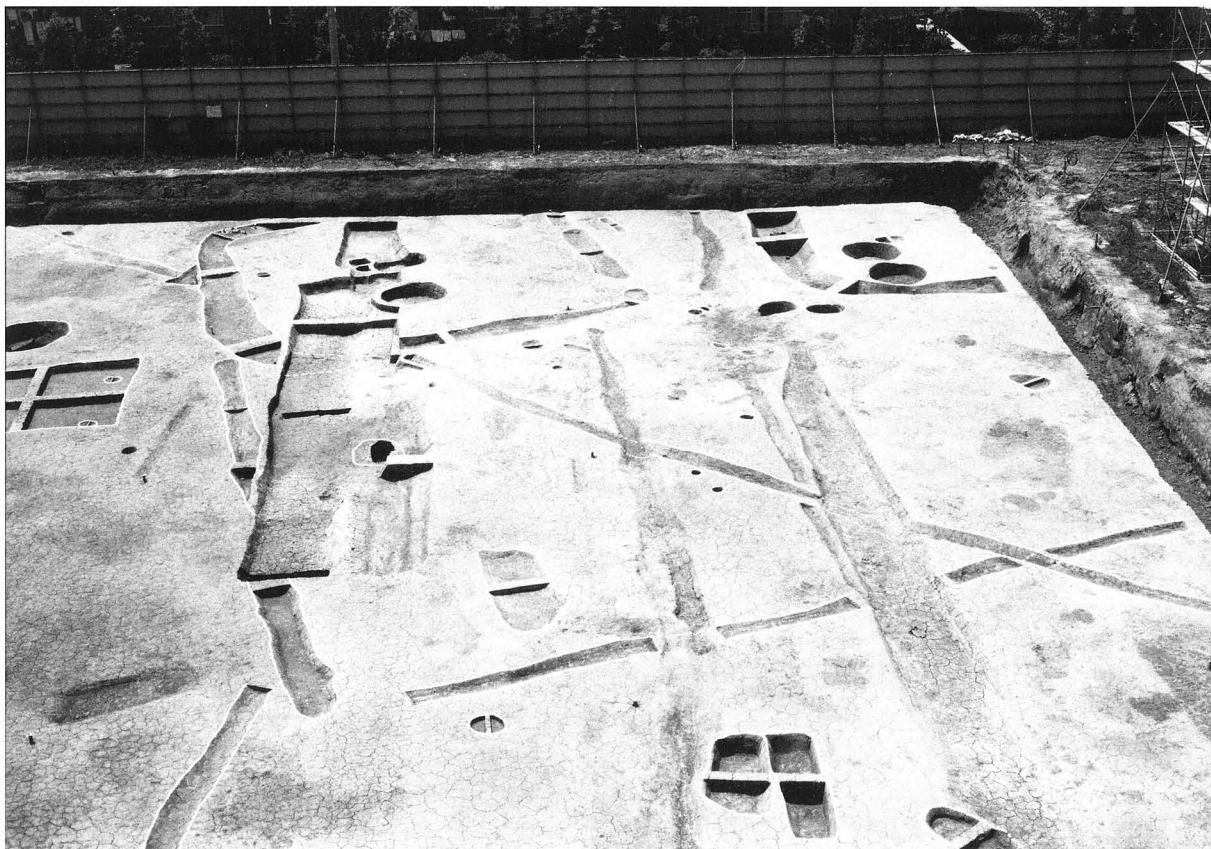
S K203検出状況(東から)



S D210土馬出土状況(南から)



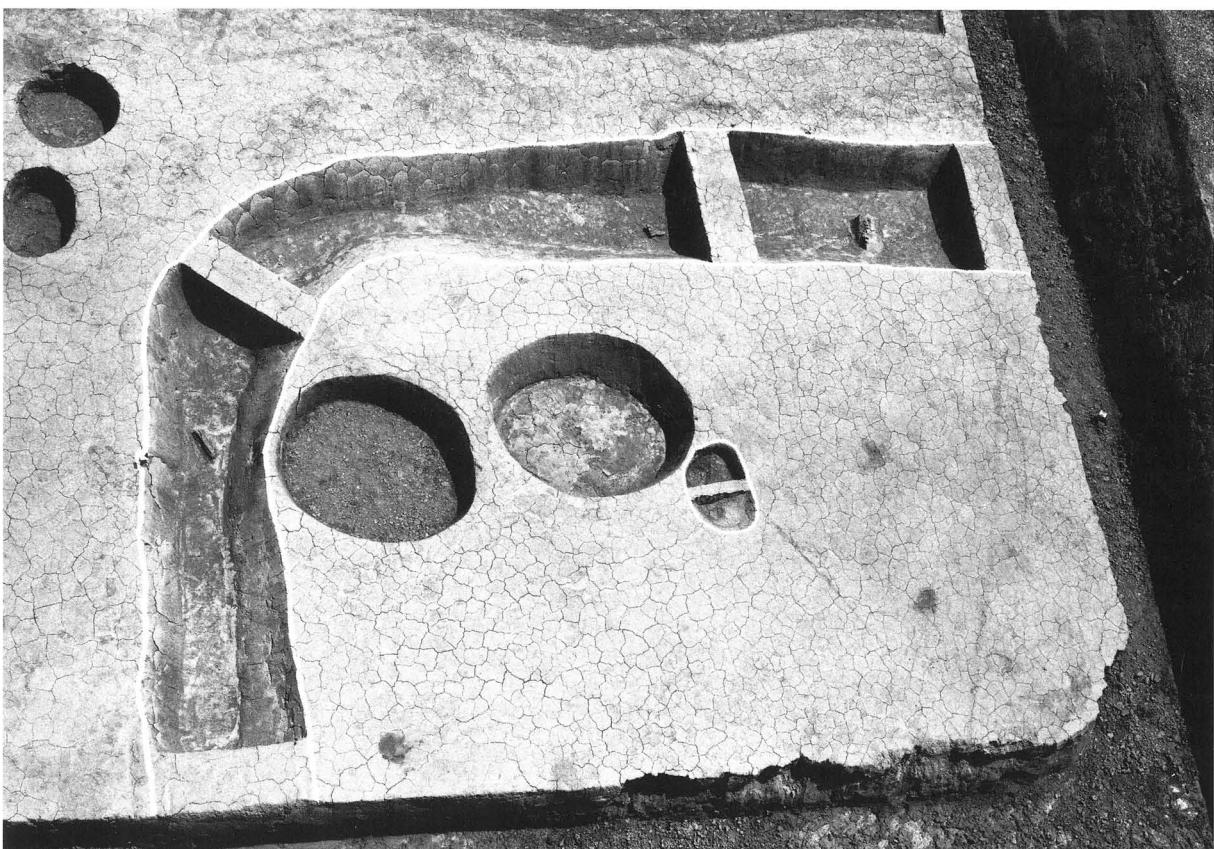
第3調査面全景(東から) [但し拡張部分は写っていない]



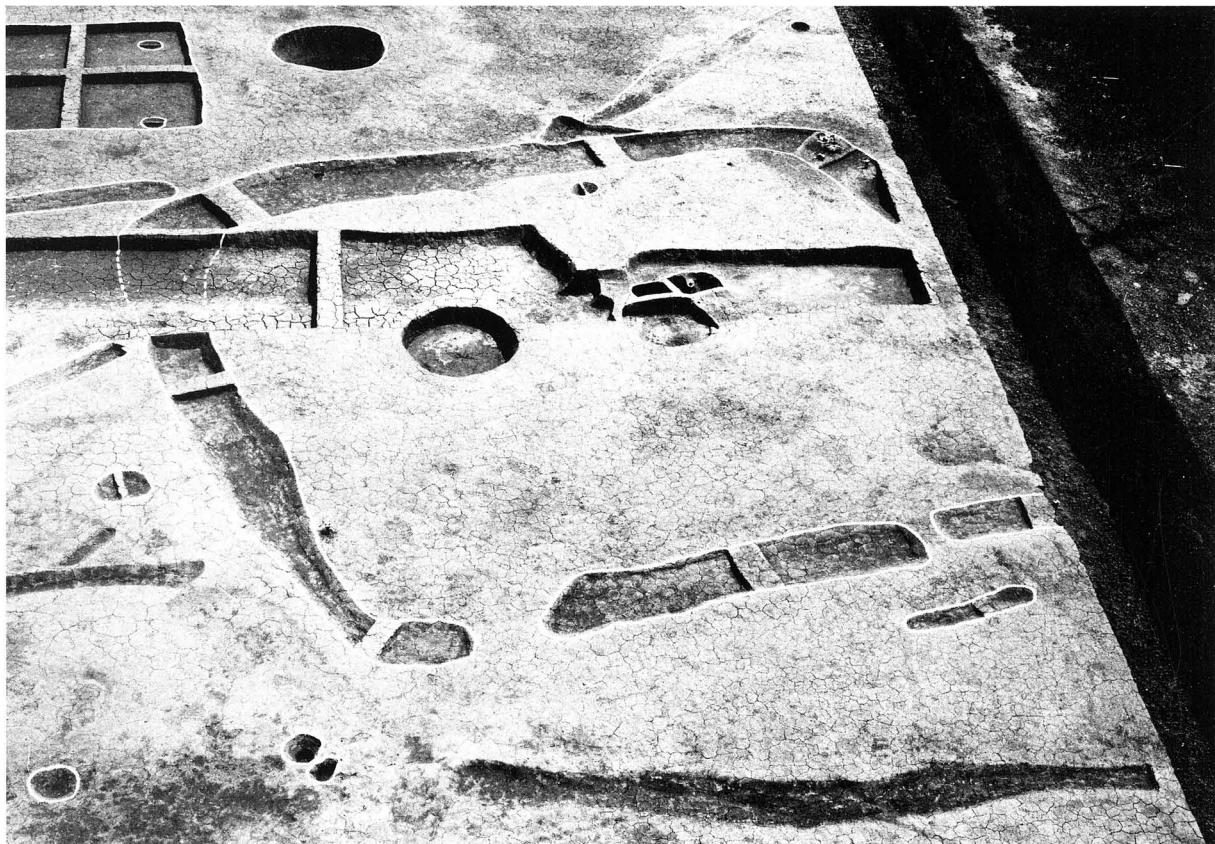
第3調査面 西部遺構検出状況(東から)



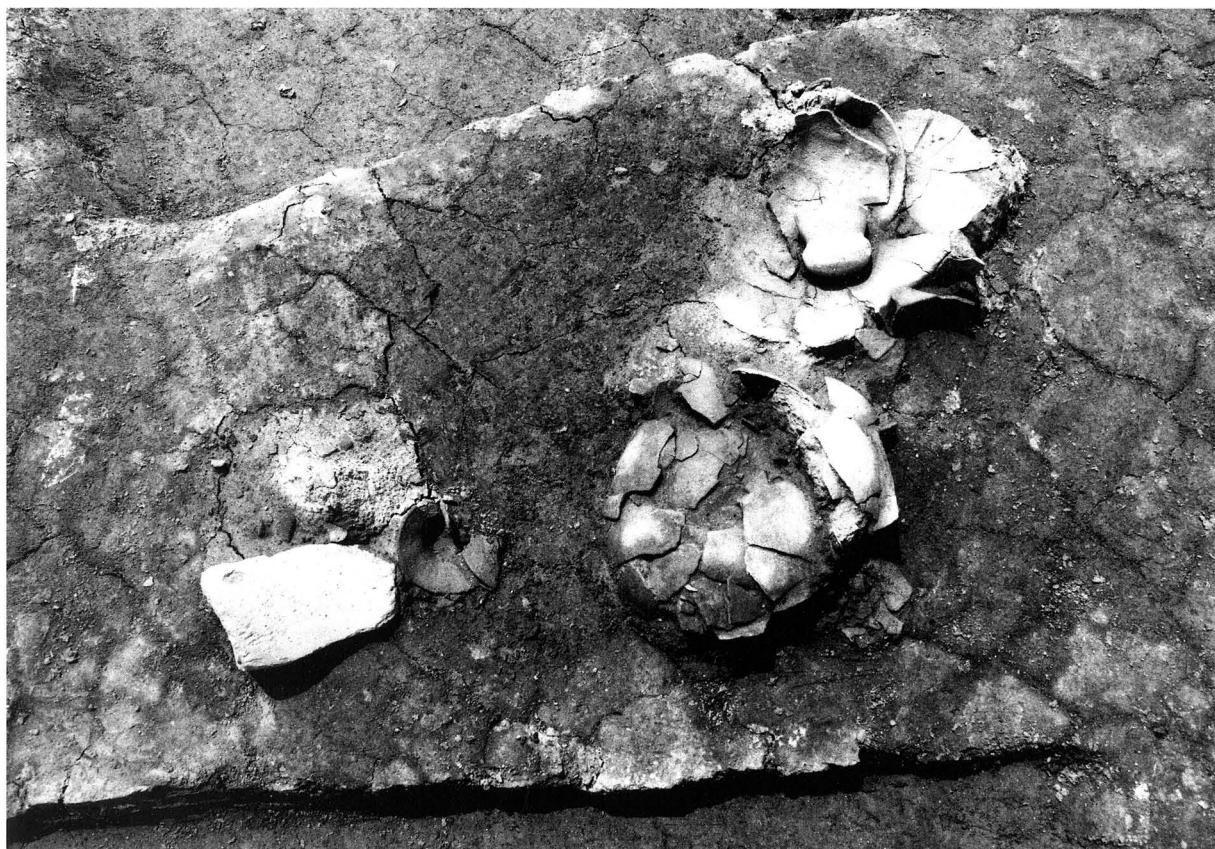
古墳301北東部検出状況(東から)



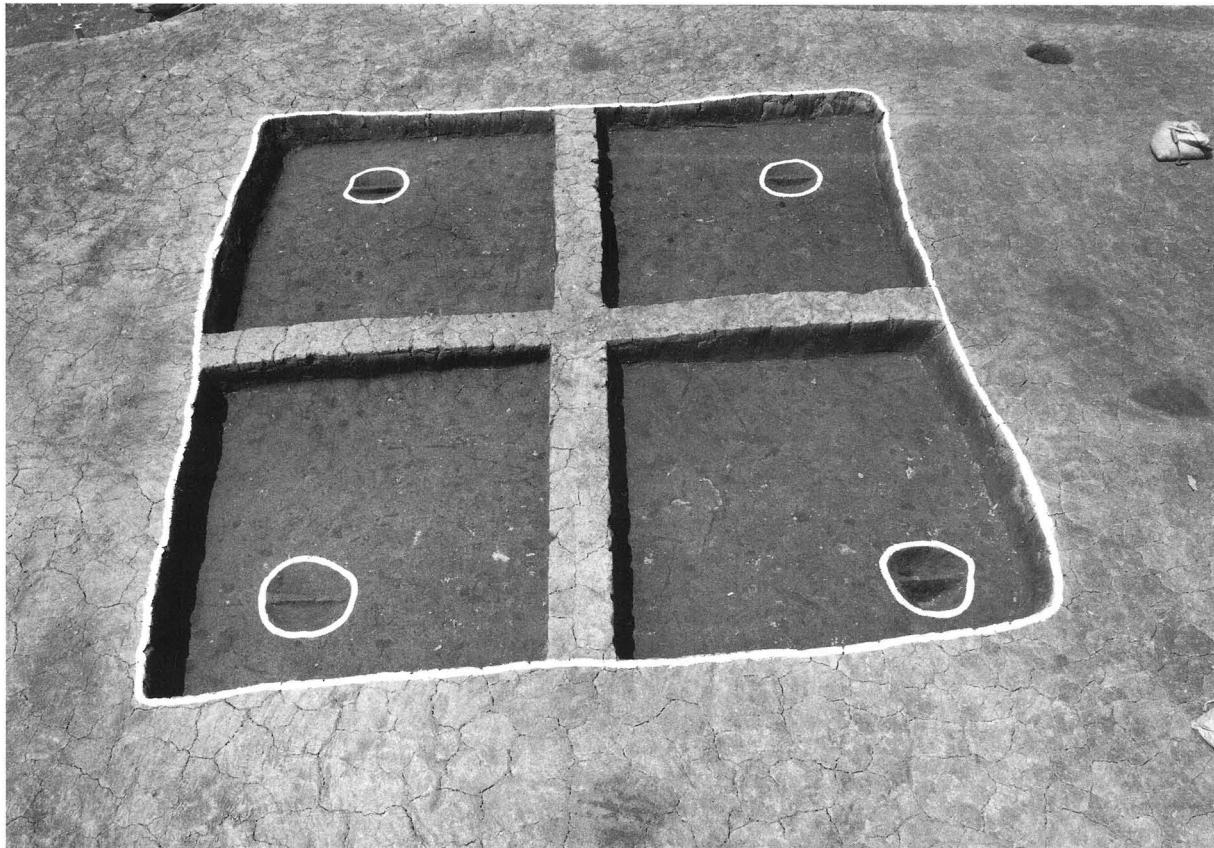
古墳301南東部検出状況(北から)



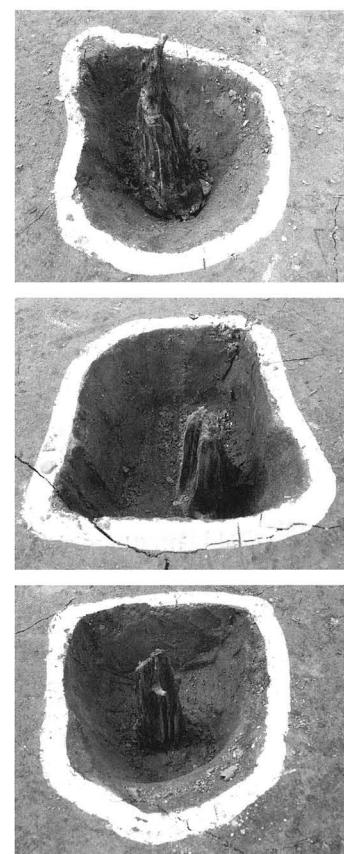
古墳302検出状況(北から)



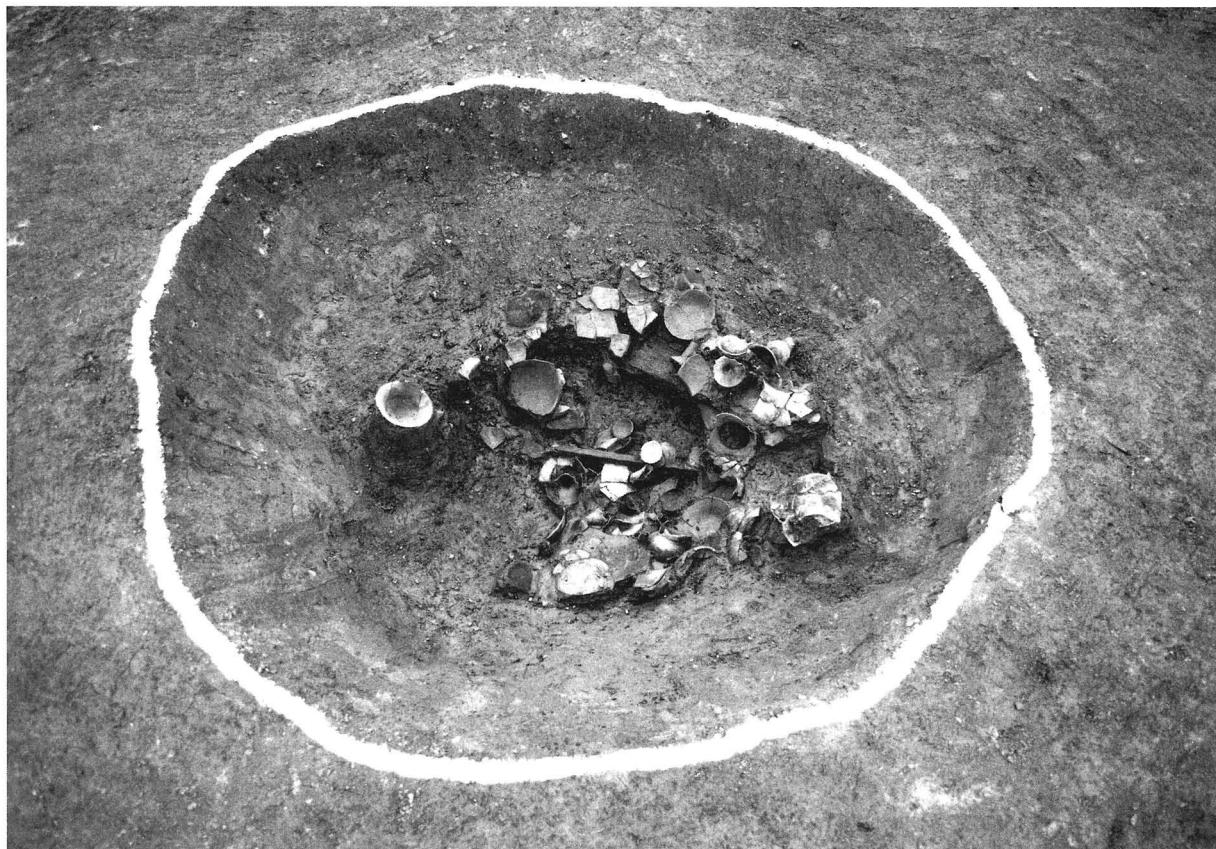
古墳302周溝南西部遺物出土状況(北から)



S I 301検出状況(南から)



S B301検出状況・柱根検出状況(南から。上より SP 316、同315、同314)



S E 301検出状況(南から)



S E 301下層部分遺物出土状況(南から)

図版八



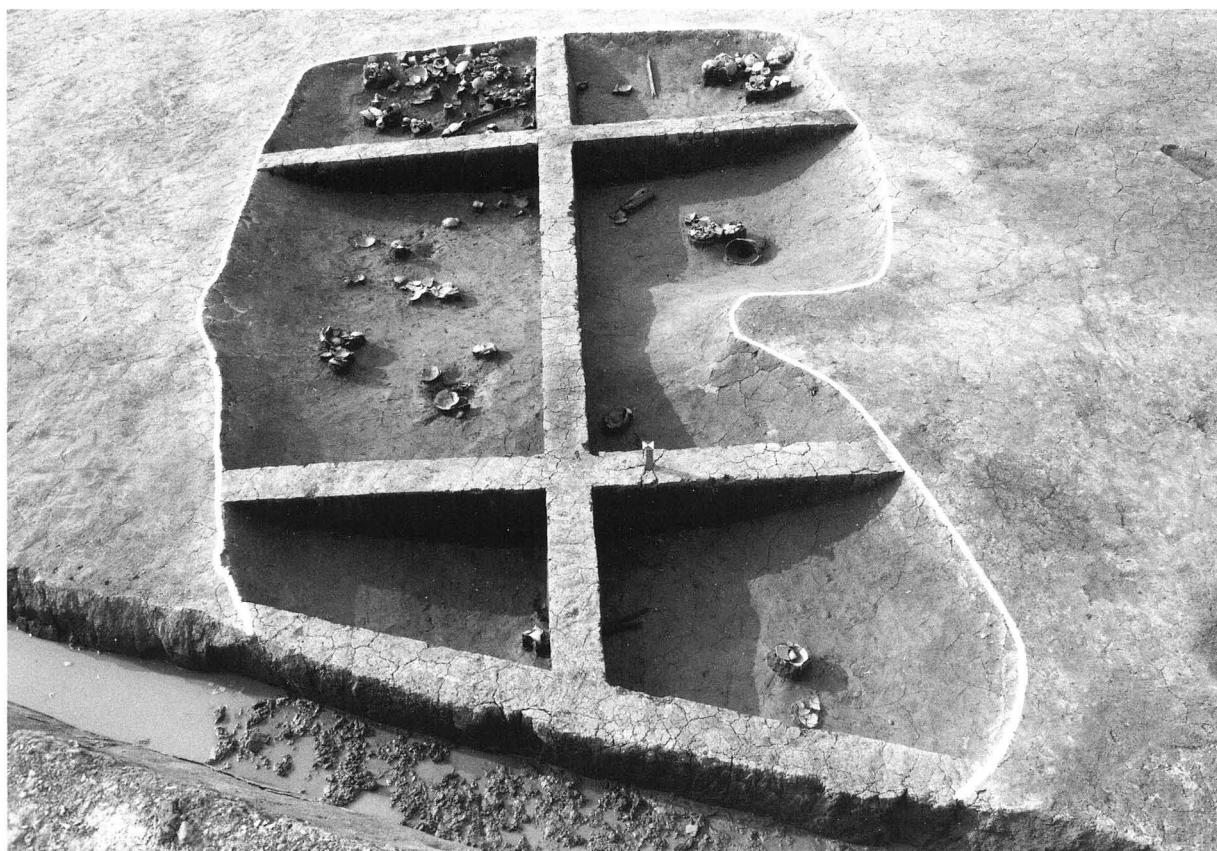
SE 302検出状況 断割り(西から)



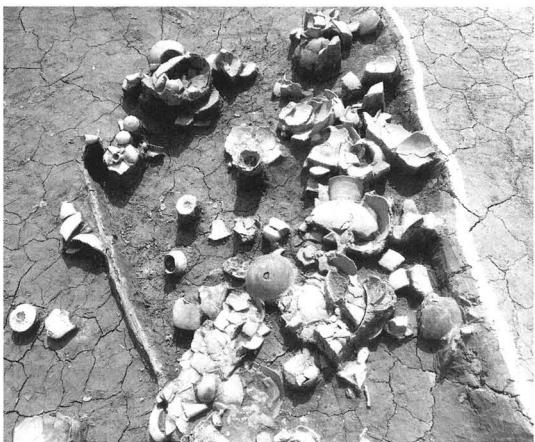
SE 302井戸側内部(北から)



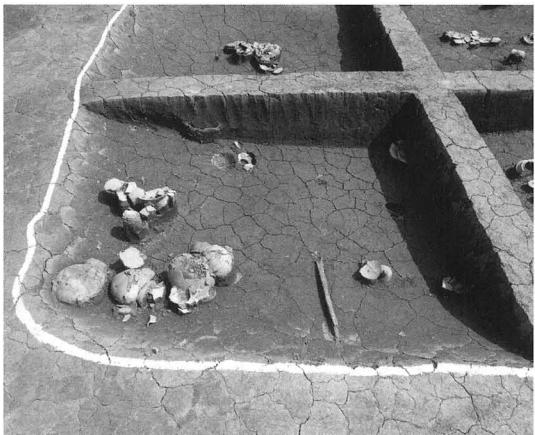
SK 303検出状況(南から)



SK 308検出状況(南から)



S K308 北西部(北から)



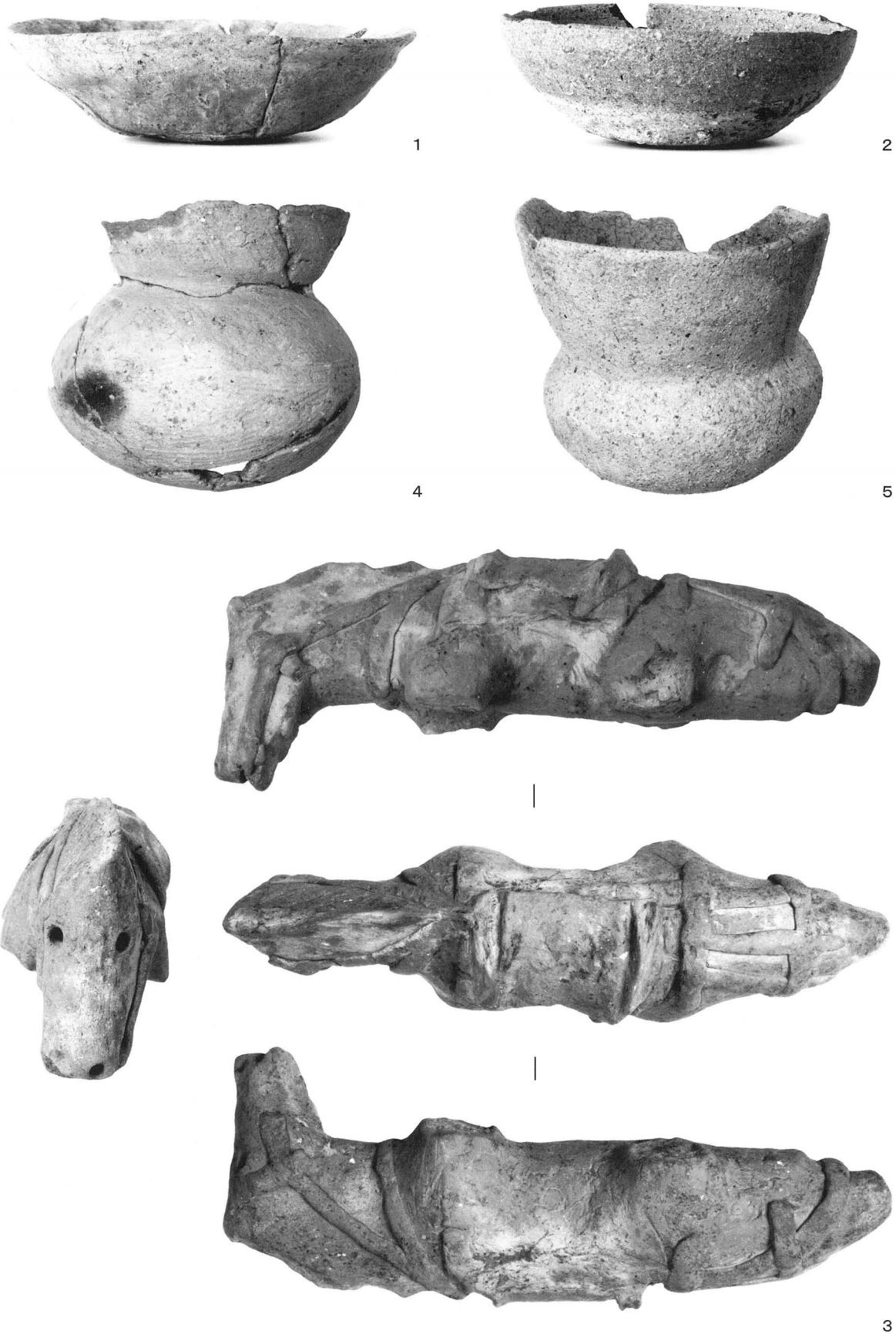
北東部(北から)



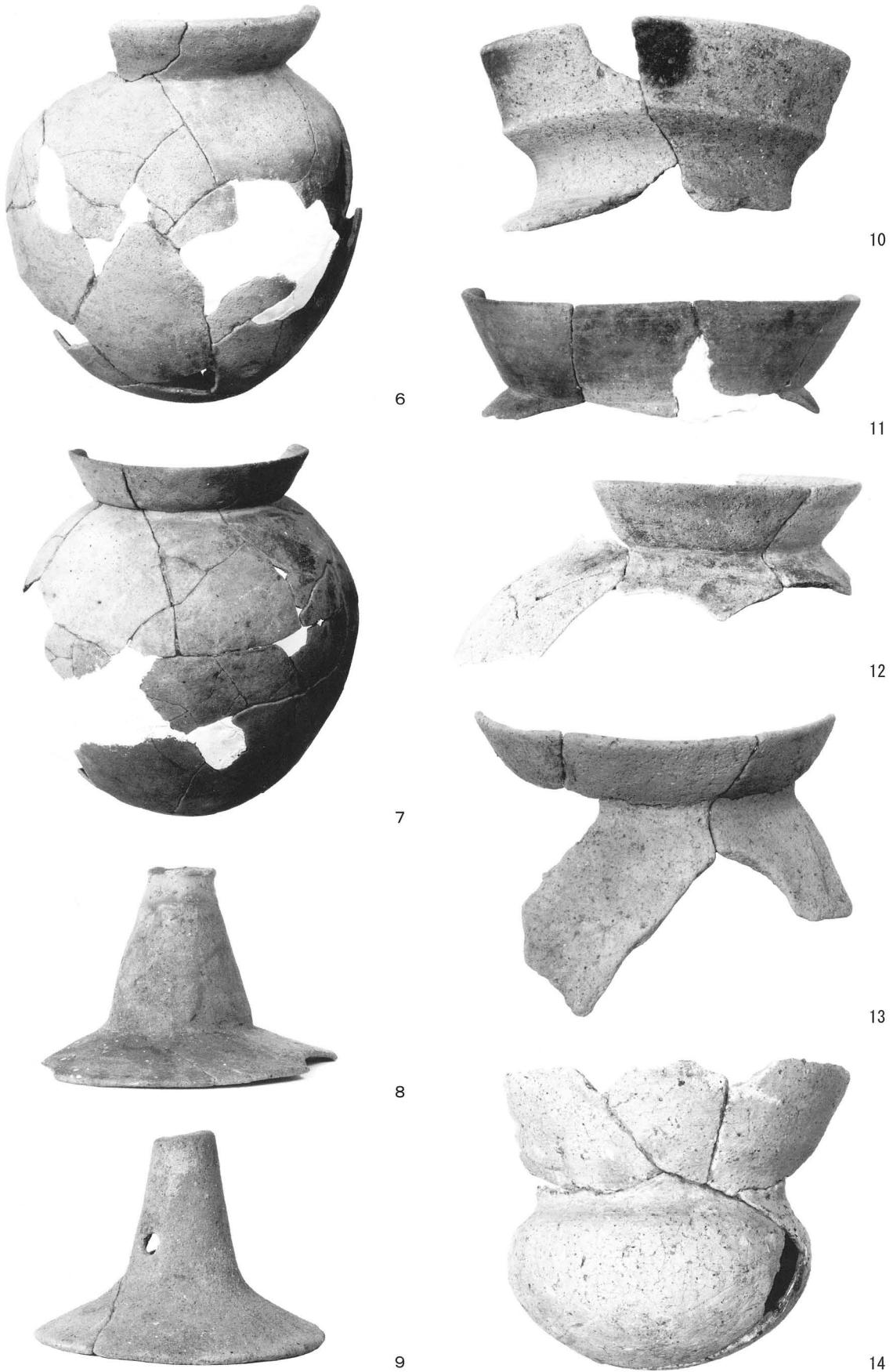
中央西部(南から)



中央東部(東から)



S K203(1)、S K204(2)、SD210(3)、古墳301(4)、古墳302(5)出土遺物



古墳302(6~9)、S I 301(10~13)、S E 301(14)出土遺物



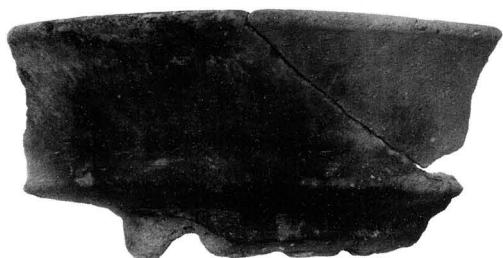
15



19



16



20



17



21



18



22

S E 301 (15~22) 出土遺物

図版一四



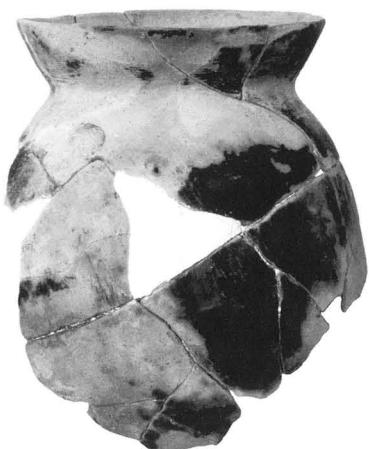
23



26



24



27



25



28



29



33

SE301(23~29・33)出土遺物



30



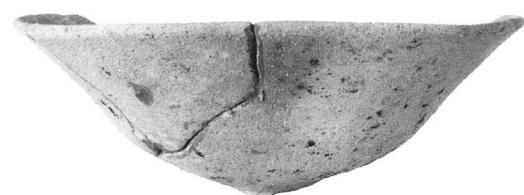
34



31



35



37



32



40



39

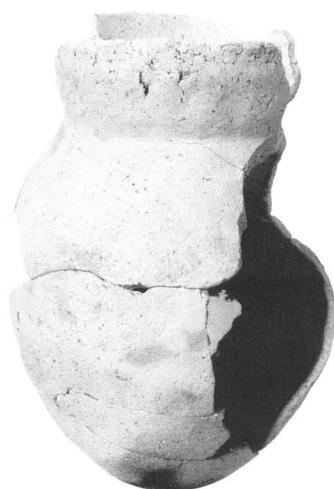


41

S E 301 (30~32・34・35・37・39~41) 出土遺物



42



45



43



44



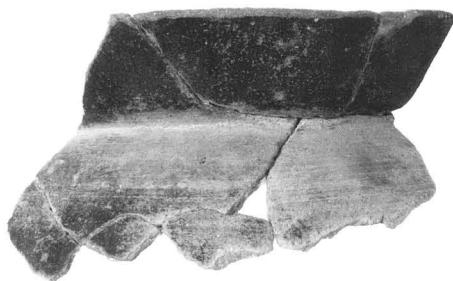
46



47



49



48

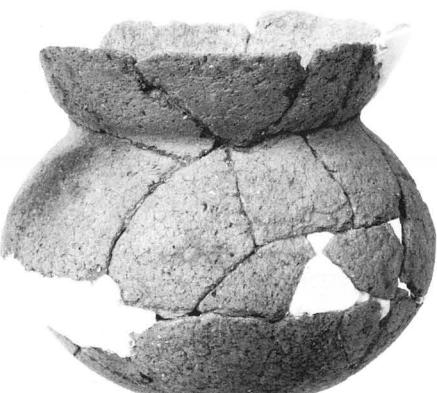


50

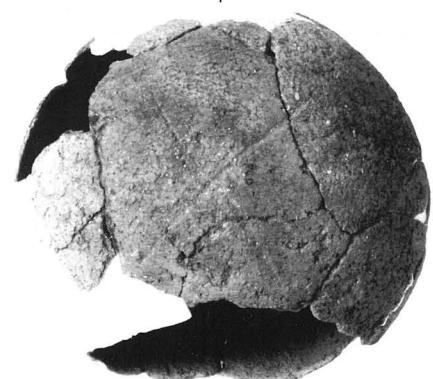
S E 302 (42~46)、S K 303 (47~50) 出土遺物



51



52



54



53



56



55



57

S K 308 (51~57) 出土遺物



58



62



59



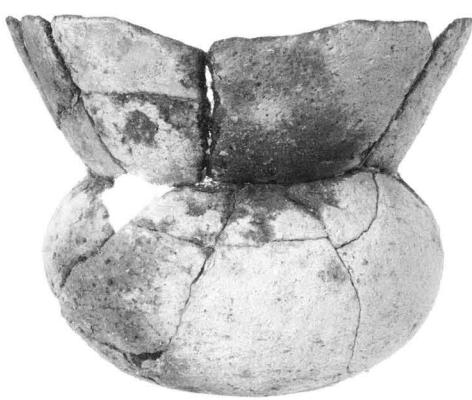
63



60



64



61



65

S K308 (58~65) 出土遺物



66



69



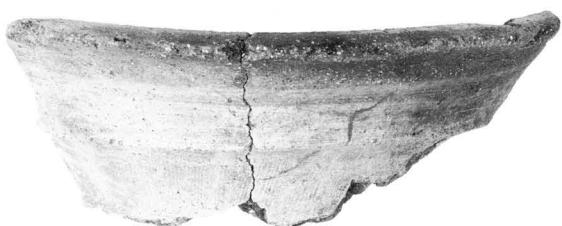
67



72



68



73



70



71

S K 308 (66~73) 出土遺物



74



75



77



78



79



80

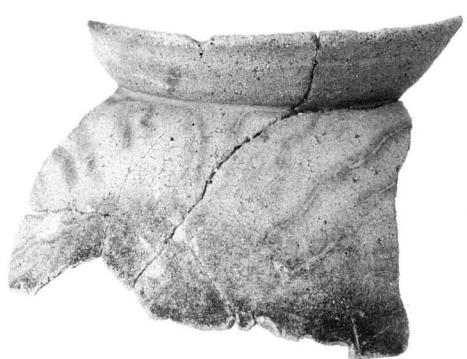


81

S K 308 (74・75・77~81) 出土遺物



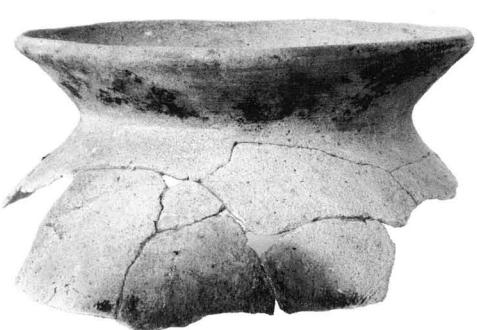
82



94



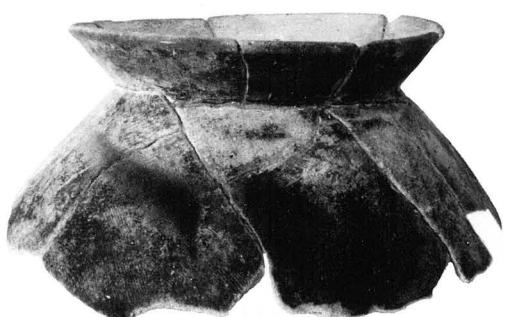
83



95



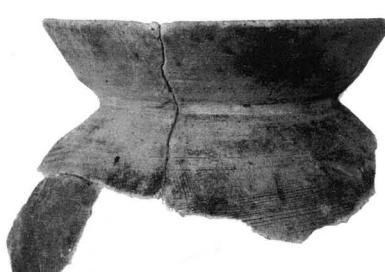
84



96



85



88



89

S K 308 (82~85・88・89・94~96) 出土遺物



97



99



104



98



105



100



106



101



107

S K 308 (97~101・104~107) 出土遺物



108



111



109



114



116



110



112



115

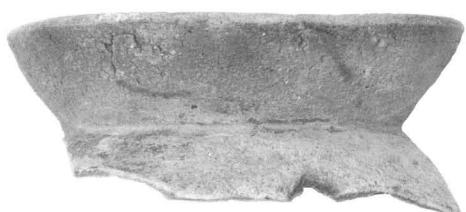


113

S K 308 (108~116) 出土遺物



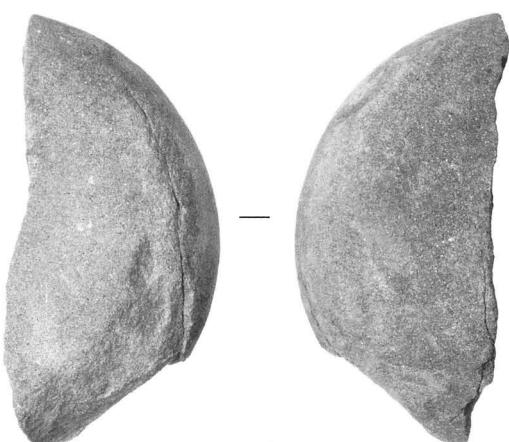
120



123



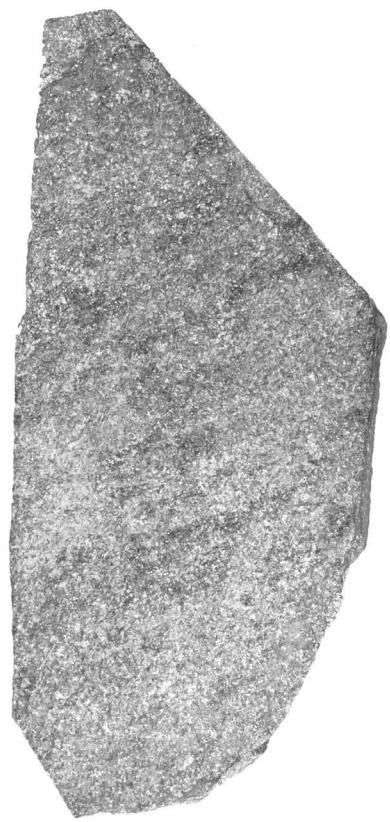
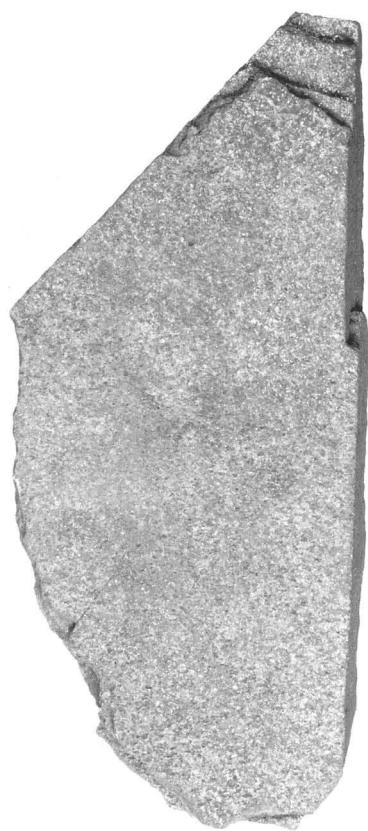
121



118

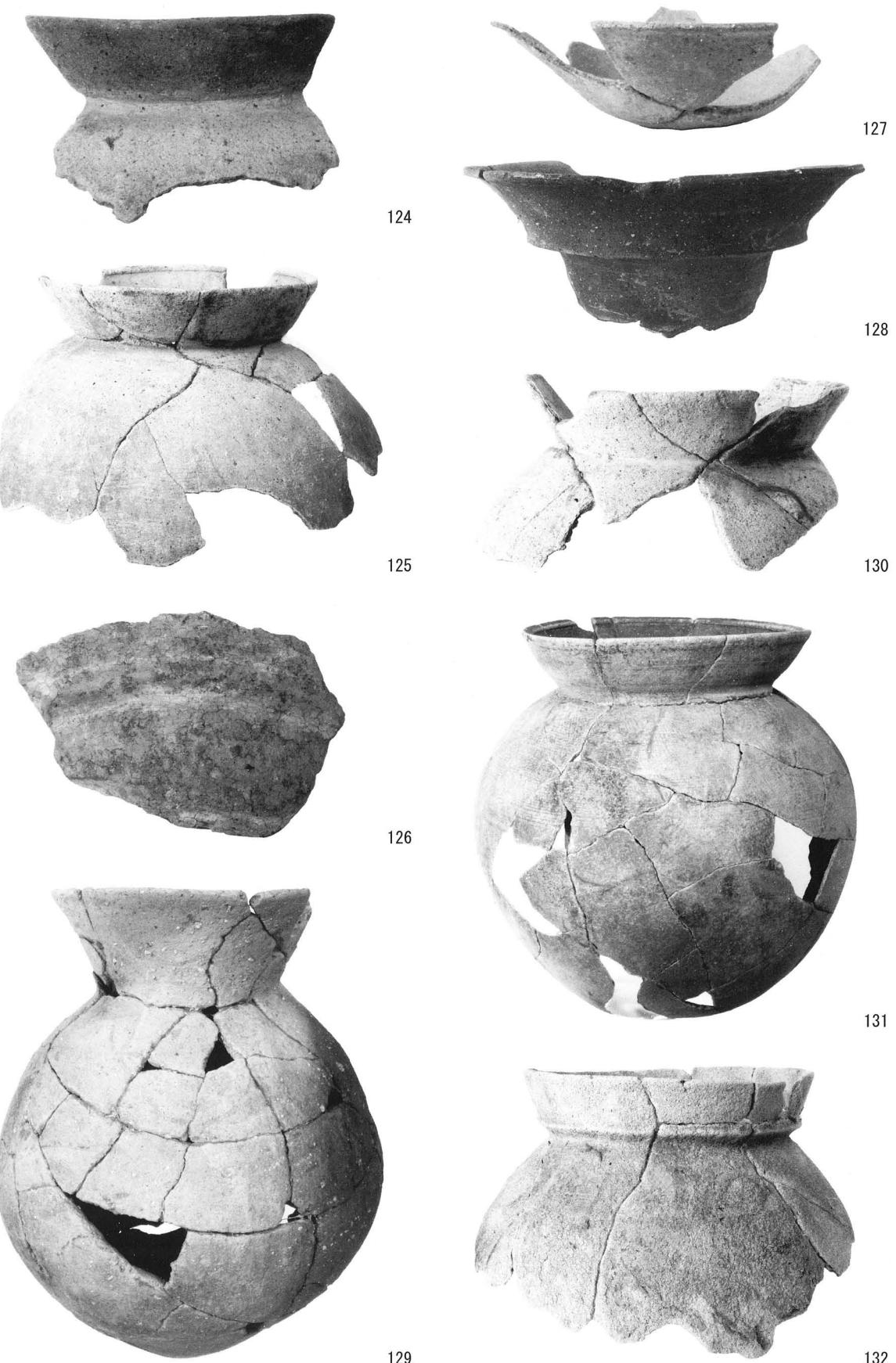


122



117

S K308(117・118)、S D302(120)、S D304(121～123)出土遺物



S D 304(124~126)、S D 305(127)、SW301(128~132)出土遺物

II 萱振遺跡第14次調査(K F 93-14)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市旭ヶ丘五丁目85番1の一部及び4丁目1番外3筆で実施した府営住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第14次調査(KF93-14)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成5年8月9日から平成6年3月14日(実働119日間)にかけて原田昌則・岡田清一・中野篤史(現田尻町教育委員会)を担当者として実施した。面積約3000m²を測る。
1. 現地調査においては、朝田要・内山千栄子・大見康裕・上林貴子・岸田靖子・瀬尾泰大・辻野優子・福島友香・森本智子・山喜広一・與儀徳保・吉田博・吉田由美恵が参加した。
1. 内業整理事業は平成19年4月から平成20年1月に整理係の原田昌則・尾崎良史が実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・山内千恵子、図面トレース－山内、遺物写真撮影－尾崎・北原、写真図版作成－尾崎が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 航空写真測量・撮影は(株)八州に委託した。
1. 現地調査の実施においては、以下の方々からのご協力とご指導を受けた。(敬称略、所属は調査時点)
井西貴子・小林義孝・中村清美・広瀬雅信・三木弘・宮野淳一(大阪府教育委員会)、日宝建設工業(株)、(株)八州
1. 本書で記述した古墳時代初頭から前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式-古相・新相)、古墳時代前期前半から後半(布留式-古相・中相・新相)に区別した。当該期の土器形式分類および土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(1993)に従った。本書で使用した布留式期の土器編年と既往編年との対応についてはP87の第4表に示した。
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、P87に提示した。

本　文　目　次

第1章　調査に至る経過	47
第2章　調査概要	48
第1節　調査方法と経過	48
第2節　基本層序	49
第3節　各調査区の検出遺構と出土遺物	50
1) 第1調査面	50
2) 第2調査面	58
3) 遺構に伴わない出土遺物	86
第3章　まとめ	88

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	47
第2図	調査区地区割図	48
第3図	断面図	51-52
第4図	第1調査面平面図	53-54
第5図	A SK201平断面図	58
第6図	第2調査面平面図	59-60
第7図	A SK201出土遺物実測図	61
第8図	A SK202平断面図	61
第9図	A SK202出土遺物実測図	62
第10図	A SD202出土遺物実測図	64
第11図	A SD202平断面図	64
第12図	A SD204平断面図	65
第13図	A SD204出土遺物実測図	66
第14図	B SD203出土遺物実測図	68
第15図	B SD203平断面図	68
第16図	C SB201平断面図	69
第17図	C SE201平断面図	70
第18図	C SE201出土遺物実測図	70
第19図	C SK205平断面図	71
第20図	C SK205遺物出土状況	72
第21図	C SK205出土遺物実測図-1	73
第22図	C SK205出土遺物実測図-2	74
第23図	C SK213平断面図	75
第24図	C SK213、214、215、219出土遺物実測図	76
第25図	C SK214、215平断面図	77
第26図	C SK216平断面図	78
第27図	C SK216出土遺物実測図	79
第28図	C SK219平断面図	79
第29図	C SD201平断面図	80
第30図	C SD201出土遺物実測図	81
第31図	C SD204出土遺物実測図	81
第32図	C SD205出土遺物実測図	81
第33図	C SD205平断面図	82
第34図	D SK201出土遺物実測図	84
第35図	D SK201平断面図	84

第36図 第4層、第8a層、第8b層出土遺物実測図 86

写 真 目 次

写真1	A S E 101検出状況	50
写真2	A N R 101検出状況	55
写真3	A区第2面 小溝検出状況	67

表 目 次

第1表	A区第2調査面 A S D 205~212法量表	67
第2表	C区第2調査面 C S D 206~223法量表	83
第3表	C区第2調査面 小穴・柱穴(S P)法量表	84
第4表	布留式期の土器編年対照表	87

図 版 目 次

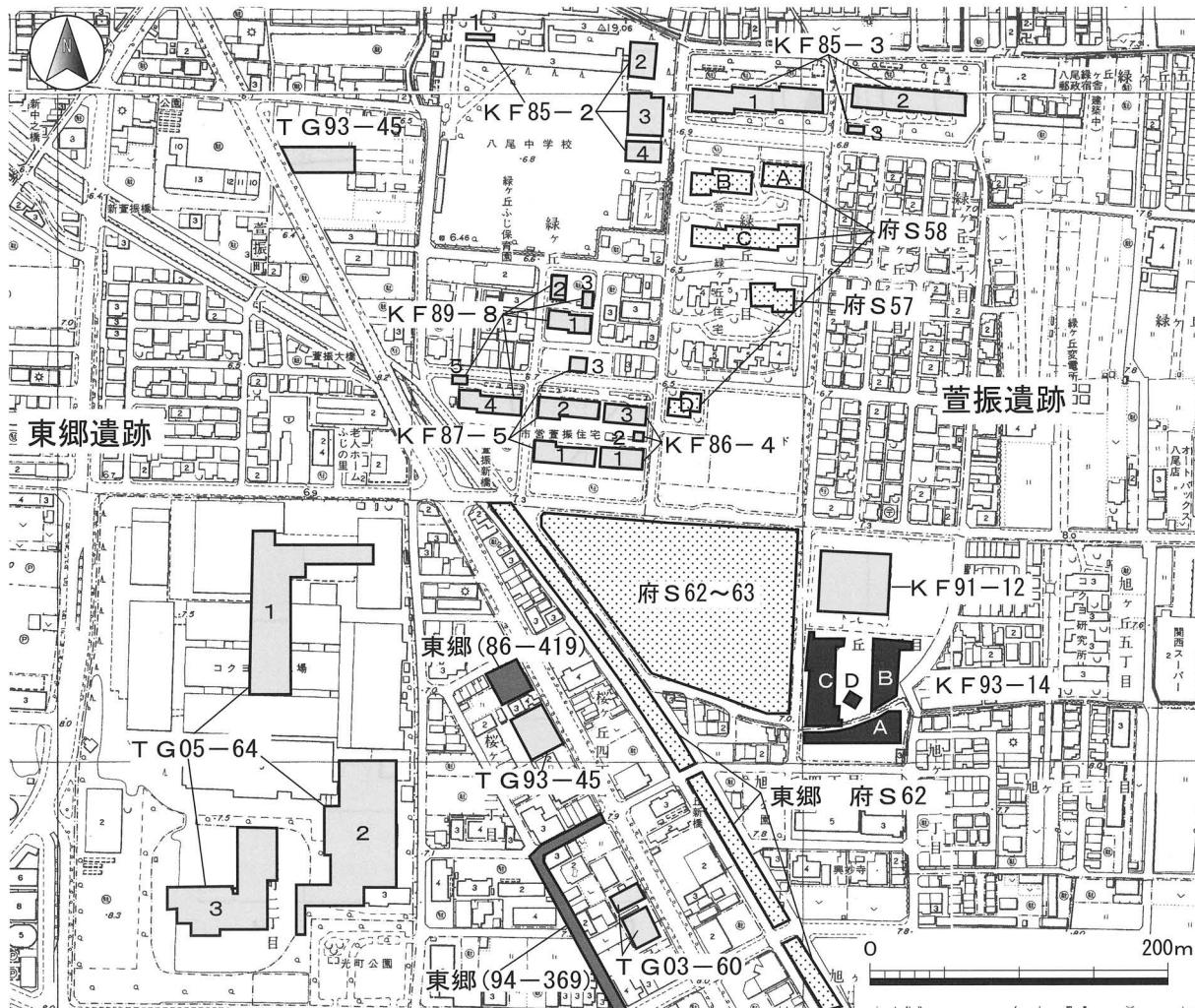
図版 一	A区第1調査面全景	図版一一	C S K 205遺物出土状況
図版 二	B区第1調査面全景	図版一二	C S K 214~216検出状況
	C区第1調査面全景	図版一三	C S D 201検出状況
図版 三	D区第1調査面全景	図版一四	D区第2調査面全景
図版 四	A区第2調査面全景	図版一五	A S K 201、A S K 202出土遺物
図版 五	A区第2調査面西部遺構検出状況	図版一六	A S K 202、A S D 202出土遺物
	A S K 201検出状況	図版一七	A S D 202、A S D 204出土遺物
図版 六	A S K 202検出状況	図版一八	A S D 204出土遺物
	A S K 202北西部遺物出土状況	図版一九	A S D 204出土遺物
	A S K 202中央部遺物出土状況	図版二〇	C S K 205出土遺物
	A S D 202検出状況	図版二一	C S K 205、C S K 213、C S K 214、
図版 七	A S D 204検出状況	図版二二	C S K 215、C S K 219出土遺物
	A S D 204遺物出土状況	図版二三	C S K 216、C S D 201出土遺物
図版 八	B区第2調査面全景	図版二四	C S D 201、C S D 204、C S D 205、
	B S D 203検出状況		D S K 201出土遺物
図版 九	C区第2調査面全景		D S K 201、第4層、第8層a、第
図版一〇	C S E 201下層遺物出土状況		8層b出土遺物
	C S K 205検出状況		

第1章 調査に至る経過

萱振遺跡は、大阪府八尾市の中央部から北部に位置する旭ヶ丘五丁目、緑ヶ丘一～三丁目、萱振町一～七丁目、北本町三・四丁目、泉町一～三丁目、桂町一・二丁目、幸町一・三・四・六丁目に所在する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

地理的には、河内平野内を北西方向に流下する長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上に位置している。この低位沖積地は、八尾市二俣地区付近から東大阪市南部にかけての約10kmにわたって広がるもので、そのほぼ中央部の最も低いところを北西方向に楠根川が流下し、東大阪市若江南五丁目付近で第二寝屋川に合流している。萱振遺跡は、この楠根川流域に沿った東西0.5～0.9km、南北1.1kmの広い範囲に展開している。今回の調査地点である八尾市旭ヶ丘五丁目付近は、楠根川右岸の海拔7m前後に位置し、遺跡推定範囲の南東部にあたる。

萱振遺跡の南部が遺跡として認識されたのは、昭和18年に八尾競馬場(昭和5年～昭和15年)跡地で防空壕を構築する際に、古墳時代中期の土器片のほか子持ち勾玉等(金谷1962)が出土したことによるが、出土地点や出土層位等の詳細は不明であった。その後、昭和57年以降には八尾競馬場跡地一帯に建てられていた府営・八尾市営住宅の建替えや八尾市の公共施設の建設に伴って、



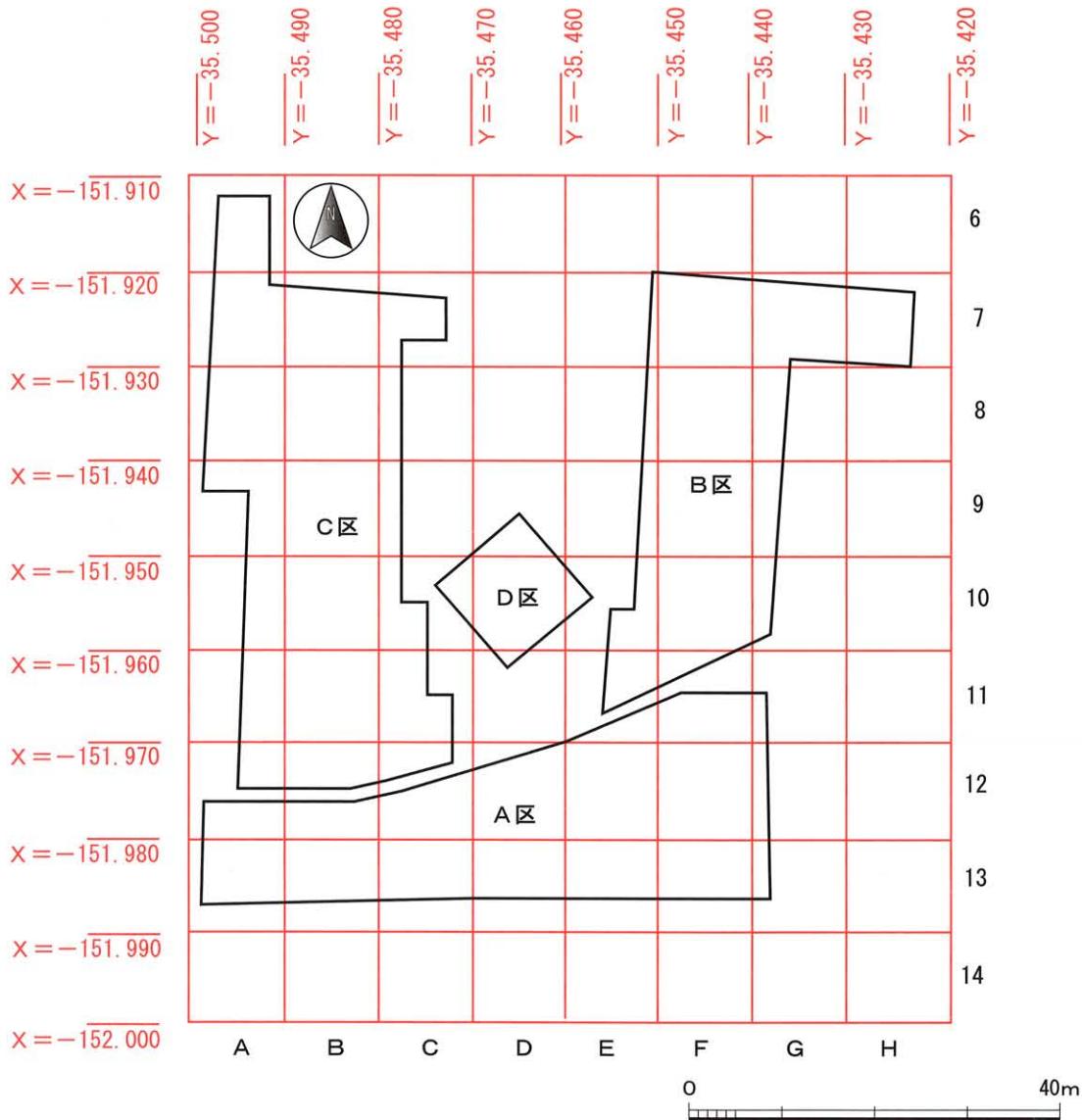
第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

大阪府教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会により継続的に発掘調査が実施されてきた。その結果、遺跡範囲南部一帯に弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡が存在することが明らかとなった。今回の調査地は、平成4年2月～6月に八尾市生涯学習センター建設に先だって当調査研究会が実施した第12次調査地の南に隣接している。なお、調査地周辺の既往調査の詳細や地理・歴史的環境等については、本書のI萱振遺跡第12次調査の第2章(P1～6)を参照されたい。

第2章 調査概要

第1節 調査方法と経過

今回の発掘調査は府営住宅建設に伴うもので、調査の対象は府営住宅建物3棟および集会場建物1棟の4箇所で総面積は約3000m²を測る。4箇所のうち、南部の調査区をA区(1150m²)、東部の調査区をB区(651m²)、西部の調査区をC区(1056m²)、B区とC区に挟まれた調査区をD区(144



第2図 調査区地区割図 (S=1/800)

m²)と呼称した。

調査の地区割については、調査地の北側で当調査研究会が平成4年2月～6月に実施した八尾市生涯学習センター建設に伴う第12次調査(K F 91-12)で使用した地区割を南部に延長する方法を取った。地区割は国土座標第VI座標系(日本測地系)を基準として北西隅の基点(X=-151.910.000, Y=-35.500.000)から東西80m、南北90mにわたって設定した。地区の一区画単位は10m四方で、東西方向はアルファベット(西からA～H)、南北方向は算用数字(北から6～14)で示し、地区的表示は6 A～14 H地区と呼称した。地点の表示については、国土座標値を入れる方法を取った。調査では排土置場および関連工事との関係からA区、B区・D区、C区の順に調査を実施した。

掘削に際しては、調査指示書に従って地表下0.6～0.7mを機械掘削した後、以下0.6～0.7mについては層理に従って人力掘削を実施した。各調査区ともに2面(第1調査面・第2調査面)にわたる調査を実施した。

第1調査面は、現地表下0.7～1.2m(T.P.+6.8～6.3m)付近に存在する第5層ないしは第6層上面を対象としており、一部、江戸時代後半の井戸を除けば、鎌倉時代を中心とした農耕に関連した溝遺構を多数検出している。第2調査面は、第1調査面より0.3～0.5m下部(T.P.+6.3～5.8m)に存在する第9層上面で弥生時代後期、古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)、平安時代後期の遺構を検出した。遺物は、各調査区で検出した遺構内および第4層・第8a層・第8b層を中心にコンテナ箱に20箱程度出土している。

第2節 基本層序

調査地の古墳時代前期の微地形はA区の西部付近が高く、そこから北および東に向かって緩やかに下がっており、土層もそれらの地形に沿った堆積状況を示している。普遍的に存在した11層を基本的層序としたが、A区・B区の東部では南北方向に走る自然河川に起因した水成層の広がりが認められた。

第1層：盛土。N6/0灰色細粒砂。層厚0.2～0.6m。上面の標高はT.P.+7.7～7.5m。

第2層：床土。N7/0灰白色細粒砂。層厚0.1～0.2m。

第3層：10YR6/1褐色細粒砂。層厚0.1～0.3m。

第4層：10YR6/2灰黄褐色細粒砂。層厚0.1～0.3m。鎌倉から室町時代の遺物を極少量含む。

第5層：10YR7/4にぶい黄橙色極細粒砂。層厚0.05～0.3m。上面が第1調査面(A・D区)。

第6層：2.5Y7/2灰黄褐色粘質土。層厚0.2m前後。上面が第1調査面(B・C区)。

第7層：10YR8/4浅黄橙色粘土。層厚0.1～0.3m。A区の南部を中心に存在している。

第8a層：N8/0灰白色粘土。層厚0.1～0.3m。平安時代後期の耕作土。古墳時代前期・後期・平安時代前期～後期の遺物を少量含む。平安時代後期の鋤溝の構築面。

第8b層：10YR5/1褐色細粒砂。層厚0.05～0.15m。C区を中心に広がる。北に行くに従つて漸増する。古墳時代前期前半から中葉(布留式古相から中相)の遺物を含む。

第9層：2.5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂。層厚0.2～0.3m。上面が第2調査面。

第10層：2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト。層厚0.2m前後。弥生時代後期の自然河川(CNR 201)を検出している。

第3節 各調査区の検出遺構と出土遺物

1) 第1調査面(第4図)

各調査区共に現地表下0.7~1.2m(T.P.+6.8~6.3m)付近に存在する第5層ないしは第6層上面を調査対象とした。

各調査区の検出遺構は、A区では、第5層上面で鎌倉時代前期の溝8条(A S D 101~108)、自然河川1条(A N R 101)と江戸時代後期に比定される井戸1基(A S E 101)を検出した。B区では、対象とした第6層上面が上層に堆積する水成層の影響を受けてグライ化しており、上面で人・小動物の足跡を一部で検出したほか、調査地の北東隅の7G・H区で自然河道1条(B N R 101)を検出した。C区では、第6層上面で、鎌倉時代時代に比定される溝11条(C S D 101~111)を検出した。D区では、第5層上面で鎌倉時代に比定される溝3条(D S D 101~103)を検出した。

A区—第1調査面(第4図、図版一)

井戸(A S E)

A S E 101

A区南東隅の13G地区で検出した。東部および南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅2.25m、南北幅1.9mを測る。掘方は二段に掘削されており、1段目と2段目の間に幅0.55~0.7mを測るテラス状の部分を形成している。深さは検出面から0.73mまで確認したが、それより下部については安全面を考えて掘削を実施しなかった。埋土は検出部分では5層に分層できるが、土層堆積は普遍的にみられる堆積状況ないことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物は江戸時代後期以降に比定される国産磁器碗の小破片が1点出土している。なお、井戸側等が検出されていないが、その形状からみて江戸時代中期以降の水田や畠地内で検出されている農耕用の井戸であったものと考えられる。



写真1 A S E 101検出状況(西から)

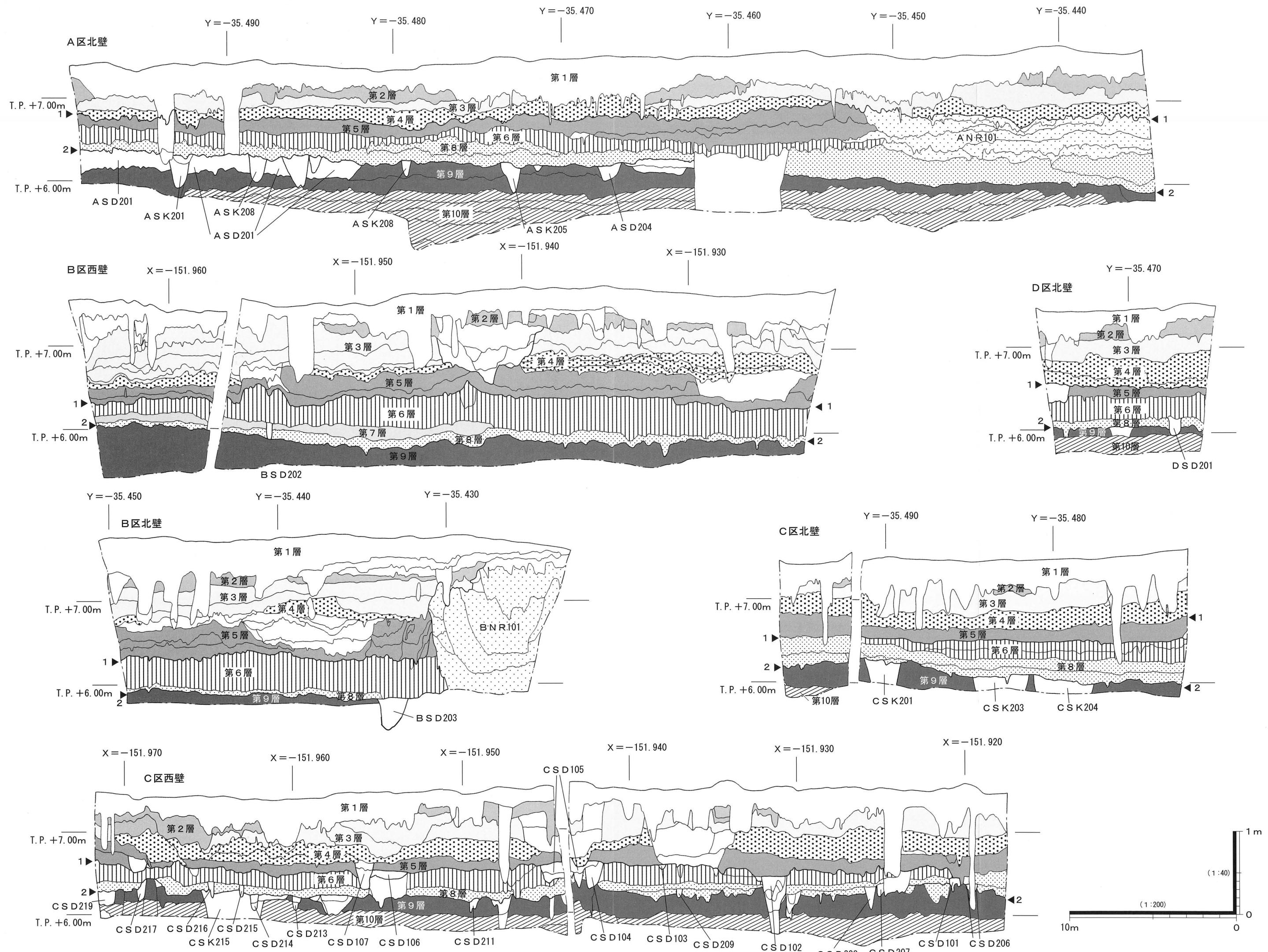
溝(A S D)

A S D 101

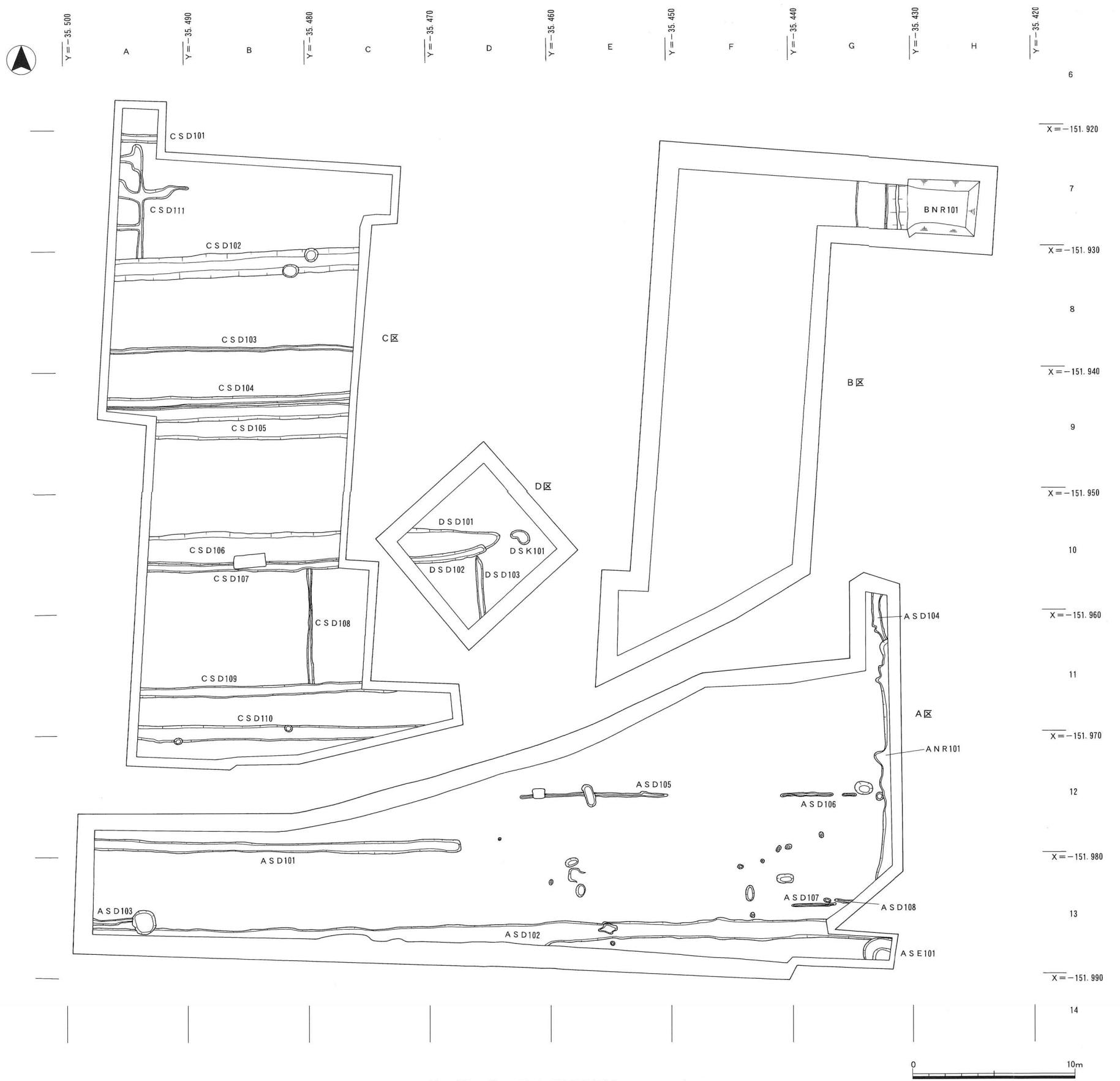
A区の北西部で検出した。東西方向に直線的に伸びるもので、検出長36m、幅0.75~1.0mを測る。掘方の断面形状は浅い皿状を呈し、深さ0.03~0.1mを測るもので、東に行くに従ってやや深くなっている。埋土は10YR7/8黄橙色細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

A S D 102

A S D 101の南に6m前後の間隔を持ち並行して伸びる。調査区の西部の13A地区から13D地区にかけては南肩が調査区外のため不明な点があるが検出部で全長61m、幅1.6mを測る。13D・E地区付近では、溝底の中央部が一段深くなる部分が認められたが、それ以外は断面の形状が浅い皿状を呈しており、深さは0.1m前後を測る。埋土は10YR8/8黄橙色細粒砂の単一層である。



第3図 断面図(水平: S=1/200、垂直: S=1/40)



第4図 第1調査面平面図 (S=1/400)

遺物は鎌倉時代の土師器小皿、瓦器椀、瓦質土釜、屋瓦等の小破片が少量出土している。

A S D 103

A区南西隅の13A地区で検出した。A S D 102の北に0.4m前後の間隔を持ち並行に伸びるもので、検出長3.5m、幅0.3~0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

A S D 104

A区の北東隅の10・11G地区で検出した。南北方向の伸びるもので、南端はA N R 101に切られている。検出長3.8m、幅0.73m、深さ0.08mを測る。埋土は5BG6/1青灰色微砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。

A S D 105

A区の12D・E地区で検出した。東西方向に直線的に伸びるもので、全長12.3m、幅0.43m、深さ0.06mを測る。埋土は7.5YR8/8黄橙色シルト混細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

A S D 106

A区の12F・G地区で検出した。東西方向に伸びるもので、一部途切れる部分がある。全長6.3m、幅0.2m、深さ0.03mを測る。埋土は7.5YR6/1褐灰色細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

A S D 107

A区の南東部の13G地区で検出した。東西方向に伸びるもので、全長3.6m、幅0.19m、深さ0.06mを測る。埋土は5Y7/8黄色シルト混細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

A S D 108

A区の13G地区で検出した。東西方向に伸びるもので一部途切れる部分がある。検出長2.5m、幅0.2m、深さ0.05mを測る。埋土は5Y7/8黄色シルト混細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

自然河川(A N R)

A N R 101(写真2)

A区の東端を南北方向に伸びるもので、東肩は調査区外のため詳細は不明である。検出した西肩も直線的に伸びるものではなく、一部広がりを持つ部分が認められた。検出部分で南北長20m、幅0.5m~1.5m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色系で砂礫混粘土を主とするが、一部で粗砂が堆積する箇所が認められた。遺物は土師器土釜、須恵器甕、屋瓦等の細片が少量出土したが時期を明確にできたものは無い。なお、北接するB区で検出したB N R 101に続くものと考えられる。この南北に伸びる自然河川の流路方向は、推定される若江郡条里(若江北条)の六条(里名不明)の九ノ坪・十ノ坪の東側を画する位置にあたる。



写真2 A N R 101検出状況(西から)

B区－第1調査面(第4図、図版二)

自然河川(BNR)

BNR101

B区の北東隅の7G・H地区で検出した。ANR101と同様の河川である。東部が調査区外のため不明であるが、検出部分で幅7m、深さ0.7mを測る。検出した西肩は第6層を盛り上げて小さな堤を構築しており、その形状は河川側の角度が急な不整形な台形を呈している。上面幅0.1m、基底幅0.6m、高さ0.3mを測る。河川内の埋土は細粒砂～粗粒砂を主体としている。遺物は庄内式甕、瓦器小皿等の細片が極少量出土している。また、堤は上部および西部に拡張されており、室町時代頃には堤の東側に道路遺構が付随していたことが、断面観察から読みとれる。埋土も上部に至るまで細粒砂～粗粒砂が優勢であり、少なくとも江戸時代まではその機能を果たしていたようである。

C区－第1調査面(第4図、図版二)

溝(CSD)

CSD101

C区の7A地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長2.9m、幅0.65m、深さ0.3mを測る。断面形状はU字形である。埋土はN6/0灰色極細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

CSD102

C区の8A～8C地区にかけて東西方向に伸びる。検出長20.1m、幅1.8～2.0m、深さ0.4m前後を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は2層から成る。遺物は土師器、須恵器、瓦器、国産陶器等の細片が少量出土している。

CSD103

C区の8A～8C地区にかけて東西方向に伸びる。検出長19.9m、幅0.35m、深さ0.05mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は5Y8/1灰白色シルトの単一層である。遺物は土師器の細片が極少量出土している。

CSD104

C区の9A～9C地区にかけて東西方向に伸びる。南肩がCSD105に切られている。検出長19.9m、幅0.5m、深さ0.25mを測る。断面形状は逆台形を呈している。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

CSD105

CSD104の南肩を切り、並行して伸びる。検出長15.6m、幅2.95m、深さ0.35mを測る。溝底は、南部は水平であるが北部では一段深くなっている。埋土は3層から成る。遺物は奈良時代から鎌倉時代を中心とする土師器、須恵器、瓦器の細片が極少量出土している。

CSD106

C区の10A～10C地区にかけて東西方向に伸びる。検出長15.6m、幅2.45m、深さ0.3mを測る。断面の形状は逆台形である。埋土は断面形状に沿って3層が堆積している。遺物は土師器、須恵器、瓦器等の細片が少量出土している。東接するD地区西部で検出したDSD101に続く溝である。

C S D 107

C S D 106の南に隣接し、並行して伸びる。検出長15.6m、幅0.75m、深さ0.15mを測る。断面の形状は半円形である。埋土は2層から成る。遺物は土師器の細片が極少量出土しているが図化し得たものはない。東接するD地区西部で検出したD S D 102に続く溝である。

C S D 108

C区南東部の10・11 C地区で検出した。南北方向に伸びるもので、北端がC S D 107、南端がC S D 109に切られている。検出長9.5m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。断面形状は浅半円形である。埋土はN6/0灰色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

C S D 109

C区の11 A～11 C地区にかけて東西方向に伸びる。検出長18.2m、幅0.8～1.0m、深さ0.1mを測る。断面形状浅い皿状である。埋土は2.5GY8/1灰白色極細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

C S D 110

C区の11・12 A～11・12 C地区にかけて東西方向に伸びる。検出長23.6m、幅1.2m、深さ0.1mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土はN6/0灰色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

C S D 111

C区の7 A地区で検出した。枝状に伸びる溝状遺構全体をC S D 111とした。南北方向の検出長9.4m、幅0.45～1.5m、深さ0.15mを測る。埋土はN6/0灰色極細粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

D区—第1調査面(第4図、図版三)**土坑(D S K)****D S K 101**

D区東部の10D地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.6m、南北幅1.1m、深さ0.08mを測る。埋土は5Y8/3淡黄色シルトである。遺物は出土していない。

溝(D S D)**D S D 101**

東西方向に伸びるもので、南部はD S D 102に切られている。検出長8.6m、幅2.0m、深さ0.14mを測る。埋土は5Y8/3淡黄色シルトである。遺物は出土していない。

D S D 102

D S D 101の南に位置する。東西方向に伸びるもので、北肩は一部D S D 101を切っている。検出長6.4m、幅0.65m、深さ0.2mを測る。埋土はN7/0灰白色粘質シルトである。遺物は出土していない。

D S D 103

南北方向に伸びるもので、検出長5.2m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土はN7/0灰白色粘質シルトである。遺物は出土していない。

2) 第2調査面(第6図)

第2調査面は第1調査面より0.3~0.5m下部(T.P.+6.3~5.8m前後)に存在する第9層上面を調査対象とした。

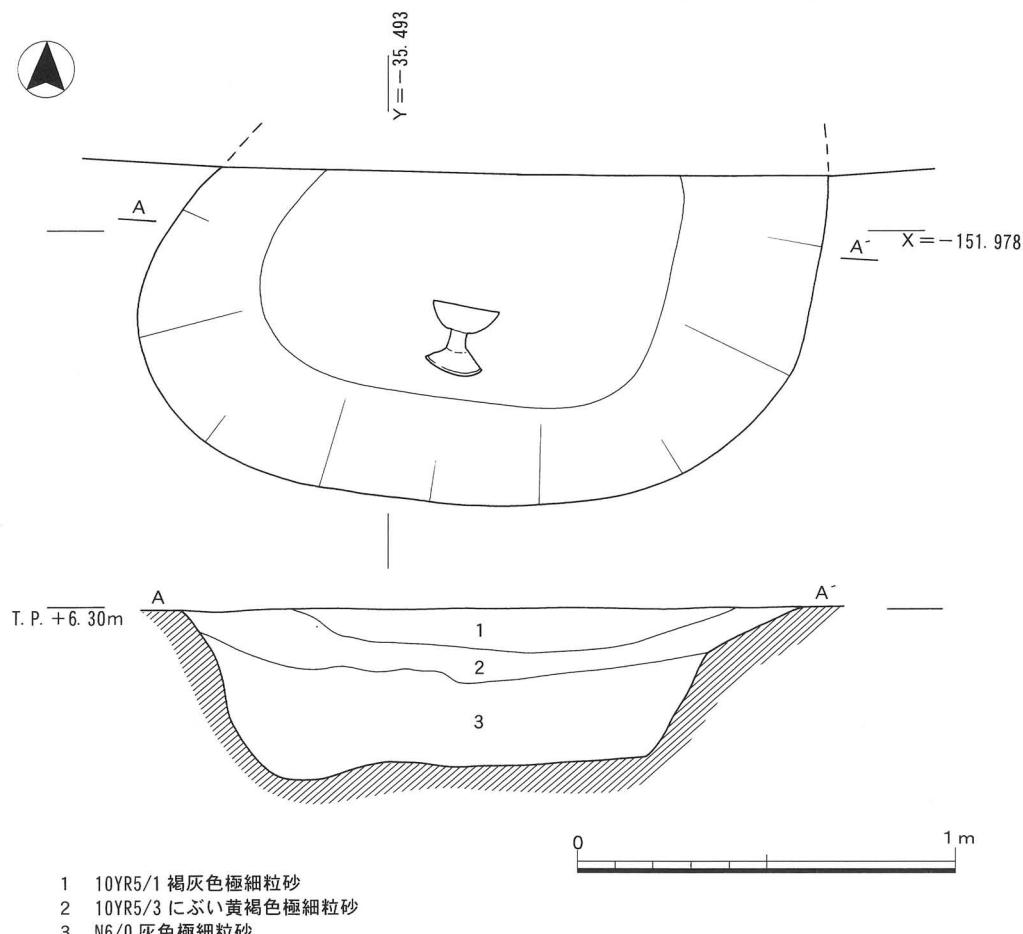
各調査区での検出遺構は、A区では、古墳時代前期前半・後期(布留式古相・新相)に比定される溝4条(A S D 201~204)、土坑8基(A S K 201~208)と平安時代前期に比定される耕作に関連した小溝8条(A S D 205~212)を検出した。B区では、平安時代後期の溝3条(B S D 201~203)を検出した。C区では、弥生時代後期の溝1条(C S D 201)、古墳時代前期前半・後期(布留式古相・新相)比定される掘立柱建物1棟(C S B 201)、井戸1基(C S E 201)、土坑20基(C S K 201~220)、溝4条(C S D 202~205)、小穴29個(C S P 201~229)と平安時代後期の溝18条(C S D 206~223)を検出した。D区では、古墳時代前期中葉(布留式中相)に比定される土坑2基(D S K 201・202)、小穴2個(D S P 201・202)と平安時代後期の溝3条(D S D 201~203)を検出した。

A区—第2調査面(第6図、図版四~七)

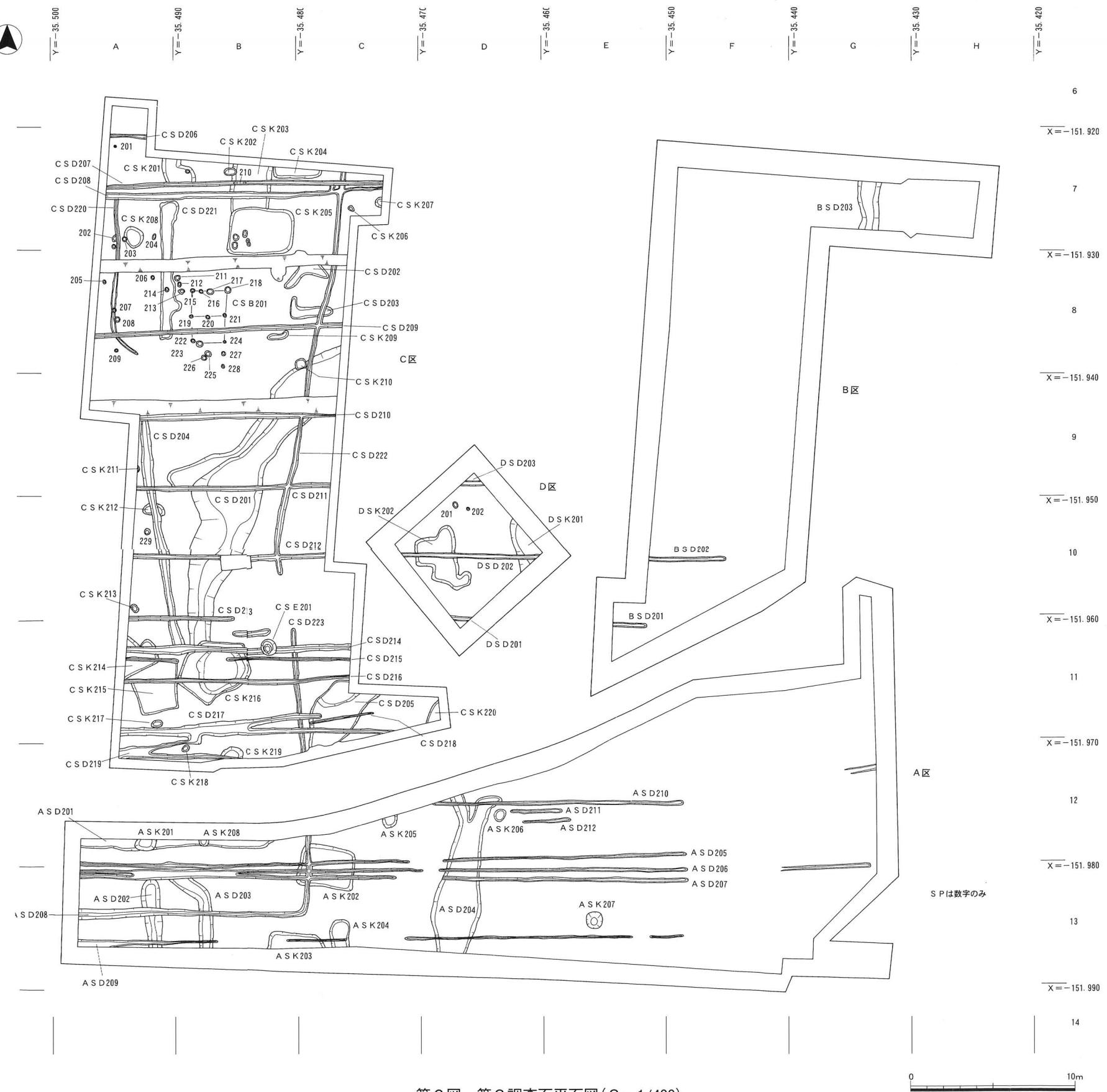
土坑(A S K)

A S K 201(第5・7図、図版五・一三)

12 A地区で検出した。A S D 201を切っている。北部は調査区外のため全容は不明であるが、検出部分からみて東西方向に長い楕円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.75m、



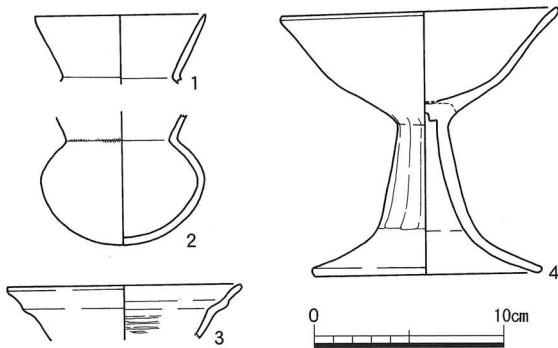
第5図 ASK 201平断面図(S=1/20)



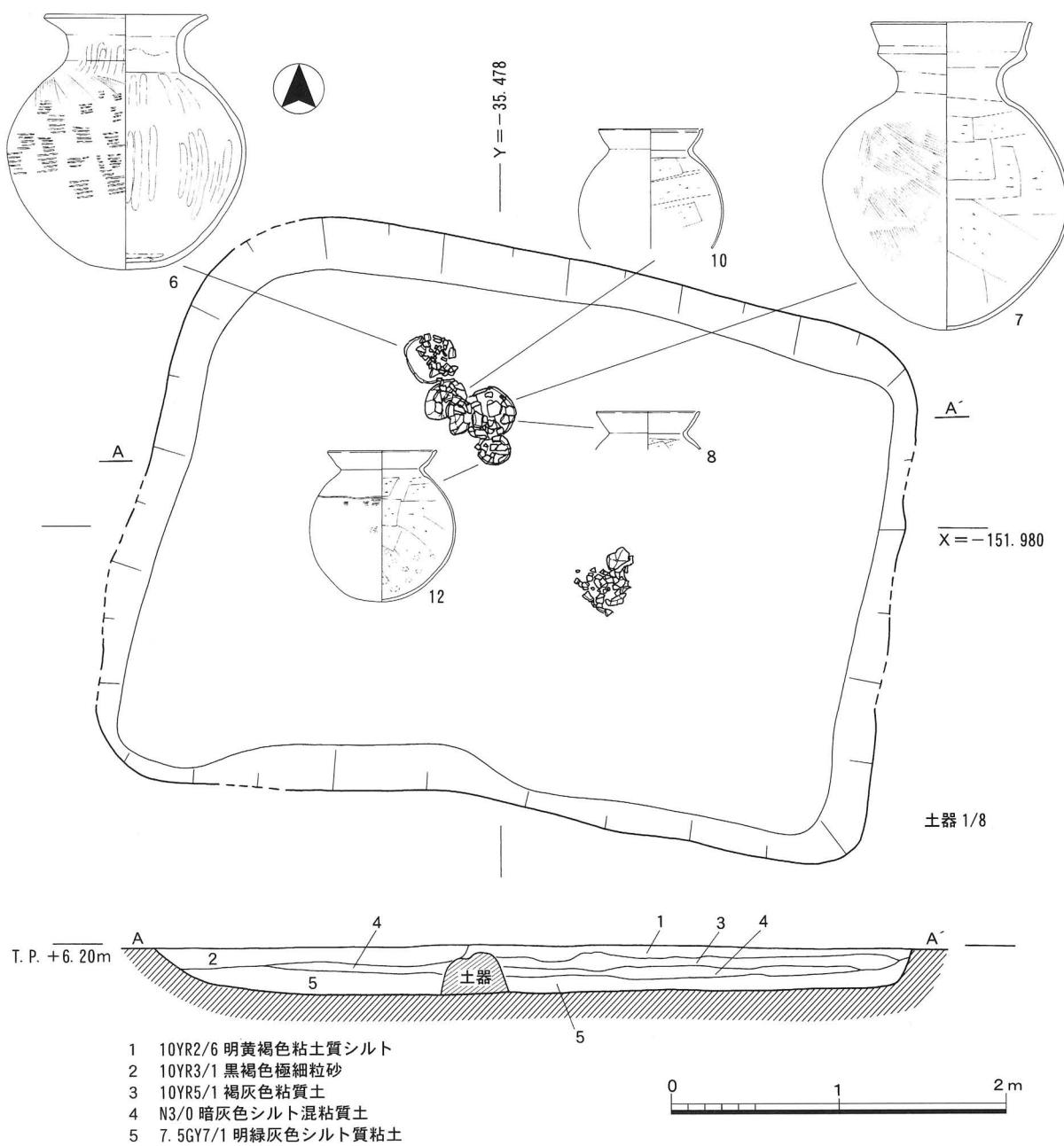
第6図 第2調査面平面図 (S=1/400)

II 萱振遺跡第14次調査(K F 93-14)

南北幅0.9m、深さ0.45mを測る。埋土は断面の形状に沿ってレンズ状に3層(1~3層)が堆積している。各層ともに極細粒砂を主体とするもので、最下層の3層中には炭が少量含まれていた。遺物は2層から古墳時代前期中葉(布留式中相)の小形丸底壺、高杯、小形鉢が出土したほか、1・3層からは古式土師器が出土しているが全て細片で量も僅少である。4点(1~4)を図化した。1・2は小形



第7図 AS K201出土遺物実測図

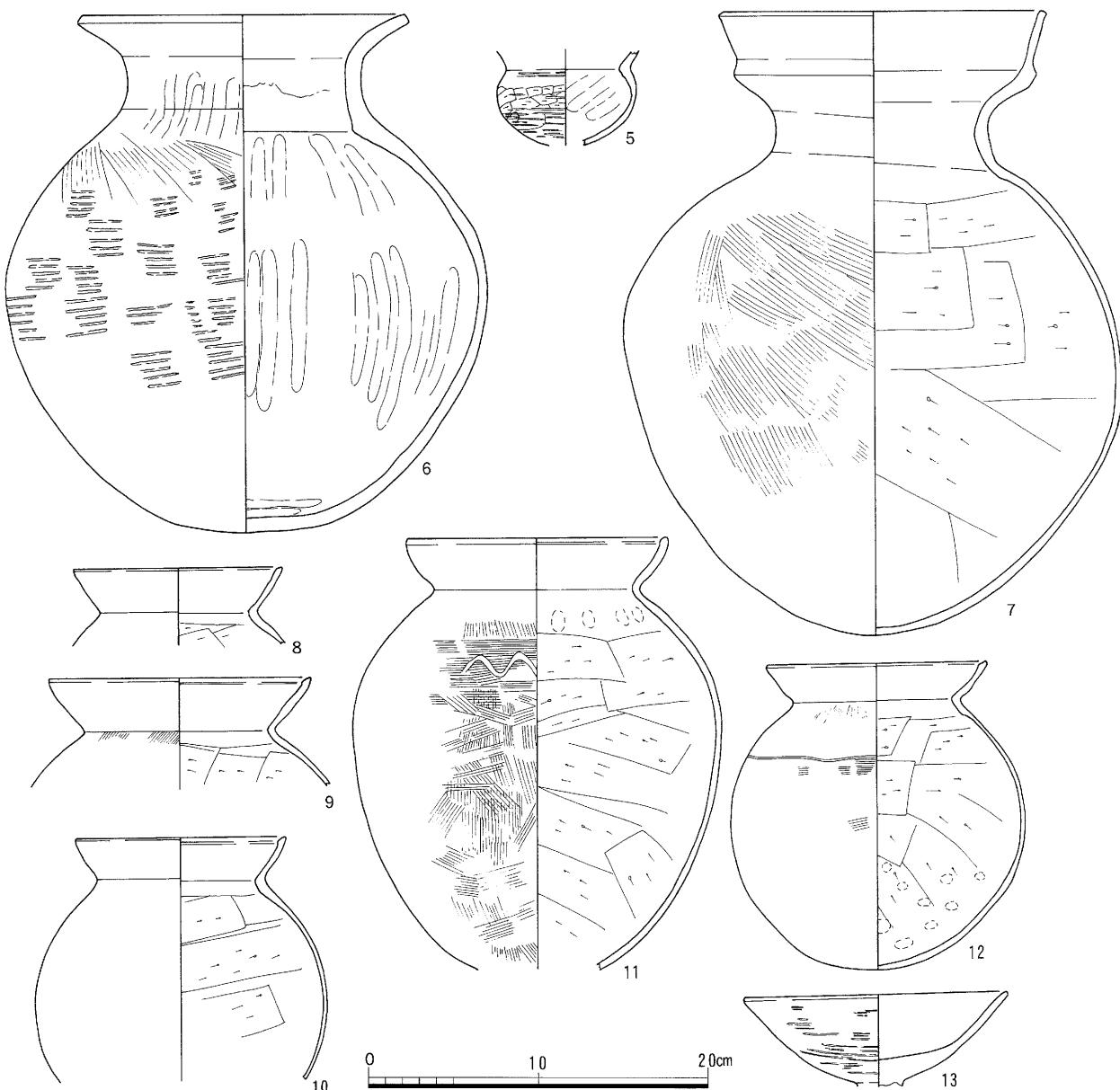


第8図 AS K202平断面図(S=1/40)

丸底壺（B₄）である。共に器面が風化しており調整は不明である。3は精製品の二段屈曲鉢（鉢H₂）の細片である。体部内面に横位のヘラミガキが施されている。4は有稜高杯（高杯A₅）である。杯部の稜が丸味を帯びている。口径14.8cm、器高14.1cm、裾部径12.2cmを測る。古墳時代前期中葉の布留Ⅲ期にあたる。

A SK 202(第8・9図、図版六・一三・一四)

調査区中央部の12・13B C地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、中央部付近が東西方向に伸びるA SD 205～207に切られており、西部では南北方向に伸びるA SD 208に切られている。東西幅4.5m、南北幅3.2m、深さ0.3mを測る。掘方の断面形状は皿状で坑底はほぼ水平である。埋土は掘方断面に沿って堆積しており、5層に分層が可能である。遺物は上部に堆積している1層および2層から、古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される、小形丸底壺・広口壺・複合口縁壺、布留式甕等が出土しており、一部北西部に集中する部分がある。9点(5～13)を図化した。



第9図 A SK 202出土遺物実測図

5は小形丸底壺(小形壺B₃)である。精製品で、体部外面はヘラケズリの後、横位の密なヘラミガキが施されている。6は球形の体部から頸部が直上方に短く伸びた後、口縁部が大きく開く広口壺である。1/2が残存しており、口径19.4cm、器高30.5cm、体部最大径28.3cmを測る。体部の上位にハケ、上位から中位にタタキが施されているが、全体に風化が進んでおり不明瞭である。胎土は粗く、1~3mm大の長石・赤色酸化土粒が散見される。7は複合口縁壺(複合口縁壺D)に分類される。図上で完形に復元が可能で、口径19.2cm、器高36.7cm、体部最大径29.2cmを測る。体部の器面調整は外面がハケ、内面はヘラケズリが施されている。8~12は布留式甕(甕F₂)である。11を除けば、器面風化が進行したものが大半を占めている。12においては、上位に横方向のハケと1条の波状文の他、縦方向のハケを行うもので、布留式甕の古相に特有な特徴を持つ。13は有稜高杯(高杯A₅)の杯部片である。布留Ⅱ期にあたる。

A SK203

13B C地区で検出した。南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分の形状は、台形を呈するもので、一部東西方向に伸びるA SD 209に切られている。検出部分で東西幅4.67m、南北幅1.2m、深さ0.23mを測る。掘方の断面形状は皿状で坑底はほぼ水平である。埋土は4層で掘方の形状に沿ってほぼ水平に堆積している。遺物は古墳時代前期(布留式期)に比定される甕の細片が少量出土しているが細片のため時期は限定できない。

A SK204

13C地区で検出した。A SK 203の東部に位置する。南部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分では方形を呈するもので、東西幅1.4m、南北幅2.1m、深さ0.14mを測る。埋土は10YR7/6明黄褐色粘質土の単一層である。遺物は古墳時代前期(布留式期)に比定される甕の細片が少量出土しているが細片のため時期は限定できない。

A SK205

12C地区で検出した。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅1.26m、南北幅0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は10YR7/6明黄褐色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

A SK206

12D地区で検出した。橢円形を呈するもので、長径1.0m、短径0.84m、深さ0.05mを測る。掘方の断面形状は浅い皿状を呈するもので、埋土は2.5Y7/6黄色極細粒砂の単一層である。遺物は古墳時代前期(布留式期)の布留式甕の細片が少量出土している。

A SK207

13E地区で検出した。円形を呈するもので、東西径1.26m、南北径1.3m、深さ0.7mを測る。掘方の断面形状は摺鉢状を呈する。埋土は5層に分層が可能である。堆積状況は、掘方の形状に沿って3層が堆積した後、中央部にレンズ状に2層が堆積しており、斬移的な堆積状況が窺える。遺物は古墳時代前期(布留式期)に比定される布留式甕の細片が極少量出土している。

A SK208

12B地区で検出した。A SD 201を切っている。検出部では半円形を呈するもので、北部が調査区外に至る。検出部の東西幅0.82m、南北幅0.3m、深さ0.25mを測る。埋土は10BG6/1青灰色粘質土の単一層である。遺物は出土しなかった。

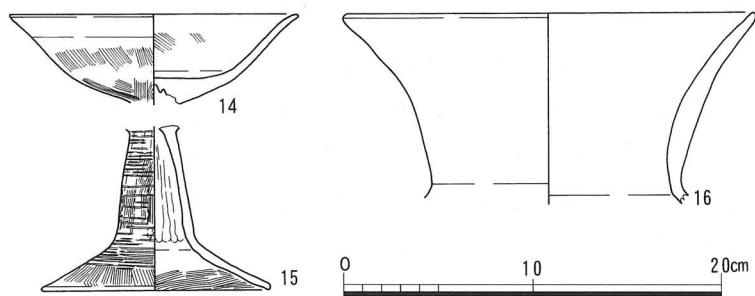
溝(A S D)

A S D 201

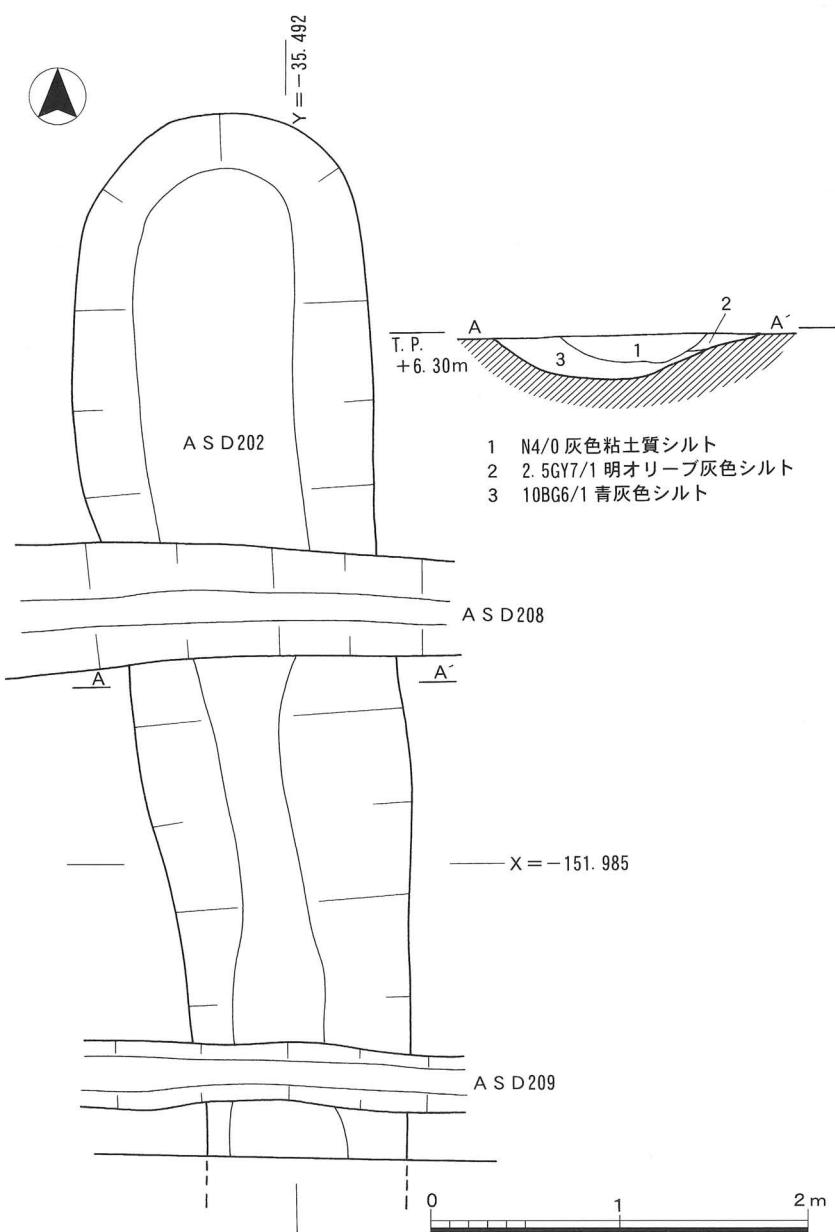
調査区北西部で検出した。12A～12B地区にかけて東西方向に伸びるもので、北肩は調査区外のため全容は不明である。一部、A S K 201・208に切られている。検出長15.8m、検出幅0.47～0.68m、深さ0.18mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色極細粒砂の単一層である。遺物は古式土師器の細片が極少量出土しているが、図化や時期を明確にし得たものは無い。

A S D 202(第10・11図、図版六・一四・一五)

13A地区で検出した。南北方向に伸びるもので、一部、A S D 208・209に切られている。検出長5.5m、幅1.43m、深さ0.23mを測る。埋土は半円形の断面形状に沿って3層(1～3層)が堆積している。遺物は1層の炭を含むN4/0灰色粘質シルト層から古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される壺、甕、高杯等の細が少量出土している。3点(14～16)を図化した。14・15は高杯である。14が杯部、15が脚部である。杯部の形状から(高杯A₅)に分類される。16は大形直口壺(大形直口壺A)の口縁部片である。古墳時代前期前半の



第10図 A S D 202出土遺物実測図

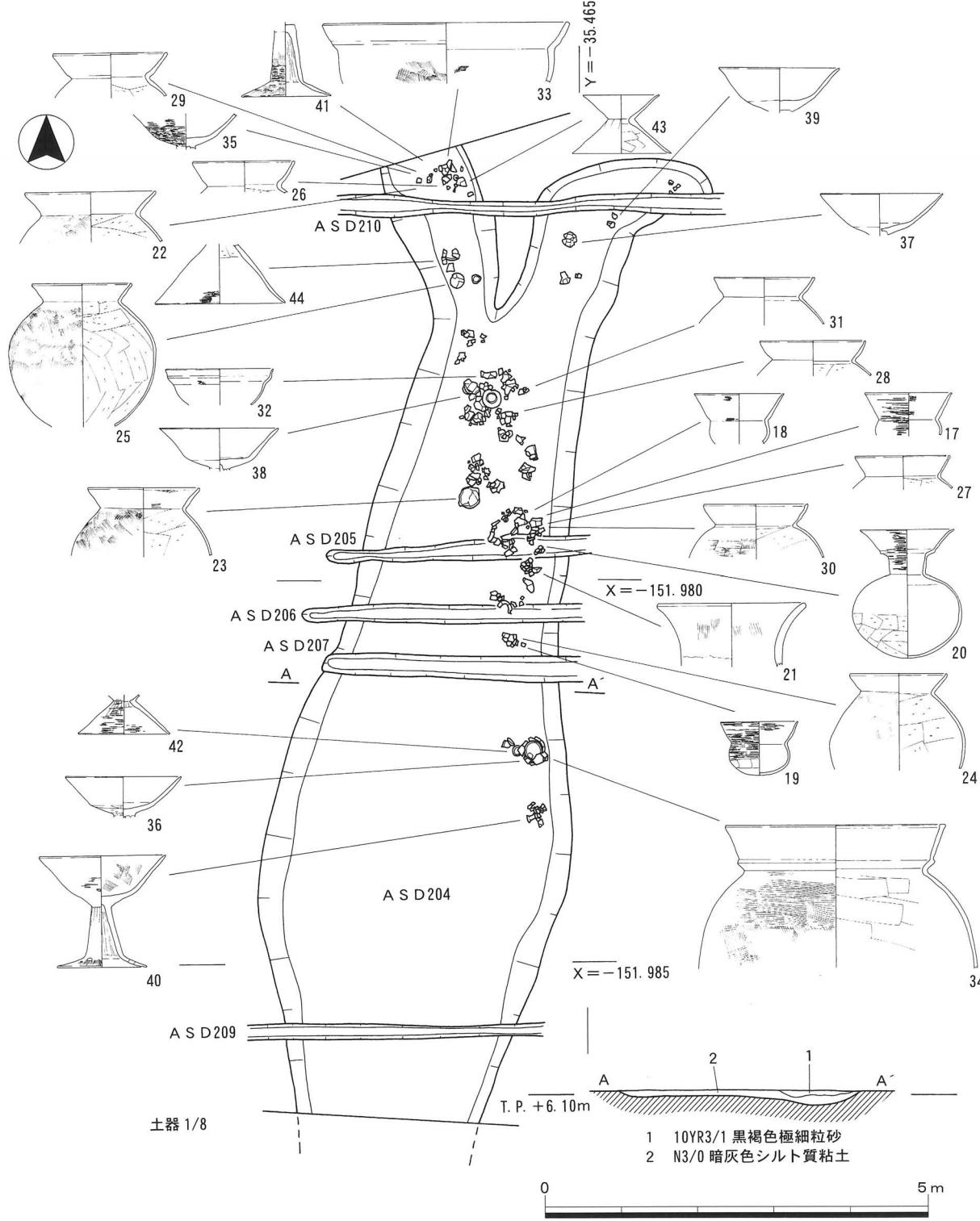


第11図 A S D 202平断面図(S=1/40)

布留Ⅱ期にあたる。

A S D 203

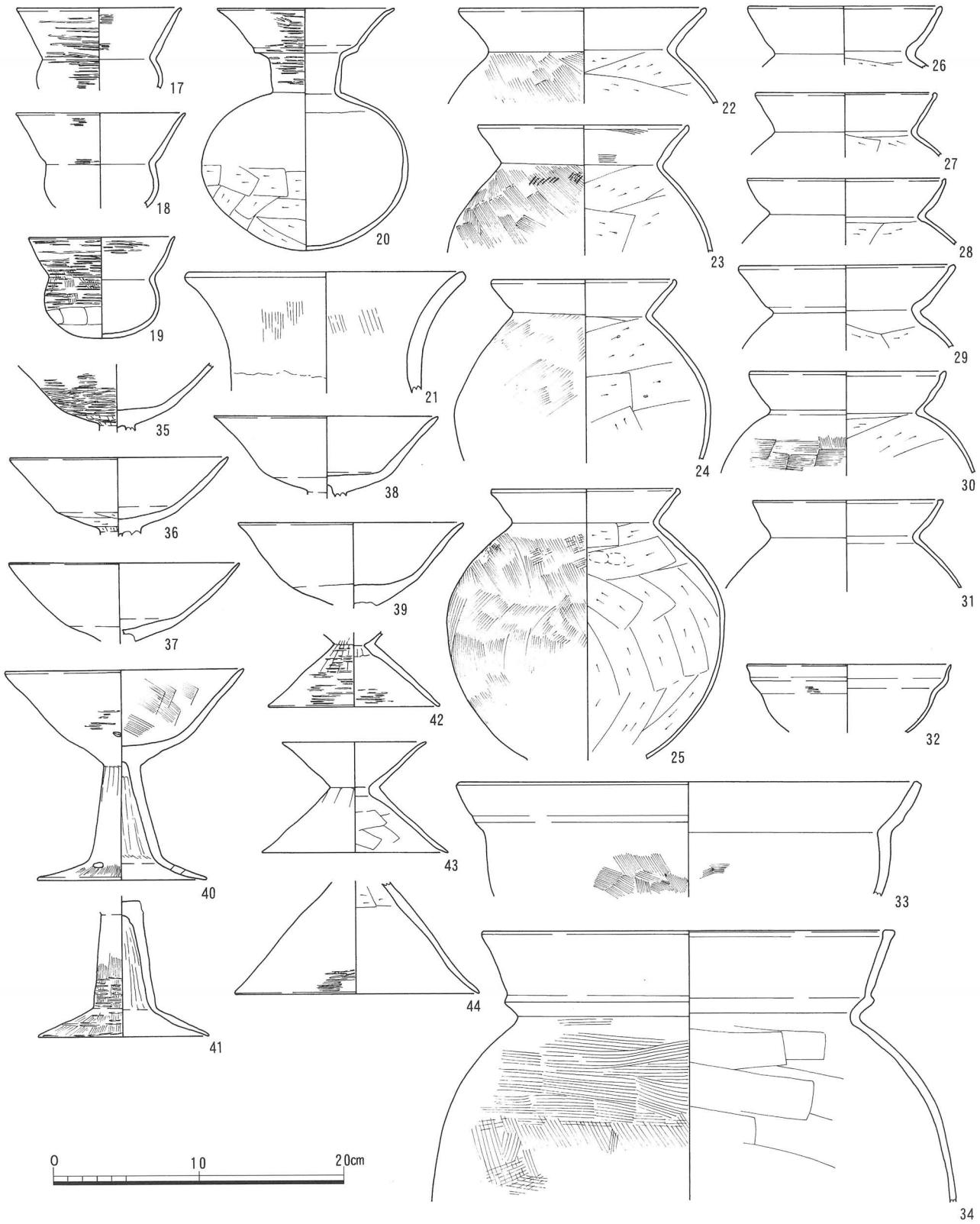
13A・B地区で検出した。北端がA S D 207、南端が調査区外に至る。検出部分の形状は逆「く」の字に屈曲した後、南北方向に伸びる。検出長5.6m、幅1.14m、深さ0.3mを測る。埋土は10BG6/1青灰色粘質シルトの単一層である。遺物は砥石片が1点のみ出土している。



第12図 A S D 204平面面図(S=1/80)

A S D 204(第12・13図、図版七・一五~一七)

12・13D地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出部の北部で東西に分流している。検出長12.8m、幅1.1~4.0m、深さ0.08~0.2mを測る。溝底は東部でやや深くなる部分が認められるが、他はほぼ水平である。埋土は2層(1・2層)で、大半が2層のN3/0暗灰色シルト質粘土



第13図 A S D 204出土遺物実測図

であるが、東部の上層の一部には1層10YR3/1黒褐色極細粒砂が堆積している。遺物は両層から出土したが、なかでも溝の東部では土器類が南北方向に列状に出土している。出土した遺物は、古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される壺、甕、鉢、高杯、器台等でコンテナ2箱程度出土している。28点(17~44)を図化した。17~19は小形丸底壺である。3点共に口径が体部径を大きく凌駕するもので、精製品の小形壺B₃に分類される。そのうち19が完形品で口径10cm、器高7cm、体部最大径7.9cmを測る。20は精製品の二重口縁壺(複合口縁壺B₃)である。やや頸部径が小さいもので、口縁部外面は横位のヘラミガキが行われている。21は大形直口壺Aの口縁部である。1/2が残存している。復元口径19.4cmを測る。22~25は体部外面の器面調整にハケを多用する甕で、布留式影響の庄内式甕(甕D)にあたる。胎土は24がやや粗く1~3mm大の長石が散見されるが、他は良好である。26~31は布留式甕(甕F₂)の細片である。32は二段屈曲鉢(鉢H₂)の細片である。33・34は共に大形鉢である。33が鉢I₁である。口縁部の約1/8が残存しており、復元口径は32cmを測る。34が山陰系の鉢I₂である。口縁部は完存しており、口径28.5cmを測る。色調・胎土からみて山陰地方からの搬入品と推定される。35~39は有稜高杯(高杯A₅)である。35~39が杯部である。35は精製品で横方向の密なヘラミガキが行われている。40は完形品である。口径16.4cm、器高14.6cm、裾部径11.6cmを測る。三方にスカシ孔が穿たれている。杯部内面に煤の付着が認められる他、柱状部外面の器壁が被熱により剥がれている箇所がある。41は脚部片である。42~44はいわゆる鼓形器台(器台C₂)である。42・43は小形品である。43は図上で完形に復元できるもので、口径10cm、器高7.7cm、裾部径13cmを測る。44は大形品で受部を欠く。古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定される。

A S D 205~212

東西方向に伸びる小溝群である。規模は検出長4.0~49.8m、幅0.22~0.83m、深さ0.05~0.25mを測る。断面形状は「U」字形を呈する。埋土はN7/0灰白色ないしは10BG6/1青灰色粘土質シルトである。遺物は、A S D 205~208から土師器、須恵器の細片が極少量出土している。第8a層で水田作土である作土層を確認していることから、水田耕作に関連した犁溝の痕跡と推定される。

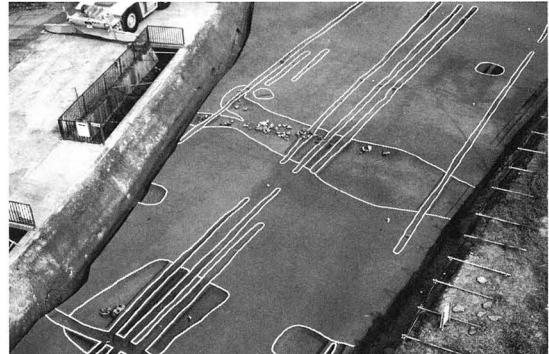


写真3 A区第2面 小溝検出状況(南西から)

第1表 A区第2調査面 A S D 205~212法量表 (単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
A S D 205	12A~12F	49.7	0.30	0.05	N7/0灰白色粘土質シルト	土師器
A S D 206	13A~13F	49.7	0.25	0.08	10BG6/1青灰色粘土質シルト	土師器
A S D 207	〃	49.8	0.32	0.05	〃	土師器・須恵器
A S D 208	12C~13A	18.5	0.83	0.25	〃	土師器・須恵器
A S D 209	13A~13F	11.5	0.22	0.05	N7/0灰白色粘土質シルト	
A S D 210	12D E	20.2	0.30	0.10	〃	
A S D 211	〃	4.20	0.25	0.05	〃	
A S D 212	〃	4.00	0.22	0.05	〃	

B区—第2調査面(第6図、図版八)

溝(B S D)

B S D 201

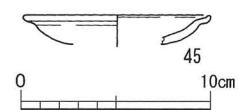
B区の南西隅の11E地区で検出した。東西方面に伸びるもので、検出長2.9m、幅0.35m、深さ0.1m前後を測る。埋土はN8/0灰白色粘土である。遺物は出土していない。D S D 201と同一溝である。

B S D 202

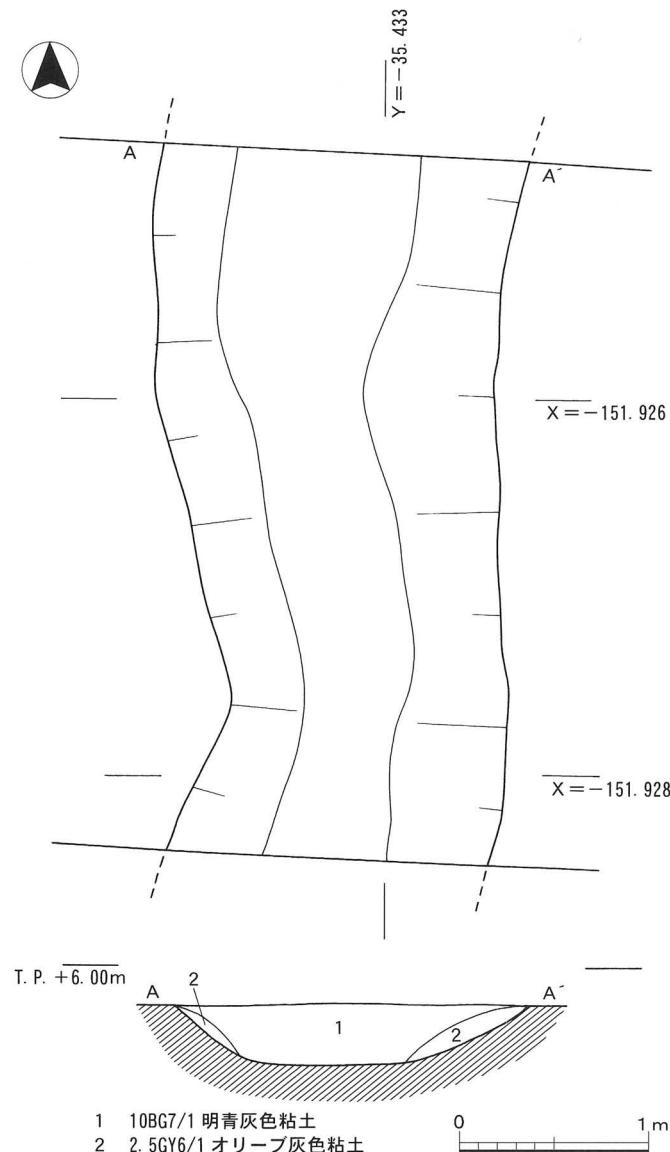
B区の10E・F地区で検出した。東西方向に伸びるで、検出長6.3m、幅0.35m、深さ0.1m前後を測る。埋土はN8/0灰白色粘土である。遺物は出土していない。D S D 202と同一の溝である。

B S D 203(第15図、図版八)

B区の7G地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長4.8m、幅1.85m、深さ0.3mを測る。埋土は両肩部分が2.5GY6/1オリーブ灰色粘土である以外は、10BG7/1明青灰色粘土が堆積している。遺物は平安時代後期に比定される土師器小皿の細片が出土している。45は土師器小皿の細片である。「て」の字状口縁を有する土師器小皿で復元口径10cmを測る。色調は灰白色。平安時代末期の11世紀末～12世紀初頭に比定される。



第14図 B S D 203出土遺物実測図



第15図 B S D 203平面面図(S=1/40)

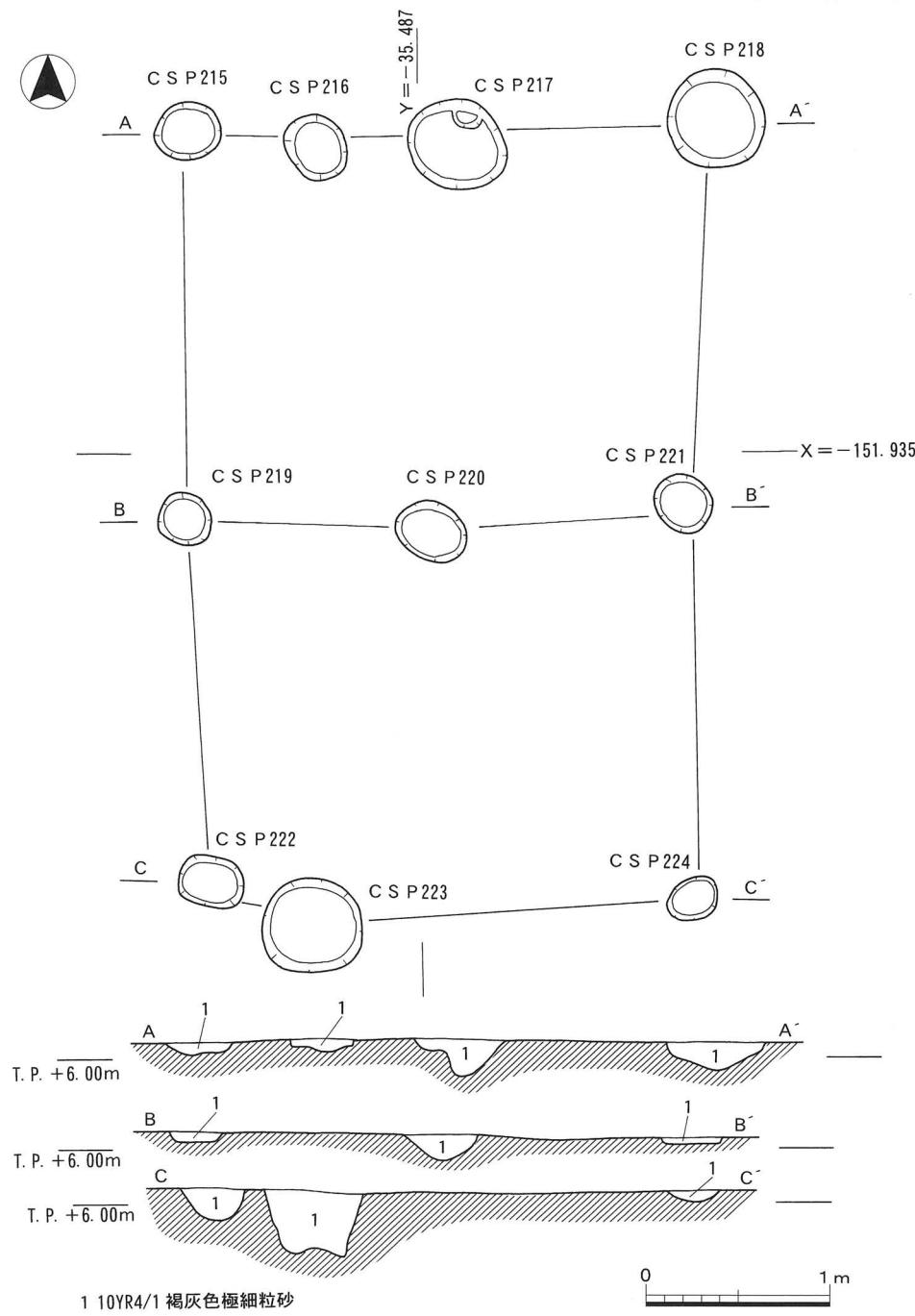
II 萱振遺跡第14次調査(K F93-14)

穴内の埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂の単一層である。遺物はC S P 224から布留式甕の細片が出土している。遺構の帰属時期については、建物に近接して主軸を同じくするC S D 221やC S K 205が存在しており、これらが古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定されるため、同時期に存在したものと推定される。

井戸(C S E)

C S E 201(第17・18図、図版一〇・一八)

C区南部の11B地区で検出した素堀井戸である。上面がC S D 214に切られていたことから、平面調査では検出できず、下層確認調査で存在を確認したものである。検出部分で径1.30m、深



第16図 C S B 201平断面図(S=1/40)

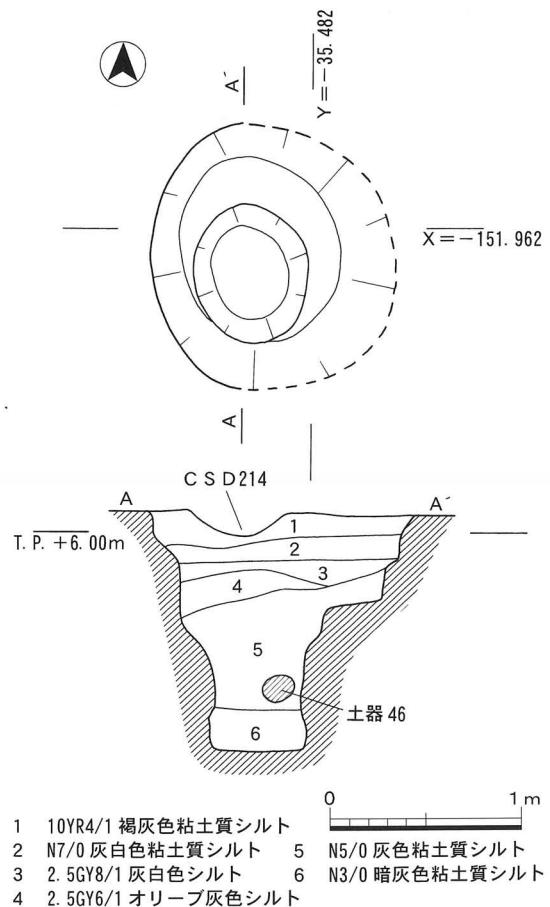
さ1.28mを測る。埋土は粘土質シルトからシルトを主体とする6層(1～6層)がほぼ水平に堆積している。遺物5層から古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される完形の古式土師器壺、甕細片が少量出土している。そのうち2点(46・47)を図化した。46は大形の二重口縁壺(複合口縁壺B₁)である。ほぼ完形品で口径21.4cm、器高33.7cm、体部最大径28.1cmを測る。全体に丁寧な作りである。色調は淡褐灰色。胎土は精良である。47は長胴形の体部に短い頸部が付く壺(長胴壺A)である。口径12.8cm、器高23.6cm、体部最大径16.5cmを測る。体部外面は上位と下位のタタキを除いて縦方向のヘラケズリおよびクラックが目立つ粗製品である。長胴壺に分類されるが、体部の器壁が薄く器面が被熱を受け赤褐色に変色していることから製塩土器である可能性が高い。出土遺物から、遺構の帰属時期は古墳時代前期前半の布留式古相である。

土坑(CSK)

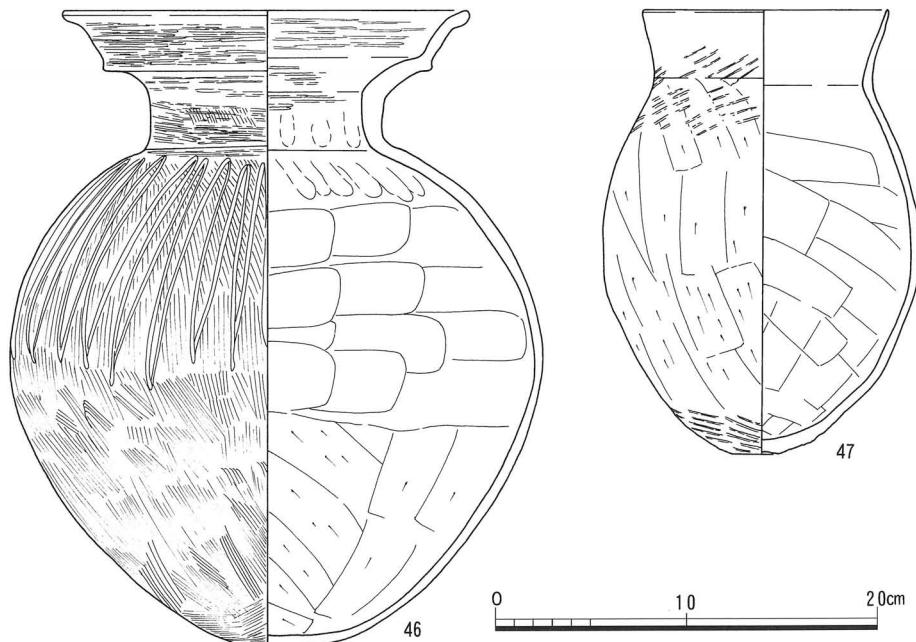
C SK 201

C区北部の7AB

地区で検出した。南北方向に溝状に伸びるもので、北端が調査区外、南端がCS D 207に切られている。検出部分で東西幅2.46m、南北幅1.94m、深さ0.26mを測る。埋土は4層である。遺物は古墳時代前期(布留式期)の古式土師器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。



第17図 CS E 201平面面図(S=1/40)



第18図 CS E 201出土遺物実測図

C S K 202

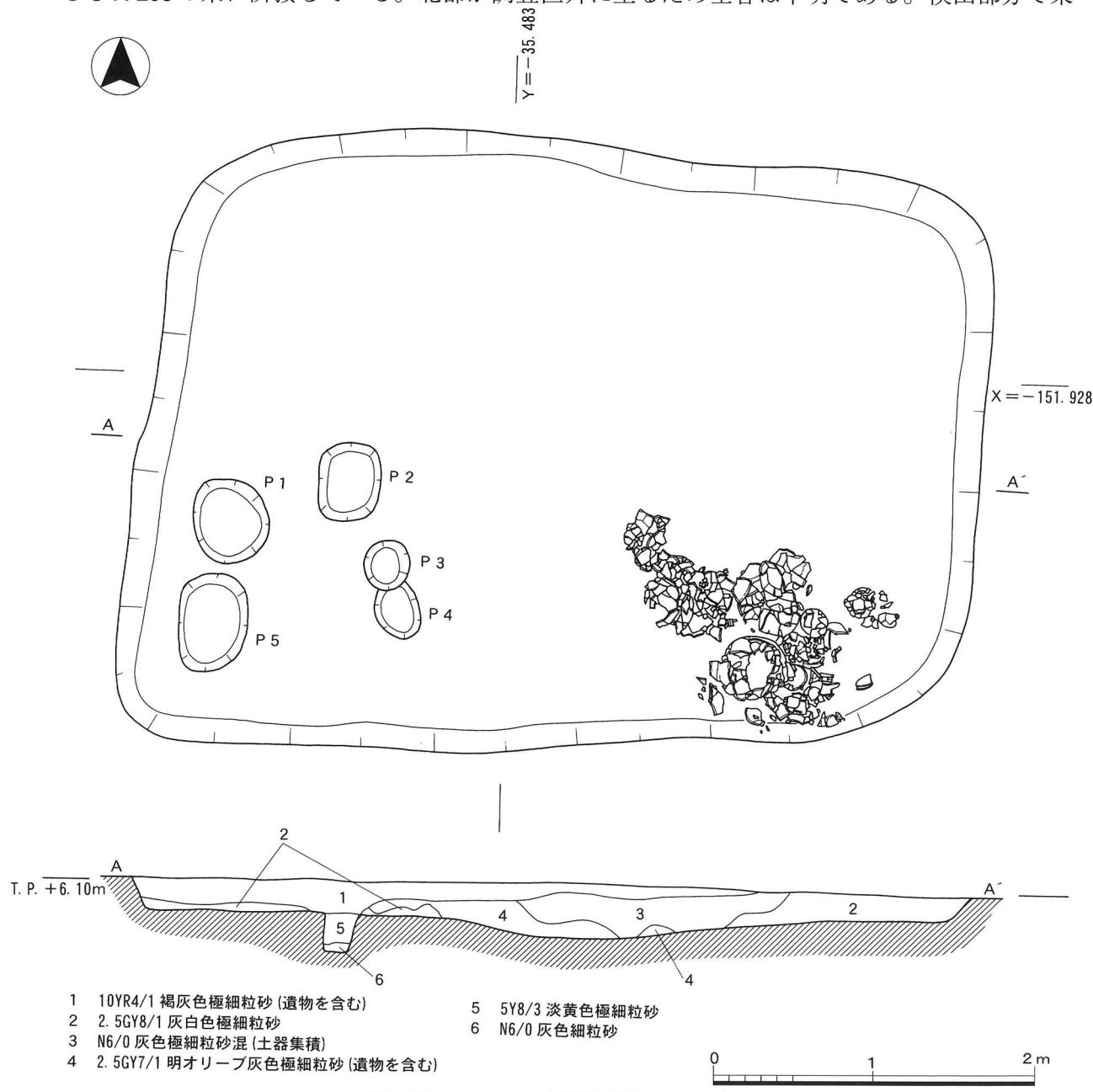
C区北部の7B地区で検出した。C S K 203の西肩を切っている。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西径1.0m、南北径0.62m、深さ0.09mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂である。遺物は出土していない。

C S K 203

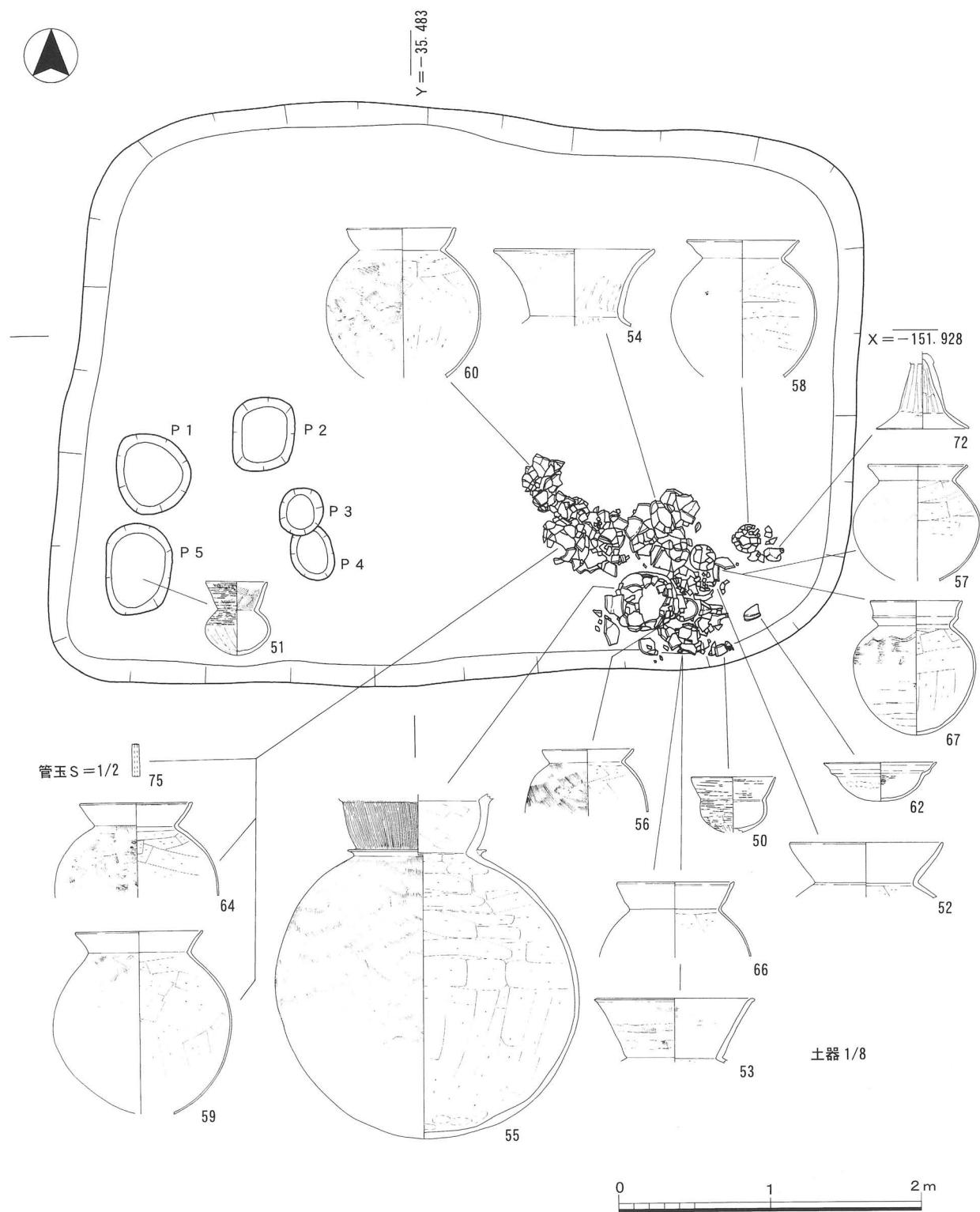
C区北部の7B地区で検出した。南北方向に溝状に伸びるもので、西部でC S K 202、南端でC S K 205に切られている。埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂である。遺物は古墳時代前期(布留式期)に比定される古式土師器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

C S K 204

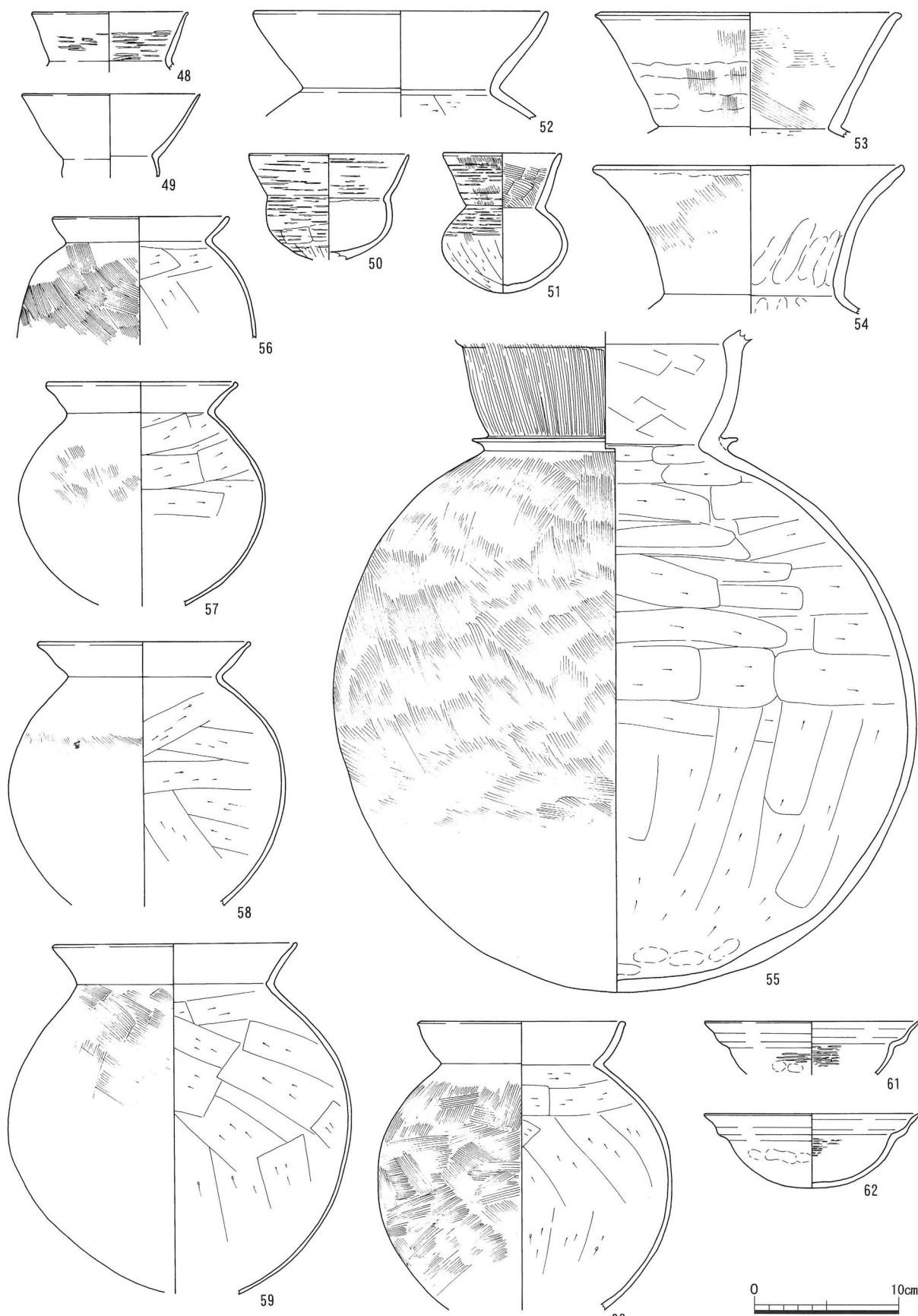
C S K 203の東に隣接している。北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東



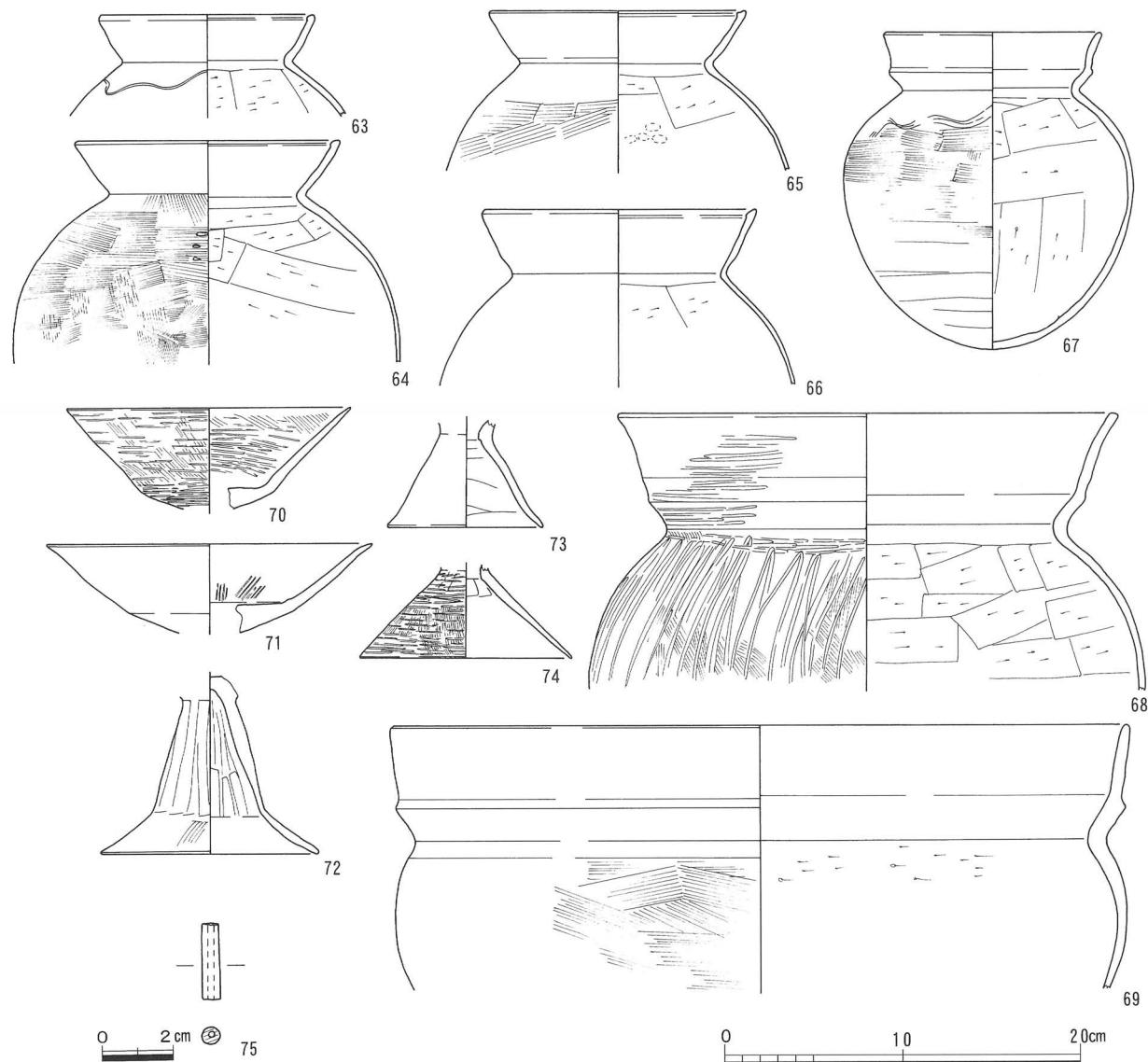
第19図 C S K 205平面面図(S=1/40)



第20図 C S K 205遺物出土状況 (S = 1/40)



第21図 C S K 205出土遺物実測図—1



第22図 CS K 205出土遺物実測図一2

西幅3.92m、南北幅0.84m、深さ0.14mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂である。遺物は出土していない。

CS K 205(第19~22図、図版一〇・一一・一八~二一)

C区北部の7・8B地区で検出した。北部でCS K 203を切っている。隅丸方形を呈するもので、東西幅5.27m、南北幅3.88m、深さ0.37mを測る。底面は西部がほぼ水平で南西部部分には小穴5個が存在するが、南東部分は深くなっている。この部分から古墳時代前期前半(布留式古相)の土類が集中して出土している。埋土は極細粒砂を主体とする4層からなる。28点(48~75)を図化した。48~50は小形丸底壺。3点共に精製品で、48・49が細片、50は1/3が残存している。

49が小形壺B₃、50が小形壺B₂にあたる。51は小形の直口壺(直口壺A₂)である。52は広口壺の口縁部の細片。53・54が大形直口壺(大形直口壺A)の口縁部細片である。55は口縁部を欠くが大形の複合口縁壺と推定される。頸部と体部の境に水平方向に張り出す凸帯が廻る。56~59は河内型庄内式甕の最終段階の形態で、体部外面の器面調整には布留式期以降に多用されるハケ調整を持つ布留式影響の庄内式甕(甕D)にあたる。60については、口縁部が内湾気味に伸びることや

口縁端部が小さく外折する特徴を持っており、その属性から布留傾向甕(甕E)に分類される。63～66は布留式甕(甕F₂)である。67は山陰系の甕(甕K)である。小形品で口径12.3cm、器高17.9cm、体部最大径16.3cmを測る。体部外面の肩部に櫛描波状文が施されている。61・62は精製品の二段屈曲鉢(鉢H₂)である。62がほぼ完形品で口径9.7cm、器高5.0cmを測る。68は山陰系の中形、69は大形の鉢である。68が復元口径28.2cm、69が復元口径41.5cmを測る。70～72は有稜高杯(高杯A₅)である。73・74はいわゆる鼓形器台である。74は精製品で、外面調整は、一次調整として縦方向のハケ調整の後、横方向の密なヘラミガキが施されている。75は緑色凝灰岩製の管玉である。完形品で、径0.5cm、長さ2.2cm、紐孔径0.2cmを測る。遺構の帰属時期は古墳時代前期前半の布留Ⅱ期である。

C S K 206

C区北東部の7C地区で検出した。円形を呈するもので東西径0.54m、南北径0.50m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂である。遺物は出土していない。

C S K 207

C区北東部の7C地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅0.54m、南北幅0.83m、深さ0.28mを測る。埋土は5Y8/3淡黄色シルトである。遺物は古墳時代前期(布留式期)の古式土師器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

C S K 208

C区北西部の7A地区で検出した。円形を呈するもので、西肩の一部をC S P 203に切られている。東西径1.56m、南北径1.65m、深さ0.29mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂である。遺物は古墳時代前期(布留式期)の古式土師器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

C S K 209

C区北東部の8B地区で検出した。溝状を呈するもので、東西幅1.75m、南北幅0.53m、深さ0.18mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色極細粒砂である。遺物は出土していない。

C S K 210

C区北東部の8C地区で検出した。C S D 201北部の西肩を切っている。円形状を呈するもので、東西径0.88m、南北径0.86m、深さ0.34mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色極細粒砂である。遺物は出土していない。

C S K 211

C区西部の9A地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.17m、南北幅0.51m、深さ0.08mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色極細粒砂である。遺物は古墳時代前期(布留式期)の古式土師器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

C S K 212

C区西部の10A地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するものであるが、ほぼ中央部をC S D 204に切られ、東部は攪乱を受けている。東西幅1.78m、南北幅1.10m、深さ0.33mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色シルトである。遺物は古墳時代前期(布留式期)の古式土師器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

C S K213(第23・24図、図版二一)

C区南西部の10A地区で検出した。橢円形を呈するもので、長径0.70m、短径0.52m、深さ0.13mを測る。埋土は炭を含む10YR4/1褐灰色極細粒砂である。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器の細片が少量出土している。1点(78)を図化した。78は大形複合口縁壺(複合口縁壺B₁)である。布留式古相に盛行する器種である。

C S K214(第24・25図、図版二・二一)

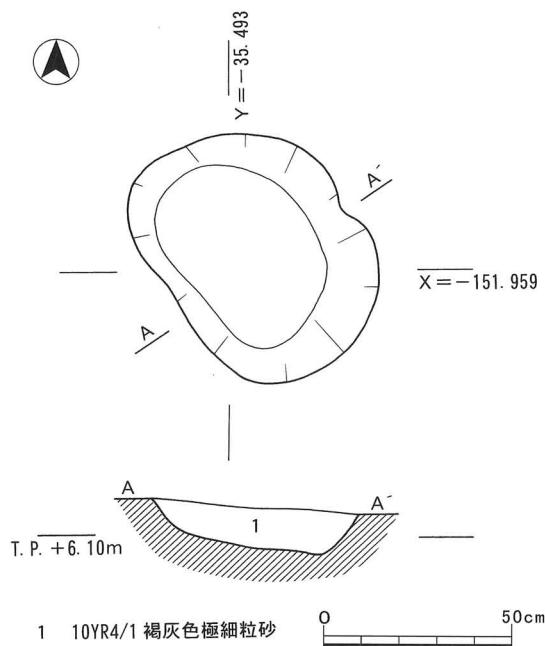
C区南西部の11A地区で検出した。南部でC S K215を切っているほか、C S D 214・215に切られている。検出部分で東西幅2.38m、南北幅0.91m、深さ0.14mを測る。埋土は2.5GY8/1灰白色極細粒砂である。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)の古式土師器が少量出土しているが細片化したものが大半で図化したものは布留式甕1点(82)のみである。82は布留式甕(甕F₃)の細片である。遺構の帰属時期は古墳時代前期後半の布留IV期である。

C S K215(第24・25図、図版一一・二一)

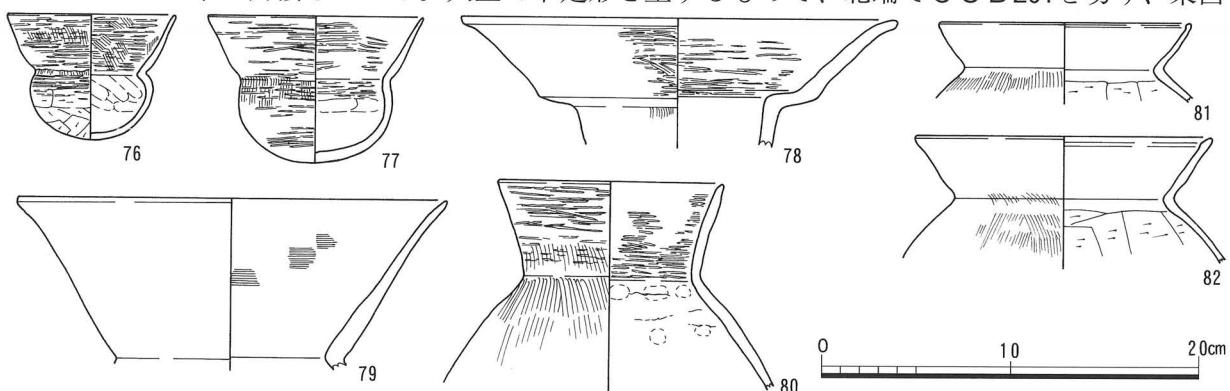
C S K214の南部に隣接している。大型の方形を呈するもので、北端がC S K214に切られるほか、北部では東西方向に伸びるC S D 216に切られている。東西幅3.70m、南北幅4.24m、深さ0.16mを測る。埋土は5層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器類が少量出土している。4点(77・79~81)を図化した。77は小形丸底壺(小形壺B₃)である。1/3が残存しており、復元口径11.4cm、器高7.8cm、体部最大径8.1cmを測る。79は大形直口壺(大形直口壺A)の口縁部である。復元口径22.8cmを測る。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。80は短頸壺(短頸壺A)で口縁部から体部上半が残存している。81は布留式甕(甕F₁)の口縁部細片。遺構の帰属時期は古墳時代前期前半の布留II期である。

C S K216(第26図、図版一一・二二)

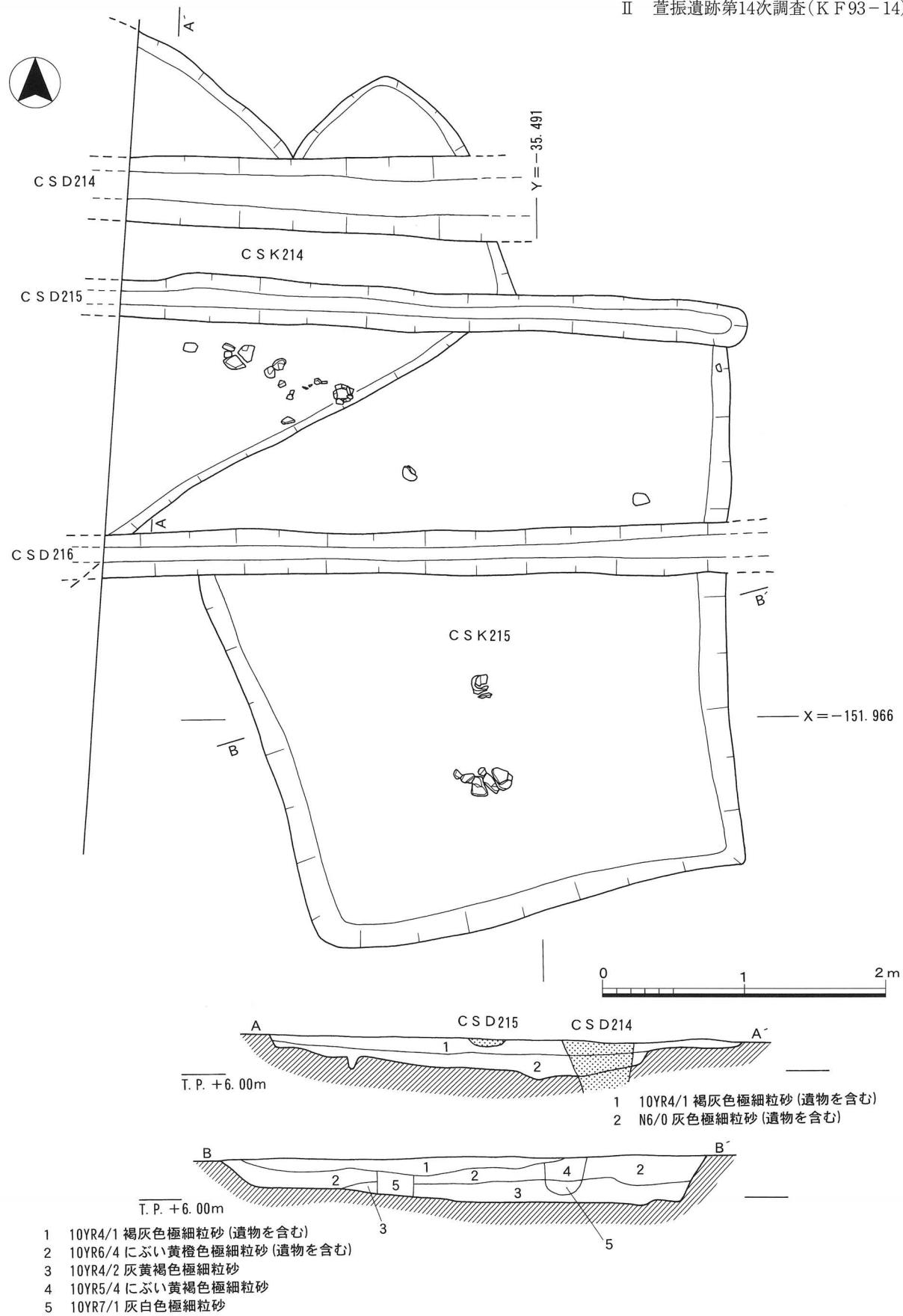
C S K215の東に隣接している。大型で不定形を呈するもので、北端でC S D 201を切り、東西



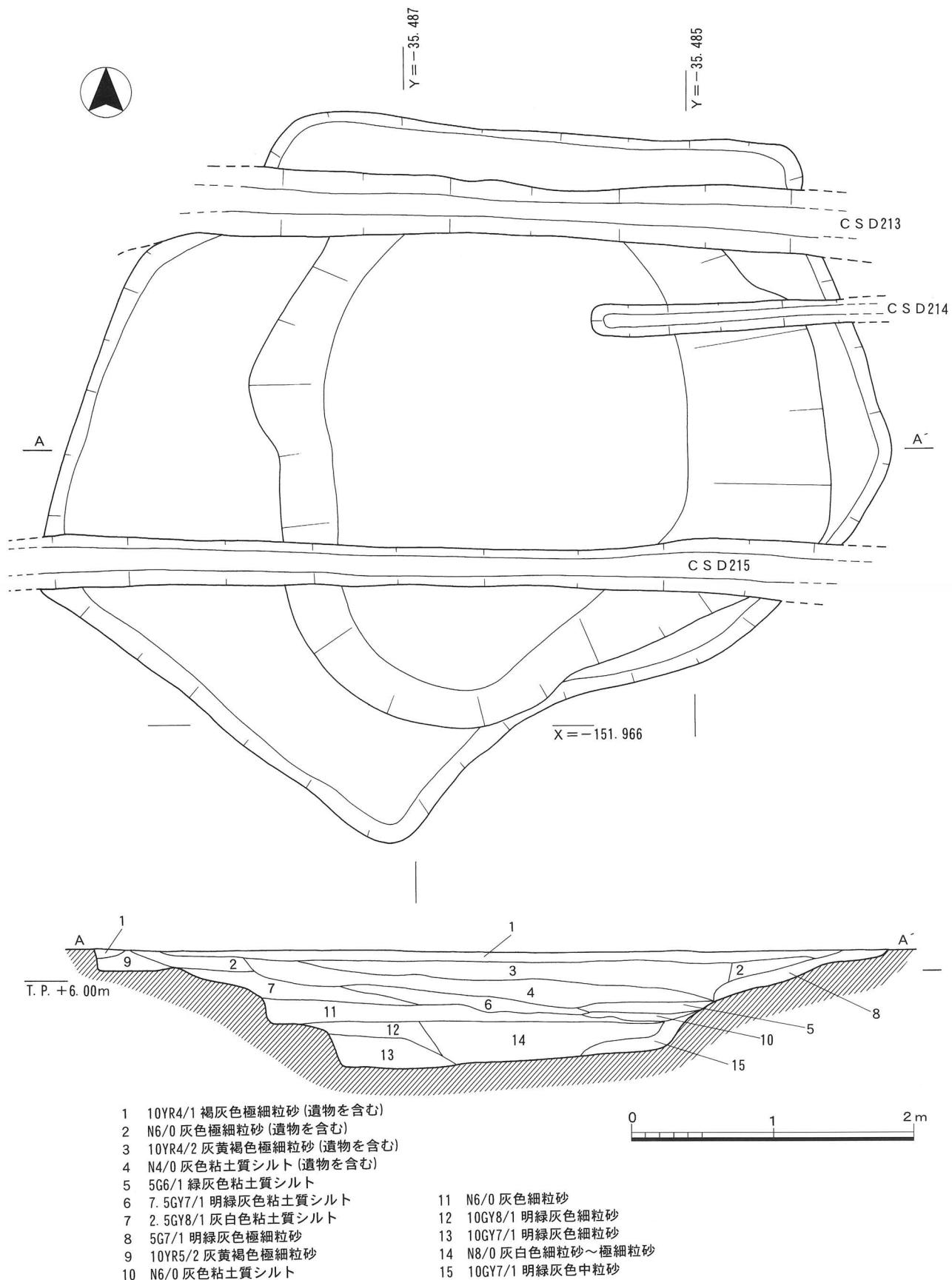
第23図 C S K213平断面図(S=1/20)



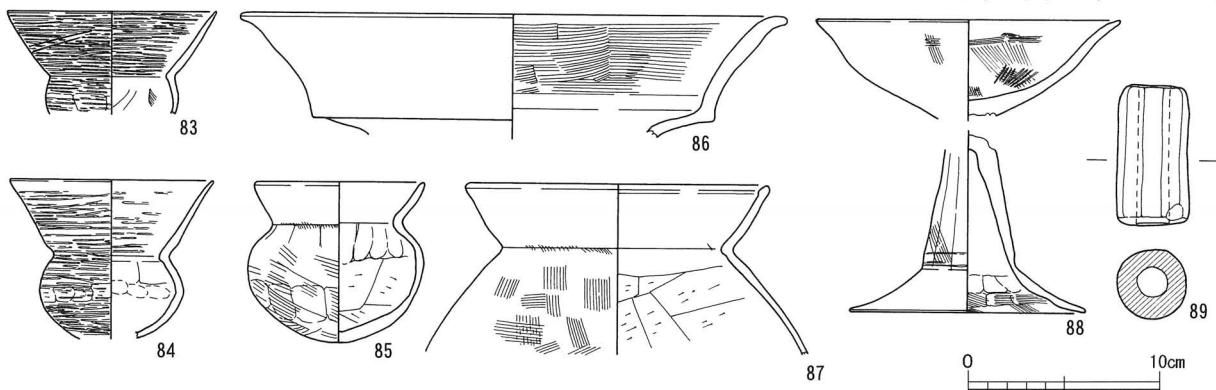
第24図 C S K213(78)、214(82)、215(77・79~81)、219(76)出土遺物実測図



第25図 CS K214、215断面図(S=1/40)



第26図 C S K216平面面図 (S = 1/40)



第27図 CS K216出土遺物実測図

方向に伸びるCS D214~216に切られている。二段の掘方を呈するもので、西部ではテラス状の部分を有し、中央部から東部にかけては摺鉢形を呈している。東西幅6.0m、南北幅5.24m、深さ0.84mを測る。埋土は15層から成る。遺物は1~4層を中心に古墳時代前期前半~中葉(布留式古~中相)の古式土師器が少量出土している。7点(83~89)を図化した。83~85は小形丸底壺である。83・84が小形壺B₃、85が粗製品で小形壺B₅にあたる。86は大形の複合口縁壺(複合口縁壺B₁)の口縁部片である。復元口径28.6cmを測る。色調や胎土からみて山陰地方からの搬入品と考えられる。87は布留式甕(甕F₃)。88は杯部の稜に丸味も持つ高杯A₆にあたる。89は管状土錘である。全長7.5cm、径3.8cm、紐径1.6cmを測る。時期幅のある遺物が出土しているが、85・88から遺構の廃絶時期は古墳時代前期中葉の布留Ⅲ期が推定される。

CS K217

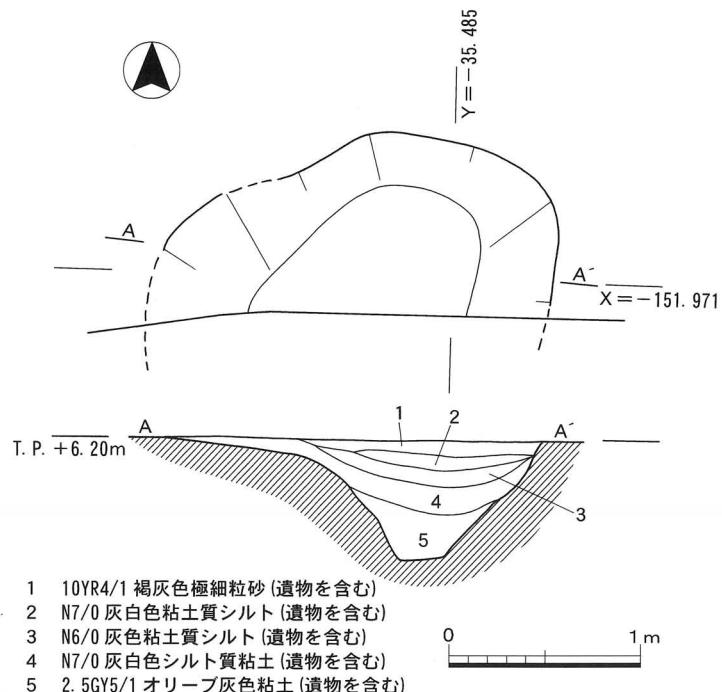
CS K215の南で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、長径0.19m、短径0.07m、深さ0.14mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂である。遺物は布留式甕の細片が極少量出土しているが図化し得たものは無い。

CS K218

C区南部の12B地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、長径0.68m、短径0.52m、深さ0.04mを測る。埋土は10BG5/1青灰色シルトである。遺物は出土していない。

CS K219(第28図、図版二一)

C区南部12B地区で検出した。南部がCS D219に切られている。検出部分で東西幅1.73m、南北幅0.80m、深さ0.64mを測る。埋土は5層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)を中心とする古式土師器が少量出土している。1点(76)を図化した。76は小形丸底壺である。



第28図 CS K219断面図(S=1/40)

口径が体部最大径を大きく凌駕するもので小形壺B₃に分類される。口径9cm、器高6.7cm、体部最大径6.5cmを測る。精製品で口縁部内外面および体部外面上位に横位の密なヘラミガキが施されている。古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に盛行する器種である。

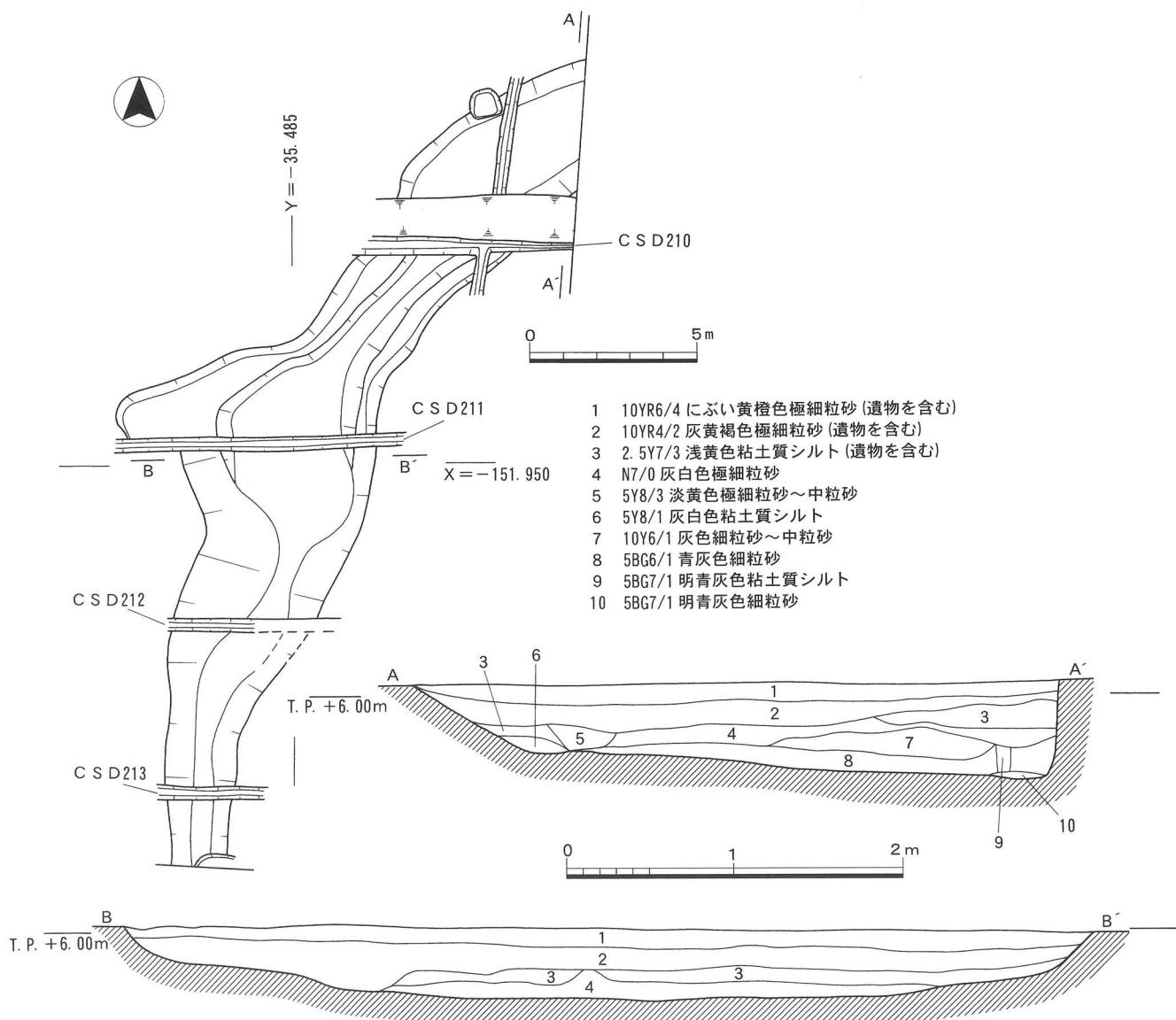
C S K 220

C区南東隅の11D地区で検出した。東部および南部が調査区外に至るため全容は不明である。埋土はN7/0灰白色極細粒砂である。遺物は古墳時代前期（布留式期）の古式土師器が少量出土しているが、図化し得たものは無い。

溝(C S D)

C S D 201(第29・30図、図版一二・二二・二三)

調査対象面とした第9層と異なった褐色系の砂質土の広がりが認められたため、この部分を0.1m前後掘り下げた結果、検出された遺構で、本来の遺構構築面は第10層上面と推定される。C区



第29図 C S D 201平面面図(平面S=1/200、断面S=1/40)

中央部の8C地区から11B地区にかけて南北方向に弓状に伸びるもので、南部では幅を減じており、南端はCSK 216に切られている。検出長27.0m、幅1.7~7.8m、深さ0.5mを測る。断面の形状は皿形である。埋土は10層から成る。遺物は1~3層から弥生時代後期後半に比定される土器類がコンテナ1箱程度出土しているが、細片化したものが大半で図化し得たものは弥生土器5点(90~94)である。

90・91は壺である。90は広口壺で口縁部は完存している。口径14cmを測る。色調は淡褐灰色。生駒西麓産である。91は小形の長頸壺。図上で完形に復元でき、口径8.1cm、器高10.6cm、体部最大径8.6cmを測る。色調は褐灰色。生駒西麓産である。92・93はV様式壺の細片である。体部外面が無文の92とタタキを行う93がある。色調は92が黒灰色、93が褐灰色で、共に生駒西麓産である。94は「ハ」の字を開く脚台が付く小形鉢である。完形品で口径11.8cm、器高7.0cm、脚部径4.3cmを測る。色調は灰白色。非生駒西麓産である。遺構の帰属時期は弥生時代後期後半である。

C S D 202

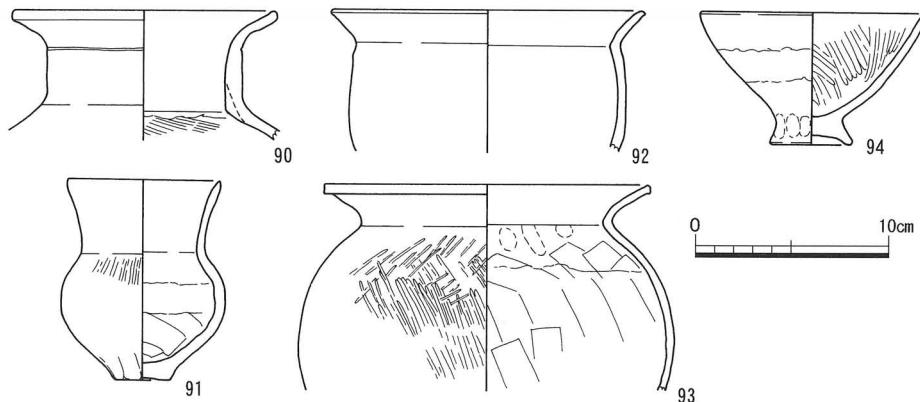
C区北西部の8B・C地区で検出した。「C」字形に屈曲するもので、北端は搅乱により削平を受けている。検出部分で長さ4.24m、幅0.76m、深さ0.11mを測る。埋土は2.5YR4/1褐灰色極細粒砂である。出土遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)を中心とした古式土師器が少量出土しているが、図化出来たものは無い。

C S D 203

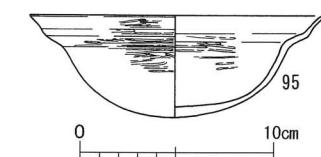
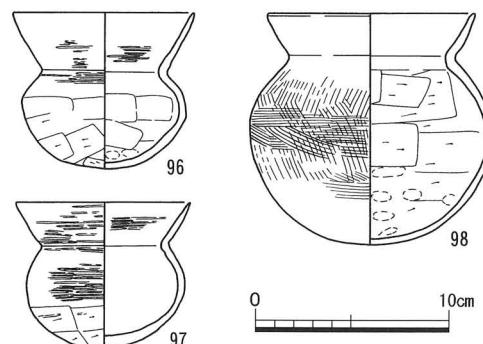
C S D 202の南に近接している。東西方向に直線的に伸び、西端で屈曲する「L」字状を呈する。東西長3.5m、南北長1.9m、幅0.9m、深さ0.12mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色極細粒砂である。遺物は出土していない。

C S D 204(第31図、図版二三)

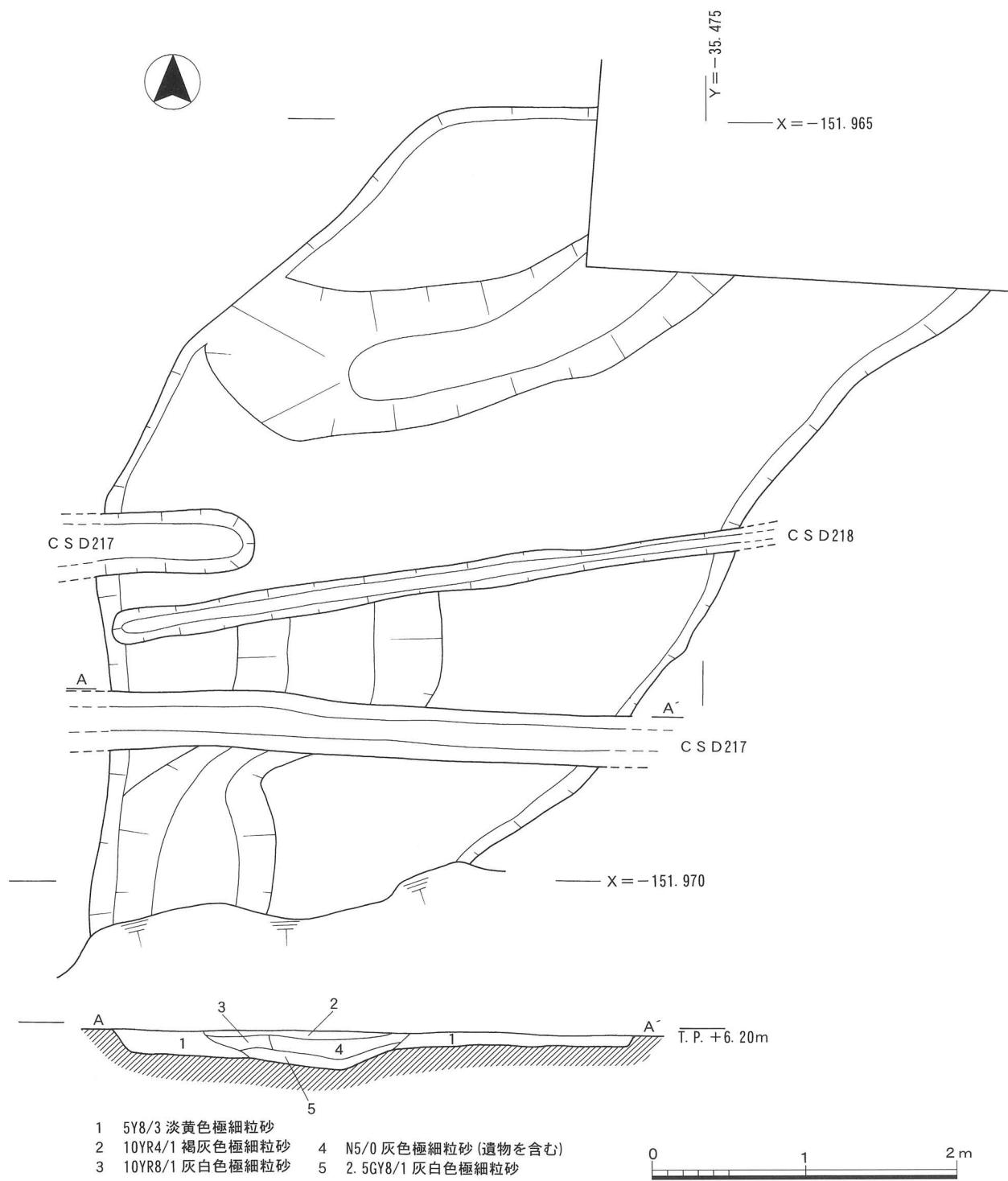
C区西部の9A地区から11B地区に直線的に伸びる。CSK 212を切る他、北端が搅乱、南端がC S D 214に切られている。検出長18.2m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。断面形状は半球形で、埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂の単一層である。溝底の標高値は南端が高く北端とは10cm程度の高低差がある。出土遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)から中期に比定される古式土師器・須恵器が少量出土している。1点(95)を図化



第30図 C S D 201出土遺物実測図

第31図 C S D 204出土遺物
実測図

第32図 C S D 205出土遺物実測図



第33図 C S D205平面面図 (S=1/40)

した。95は精製品の二段屈曲鉢(鉢H₂)である。1/2が残存しており、口径15.4cm、器高5.4cmを測る。古墳時代前半前半(布留式古相)に比定される。

C S D205(第22・23図、図版二三)

C区南東部の11・12C地区で検出した。北東-南西方向に伸びるもので、両端は調査区外に至るため不明である。検出部分では、一部にテラス状を呈する部分がある。検出長8.0m、幅3.3m、深さ0.24mを測る。埋土は5層から成る。出土遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)に比定され

る古式土師器が少量出土している。3点(96~98)を図化した。96~98は小形丸底壺である。96・97が小形壺B₄、98が小形壺B₁-IIにあたる。96・97は完形品で、96が口径9.7cm、器高8.3cm、97が口径9.2cm、器高7.7cmを測る。口縁部内外面から体部外面に横位のヘラミガキが施されている。98は図上で復元が可能である。口径10.8cm、器高12.2cm、体部最大径12.6cmを測る。体部外面はハケ調整が多用されている。遺構の帰属時期は古墳時代前期後半の布留IV期が推定される。

C S D 206~223

東西方向に伸びる小溝群である。規模は長さ3.00~33.10m、幅0.28~1.75m、深さ0.06~0.27mを測る。断面形状は「U」字形を呈する。埋土は極細粒砂を主体とする単一層である。第4層で水田作土層を確認していることから、水田耕作に関連した犁溝の痕跡と推定される。遺物はC S D 206・207・214・215・220・222から古墳時代前期から中期の古式土師器、土師器、須恵器、石材等の細片が少量出土している。

第2表 C区第2調査面 C S D 206~223法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
C S D 206	7 A	3.00	0.34	0.08	N7/0灰白色極細粒砂	古式土師器・須恵器・石材
C S D 207	7 A~7 C	17.80	0.36	0.06	〃	古式土師器
C S D 208	〃	17.80	0.60	0.12	〃	
C S D 209	8 A~8 C	19.90	0.46	0.04	〃	
C S D 210	9 A~9 C	15.74	0.48	0.10	7.5GY8/1灰白色極細粒砂	
C S D 211	〃	15.31	0.42	0.08	N7/0灰白色極細粒砂	
C S D 212	10A~10C	15.75	0.53	0.14	5Y7/2灰白色極細粒砂	
C S D 213	10·11A B	8.63	0.40	0.06	2.5GY8/1灰白色極細粒砂	
C S D 214	11A~11C	17.36	0.87	0.14	N7/0灰白色極細粒砂	古式土師器
C S D 215	〃	10.26	0.28	0.07	〃	古式土師器・須恵器
C S D 216	〃	18.45	0.46	0.12	〃	
C S D 217	〃	22.44	1.60	0.27	〃	
C S D 218	11C	5.27	0.20	0.04	〃	
C S D 219	12A~11·12B	10.50	0.38	0.14	〃	
C S D 220	7·8 A	13.37	0.42	0.09	〃	古式土師器・須恵器
C S D 221	7·8 A B	11.17	1.75	0.15	10YR4/1褐色極細粒砂	
C S D 222	7 C~10B	33.10	0.53	0.10	N7/0灰白色極細粒砂	須恵器
C S D 223	11B C~12C	10.20	0.40	0.16	〃	

小穴・柱穴(C S P)

C S P 201~229

C S B 201を構成する柱穴を含めて、総数で29個(C S P 201~229)を検出した。調査地北部を中心に分布しており、特にC S B 201付近が密集している。平面形状では円形・橢円形・不定形がある。規模は幅0.22~1.03m、深さ0.05~0.46mを測るが柱根を検出したものはない。そのうち、遺物が出土したものは、S P 210・211・216・223・224・226・229である。各小穴の法量等の詳細は第3表に示した。

第3表 C区第2調査面 小穴・柱穴(S P)法量表(単位m)

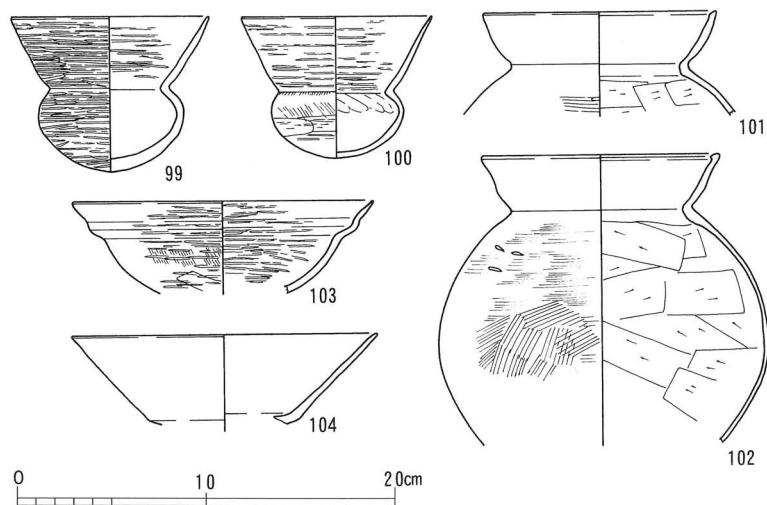
遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	備考・出土遺物
C S P 201	7 A	円形	0.22	0.22	0.08	N7/0灰白色極細粒砂	
C S P 202	〃	不定形	0.50	0.34	0.06	10YR4/1褐灰色極細粒砂	古式土師器
C S P 203	〃	円形	0.40	0.32	0.05	N7/0灰白色極細粒砂	
C S P 204	〃	楕円形	0.46	0.30	0.07	10YR4/1褐灰色極細粒砂	
C S P 205	8 A	円形	0.30	0.27	0.09	N6/0灰色極細粒砂	
C S P 206	〃	楕円形	0.32	0.26	0.16	〃	
C S P 207	〃	円形	0.36	0.35	0.26	N7/0灰白色極細粒砂	
C S P 208	〃	〃	0.43	0.41	0.46	10YR7/4にぶい黄橙色極細粒砂	
C S P 209	〃	〃	0.26	0.25	0.10	〃	
C S P 210	7 B	不定形	1.03	0.16	0.05	〃	古式土師器(布留式甕)
C S P 211	8 B	円形	0.53	0.51	0.05	10YR4/1褐灰色極細粒砂	古式土師器(布留式甕)
C S P 212	〃	楕円形	0.42	0.31	0.08	〃	
C S P 213	〃	不定形	0.54	0.46	0.15	N7/0灰白色極細粒砂	
C S P 214	8 A	円形	0.40	0.36	0.10	10YR4/1褐灰色極細粒砂	
C S P 215	8 B	〃	0.36	0.32	0.08	〃	C S B 201
C S P 216	〃	〃	0.37	0.34	0.08	〃	古式土師器(布留式甕・壺)
C S P 217	〃	〃	0.57	0.50	0.23	〃	C S B 201
C S P 218	〃	〃	0.54	0.52	0.16	〃	C S B 201
C S P 219	〃	〃	0.30	0.28	0.06	〃	C S B 201
C S P 220	〃	〃	0.41	0.32	0.14	〃	C S B 201
C S P 221	〃	〃	0.32	0.32	0.03	〃	C S B 201
C S P 222	〃	楕円形	0.36	0.27	0.18	〃	C S B 201
C S P 223	〃	円形	0.55	0.51	0.39	〃	古式土師器(布留式甕)
C S P 224	〃	〃	0.28	0.25	0.07	〃	C S B 201 古式土師器(布留式甕)
C S P 225	〃	〃	0.58	0.48	0.16	〃	
C S P 226	〃	〃	0.47	0.05	0.14	〃	古式土師器(布留式甕)
C S P 227	〃	〃	0.37	0.37	0.10	〃	
C S P 228	〃	〃	0.28	0.26	0.06	〃	
C S P 229	10A	〃	0.49	0.48	0.13	〃	古式土師器(布留式甕・壺・鉢)

D区-第2調査面(第6図、図版一二)

土坑(D SK)

D SK 201(第34・35図、図版二三・二四)

D区東部の10D地区で検出した。西肩を検出したのみで大半は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.6m、南北幅3.68m、深さ0.3mを測る。埋土は粘質シルトないしは粘土を主とする3層が遺構の形状に沿って堆積しており、遺物



第34図 D SK 201出土遺物実測図

を包含する2層には炭が少量含まれている。

遺物は2層から古墳時代前期中葉（布留式中相）に比定される古式土師器が数多く出土している。6点(99~104)を図化した。99・100は精製品の小形丸底壺である。2点共に口径が体部最大径を大きく凌駕するもので小形壺B₄にあたる。101・102は布留式甕（甕F₂）にあたる。103は精製品で二段に口縁部が屈曲する小形鉢（鉢H₂）である。104は有稜高杯（高杯A₄）の脚部である。古墳時代前期中葉の布留Ⅲ期のものである。

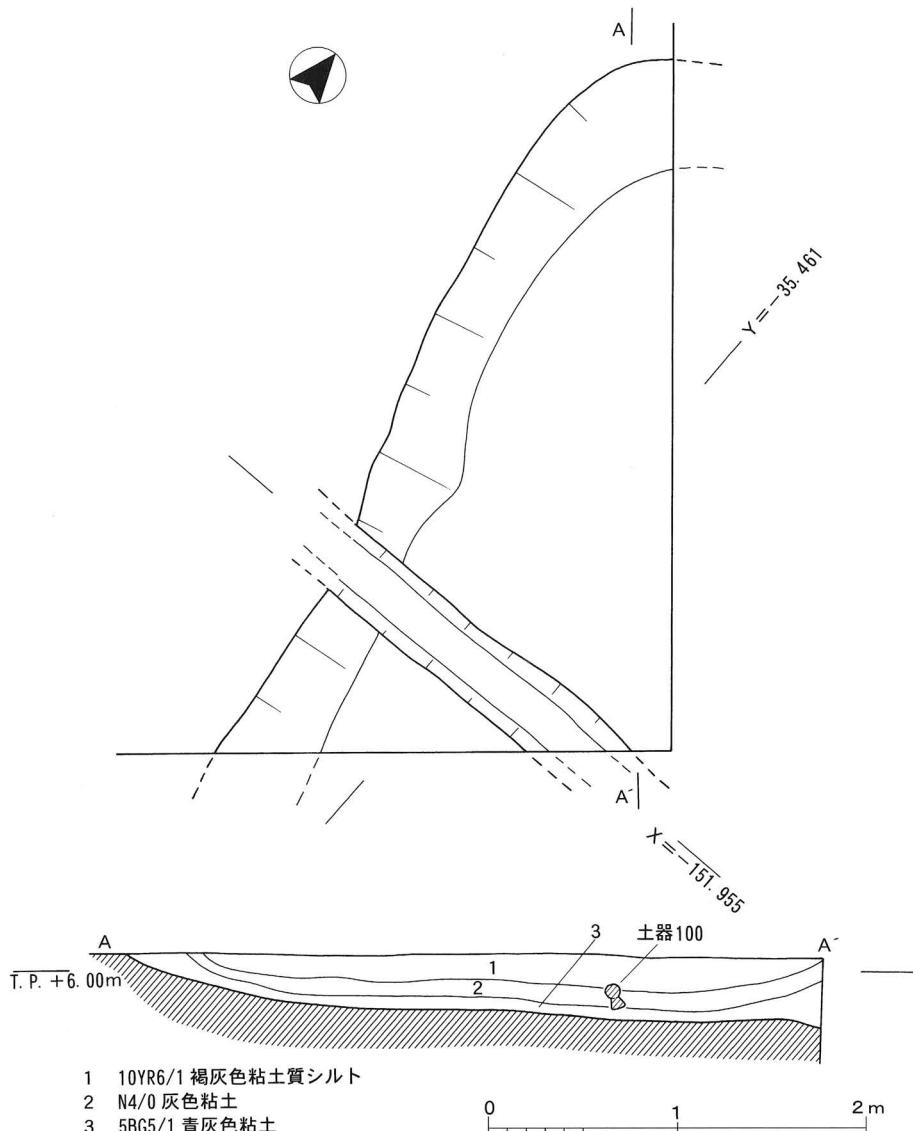
D SK 202

D区東部の10D地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅2.1m、南北幅4.4m、深さ0.28mを測る。断面形状は浅い皿状で底部は水平である。埋土は2層がほぼ水平に堆積しており、上層の2.5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂層の最下部には炭が含まれていた。遺物は古墳時代前期（布留式期）の古式土師器が少量出土しているが、大半が細片で図化出来たものはない。

溝(D SD)

D SD 201

D区南部の10・11D地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長1.8m、幅0.35m、深さ0.1mを測る。埋土はN7/0灰白色粘質シルトの単一層である。遺物は出土していない。B SD 201と同一の溝である。



第35図 D SK 201平断面図(S=1/40)

D S D 202

D区中央部の10C D地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長11.8m、幅0.4m、深さ0.08~0.2mを測る。B S D 202およびC S D 212と同一の溝と推定される。埋土はN7/0灰白色粘質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

D S D 203

D区北部の9 D地区で検出した。東西方向伸びるもので、検出長2.1m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土はN7/0灰白色粘質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

小穴(D S P)

D S P 201

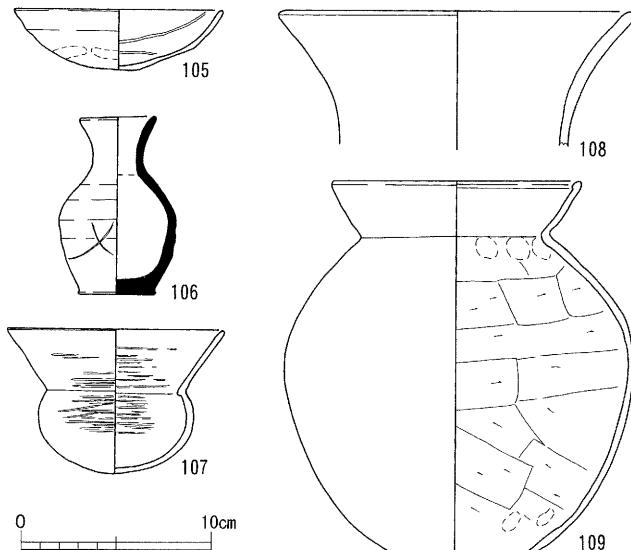
D区北部の10 D地区で検出した。円形を呈するもので、東西径0.45m、南北径0.5m、深さ0.25mを測る。埋土は灰白色粘質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

D S P 202

D S P 201の東側に近接している。円形を呈するもので、東西径0.25m、南北径0.25m、深さ0.15mを測る。埋土はD S P 201と同様である。遺物は出土していない。

3) 遺構に伴わない出土遺物 (第36図、図版二四)

第4層・第8 a層・第8 b層が遺物を包含する地層である。第4層からは鎌倉時代から室町時代前期、第8 a層からは古墳時代前期・後期・平安時代前期から後期、第8 b層からは古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)の古式土師器、土師器、須恵器、瓦器等の遺物が出土しているが細片化した遺物が大半を占めている。5点(105~109)を図化した。105は和泉型瓦器碗である。浅い椀形の体部に形骸化した、貼り付け高台が付く。口径11.0cm、器高3.3cm、高台径2.2cmを測る。色調は淡灰色である。尾上編年のIV-3期(13世紀末~14世紀初頭)に比定される。A区の13 A地区第4層出土。106は須恵器小形壺である。



第36図 第4層(105)、第8 a層(106)、第8 b層(107~109)出土遺物実測図

ほぼ完形品で口径8.0cm、器高9.4cm、底部径4.1cmを測る。体部外面にヘラ状工具による「×」記号が記されている。底部は水平高台で裏面に糸切り痕が認められる。色調は淡灰色。平安時代前期の9世紀中葉から後半のものか。A区の12 D地区8 a層出土。107~109はD区の10 C地区8 b層出土。107は小形丸底壺(小形壺B₃)。口径11.4cm、器高7.7cm、体部最大径8.1cmを測る。108は大形直口壺(大形直口壺A)の口縁部である。口径18.9cmを測る。109は布留式壺(壺F₂)である。古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

参考文献

- ・金谷克己 1962「河内八尾発見の子持勾玉」『若木考古 第62号』
- ・米田敏幸 1981「古墳時代前期の土器について」『八尾南遺跡』八尾市史編さん室
- ・棚橋利光 1982「八尾の条里制」『八尾市紀要 第6号』八尾市史編さん室
- ・尾上 実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会(和泉型瓦器椀の型式に使用)
- ・寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集 檜原考古学研究所
- ・森島康雄1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会(和泉型瓦器椀の実年代に使用)
- ・原田昌則 1993「第5章 まとめ 3)中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37
- ・杉本厚典 2003「河内における布留式期の細分と各地の併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代』(財)大阪府文化財センター
- ・森岡秀人・西村 歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター

第4表 既往編年案との対応

暦年代	270			300			350			400								
古墳時代前期	前半 中葉						後半											
土器様式	布留式																	
様式区分	古相前半			古相後半			中相		新相									
原田1998	布留Ⅰ期			布留Ⅱ期			布留Ⅲ期		布留Ⅳ期			布留Ⅴ期						
杉本2006	25期	26期	27期	28期	29期		30期	31期	32期	33期	34期							
米田1991	庄内式期Ⅳ			庄内式期Ⅴ = 布留式期Ⅰ			布留式期Ⅱ		布留式期Ⅲ		布留式期Ⅳ							
西村2006	古段階			中段階			新段階											
寺沢1986・2002	布留0式(新)			布留1式			布留2式		布留3式		布留4式(古)	布留4式(新)						
標識資料	中田 1-39 土坑2		萱振 S E 03		朝集殿下 層溝		小若江北				船橋0 I							

第3章　まとめ

今回の調査では、2面(第1調査面・第2調査面)にわたる調査を実施した。その結果、弥生時代後期、古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)、平安時代後期、鎌倉時代、江戸時代に比定される遺構・遺物を検出した。以下、時期毎に概観する。

弥生時代後期

この時期の遺構は、C区の第2調査面での溝1条(C S D201)が検出されている。C S D201については、第2調査面の調査対象面とした第9層と異なった褐色系の砂質土の広がりが認められたため、この部分を0.1m前後掘り下げた結果、検出されたもので本来の遺構構築面は第10層上面と推定される。検出部分では弓状に伸びるが、下層確認調査ではさらに南部に蛇行して伸びることが確認されており、周辺に当該期の居住域の存在が示唆される。出土遺物から後期後半に比定されるもので、周辺の調査では調査地の北西約200m地点の第5次調査(K F 87-5)の第1調査で遺物が検出されている程度で、本調査地の検出例が貴重な資料となろう。

古墳時代前期前半から中葉(布留式古相から中相)

この時期の遺構は、B区を除く各調査区の第2面で検出されている。居住域を構成する遺構を中心に、布留式古相から中相にかけて継続して営まれており、北接する第12次調査(K F 92-12)で検出された当該期の居住域を含めて、長期に亘って比較的安定した集落の推移が想定される。

布留式古相の居住域は古相後半の布留Ⅱ期に成立したもので、A区のA S K 202、C区のC S B 201、C S E 201、C S K 205・213・214・219の他、第12次調査で検出したS B 301、S I 301、S E 301・302等を含めて東西方向に約100m以上に亘って展開している。C区北部を中心に遺構の構築軸を同じくする掘立柱建物(C S B 201)、土坑(C S K 201・205)、溝(C S D 221)等の遺構が集中する箇所があり、この部分が居住域の中核を成すものと考えられる。

布留式古相の居住域としては、当調査地の北方約220m地点の緑ヶ丘二丁目で昭和57年に大阪府教育委員会が行った府営住宅工事に伴う発掘調査で検出されている。後に、中河内地域における布留式古段階の基準土器資料が出土した井戸(S E 03)をはじめとする遺構を検出した居住域で、布留式古相前半・後半の布留Ⅰ・Ⅱ期に存続している。従って、布留式古相後半の布留Ⅱ期においては、小阪合分流路の右岸一帯の南北約300mに亘って居住域の広がりが想定される。

布留式中相の布留Ⅲ期の遺構は、C区東部からD区の一部で検出されている程度である。北接する第12次調査(K F 92-12)の調査成果においても同様の結果が得られており、前代に比して遺構の減少傾向が認められる。周辺における布留式中相(布留Ⅲ期)の居住域は、小阪合分流路の右岸においては本調査地および北接する第12次調査(K F 91-12)、左岸においては第15次調査(K F 94-15)の2箇所がある。

平安時代後期

この時期の遺構は、A～D区の第2調査面で検出されている。主な検出遺構は溝で、31条を検出している。南北方向に伸びるC S D 222・223、B S D 203以外は全て東西方向に直線的に伸びるもので、幅0.2～0.5mを測る。形状からみて農耕に関連した犁溝と考えられ、当該期においては、水田を主とする生産域が広がっていたようである。

鎌倉時代

A～D区の第1調査面で、水田を主とする生産域に関連した遺構が検出されている。検出された遺構には、小溝およびA・B区の東端で検出された自然河川(A N R 101、B N R 101)がある。溝遺構はB区を除いた各調査区で検出されている。第2調査面で検出された平安時代後期の溝遺構と同様、大半が東西方向に直線的に伸びるもので、耕作地内での土地利用の一端が窺われる。溝幅が0.3～0.5mを測るものと2m前後のものがあり、前者は犁溝で後者については、耕作地を区画する道路の役割を果たしたものと推定される。自然河川はA区の東端ならびにB区の北東部で検出されている。ほぼ南北方向に伸びるもので、B区では西岸の堤が検出されている。河川内の堆積層が細粒砂から粗粒砂で充填されていることから、比較的流勢の強い河川であったことが推定される。この自然河川の流路位置は、推定される若江郡条里(若江北条)の六条(里名不明)の九ノ坪・十ノ坪の東側を画する部分にあたり、若江郡条里の施行時期を推定するうえでも貴重である。

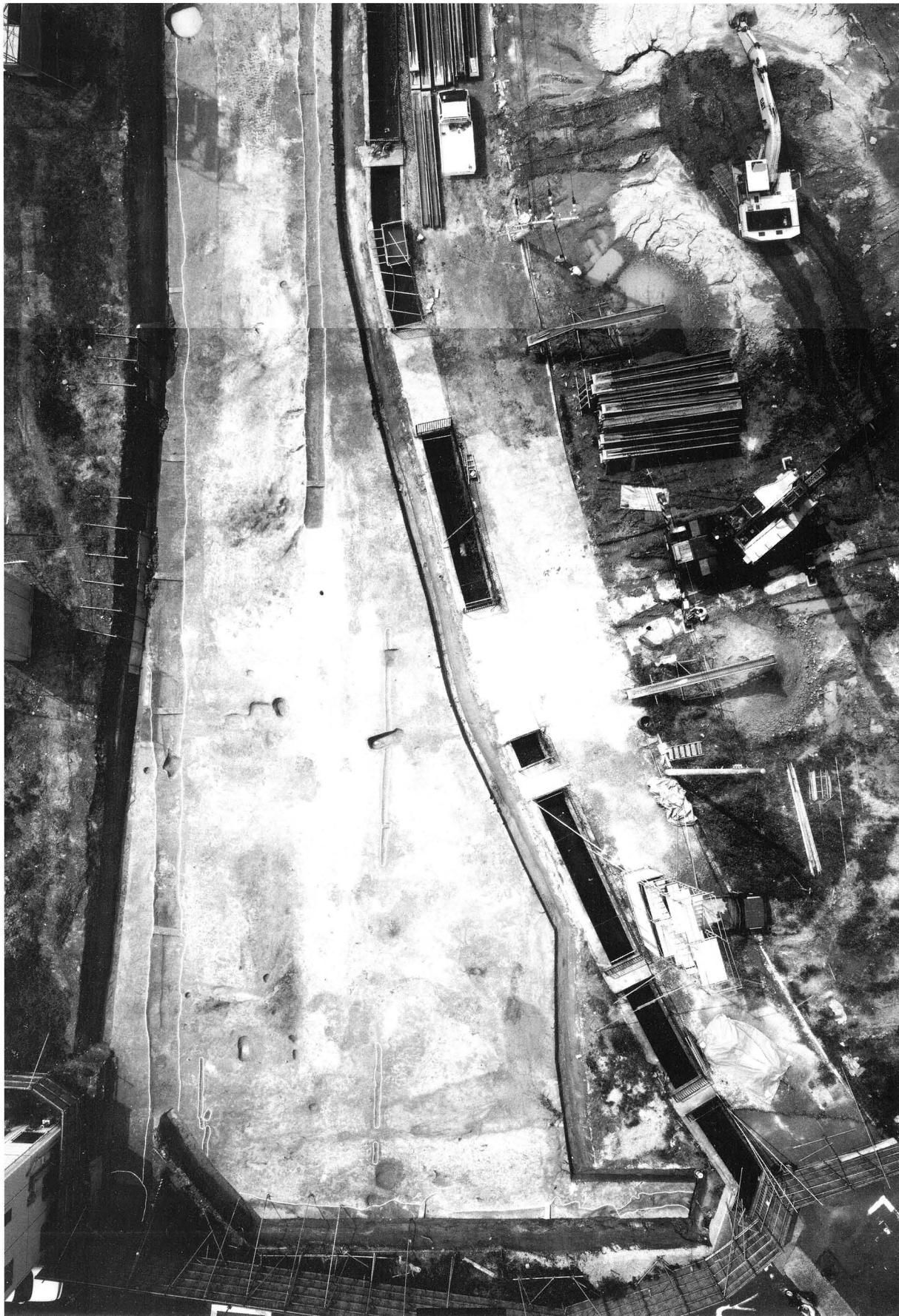
江戸時代

A区の南西隅で井戸1基(A S E 101)が検出されている。第2層上面を構築面とするもので、農耕用の井戸と推定される。

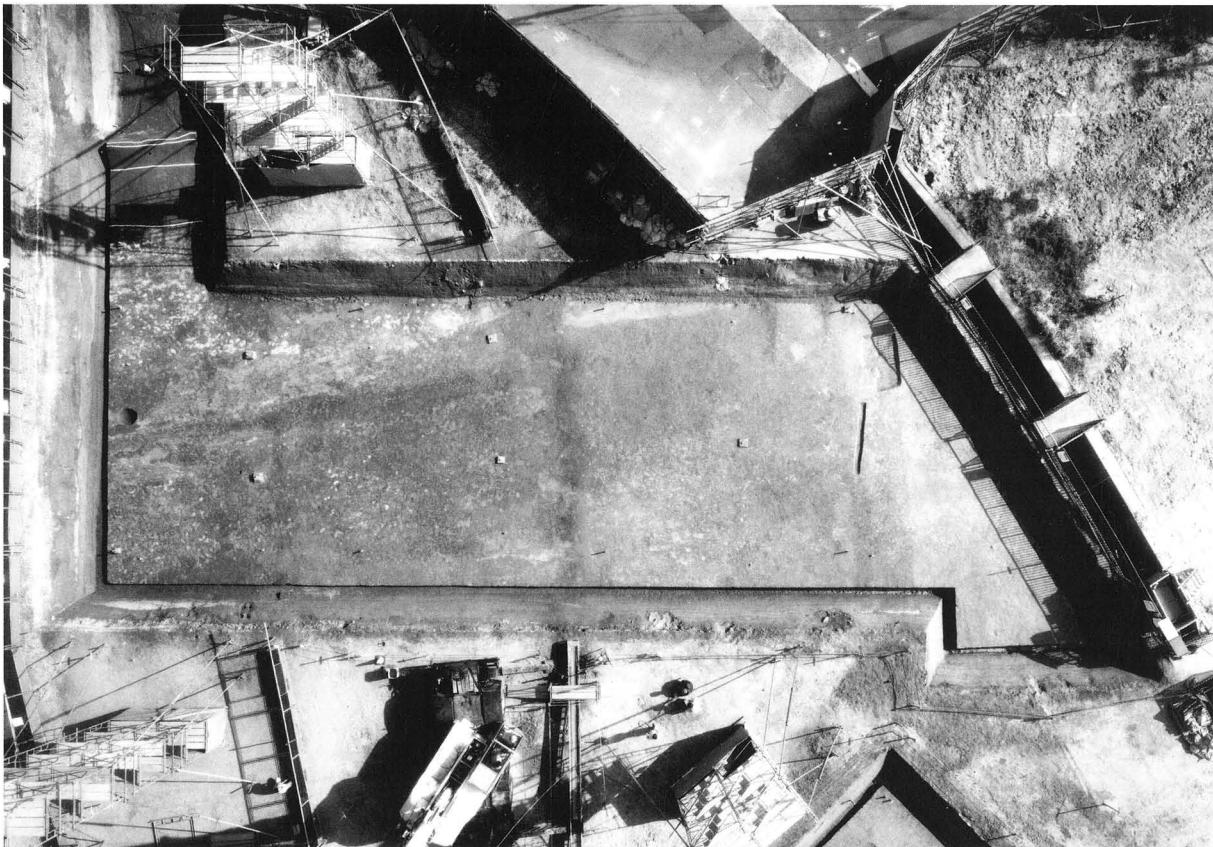
参考文献

- ・大野 薫 1983『萱振遺跡発掘調査概要・I－八尾市緑ヶ丘2丁目所在－』大阪府教育委員会
- ・西村公助 1993「V 萱振遺跡(第5次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1996「VI 萱振遺跡(第15次調査)」『萱振遺跡 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告52』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・松田順一郎 2001「河内平野沖積平野南部における完新世後半の旧大和川分流路発達と人間活動」『環境と人間社会』埋蔵文化財研究会

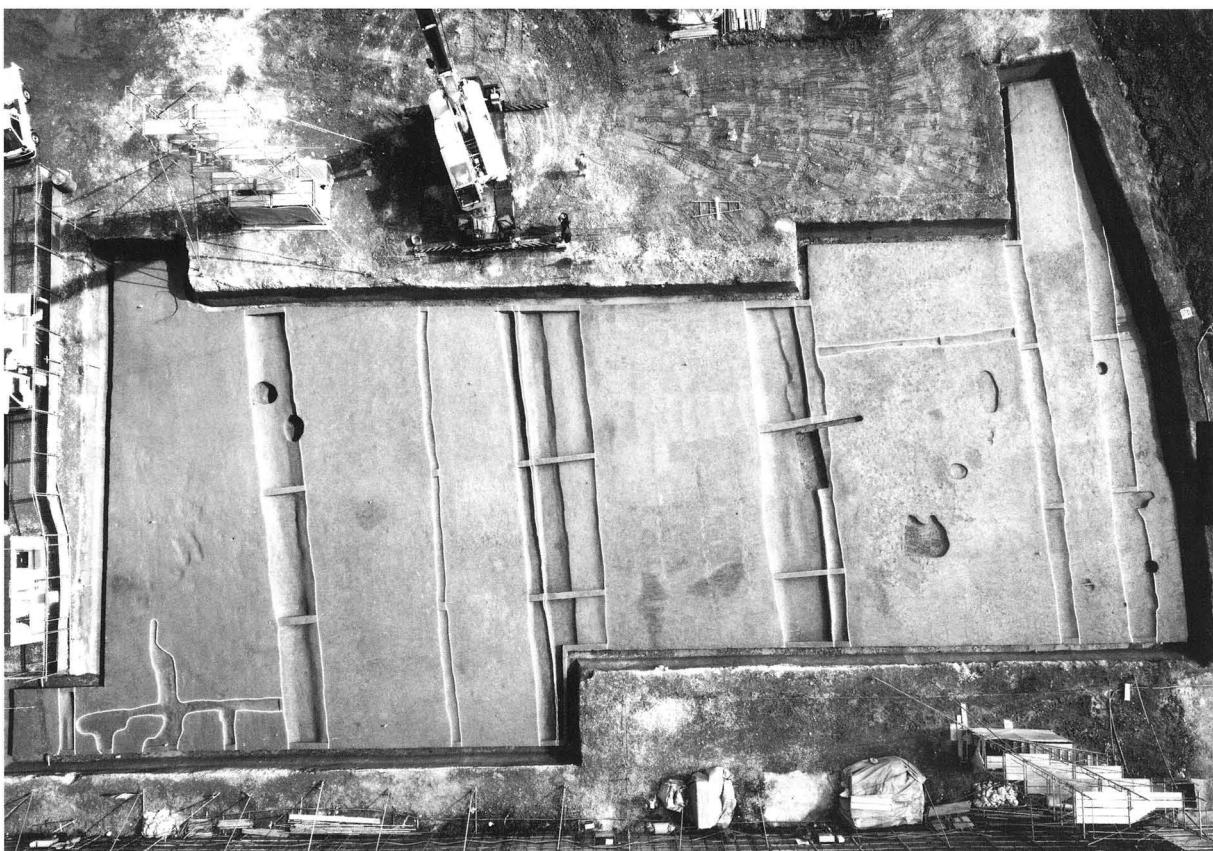
図 版



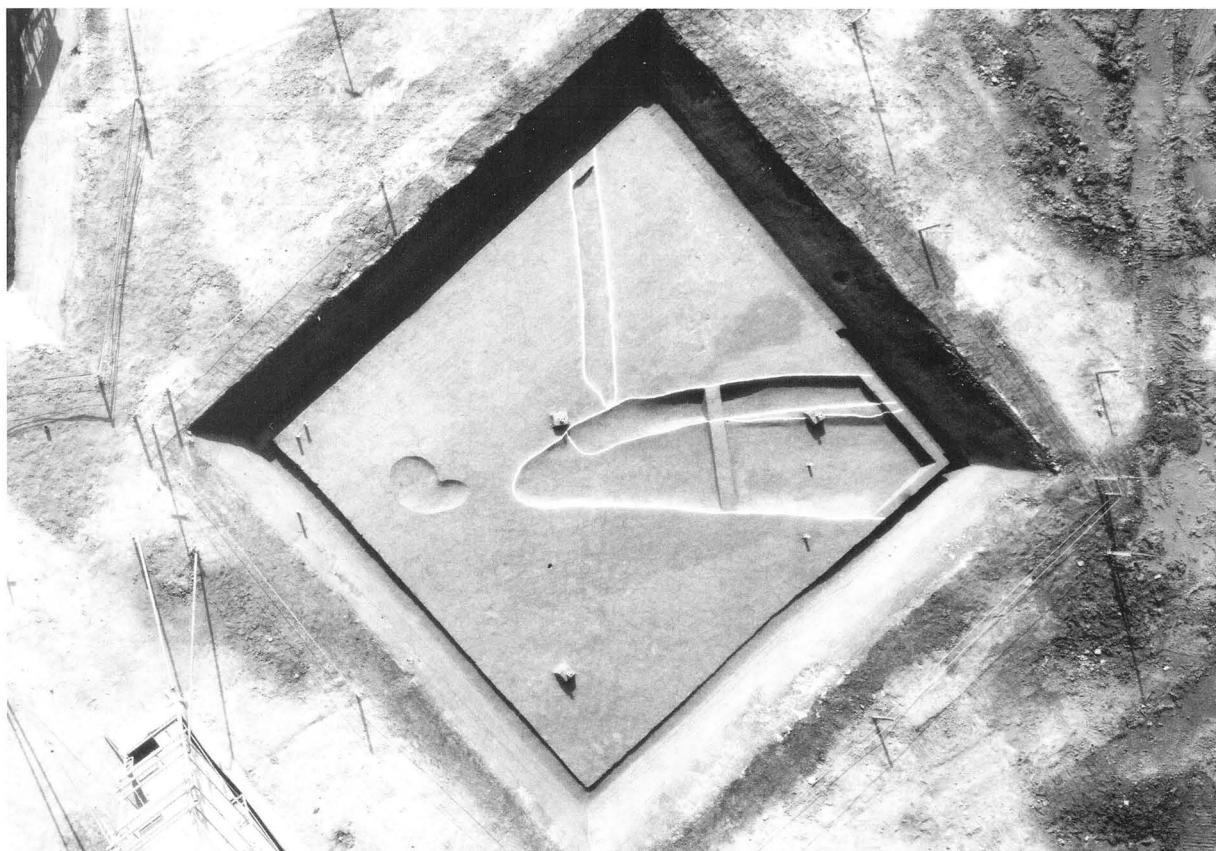
A区第1調査面全景(上が西)



B区第1調査面全景(上が東)

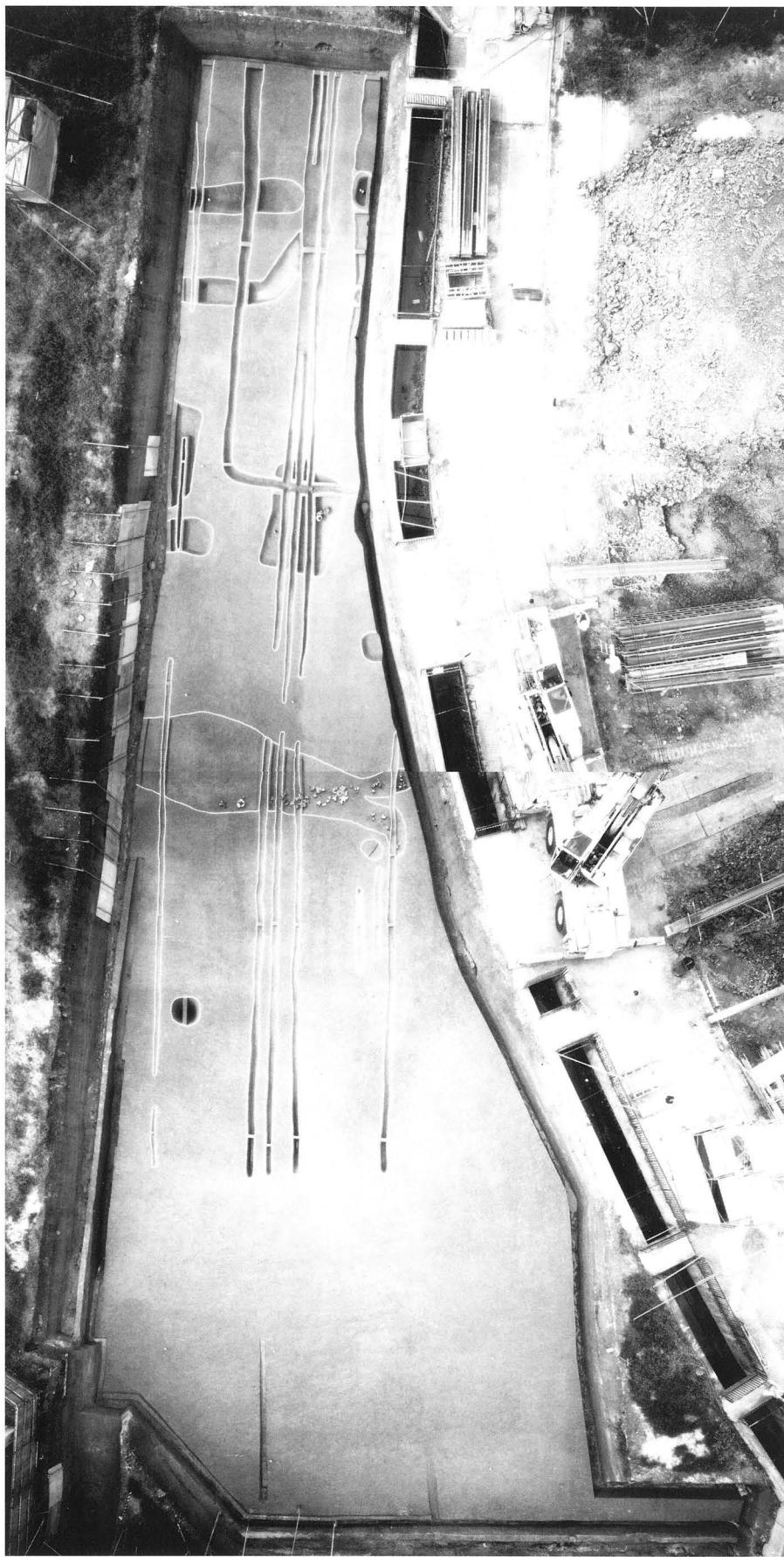


C区第1調査面全景(上が東)

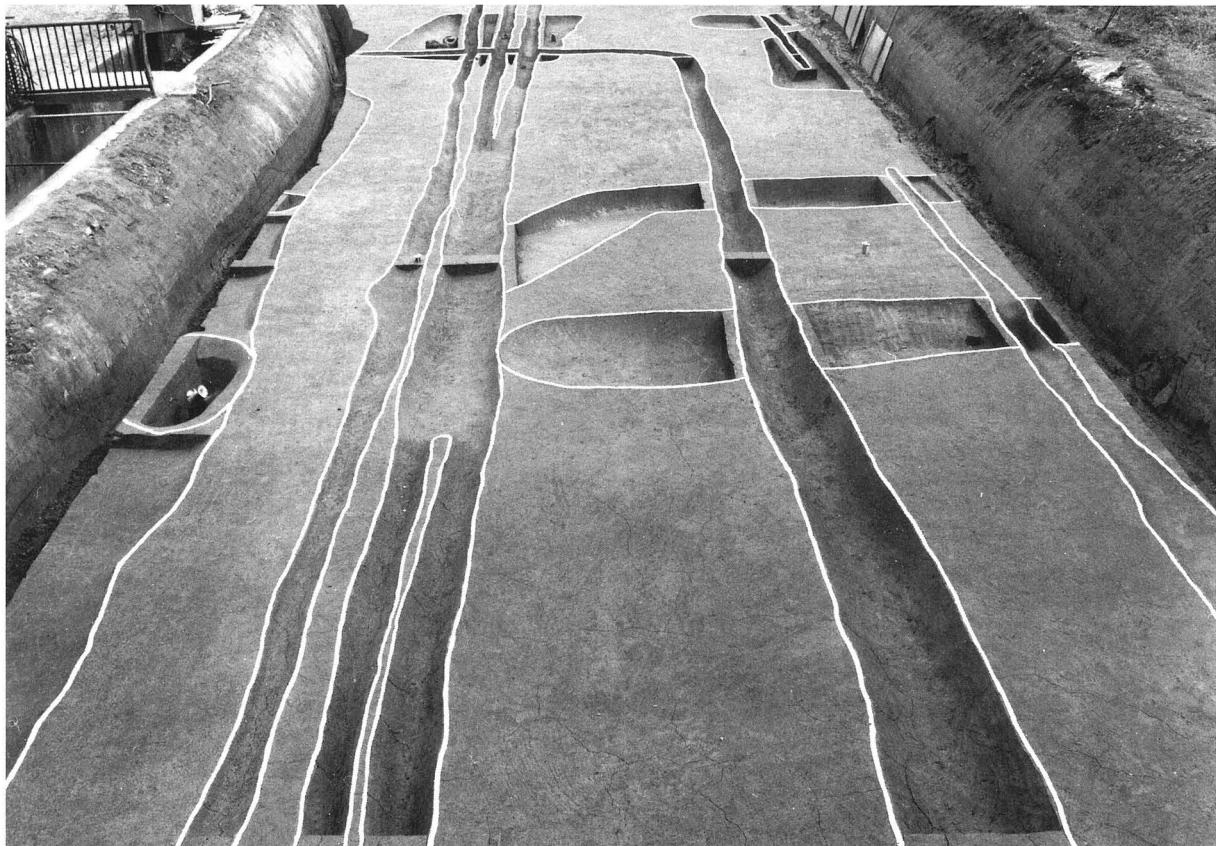


D区第1調査面全景(北から)

図版四



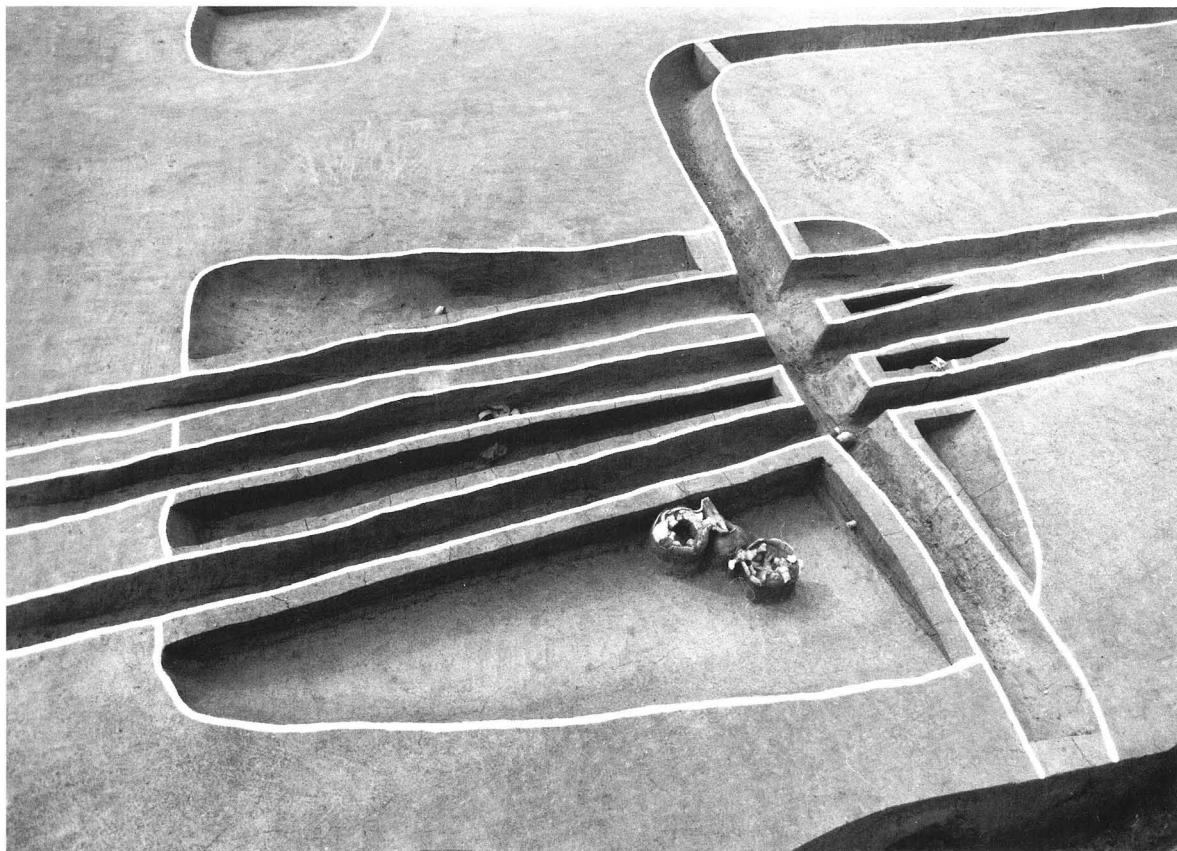
A区第2調査面全景(上が西)



A区第2調査面西部遺構検出状況(西から)



A SK201検出状況(南から)



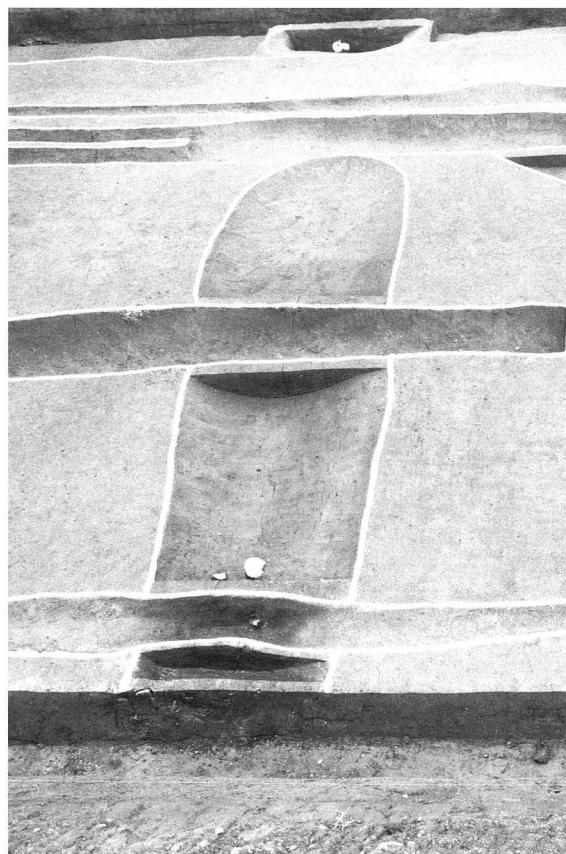
A S K 202検出状況(北から)



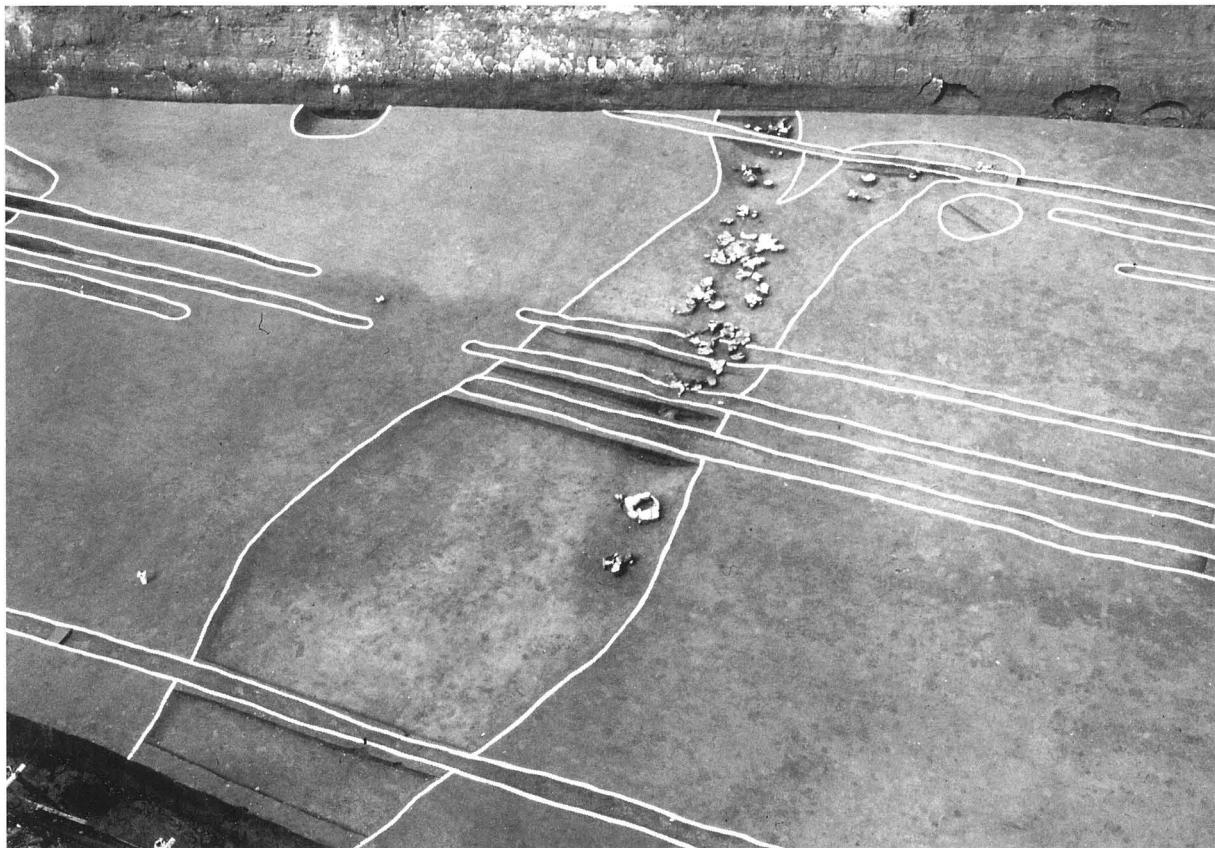
A S K 202北西部遺物出土状況(北から)



A S K 202中央部遺物出土状況(南から)



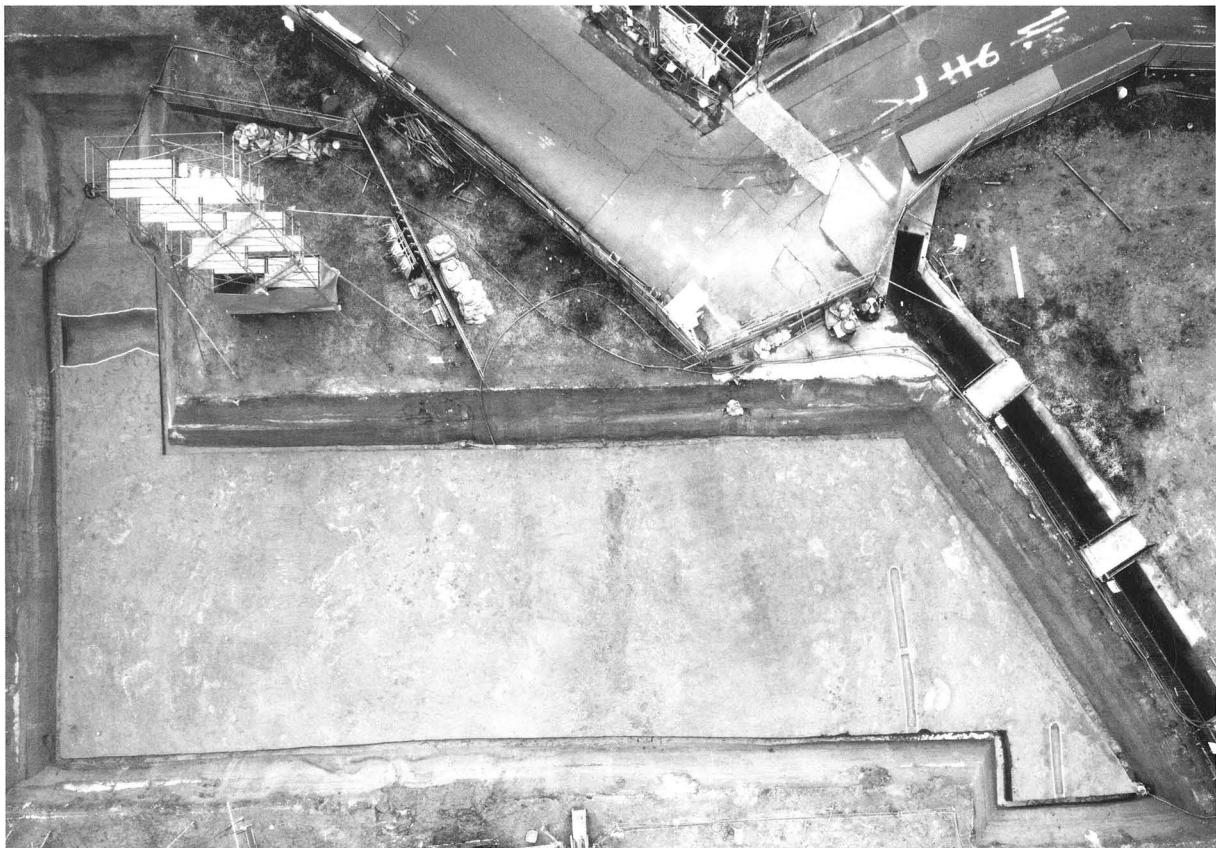
A S D 202検出状況(南から)



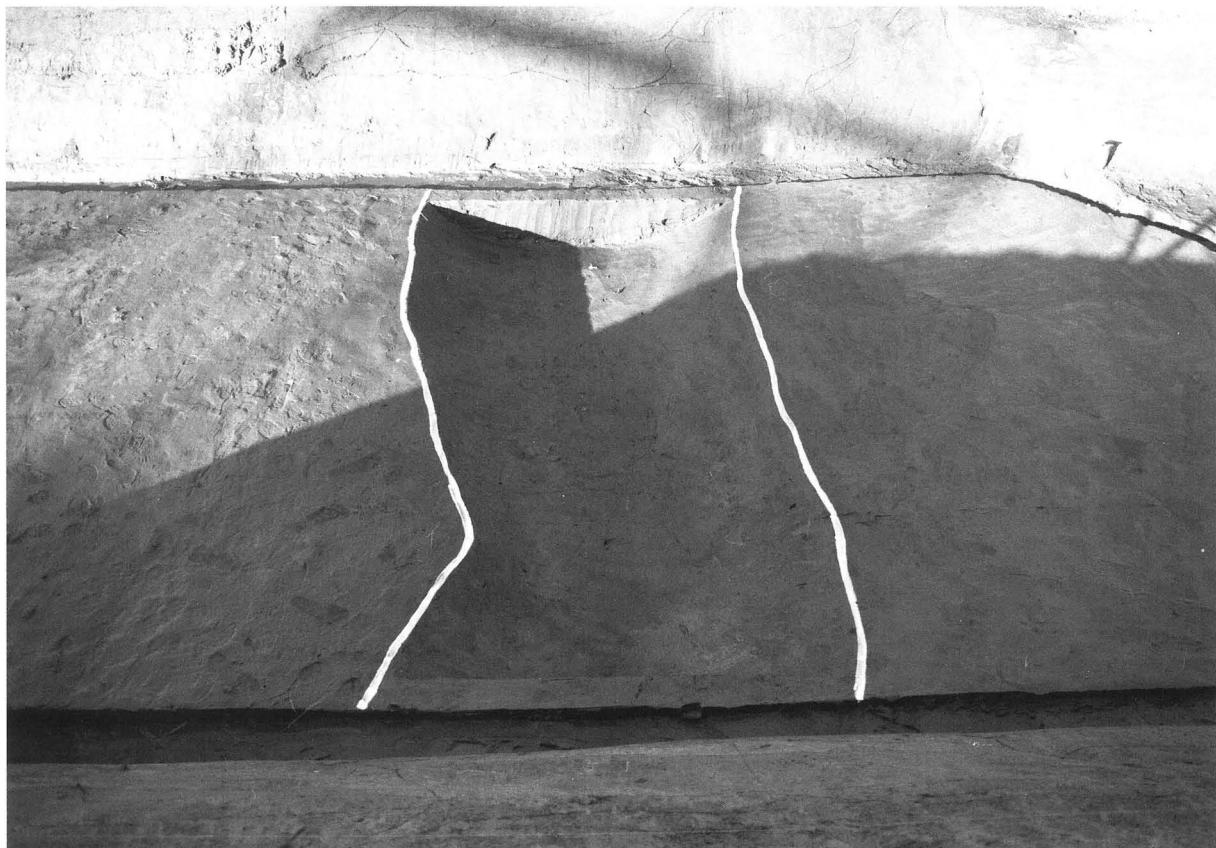
A S D 204検出状況(南から)



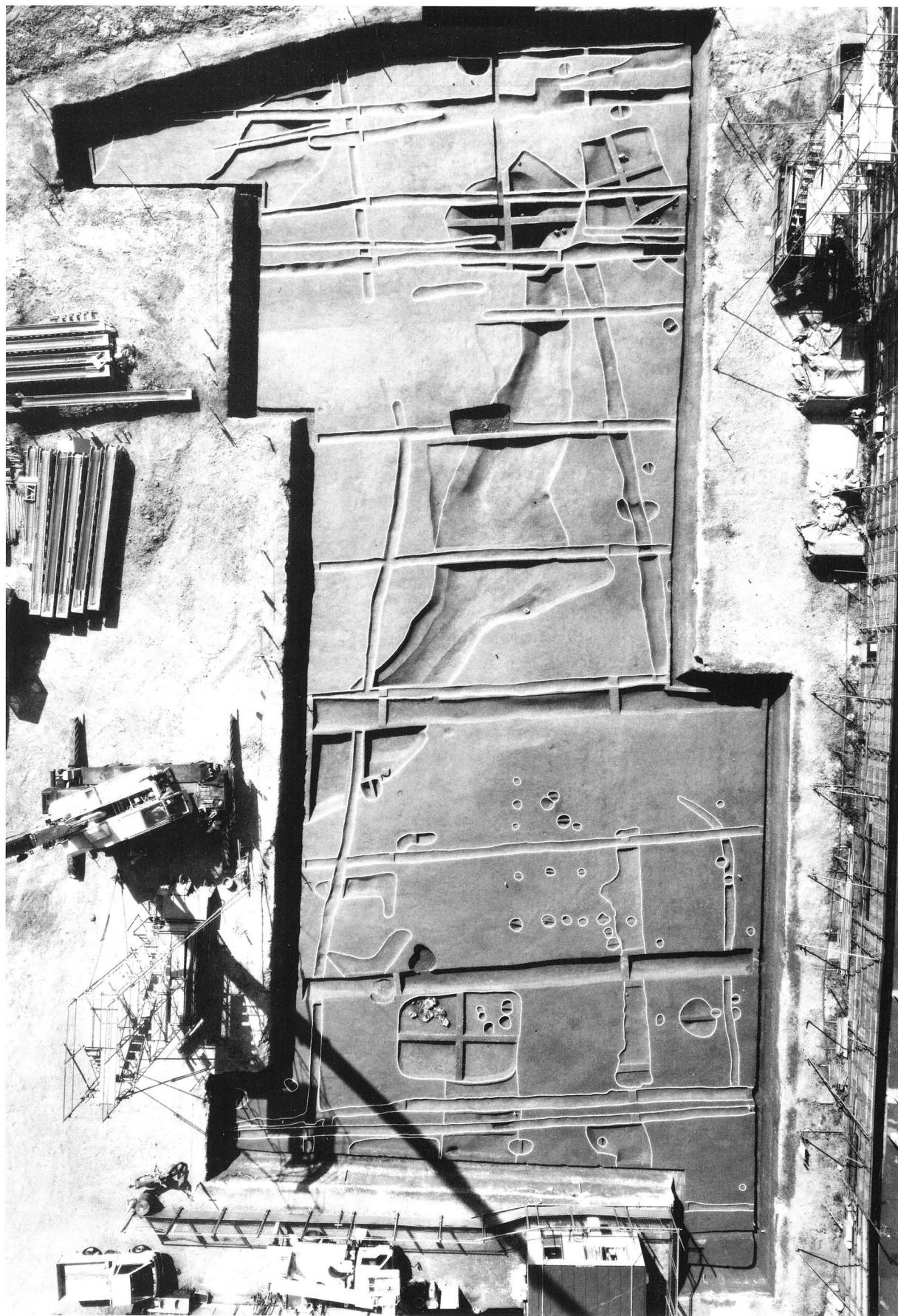
A S D 204遺物出土状況(北から)



B区第2調査面全景(上が東)



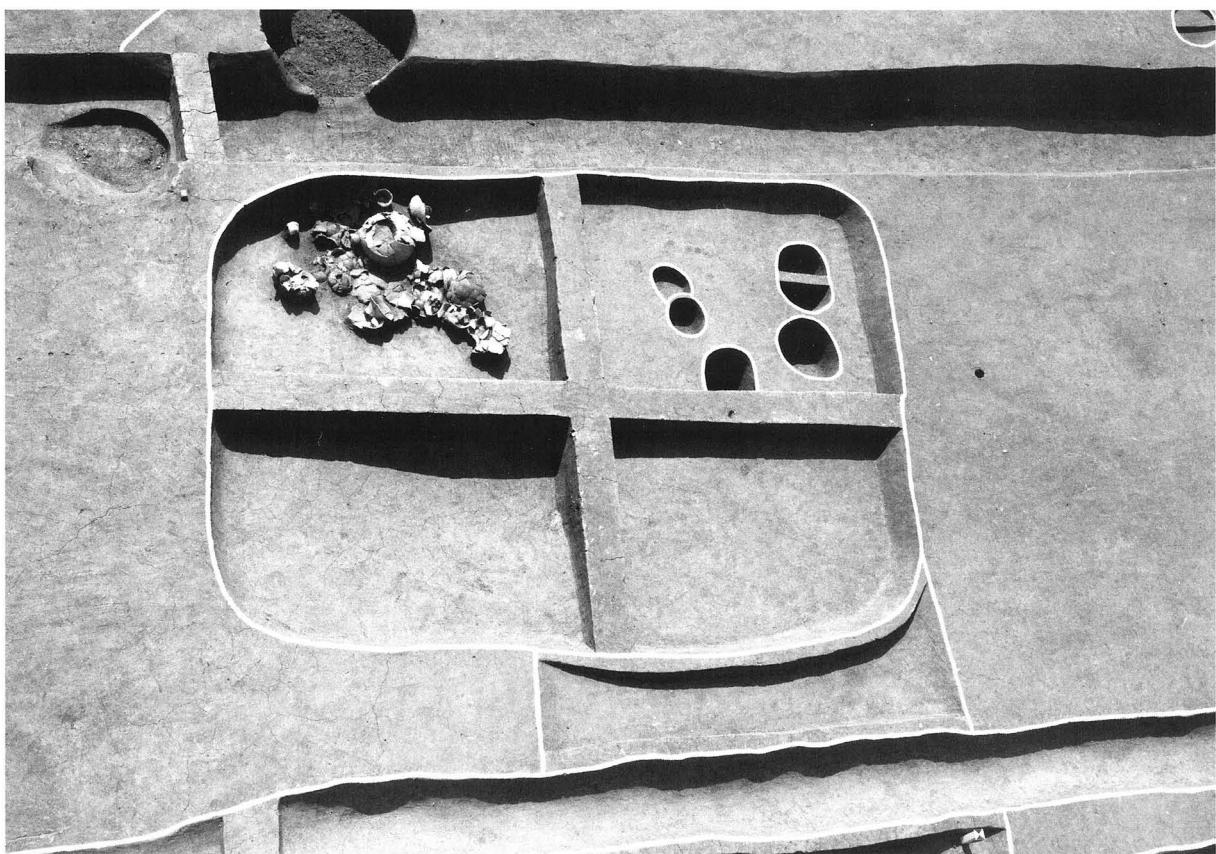
B S D 203検出状況(南から)



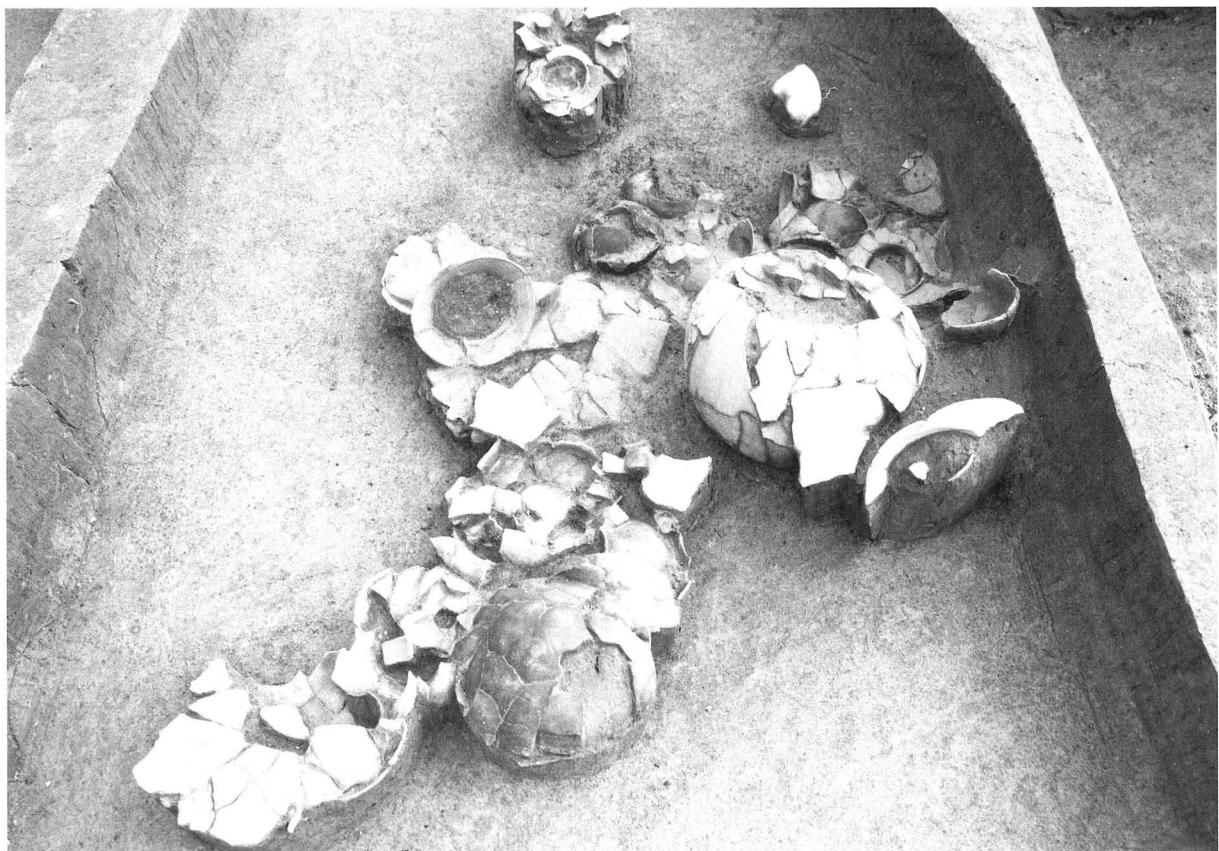
C区第2調査面全景(上が南)



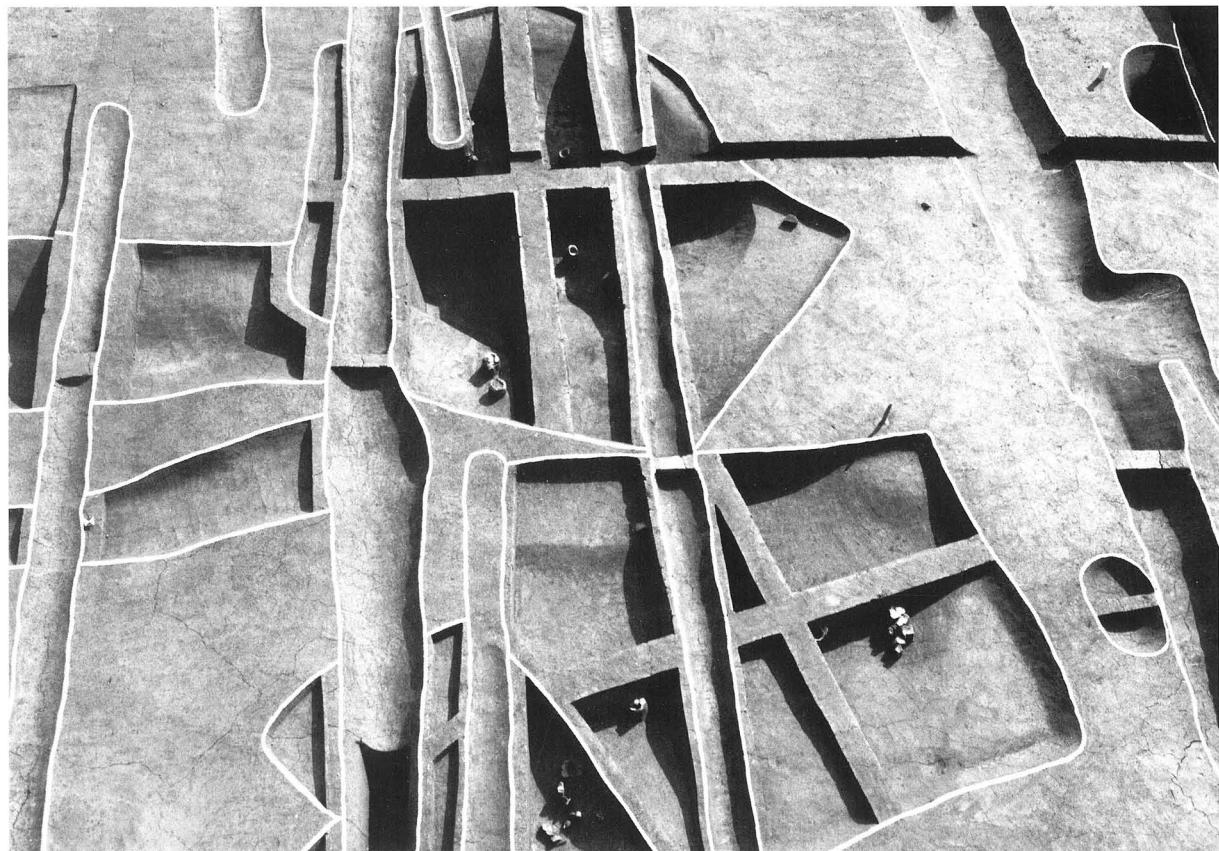
C S E 201下層遺物出土状況(東から)



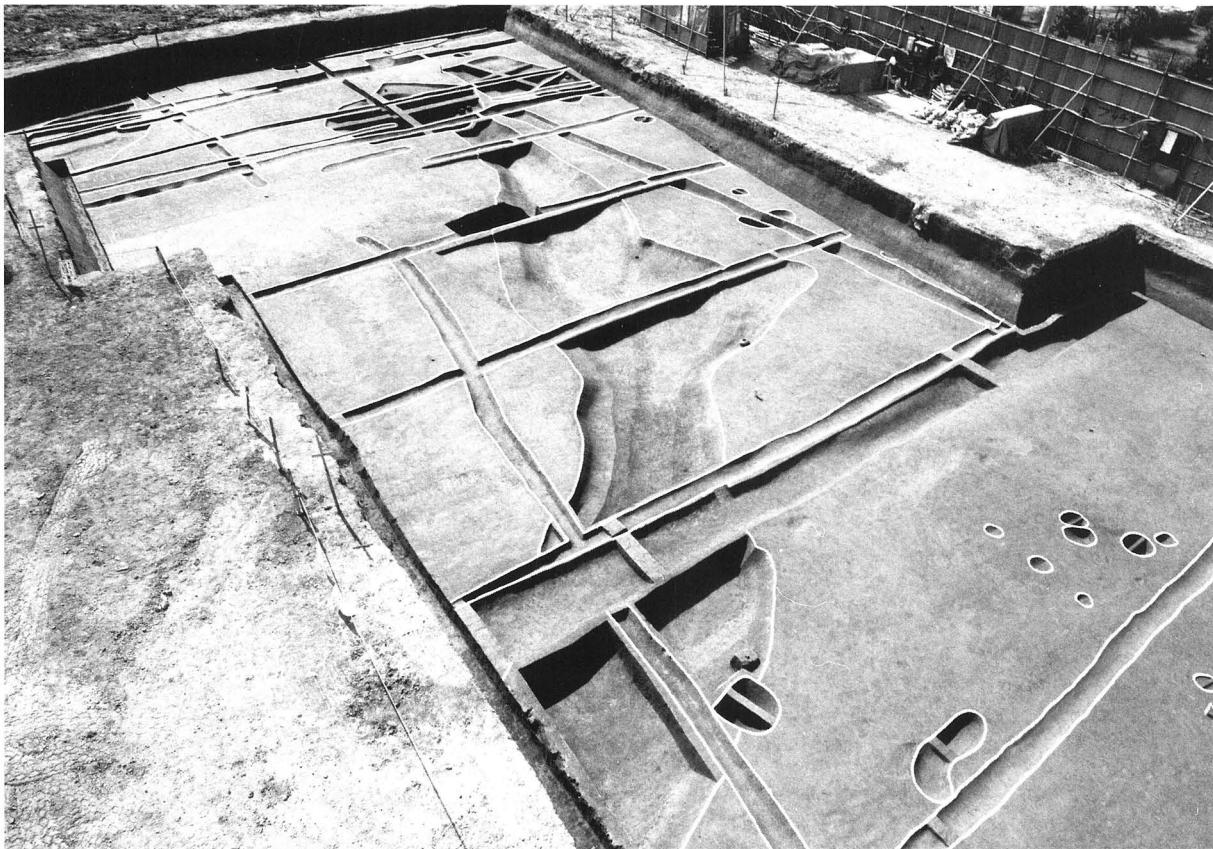
C S K 205検出状況(北から)



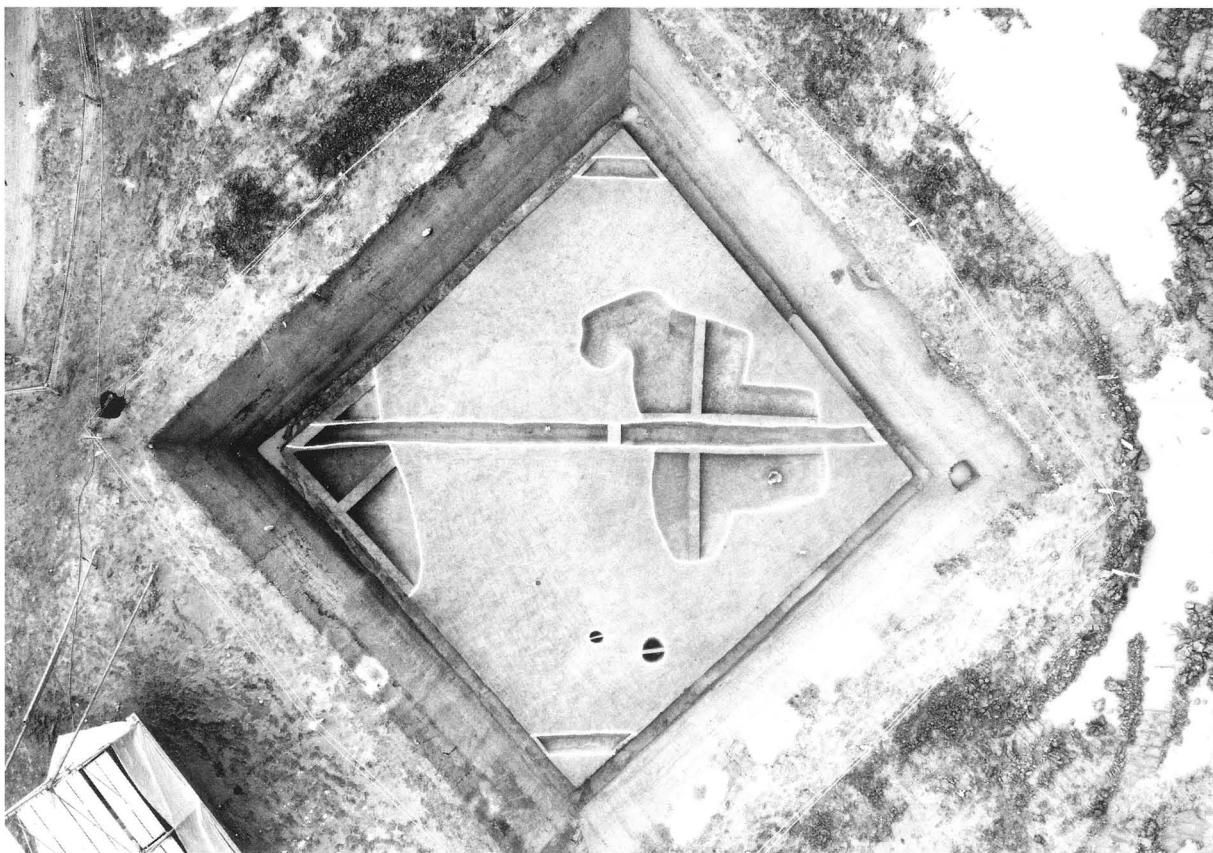
C S K205遺物出土状況(西から)



C S K214~216検出状況(西から)



C S D 201検出状況(北東から)

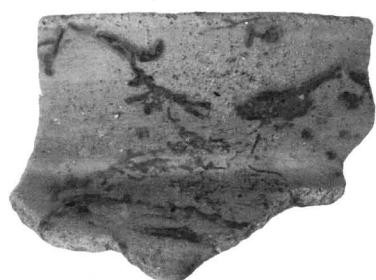


D区第2調査面全景(北から)

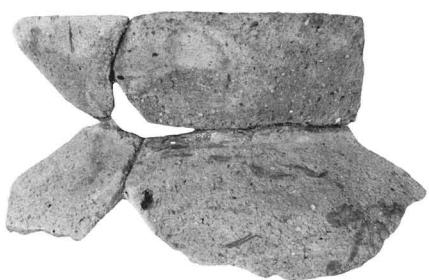


AS K201(1~4)、AS K202(5~7)出土遺物

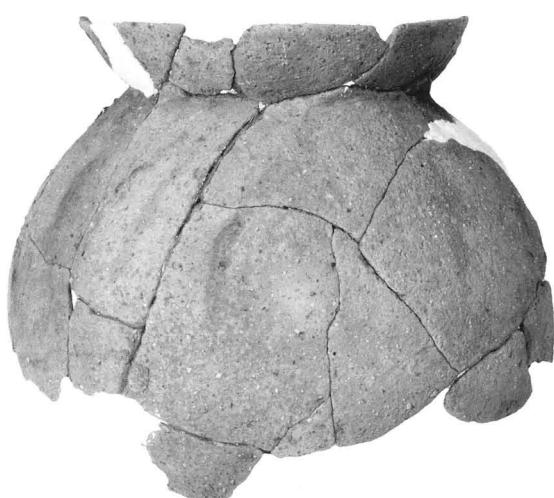
図版一四



8



9



10



12



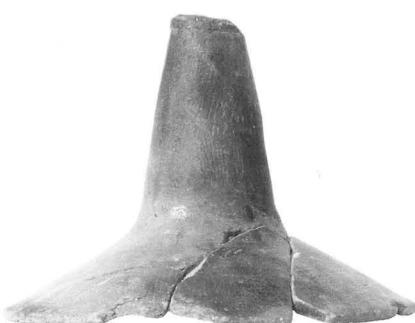
11



13



14



15

A SK202(8~13)、ASD202(14·15)出土遺物



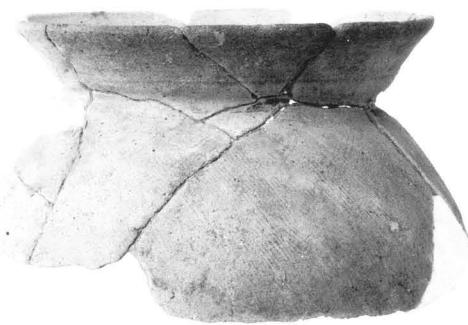
16



22



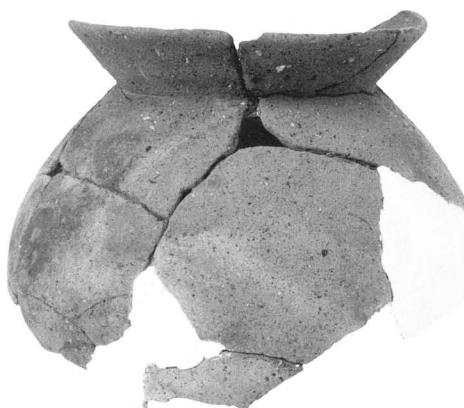
17



23



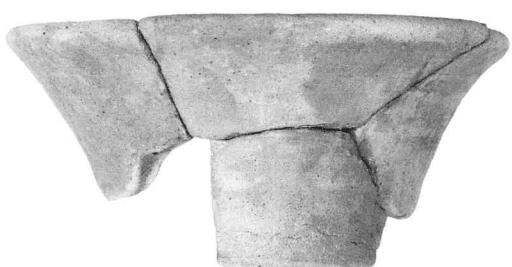
18



24



19



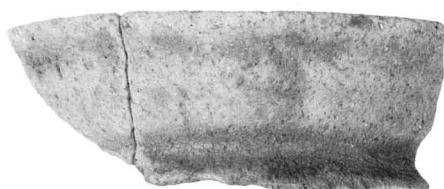
21



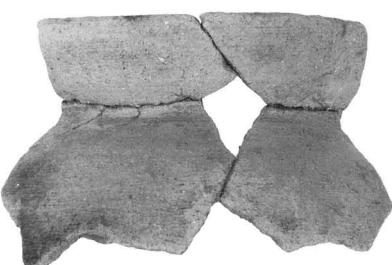
20

A S D 202(16)、A S D 204(17~24)出土遺物

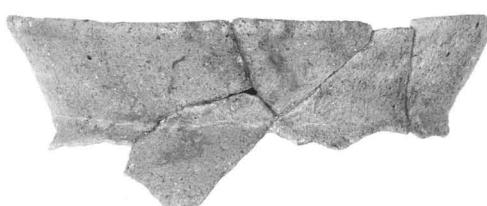
圖版一六



26



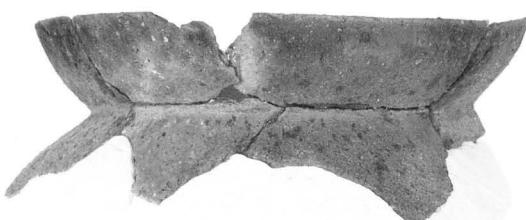
30



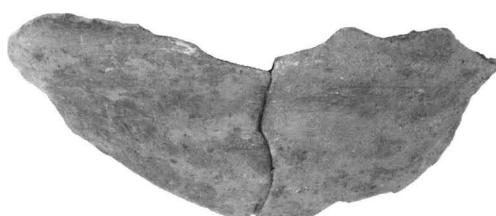
27



31



28



32



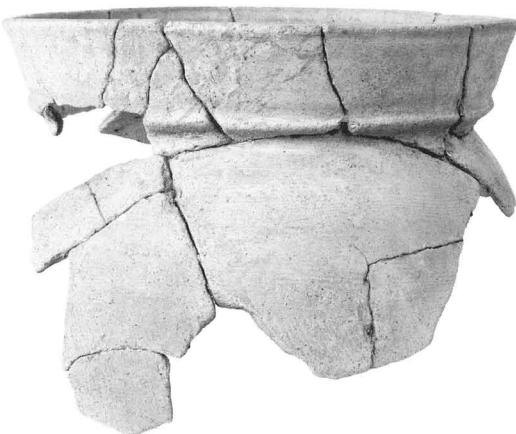
29



33



25

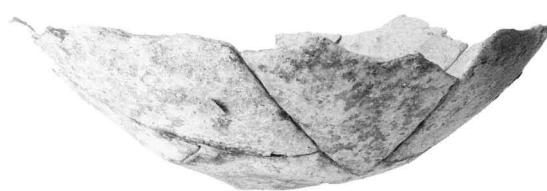


34

A S D 204 (25~34) 出土遺物



36



37



38



39



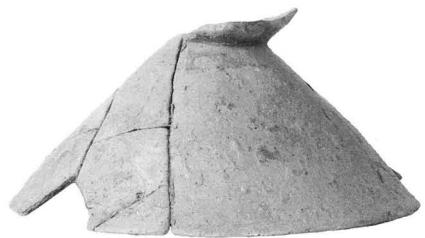
35



41



40



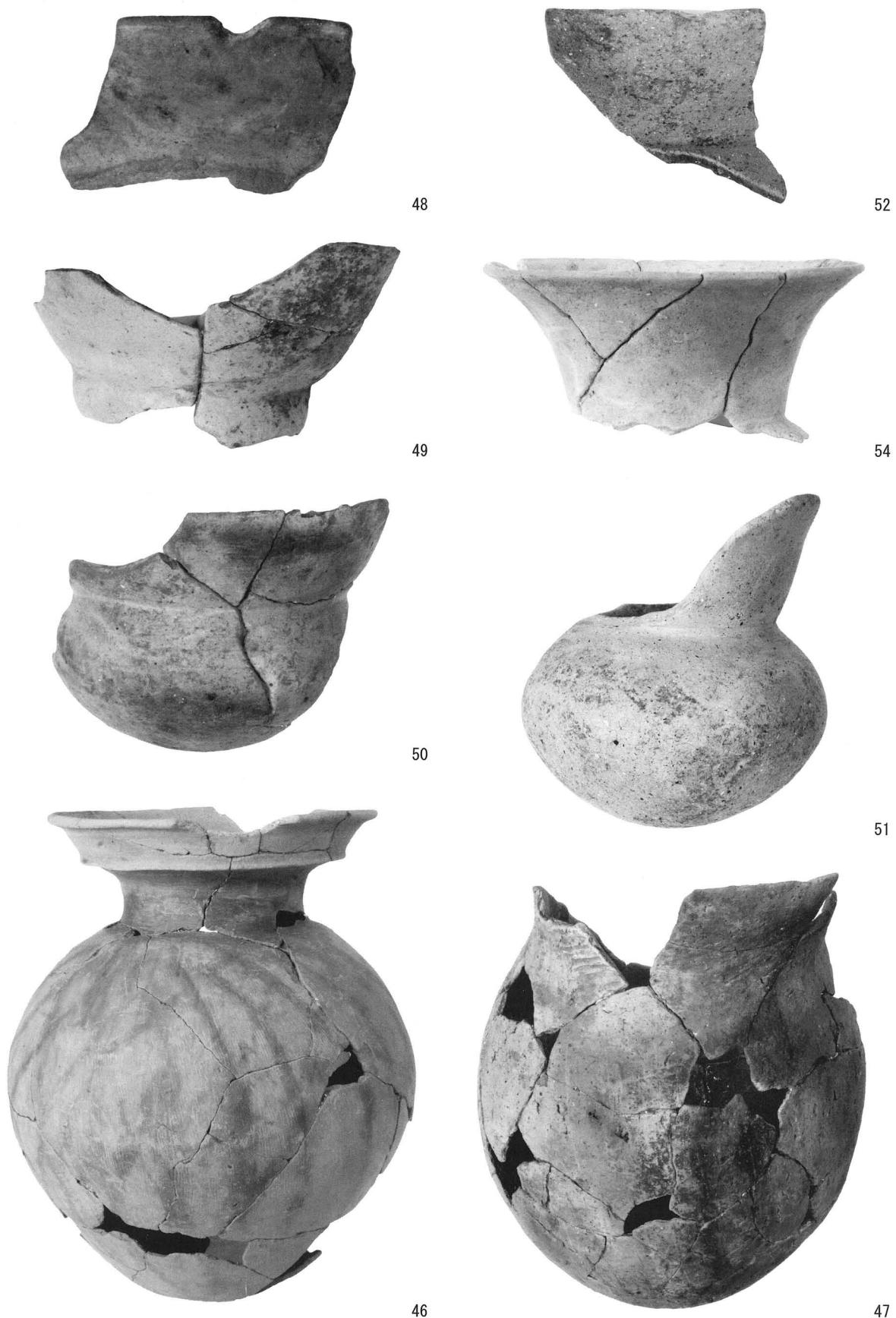
42



43

A S D 204 (35~43) 出土遺物

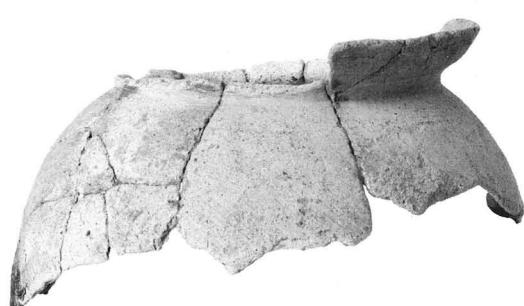
圖版一八



CSE 201(46・47)、CSK 205(48~52・54)出土遺物



55



56



59



57



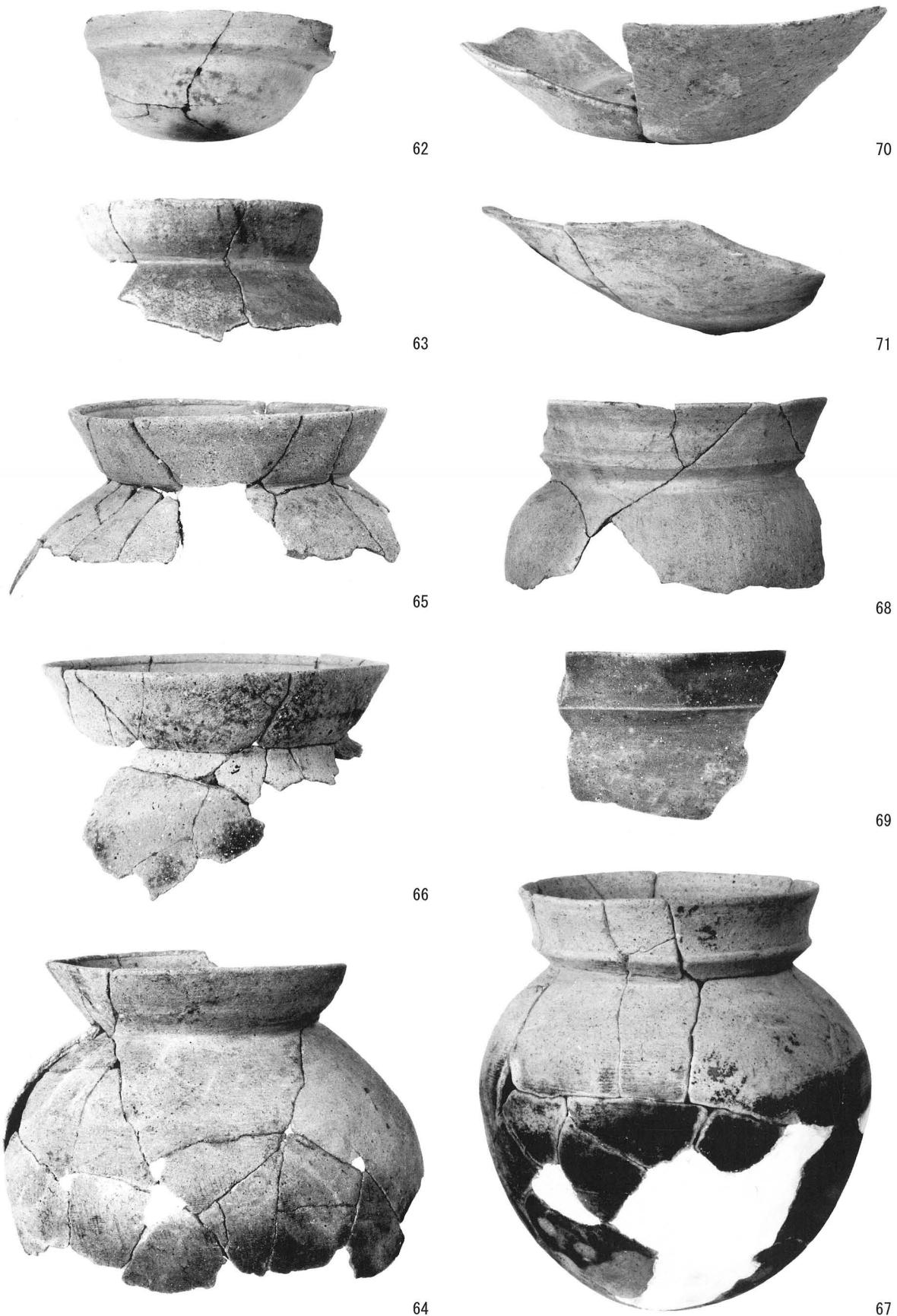
58



60

C S K 205 (55~60) 出土遺物

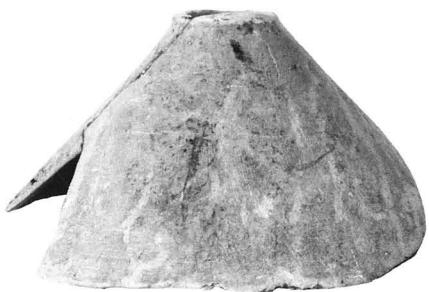
図版二〇



C S K205(62~71)出土遺物



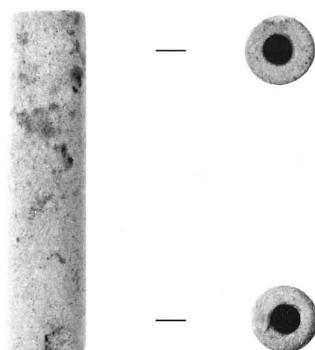
73



74



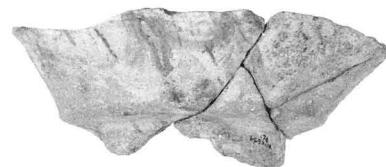
72



75



76



78



82



77

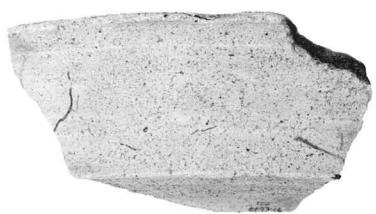


80

C SK205(72~75)、C SK213(78)、C SK214(82)、C SK215(77・80)、C SK219(76)出土遺物



83



86



84



87



88



85

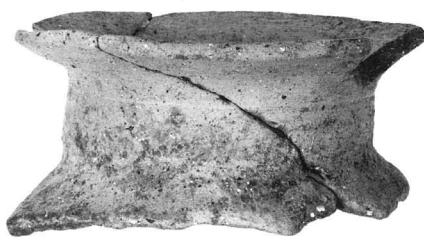


89



91

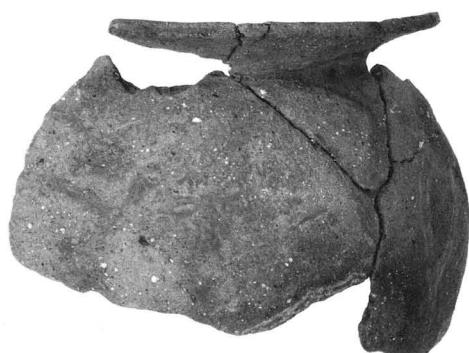
C S K216(83~89)、C S D201(91)出土遺物



90



92



93



94



95



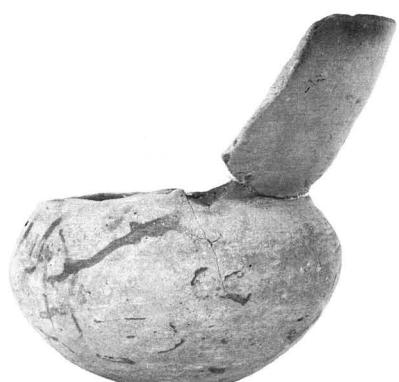
96



98

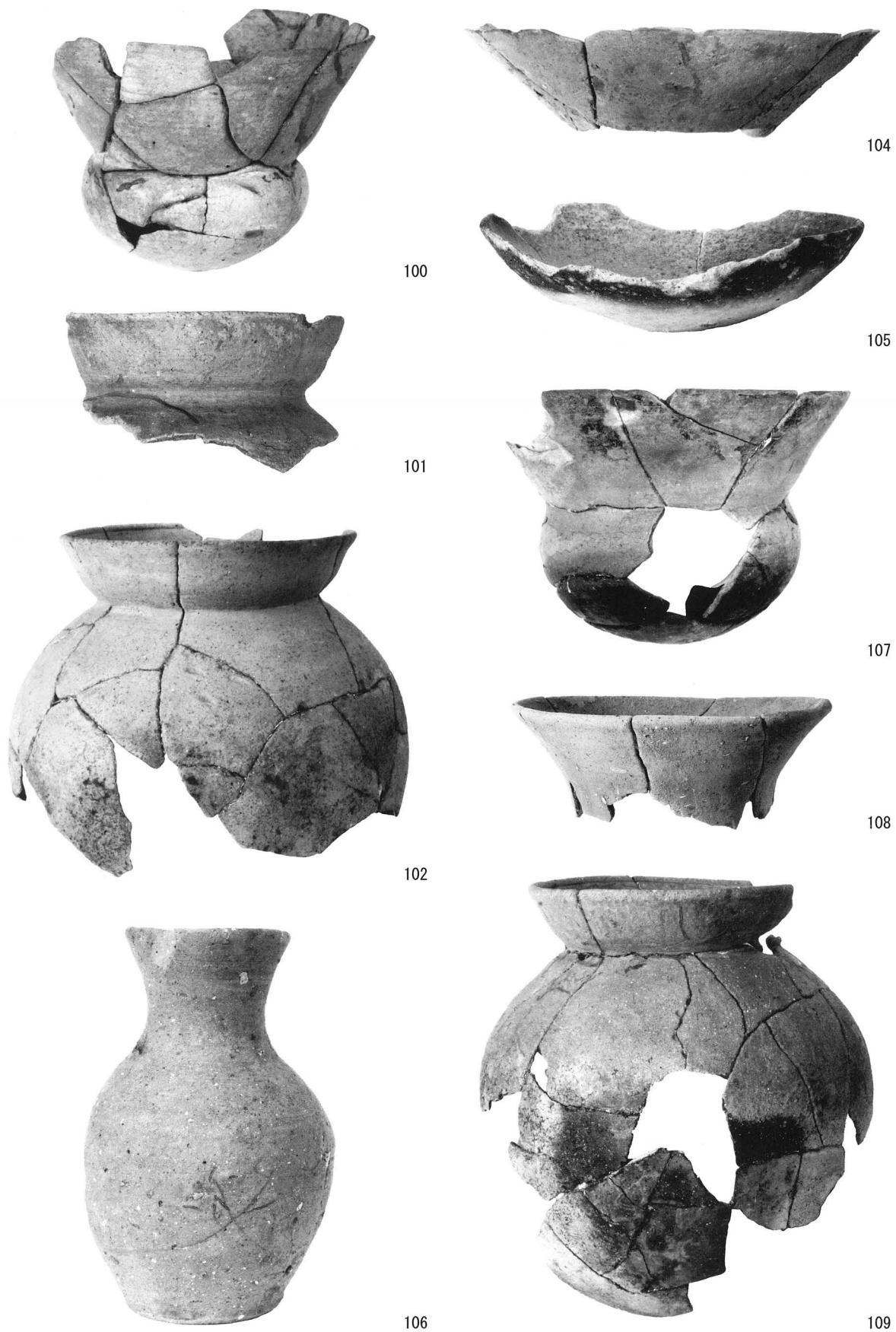


97



99

C S D 201 (90・92~94)、C S D 204 (95)、C S D 205 (96~98)、D S K 201 (99) 出土遺物



D S K 201(100~102・104)、第4層(105)、第8層a(106)、第8層b(107~109)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく109
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告109
副書名	I 萱振遺跡(第12次調査) II 萱振遺跡(第14次調査)
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	109
編著者名	原田昌則
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX072-994-4700
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かやふり いせき 萱振遺跡 (第12次調査)	おおさか ふや おしあひがおから おうめ 大阪府八尾市旭ヶ丘五丁目	27212	65	34° 37' 48"	135° 36' 46"	19920210 ～ 19920609	約2000m ²	市営建物建設
かやふり いせき 萱振遺跡 (第14次調査)	おおさか ふや おしあひがおか 4 5 大阪府八尾市旭ヶ丘、四・五 丁目	27212	65	34° 37' 46"	135° 36' 47"	19930809 ～ 19940314	約3000m ²	府営住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
萱振遺跡 (第12次調査)	集落	古墳時代前期前半～後半	竪穴住居1・掘立柱建物1・井戸2・土坑13・溝6・小穴21	古式土師器・石製品	
	古墳	古墳時代前期後半	古墳2	古式土師器	
	集落	飛鳥時代～奈良時代	土坑1・溝1	土師器・須恵器・土製品(土馬)	
	集落	平安時代前期	土坑1・溝1	土師器	
	田畠	鎌倉時代	土坑3・溝48	土師器・須恵器・瓦器	
	田畠	江戸時代	井戸4・土坑29・溝2	土師器・陶磁器	
萱振遺跡 (第14次調査)	集落	弥生時代後期	溝1	弥生土器	
	集落	古墳時代前期前半～中葉	掘立柱建物1・井戸1・土坑28・溝10・小穴31	古式土師器・土製品・石製品(管玉)	
	田畠	平安時代後期～鎌倉	溝54・自然河川2	土師器・瓦器・瓦質土器・屋瓦	
	田畠	江戸時代	井戸1	土師器・陶磁器	

要約	北に第12次調査地、南に第14次調査地が隣接している。両調査区ともに、古墳時代前期前半(布留式古相)から中葉(布留式中相)にかけては、比較的安定した居住域が形成されている。居住域の廃絶後の前期後半(布留式新相)には第12次調査で古墳2基が検出されており、居住域から墓域へと変化している。飛鳥・奈良時代には一部で居住域を形成するが、平安時代前期以降は、江戸時代に至るまで、田畠を中心とする生産域としての土地利用が窺える。
----	---

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告109
萱振遺跡

I 萱振遺跡(第12次調査)

II 萱振遺跡(第14次調査)

発 行 平成20年3月
編 集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX(072) 994-4700

印 刷 (株)近畿印刷センター
〒581-0033 八尾市志紀町南2丁目131番地
TEL(072) 920-3488
FAX(072) 920-3455

表 紙 レザック66 <260Kg>
本 文 ニューイエイジ < 70Kg >
図 版 マットアート <110Kg>

